

# 千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書 X

泉北側第2遺跡 (CN 613)

1 9 9 1

千葉県企業庁  
住宅・都市整備公団千葉開発局  
財団法人 千葉県文化財センター



006号住居跡(上段)・021号住居跡(下段)出土銅鏝(3倍)

# 千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書 X

泉北側第2遺跡 (CN 613)

1 9 9 1

千 葉 県 企 業 庁  
住宅・都市整備公団千葉開発局  
財団法人 千葉県文化財センター

## 序 文

千葉県北部に広がる下総台地は平坦で、豊かな緑に覆われた広大な台地であり、また、利根川や、印旛沼・手賀沼といった河川などの水に恵まれた肥沃な土地でもあります。このように恵まれた自然環境のもとに先土器時代からの、人々の生活の跡が数多く残されています。

一方、この下総台地の北部に位置する北総地域は都心から30～40kmという地理的条件を備えています。そのため千葉県では首都圏の住宅需要に応え、良好な住宅・宅地を供給し、あわせて北総地域の中核拠点都市として千葉ニュータウンを計画しました。

そこで、事業予定地内に所在する貴重な埋蔵文化財について、千葉県開発庁（現千葉県企業庁）と、文化庁・千葉県教育委員会とで協議を重ねた結果、やむを得ず記録保存の措置を講じることとなり埋蔵文化財の調査を実施することとなりました。

調査は昭和45年8月から財団法人千葉県都市公社内に設置された文化財調査事務所によって開始され、昭和50年4月からは財団法人千葉県文化財センターが継続して実施しています。

調査を開始して以来まもなく20年を迎えようとしていますが、この間に数多くの遺跡の発掘調査を実施し、調査成果は『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書』として既に9冊を刊行してまいりました。

今回報告する遺跡は、昭和57年度から昭和58年度にかけて調査を実施した泉北側第2遺跡です。当遺跡は先土器時代から古墳時代前半まで断続的ですが、長い時代にわたり先人が生活してきた跡です。特に古墳時代前半の集落跡や遺物は当時の生活を知る貴重な手掛かりとなるものです。この度、昭和59年度から開始した整理作業が終了し、第10冊目の報告書を刊行する運びとなりました。本書が郷土の歴史のみならず文化財に対して多くの方々への理解を深め、さらに広く活用されることを望んでやみません。

最後に、千葉県企業庁及び住宅・都市整備公団、印旛町教育委員会の御協力と文化庁並びに千葉県教育庁文化課の御指導、御助言にお礼を申し上げるとともに、寒風、酷暑のなかで調査に従事され、報告書刊行に至るまで御協力いただいた調査補助員の皆様へ心から謝意を表します。

平成3年3月

財団法人 千葉県文化財センター

理事長 岩瀬良三

## 凡 例

1. 本報告書は千葉北部地区新市街地造成整備事業（千葉ニュータウン）に関連して調査した印旛郡印西町鹿黒550他に所在する泉北側第2遺跡（CN613）の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査から整理作業までに至る業務は、千葉県企業庁ならびに住宅・都市整備公団の委託を受けて、千葉県教育委員会の指導の下に、（財）千葉県文化財センターが行った。
3. 発掘調査は、昭和57・58年度に下記により実施した。

（昭和57年度）	調査期間	昭和57年8月23日～昭和58年3月28日					
	調査面積	上層本調査	10,000㎡	下層本調査	180㎡		
	調査担当	調査部長	白石竹雄	部長補佐	岡川宏道	班長	清藤一順
		調査研究員	及川淳一				

（昭和58年度）	調査期間	昭和58年4月1日～昭和58年11月30日					
	調査面積	上層本調査	10,000㎡	下層本調査	240㎡		
	調査担当	調査部長	白石竹雄	部長補佐	岡川宏道	班長	清藤一順
		調査研究員	糸川道行				
4. 整理作業及び本書の作成は、下記により行った。

（昭和59年度）	（昭和60年度）	（昭和61年度）			
調査部長	鈴木道之助	調査部長	鈴木道之助	調査部長	鈴木道之助
部長補佐	岡川宏道	部長補佐	岡川宏道	部長補佐	岡川宏道
班長	鈴木定明	班長	矢戸三男	班長	矢戸三男
主任調査研究員	及川淳一	主任調査研究員	及川淳一		

（昭和62年度）	（昭和63年度）	（平成元年度）			
調査部長	堀部昭夫	調査部長	堀部昭夫	調査部長	堀部昭夫
部長補佐	古内茂	部長補佐	古内茂	部長補佐	西山太郎
班長	小宮孟	班長	大原正義	班長	上野純司
主任調査研究員	橋本勝雄	主任調査研究員	橋本勝雄	班長代理	高橋博文
5. 本書の主な執筆・編集は班長代理高橋博文が行い、班長上野純司が協力した。
6. 写真撮影のうち遺跡・遺構はそれぞれの発掘担当者が行き、整理作業に伴う遺物撮影は高橋博文が担当した。但し、空中写真については京業測量株式会社の撮影によるものを使用した。
7. 本書の第1図に使用した地形図は、国土地理院発行の1：25000地形図 白井 [NI-54-19-14-3] 及び小林 [NI-54-19-14-1] である。
8. 本書に使用した方位は、すべて座標北を示すものである。
9. 発掘調査から報告書の刊行に至るまで千葉県企業庁ニュータウン整備部建設課及び住宅・都市整備公団千葉開発局、千葉県教育庁文化課、印西町教育委員会の諸機関には御指導・御協力賜りました。深甚の謝意を表します。

# 本文目次

序 文  
凡 例

本文目次  
挿図目次  
表目次  
図版目次

## 第1章 環境と経過

- I. 遺跡の位置と環境..... 1
- II. 調査の経過と概要..... 3

## 第2章 検出された遺構・遺物

- I. 先土器時代の調査
  - 1. 層序..... 9
  - 2. 遺構と遺物..... 12
- II. 縄文時代の調査
  - 1. 遺構と遺物..... 42
  - 2. グリッド出土の遺物..... 72
- III. 古墳時代の調査
  - 1. 遺構と遺物..... 124
  - 2. グリッド出土の遺物..... 241
- IV. その他の時代の調査
  - 1. 弥生時代の遺物..... 245

## 第3章 結語

- I. 先土器時代..... 249
- II. 縄文時代..... 260
- III. 古墳時代..... 261

写真図版

## 挿 図 目 次

第 1 図	東北側第 2 遺跡周辺の地形と遺跡	2
第 2 図	遺跡地形図	3
第 3 図	グリッド名称	4
第 4 図	グリッド配置図	5
第 5 図	遺構配置図	6
第 6 図	遺構名称	7
第 7 図	土層断面図	10
第 8 図	先土器時代遺物出土状況	11
第 9 図	第 1 地点遺物出土状況図	13
第 10 図	第 1 地点石器実測図 1	14
第 11 図	第 1 地点石器実測図 2	15
第 12 図	第 1 地点石器実測図 3	16
第 13 図	第 1 地点石器実測図 4	17
第 14 図	第 2 地点遺物出土状況図	20, 21
第 15 図	第 2 地点遺物接合状況図 1	22, 23
第 16 図	第 2 地点遺物接合状況図 2	24, 25
第 17 図	第 2 地点遺物接合状況図 3	26, 27
第 18 図	第 2 地点石器実測図 1	29
第 19 図	第 2 地点石器実測図 2	30
第 20 図	第 2 地点石器実測図 3	31
第 21 図	第 3 地点遺物出土状況図	36
第 22 図	第 3 地点石器実測図	37
第 23 図	地点外石器実測図 1	38
第 24 図	地点外石器実測図 2	39
第 25 図	075号住居跡実測図・出土遺物	40
第 26 図	078号住居跡実測図	43
第 27 図	079号住居跡実測図	44
第 28 図	080号住居跡実測図	45
第 29 図	080号住居跡出土遺物	46
第 30 図	084号住居跡実測図・出土遺物	47
第 31 図	085号住居跡実測図	48
第 32 図	085号住居跡出土遺物	49

第 33 図	086号住居跡実測図	50
第 34 図	086号住居跡出土遺物	51
第 35 図	098号住居跡実測図	52
第 36 図	P-26号住居跡実測図・出土遺物	53
第 37 図	P-1・2・3号土坑実測図	54
第 38 図	P-4・6・7号土坑実測図・出土遺物	55
第 39 図	P-8・9・10号土坑実測図・出土遺物	56
第 40 図	P-13号土坑実測図・出土遺物	58
第 41 図	P-14・15・18号土坑実測図・出土遺物	59
第 42 図	P-19・20・21・22・23号土坑実測図・出土遺物	60
第 43 図	093号土坑実測図	61
第 44 図	099号土坑実測図・出土遺物	62
第 45 図	077号炉穴実測図・出土遺物	64
第 46 図	077号炉穴出土遺物	65
第 47 図	081号炉穴実測図	66
第 48 図	083・089号炉穴実測図・出土遺物	67
第 49 図	090・092号炉穴実測図	68
第 50 図	094・095号炉穴実測図・出土遺物	70
第 51 図	096・097号炉穴実測図・出土遺物	71
第 52 図	第1群土器拓影図(グリッド出土)第1類	73
第 53 図	第1群土器実測図(グリッド出土)第1類	74
第 54 図	第1群土器拓影図(グリッド出土)第1類	75
第 55 図	第1群土器実測図(グリッド出土)第2類	76
第 56 図	第1群土器実測図(グリッド出土)第3類	77
第 57 図	第1群土器拓影図(グリッド出土)第3類	78
第 58 図	第1群土器拓影図(グリッド出土)第3類	79
第 59 図	第2群土器実測図(グリッド出土)第1類	81
第 60 図	第2群土器拓影図(グリッド出土)第1類	82
第 61 図	第2群土器拓影図(グリッド出土)第1類	83
第 62 図	第2群土器実測図(グリッド出土)第2類	84
第 63 図	第2群土器拓影図(グリッド出土)第2類	85
第 64 図	第2群土器拓影図(グリッド出土)第2類	86
第 65 図	第2群土器実測図(グリッド出土)第3・4・5類	87
第 66 図	第2群土器拓影図(グリッド出土)第3類	89



第 67 図	第 2 群土器拓影図 (グリッド出土) 第 4 類	90
第 68 図	第 2 群土器拓影図 (グリッド出土) 第 4・5 類	91
第 69 図	第 2 群土器拓影図 (グリッド出土) 第 6 類	92
第 70 図	第 3 群土器実測図 (グリッド出土)	93
第 71 図	第 3 群土器拓影図 (グリッド出土)	95
第 72 図	第 4 群土器拓影図 (グリッド出土) 第 1 類	96
第 73 図	第 4 群土器拓影図 (グリッド出土) 第 2 類	97
第 74 図	第 4 群土器拓影図 (グリッド出土) 第 2・3 類	98
第 75 図	第 5 群土器拓影図・実測図 (グリッド出土)	99
第 76 図	縄文時代グリッド出土土製決状耳飾	100
第 77 図	縄文時代石器実測図 (遺構出土) 1	102
第 78 図	縄文時代石器実測図 (遺構出土) 2	103
第 79 図	縄文時代石器実測図 (遺構出土) 3	104
第 80 図	縄文時代石器実測図 (遺構出土) 4	105
第 81 図	縄文時代石器実測図 (遺構出土) 5	106
第 82 図	縄文時代石器実測図 (グリッド出土) 1	107
第 83 図	縄文時代石器実測図 (グリッド出土) 2	108
第 84 図	縄文時代石器実測図 (グリッド出土) 3	109
第 85 図	縄文時代石器実測図 (グリッド出土) 4	110
第 86 図	縄文時代石器実測図 (グリッド出土) 5	111
第 87 図	縄文時代石器実測図 (グリッド出土) 6	112
第 88 図	縄文時代石器実測図 (グリッド出土) 7	113
第 89 図	縄文時代石器実測図 (グリッド出土) 8	114
第 90 図	縄文時代石器実測図 (グリッド出土) 9	115
第 91 図	縄文時代石器実測図 (グリッド出土) 10	116
第 92 図	縄文時代石器実測図 (グリッド出土) 11	117
第 93 図	縄文時代石器実測図 (グリッド出土) 12	118
第 94 図	002号住居跡実測図・出土遺物	125
第 95 図	003号住居跡実測図・出土遺物	126
第 96 図	004号住居跡実測図・出土遺物	127
第 97 図	005号住居跡実測図・出土遺物	129
第 98 図	006号住居跡実測図	131
第 99 図	006号住居跡出土遺物	132
第 100 図	007号住居跡実測図・出土遺物	133

第 101 图	008号住居跡実測図・出土遺物	134
第 102 图	009号住居跡実測図・出土遺物	135
第 103 图	010号住居跡実測図・出土遺物	137
第 104 图	011号住居跡実測図	140
第 105 图	011号住居跡出土遺物 1	140
第 106 图	011号住居跡出土遺物 2	140
第 107 图	012号住居跡実測図・出土遺物	142
第 108 图	013号住居跡実測図	144
第 109 图	013号住居跡出土遺物	145
第 110 图	014号住居跡実測図・出土遺物	147
第 111 图	015号住居跡実測図・出土遺物	148
第 112 图	016号住居跡実測図・出土遺物	149
第 113 图	017号住居跡実測図・出土遺物	150
第 114 图	018号住居跡実測図・出土遺物	151
第 115 图	019号住居跡実測図・出土遺物	152
第 116 图	020号住居跡実測図	153
第 117 图	020号住居跡出土遺物	154
第 118 图	021号住居跡実測図	155
第 119 图	021号住居跡出土遺物	156
第 120 图	022号住居跡実測図	158
第 121 图	023号住居跡実測図	159
第 122 图	023号住居跡出土遺物	160
第 123 图	024号住居跡実測図	162
第 124 图	024号住居跡炉跡実測図・出土遺物	163
第 125 图	025号住居跡実測図・出土遺物	164
第 126 图	026号住居跡実測図・出土遺物	165
第 127 图	027号住居跡実測図・出土遺物	166
第 128 图	029号住居跡実測図	167
第 129 图	030号住居跡実測図	168
第 130 图	030号住居跡出土遺物	169
第 131 图	031号住居跡実測図	170
第 132 图	031号住居跡出土遺物	171
第 133 图	032号住居跡実測図・出土遺物	173
第 134 图	033号住居跡実測図・出土遺物	174

第 135 图	034号住居跡実測図・出土遺物	175
第 136 图	035号住居跡実測図	177
第 137 图	035号住居跡出土遺物	178
第 138 图	036号住居跡実測図・出土遺物	179
第 139 图	037号住居跡実測図・出土遺物	180
第 140 图	038号住居跡実測図	181
第 141 图	038号住居跡出土遺物 1	182
第 142 图	038号住居跡出土遺物 2	183
第 143 图	040号住居跡実測図	184
第 144 图	040号住居跡出土遺物	185
第 145 图	041号住居跡実測図・出土遺物	188
第 146 图	042号住居跡実測図	189
第 147 图	043号住居跡実測図	190
第 148 图	044号住居跡実測図	191
第 149 图	045号住居跡実測図・出土遺物	192
第 150 图	046号住居跡実測図・出土遺物	194
第 151 图	047号住居跡実測図・出土遺物	195
第 152 图	048号住居跡実測図・出土遺物	196
第 153 图	051号住居跡実測図	197
第 154 图	052号住居跡実測図	199
第 155 图	052号住居跡炉跡実測図・出土遺物	200
第 156 图	053号住居跡実測図・出土遺物	202
第 157 图	054号住居跡実測図	203
第 158 图	055号住居跡実測図・出土遺物	204
第 159 图	056号住居跡実測図	205
第 160 图	056号住居跡出土遺物	206
第 161 图	057号住居跡実測図	207
第 162 图	057号住居跡炉跡実測図・出土遺物	208
第 163 图	058号住居跡実測図・出土遺物	209
第 164 图	059号住居跡実測図・出土遺物	210
第 165 图	060号住居跡実測図	211
第 166 图	060号住居跡出土遺物	212
第 167 图	061号住居跡実測図・出土遺物	213
第 168 图	062号住居跡実測図	214

第 169 図	062号住居跡出土遺物	216
第 170 図	063号住居跡実測図・出土遺物	217
第 171 図	064号住居跡実測図	219
第 172 図	064号住居跡炉跡実測図・出土遺物	220
第 173 図	064号住居跡出土遺物	221
第 174 図	065号住居跡実測図・出土遺物	222
第 175 図	066号住居跡実測図	223
第 176 図	066号住居跡炉跡実測図・出土遺物	224
第 177 図	067号住居跡実測図・出土遺物	226
第 178 図	068号住居跡実測図	228
第 179 図	068号住居跡出土遺物	229
第 180 図	069号住居跡実測図・出土遺物	230
第 181 図	070号住居跡実測図	232
第 182 図	070号住居跡出土遺物	233
第 183 図	071号住居跡実測図	234
第 184 図	072号住居跡実測図	235
第 185 図	072号住居跡出土遺物	236
第 186 図	073号住居跡実測図	237
第 187 図	074号住居跡実測図・出土遺物	238
第 188 図	088号住居跡実測図	239
第 189 図	050号掘立柱建物跡実測図	240
第 190 図	グリッド出土土器実測図	241
第 191 図	古墳時代グリッド出土玉類実測図	243
第 192 図	古墳時代石器実測図(遺構出土)	244
第 193 図	弥生時代土器実測図(グリッド出土)	245
第 194 図	弥生時代土器拓影図(グリッド出土)	246
第 195 図	弥生時代石器実測図	247
第 196 図	先土器時代遺物一覧	251
第 197 図	第 2 地点遺物垂直分布状況	254
第 198 図	第 2 地点グリッド別遺物垂直分布図	255
第 199 図	第 2 地点礫・礫破片グリッド別接合状況図	257
第 200 図	第 2 地点石器分布図(石材別)	258

## 表 目 次

第 1 表	第 1 地点石器計測表	18
第 2 表	第 2 地点石器計測表	32
第 3 表	第 2 地点礫・礫破片接合状況	33
第 4 表	第 3 地点石器計測表	37
第 5 表	地点外出土石器計測表	40
第 6 表	縄文時代石器計測表 (遺構出土)	120
第 7 表	縄文時代石器計測表 (グリッド出土)	121
第 8 表	古墳時代石器計測表	245
第 9 表	弥生時代石器計測表	247
第 10 表	遺構一覧	264
第 11 表	第 2 地点出土礫・礫破片石材別占有率	253

## 図 版 目 次

巻頭図版	006・021号住居跡出土銅鏡	図版18	099号土坑・077・083・089号炉穴出土土器
図版1	泉北側第2遺跡周辺の航空写真	図版19	094・095・097号炉穴出土土器
図版2	遺跡全景 (57年度・58年度)・遺跡近景	図版20	第1群土器 (1・2・3類)
図版3	遺跡全景 (57年度・58年度合成写真)	図版21	第1群土器 (1類)
図版4	第1・第2・第3地点遺物分布状況	図版22	第1群土器 (1・3類)
図版5	第1地点出土石器	図版23	第1群土器 (3類)
図版6	第2地点出土石器	図版24	第2群土器 (1類)
図版7	第2地点・第3地点・地点外出土石器	図版25	第2群土器 (1・2類)
図版8	地点外出土石器	図版26	第2群土器 (1類)
図版9	075・078・079号住居跡全景	図版27	第2群土器 (2類)
図版10	080・084・085号住居跡全景	図版28	第2群土器 (2・3類)
図版11	086・098・P-26号住居跡	図版29	第2群土器 (3・4・5類)・第3群土器
図版12	P-1~4・6~10・13号土坑全景	図版30	第2群土器 (4類)
図版13	P-14・15・18~23・093・099号土坑全景	図版31	第2群土器 (4・5・6類)
図版14	炉穴全景	図版32	第3群土器
図版15	075・080号住居跡出土土器	図版33	第4群土器 (1・2類)
図版16	085・086・P-26号住居跡出土土器	図版34	第4群土器 (2類)
図版17	084号住居跡・土坑出土土器	図版35	第4群土器 (3類)・第5群土器

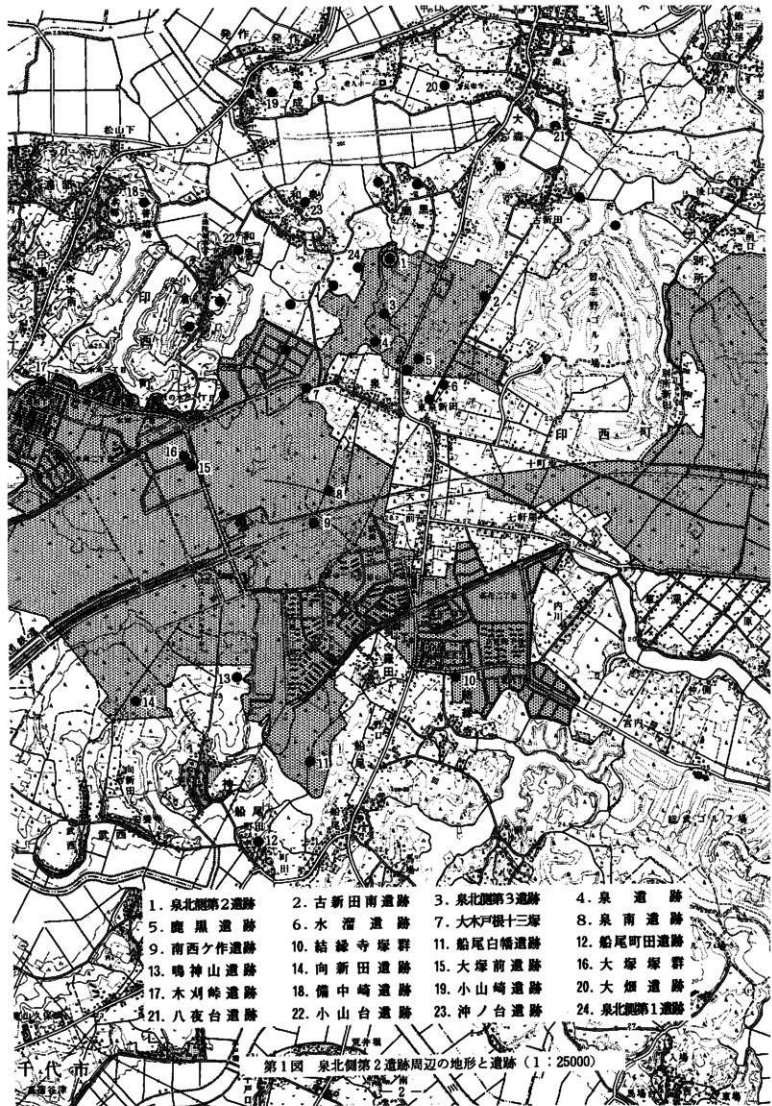
- 図版36 縄文時代出土遺物及び弥生時代出土遺物  
図版37 縄文時代石器（遺構出土）  
図版38 縄文時代石器（グリッド出土）  
図版39 縄文時代石器（グリッド出土）  
図版40 縄文時代石器（グリッド出土）  
図版41 縄文時代石器（グリッド出土）  
図版42 002・003・004号住居跡全景  
図版43 005・006・007号住居跡全景  
図版44 008・009・010号住居跡全景  
図版45 011・012・013号住居跡全景  
図版46 014・015・016号住居跡全景  
図版47 017・018・019号住居跡全景  
図版48 020・021・022号住居跡全景  
図版49 023・024・025号住居跡全景  
図版50 026・027・029号住居跡全景  
図版51 030・031・032号住居跡全景  
図版52 033・034・035号住居跡全景  
図版53 036・037・038号住居跡全景  
図版54 040・041・042号住居跡全景  
図版55 043・044・045・046号住居跡全景  
図版56 047・048・051号住居跡全景  
図版57 052・053・054号住居跡全景  
図版58 055・056・057号住居跡全景  
図版59 058・059・060号住居跡全景  
図版60 061・062・063号住居跡全景  
図版61 064・065・066号住居跡全景  
図版62 067・068・069号住居跡全景  
図版63 070・071・072号住居跡全景  
図版64 073・074・088号住居跡全景  
図版65 050号建物跡・002・005号住居跡出土土器  
図版66 006・007・008・010号住居跡出土土器  
図版67 011号住居跡出土土器  
図版68 011号住居跡出土土器  
図版69 012・013・014・015号住居跡出土土器  
図版70 016・017・018・019・020号住居跡出土土器  
図版71 021号住居跡出土土器  
図版72 023・025・026・027号住居跡出土土器  
図版73 030・031号住居跡出土土器  
図版74 033・034号住居跡出土土器  
図版75 035・037号住居跡出土土器  
図版76 038・040号住居跡出土土器  
図版77 038・040号住居跡出土土器  
図版78 041・045号住居跡出土土器  
図版79 046・047・048号住居跡出土土器  
図版80 052号住居跡出土土器  
図版81 053・055・056・057・066号住居跡出土土器  
図版82 061・062号住居跡出土土器  
図版83 064・065号住居跡出土土器  
図版84 068・069・070号住居跡出土土器  
図版85 072・074号住居跡出土土器  
図版86 古墳時代出土遺物

## 第1章 環境と経過

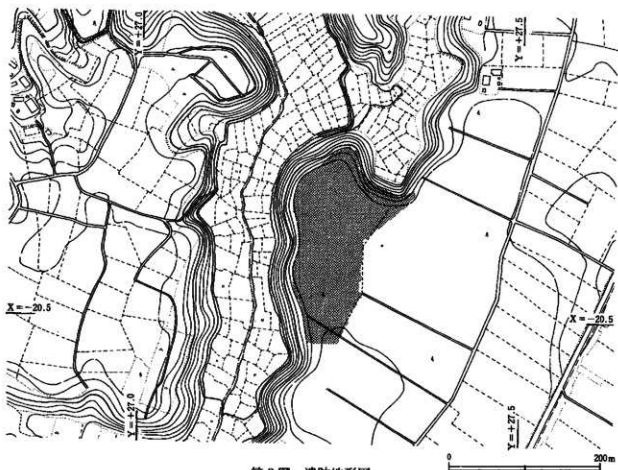
### 1. 遺跡の位置と環境(第1・2図、図版1・2)

千葉県の北部に広がる下総台地の北西部は北総台地と呼ばれる。その一角に北を利根川の流れに、南と東を広大な印旛沼に挟まれ、小支谷がいくえにも台地に入り込む標高20m~30mの平坦な印旛台地が広がる。この印旛台地の北端部に近く、本遺跡の北西約10kmに位置する手賀沼から東に流れ出て利根川右岸に注ぐ六軒川の支流亀成川を北にのぞみ開口する小支谷の東側に続く標高24mを計る平坦な台地上に泉北側第2遺跡(CN613)は立地する。利根川本流から南へ直線にして2kmも離れていない距離にある。北総台地に東西に細長く広がる千葉ニュータウンの中では、ニュータウン中央駅から北東へ2.5kmほどの中央地区の北端に位置し、千葉県印旛郡印西町鹿黒550番地他に所在する。周囲には、縄文時代を中心にして歴史時代までの遺跡が近接して多く存在している。その中ですでに調査され報告書が刊行されているものは「泉遺跡(CN614)」、「鹿黒遺跡(CN615)」のほか数えるほどである。まして、本遺跡とはほぼ時代を同じくする遺構・遺物が検出された遺跡の報告がないのが残念である。しかし、範囲を本遺跡を中心にして半径10kmに拡大してみると近隣の市町村に本遺跡と時代を同じくする遺構、遺物が少なからず検出・出土した遺跡がみられる。我孫子市の「鹿島前遺跡」・「南久保作遺跡」・「日秀西遺跡」、沼南町の「経塚遺跡」・「布瀬向山遺跡」、白井町の「復山谷遺跡」、船橋市の「小室遺跡」、印西町の「井之内作遺跡」・「南山遺跡」・「船尾町田遺跡」、印旛村の「吉田馬々台遺跡」・「吉高家老地遺跡」などの遺跡があげられる。

なお、本遺跡は『千葉県埋蔵文化財分布地図(1)―東葛飾・印旛地区―』(昭和60年 3月30日発行)の印西町所在の新山北遺跡(遺跡番号№111)の範囲と本調査区域の大部分が重複しており、同一遺跡と言える。





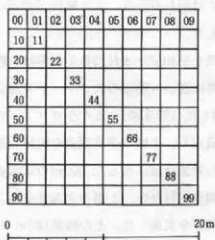
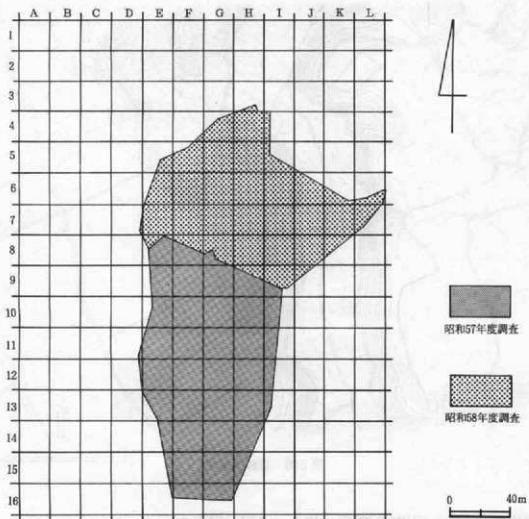


第2図 遺跡地形図

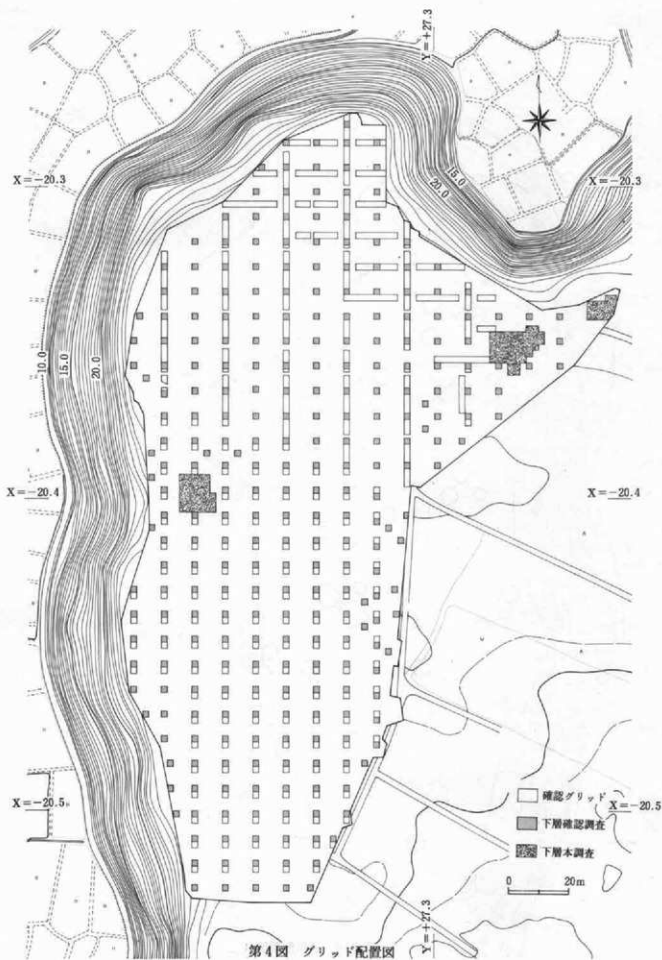
## Ⅱ. 調査の経過と遺跡の概要（第3～6図、図版3）

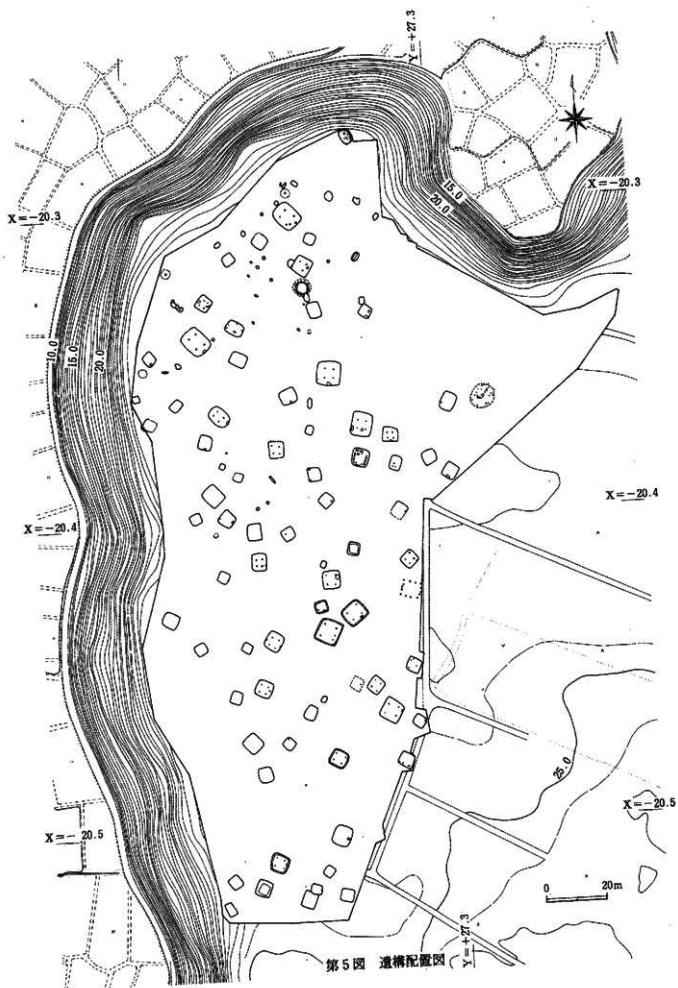
泉北側第2遺跡の調査は、千葉県企業庁の委託により『千葉ニュータウン』造成に先立ち実施したものである。発掘調査は遺跡の南区域10,000㎡については昭和57年度、北区域10,000㎡については昭和58年度と2年次により合計20,000㎡の面積で実施した。

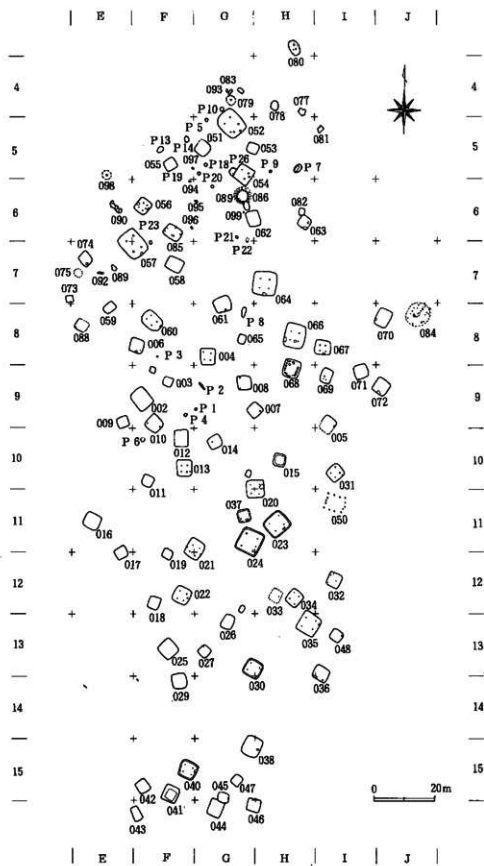
南区域10,000㎡の発掘調査は、発掘に先立つ準備作業を昭和57年8月23日から開始し終了と共に引き続き発掘調査を開始した。発掘区は、公共座標を基準に20m×20mの大グリッドを設定し、さらに大グリッドの中を2m×2mの小グリッド100個に分割した（第3図）。この小グリッドを基に2m×4mのトレンチを東西8m、南北4mの間隔を置いて設定し、上層の確認調査を実施し遺構・遺物の分布状況を確認した。この調査結果を基に県文化課から対象全域に当たる10,000㎡の本調査面積が示され、ただちに表土を除去し、のち検出した遺構全ての調査を行ない、上層の本調査を終了した。その後ただちに2m×2mのトレンチを設定し下層の確認調査を実施した。その結果180㎡の下層本調査を行い南区域の調査を昭和58年3月28日に終了した。年度が改まった昭和58年4月1日より北区域10,000㎡の発掘に先立つ準備作業を開始し終了と共に引き続き発掘調査を開始した。発掘区の設定は南区域と同様に行いその続きに設定した、今回の確認調査は南区域で実施した小トレンチによる調査ではなく2m×18mの南北に細長いトレンチを基本にしての調査で、発掘区の状況に合わせて長さ



第3図 グリッド名称







第 6 図 遺構名称

方向を選び設定し、上層の遺構・遺物の分布状況を確認した。この調査結果を基に県文化課から対象全域に当る10,000㎡の本調査面積が示され、ただちに表土を除去し、のち検出した遺構全ての調査を行い上層の本調査を終了した。その後ただちに2m×2mのトレンチを小グリッドを利用して南区域と同様に設定し、下層の確認調査を実施した。その結果240㎡の下層本調査を行い北区域の調査を終了した。こうして昭和57・58年度の2年次にわたり実施した泉北側第2遺跡の調査は、北区域と南区域合わせて上層20,000㎡、下層420㎡の面積を調査して予定どおり昭和58年11月30日に終了した。

昭和57年度および昭和58年度の1次・2次合わせて延べ16ヶ月にわたる調査の結果、泉北側第2遺跡は途中とぎれることもあるが先土器時代から古墳時代前半に至る長期間にわたってほぼ連続的に人々の生活の場であったことがうかがえる。最も多く検出された住居跡から考えると、特に古墳時代には連続して何世代にもわたり集落が営まれたようである。

つぎに本遺跡の概要を簡単にまとめて報告することにする。先土器時代は3カ所から石器を含む遺物の集中地点が検出された。そのほか単独での遺物の出土もわずかに見られた。縄文時代は早期から晩期にわたって遺構・遺物がほぼ連続的に検出されたが、残念ながら遺構の数は少なく集落を営んだ様子はまったく無い、それぞれ単独的な検出にとどまった。住居跡は前期が中心で合計9軒、炉穴が重複分を含めると15基、土坑が前期を中心に20基を数える。遺物とくに土器は調査区の北側の地域に包含層的にきわめて集中的に出土した。弥生時代は遺構は検出できなかったものの、土器破片が調査区の北側の地域から縄文土器に混じって少量だが出土している。そして検出遺構の大半を占める古墳時代前期の住居跡が70軒、掘立建物跡が1棟検出されている。住居跡はほとんど重複もなく調査区全域にわたり検出された。その他には、炭焼窯と思われる遺構が少数検出されている。

## 第2章 検出された遺構・遺物

### I. 先土器時代の調査

#### 1. 層序 (第7図)

本遺跡の現地表面から先土器時代の遺物を包含する立川ローム層の下部までの標準的土層の堆積状況について肉眼による観察で得られた層序について本遺跡の特徴的な状況を加えながら最上層である表土層から下位の層へ順に説明することにする。

I層 表土層で、a、bの二層に分かれる。aは上面が現在の生活面で、耕作等により攪乱されている。bは黒色を呈しており腐植土層である。

II層 いわゆる新期テフラと呼ばれているもので、本遺跡では一様に観察され、最も厚いところでは40cm以上を測り、平均20~30cmの厚さである。次に続くIII層との間には漸移層もなく連続して堆積している。この傾向は千葉ニュータウンの他の遺跡でも一般的に観察されている。また本遺跡で検出した古墳時代の遺構の多くがこの層を掘り窪めている。

以下は立川ローム層で本遺跡では五層に区分できる。

III層 軟質(ソフト)ローム層である。立川ローム層の最上層に当たる。黄褐色を呈し、平均で30~40cmの厚さで堆積している。一部では下部に本来のII層と若干色調の異なる層が見られ、N層の軟質化した箇所とも考えられる。

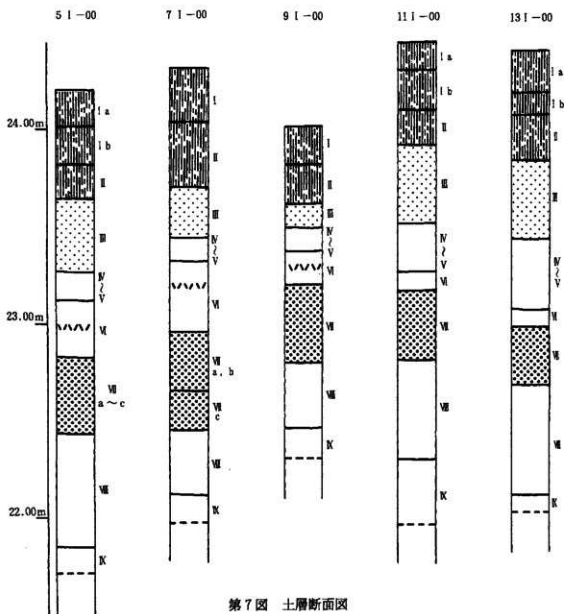
IV層 硬質(ハード)ローム層の最上層に位置する。本層の性質・特徴等を考えると部分的にIII層との同一化が考えられる。

V層 第1黒色帯に相当する、本遺跡では識別が困難であり、肉眼の観察だけでは明確にIV層とV層を識別出来ない。またIV層のソフトローム層(III層)との同一化の根拠もなく本遺跡ではIV層とV層を一つの層としてとらえ『N~V』と表示し、一応、2層の存在の可能性を示した。

VI層 非常に硬質のローム層である、ローム層中一番早く乾燥し白っぽくなる。これは始良Tn火山灰を多量に包含するためと考える。

VII層 第2黒色帯に相当する、色調・包含するもの等により区別し、上からVIIa、VIIb、VIIcの三層に識別が一応可能である。しかし本遺跡では三層に区分したVII層中一番色調の明るいVIIb層は層準を成さず小さな塊(ブロック)が希に存在する程度にすぎず、一部で観察できる程度であり本遺跡においてはVII層はVIIa、VIIcの二層と考えてもよいほどである。なお、VIIc層はVIIa層と比べても色調が黒くVII層中最も黒色味が強い。

なお、「千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書 VII」(1982)で報告されている『復山谷遺跡』における立川ローム層の層序区分で第2黒色帯を細区分するVII・VIII・IXの各層と本遺跡のVIIa・VII



第7図 土層断面図

b・VIIcの各層が対応することを記しておく。

Ⅶ層 立川ロームの最下層であると考えられる、黄褐色を呈する。

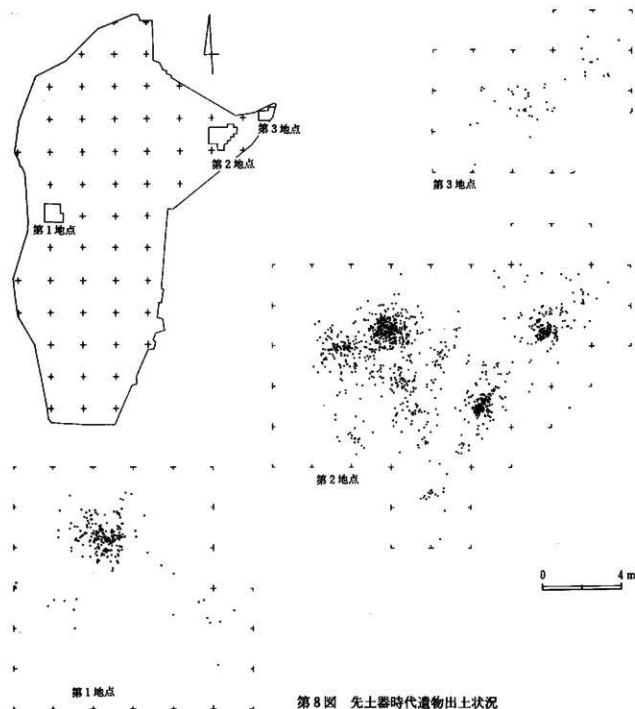
K層 武蔵野ローム層の最上層と考えられる。

本遺跡の立川ローム層を中心とした基本層序は以上に述べたとおりである。Ⅲ層～Ⅴ層の肉眼による観察だけでは、標準的層単の識別はなかなか難しいようである。まして台地縁部の斜面部ではなおさらで、一部ではⅣ層の細分が不可能な状況にいたり、把握できなくなっている箇所も存在する、このように台地（調査区）全域が必ずしも一様の堆積状況ではないこともなお一層の層位区分を難しくしているようである。

その中で、直接先土器時代の調査には関係はないが若干注目したいことがある。それは「千葉ニュータウン」内のほかの発掘調査でも観察されていることではあるが、本遺跡での状況について次に若



干触れておくことにする。いわゆる「新期テフラ」の堆積状況についてである、「千葉ニュータウン」内のすでに調査された遺跡では普通10cm～20cmの厚さで堆積し、連続して下層に黒色土が続き、さらにソフトローム(Ⅲ層)へと移っていくのが一般的な状況にある中で、本遺跡では「新期テフラ」(本遺跡の層準ではⅡ層に当たる)が立川ローム層の再上層であるソフトローム層(Ⅲ層)との間に漸移層を挟まずに平均30cm前後、場所によっては最高40cm以上の厚さ持って堆積することである。ただ肉眼による観察の結果のみの判断で厚さ40cmすべてが「新期テフラ」であるのか科学的な証拠もなく、決断は出来ないが注目しておきたい。さらにこの「新期テフラ」の降灰時期が今日までの間に数多く



第8図 先土器時代遺物出土状況

あり、遺跡で確認されるテフラの時期の決定を混乱させていることが多い。本遺跡では堆積する「新期テフラ」(Ⅱ層)を掘り穿めている古墳時代の住居跡が多く、その中には住居の床面がソフトローム(Ⅲ層)に達しないものも希に見られた。このことから、本遺跡上に堆積したいわゆる「新期テフラ」が古墳時代以前に降灰し、堆積した可能性が非常に大きいと言える。

## 2. 遺構と遺物

第1次調査で1カ所、第2次調査で2カ所、合計3カ所の遺物集中出土地点が確認された。いずれも調査区域の外れに近く、台地斜面部に移ろうとする間際の緩やかに台地が傾斜するところから出土している。遺物の出土集中箇所と調査区域が一致するので、ここでは単に遺物の集まりと言う意味で、「地点」と言う表現を使用し、あわせて遺物集中出土地点をも示すことにする。遺物の出土層準は総体的に立川ローム層のⅢ～Ⅶ層にわたっている。

なお、挿図等で、先石器時代の遺物番号の中には同一石器群中に同一番号が複数存在するが、調査時に各小グリッドごとに出土した遺物に対し与えられた番号であり、本書では小グリッド名を省いて調査時のままの番号を使用した。

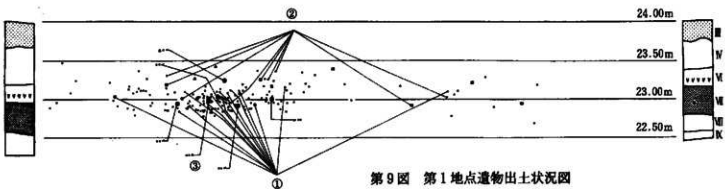
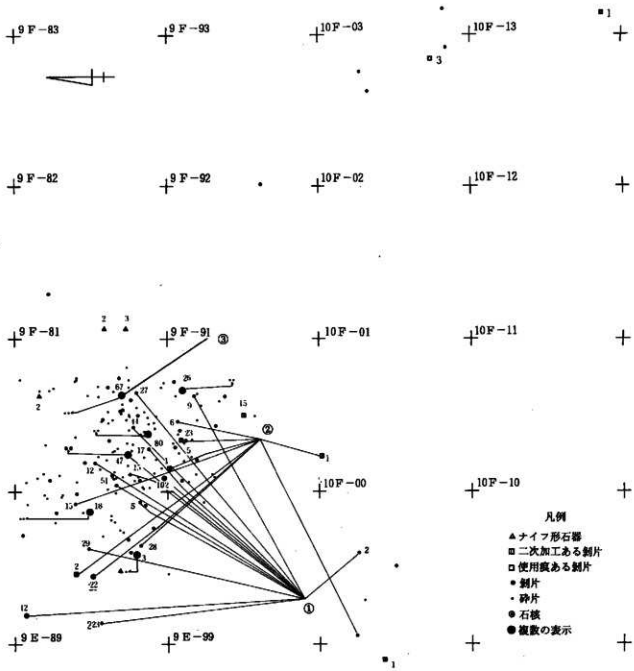
### 第1地点(第8～13図、図版4・5)

調査区のはほぼ中央西寄りの台地斜面部からわずかに台地の平坦部に移ろうとする地点から検出している。グリッドF9-80を中心に検出され、径3mの範囲に多くの遺物が集中し、残りは周囲に散在する。遺物総数は208点を数える。出土層はソフトローム(Ⅲ層)から第2黒色帯(Ⅶ層)にわたり出土しているが、層準としては第2黒色帯上部(Ⅶa層)としてよさそうである。

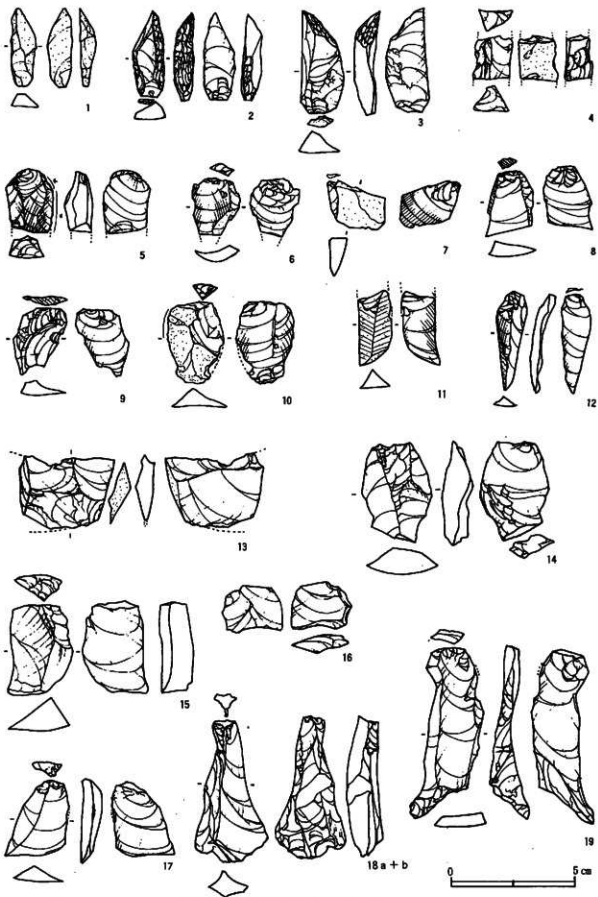
石器はナイフ形石器4点、石核3点、二次加工ある剥片7点、使用痕ある剥片1点、そして剥片29点である。ナイフ形石器は4点出土しているがいずれも形態的に違いが見られる。1は縦長剥片の背面左側面のみに調整が行われている。2は縦長剥片の背面両側縁に基部から刃部に至るまで調整が行われている。3は縦長剥片の先端部に調整が行われている。また、基部の背面側にも若干の調整が加えられている。4は遺物の両端が欠損しているので詳細は不明だが一側縁に加えられている調整の状況から一応ナイフ形石器に分類した。石核の3点はそれぞれ剥片と接合している、資料20に2点、資料21に1点が含まれる。二次加工ある剥片はいずれも縦長の剥片に連続的ではない調整が若干加えられている程度である。使用痕ある剥片は基部付近の背面右側縁に観察されるのみである。18は凝灰岩の削片であり、2点のみの出土で接合する。またここに図示しなかった石器のうち120点は黒曜石の小さな剥片または破片である。

本地点検出の石器の石材は、最も多く検出した黒曜石をはじめ珪質頁岩・砂岩・凝灰岩・安山岩の合わせて5種類が認められた。うち黒曜石が全体の75%を占めている。

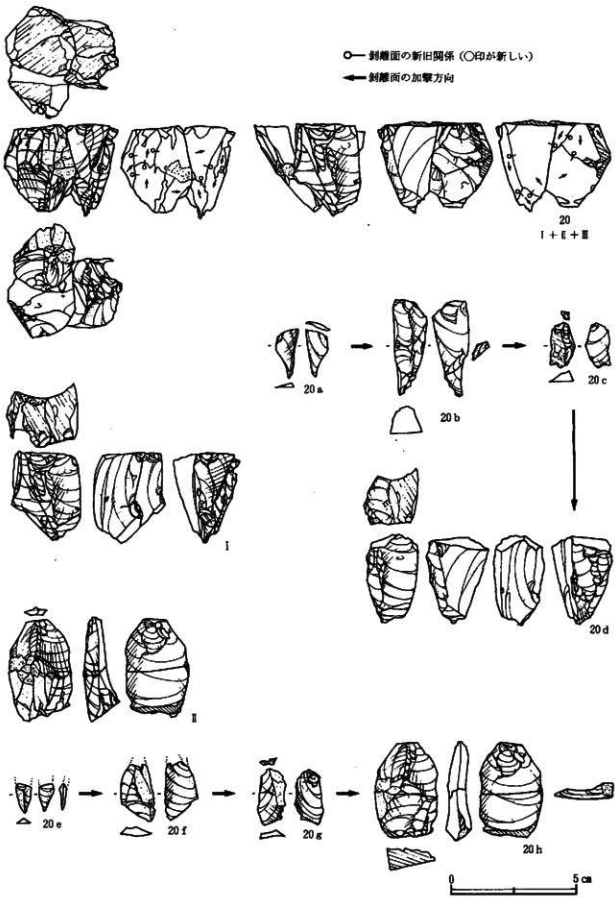
石核のところでは残核に剥片が接合する接合資料である。小さな剥片または破片が多く、ともに完全な接合復元はできなかった。そして製品との接合はなくすべて剥片とであった。



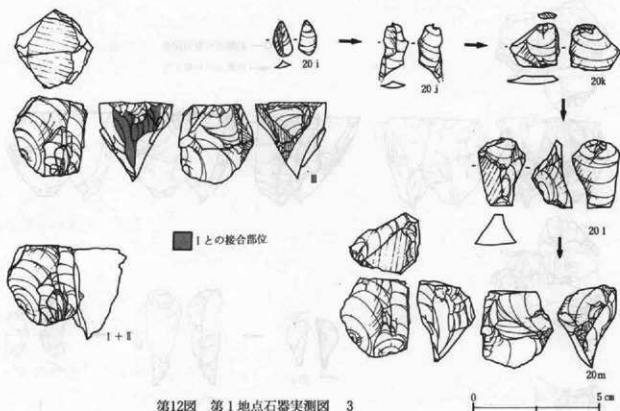
第9図 第1地点遺物出土状況図



第10图 第1地点石器实测图 1



第11図 第1地点石器実測図 2



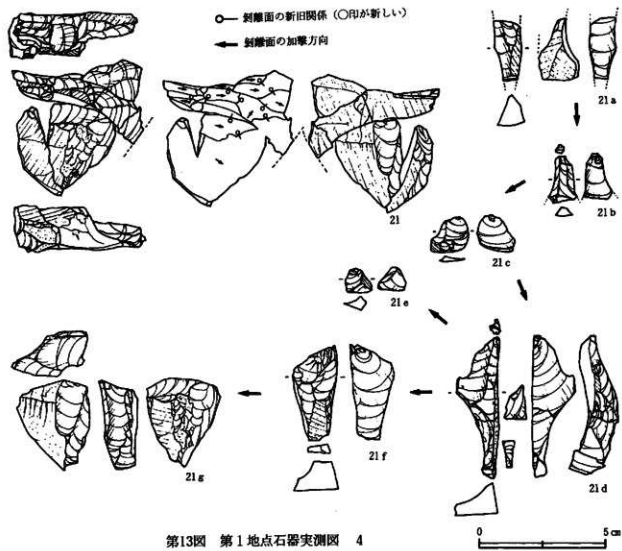
第12図 第1地点石器実測図 3

資料20、21はいずれも石材は黒曜石で節理面の状況および包含する不純物などを考え合わせると同一産地と考えられる、あるいは同一母岩の可能性も十分に考えられる。石質は不純物が混ざり素材としてはあまり良いとは言えず、大形の剝片（または石刃）を製作することは難しい。20、21とも石核再生と打面転移を頻繁に繰り返している。剝片を見ると石質にも因ると考えられるが、すずまりのものが多く、また折れているものも多い。これら剝片の中には石刃または石刃状剝片はほとんど見られず破片とも破片とも考えられる小さめの剝片が多い。

以上、本地点の石器の平面的・垂直的な分布状況、石器の接合状況、そして石材（母岩）の種類などを見ると、本地点、とくにグリッド9F-80を中心とする石器群は黒曜石を母岩（素材）の中心として縦長な剝片を中心とする剝片生産を行っていたことが予測される。同石器群のそのほかの石器・剝片は単独の出土でそれ以外に同一の母岩（素材）は見られず、もちろん接合も見られない。黒曜石以外には唯一14と17が珪質頁岩の同一母岩と考えられる。出土層準は先にも述べたとおり第2黒色帯上部（Ⅵa層）であり、黒曜石の接合資料を含む大半の石器がこの層準に該当するが、ナイフ形石器の4点はこれら石器の一群より上位より検出されていることもあり、それぞれ単独の素材でもあり少なくとも第10図1～3の3点は完成品の状態で他の地区から本遺跡にもたらされたと考えられる。

本石器群はいわゆる「先土器時代文化層下総Ⅱa期」と考えられる。

なお、本地点の石器群は、石器および数多くの破片のほとんどを黒曜石が占めるグリッド9F-80を中心とする一群と、石器の構成およびその石材を違えるグリッド10F-02.13に小さくまとまる一群との2つのグループに分かれる可能性も考えられる。



第13図 第1地点石器実測図 4

第2地点 (第8・14~20図、図版4・6・7)

調査区の北東隅に近く、北に入り込む小支谷に向かって傾斜し始めようとする地点から検出している。グリッド7K-41.42 付近を中心に検出され、東西16m、南北12mの広範囲にわたっている。遺物総数は1025点を数える。出土層はソフトローム (Ⅲ層) からハードローム層 (Ⅳ~Ⅴ層) にわたり出土しているが、層準としては礫・礫破片の多くはソフトローム層下部 (Ⅲ層またはⅣ層の可能性もあり) として、礫・礫破片の一部と石器群はハードローム層 (Ⅳ~Ⅴ層) としてよさそうである。

本地点の出土遺物の90パーセントを礫または礫破片が占め、残り10パーセントが礫・礫破片以外の石器・剝片である。これらの石器・剝片のほとんどはグリッド7K-52を中心にする直径約7mの円を示す範囲に集中して検出されている。また接合する剝片・石核もこの範囲の中のもの同士に限られており、隣り合う剝片・石核も2mを越えて離れることはほとんどない。

石器はナイフ形石器1点、角錐状石器3点、掻器2点、石核3点、二次加工ある剝片2点、使用痕ある剝片1点、蔽石1点、そして剝片18点である。ナイフ形石器は1点出土している、2は横長剝片の打面付近を腹面より調整を行っているが、途中で折断しており、この調整がナイフ形石器のどこま

第1表 第1地点石器計測表

押回 番号	遺 物		分 類	計 測 値 (mm)			重 量 (g)	打面	細部調整	石 材	備考
	出土地点	番号		長さ	幅	厚さ					
1	9 F-81	-3	ナイフ形石器	31.0	10.4	5.7	1.7	点状		細粒砂岩	
2	9 E-89	-3	ナイフ形石器	34.3	12.8	7.3	3.2	平面		珪質頁岩	b
3	9 F-80	-2	ナイフ形石器	39.4	18.9	8.3	5.6	平面		珪質頁岩	
4	9 F-81	-2	ナイフ形石器	18.5	16.3	9.9	2.7	欠損		黒曜石	
5	10 E-08	-1	剝片 (二次)	25.7	22.6	11.3	4.8	粉碎		黒曜石	
6	9 F-80	-4	剝片	22.9	19.0	4.6	1.7	平面		黒曜石	
7	9 F-90	-15	剝片 (二次)	22.0	19.1	7.2	2.5	平面		黒曜石	
8	9 F-81	-1	剝片	27.4	21.3	6.2	2.3	平面		黒曜石	
9	9 E-89	-25	剝片	25.7	17.1	6.6	2.4	2面		黒曜石	
10	10 F-02	-3	剝片 (使用)	32.0	22.0	7.7	4.3	平面		黒曜石	
11	9 F-70	-2	剝片	30.3	13.5	8.5	2.9	欠損		黒曜石	
12	9 F-80	-8	剝片	39.0	11.8	6.0	1.5	粉碎		黒曜石	
13	10 F-13	-1	剝片 (二次)	30.0	37.8	8.3	10.6	欠損		砂岩	
14	9 F-80	-31	剝片	39.3	28.9	10.4	9.5	粉碎		珪質頁岩	
15	10 F-03	-1	剝片	35.7	22.3	13.6	12.1	多面		砂岩	
16	9 F-03	-1	剝片 (二次)	24.0	18.8	7.4	3.5	欠損	部分的	安山岩	
17	9 E-89	-13	剝片	30.7	24.9	7.4	3.9	平面		珪質頁岩	
18	9 F-80	-67	剝片	56.2	21.3	10.4	8.3	欠損		凝灰岩	a
		-67	剝片	23.3	20.7	0.6	3.3				b
19	9 F-80	-70	剝片	69.4	20.1	12.6	10.8	平面		珪質頁岩	
20											I+II
20a	9 F-80	-44	剝片	16.8	16.7	2.0	0.3	平面		黒曜石	I
20b	10 E-09	-2	剝片	30.4	15.0	11.6	4.0	平面		黒曜石	I
	9 F-90	-9	剝片	10.1	11.4	3.4	0.2				
20c	9 F-80	-15	剝片	17.4	11.5	5.4	0.8	2面		黒曜石	I
20d	9 F-80	-102	石核	33.4	22.0	19.9	13.4			黒曜石	I
20e	9 F-80	-47	剝片	11.3	5.9	2.6	0.1	欠損		黒曜石	b II
20f	9 E-89	-29	剝片	23.5	16.0	4.6	0.9	平面		黒曜石	II
20g	9 E-89	-5	剝片	18.9	20.2	2.3	0.7	粉碎		黒曜石	II
	9 F-80	-17	剝片	36.9	23.8	10.5	3.1				
20h	9 F-80	-12	剝片				4.2	平面		黒曜石	II
		-47	剝片	13.5	8.1	2.3	0.1				
20i	9 F-80	-27	剝片	21.0	13.5	3.6	0.5	点状		黒曜石	II
20k	9 F-80	-51	剝片	18.4	20.0	3.9	1.3	平面		黒曜石	II
20l	9 E-89	-23	剝片	25.8	18.4	13.2	3.7	粉碎		黒曜石	II
20m	9 E-89	-12	石核	30.1	32.5	20.4	13.3			黒曜石	II
21											
21a	10 E-09	-4	剝片	24.0	11.2	15.0	3.1	欠損		黒曜石	
21b	9 F-90	-6	剝片	17.9	11.1	4.5	0.7	平面		黒曜石	
21c	9 F-90	-5	剝片	15.9	13.7	2.2	0.4	点状		黒曜石	
21d	9 E-89	-2	剝片 (二次)				5.3	平面		黒曜石	
	10 F-00	-1	剝片 (二次)	16.6	54.4	15.3	2.1				
	9 F-90	-1	剝片 (二次)				0.5				
21e	9 E-89	-28	剝片	11.1	10.4	4.3	0.3	粉碎		黒曜石	
21f	9 E-89	-15	剝片	34.9	24.1	12.5	6.2	平面		黒曜石	
21g	9 E-89	-22	石核	28.2	34.0	16.3	11.4			黒曜石	



で行われているかなど詳細は不明である。安山岩を素材としている。次に角錐状石器は3点出土している。1は横長剥片の先端部まで背面両側縁に腹面より調整が鋭角に行われている、素材は安山岩。3は途中で折断しており詳細は不明だが、厚さのある横長剥片の背面に腹面よりナイフ形石器を思わせる鋭角な調整が行われている。素材は安山岩。4は錐を思わせる鋭利な尖端をもつ、横長剥片の背面に腹面より粗い鋸歯状の調整を行って。素材は安山岩。6、7は剥片の先端部に細部調整を加え刃部を弧(凸)状に作りだしている搔器で、素材はいずれも砂岩である。6は一部に原面を残す剥片で、背面の右側の稜線に向かって腹面より調整が行われているようだが刃は分散した状態にある。刃の厚みはない。7の刃部は背面の稜線に向かって集まる状態に腹面より鋭角に調整が行われている。刃は6よりは厚みを持っている。11は砂岩の敲打器と思われる、端部に近い周囲部には打撃痕が複数観察される、長軸の一方の端部は欠損しているが、敲打した結果割れてしまったと考えられる。接合する破片はない。12~16は石器の接合状況を示したものである、石質は砂岩が3個体、凝灰岩と珪質頁岩が各1個体の計5個体を示した。いずれも大礫(最大長が10cm内外)を素材にしている。16は素材の原型を知り得る数少ない資料である。ここに上げた5点の接合資料は製品との接合はなく、すべてすずまりの剥片との接合であった。これら剥片の多くはすずまりまたは横長な剥片が多い、これは素材の大きさと石質に因るところが多いと考えられる。

石材は砂岩が最も多く、安山岩・頁岩・凝灰岩と続き、黒曜石はほとんど見られない。これは第1地点検出の石器群とは好対称な石材を示して興味深い。

本地点の遺物として、出土遺物の90パーセントを占める礫・礫片がある。平面分布では大きく3つのグループに分けられる。一つはグリッド7K-41.42を中心にする西側の大きなグループ、このグループは石器の分布する範囲とおおよそ重なる。そしてその東側グリッド7K-45を中心にするグループ、と南東側グリッド7K-64を中心とする小さいグループである。そして垂直分布から見ると、西側に位置する大きなグループは礫・礫破片の大半を出土する層準が東の二つの小さいグループ(Ⅲ層)より一段低い層準(V~Ⅵ層)にある。礫のほとんどは何等かの高熱を受け全体または一部が赤く変色したものが多く、総体的に脆く、多くが細かな破片に割れている状態である。完全に原形をとどめる礫の出土はわずかである。その中にあって、礫破片の半数以上が同じ石材同士接合し、満足な結果を得るものばかりではないが礫の原型を知り得る程度までに復元できたものが何点かある。復元状況は第3表に示すとおりである。礫片の接合は3つのグループそれぞれのグループ内同士のものが多いが、中には隣り合うグループの破片と接合する例も少数であるが見られる。

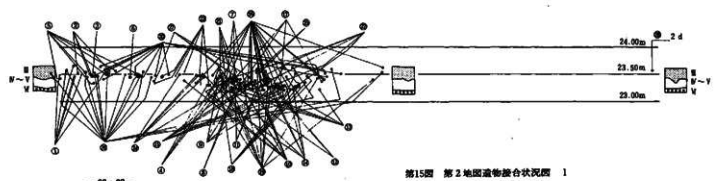
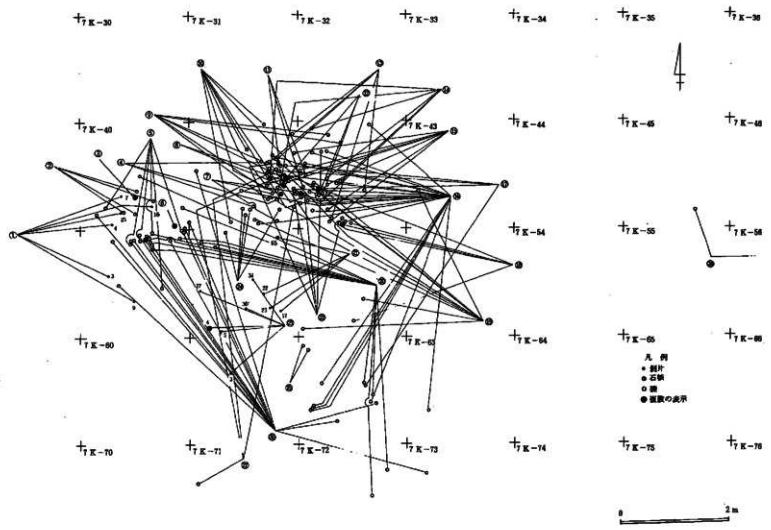
以上、本地点の遺物はその種類によりグリッド7K-51を中心に分布する石器群と本石器群を含めその南東に向かってに広範囲に分布する礫および礫破片の一群と大きく二分することができる。

ここでは石器群についてまとめることとし、礫群については項を改めて述べることにする。本石器群は第200図に示したとおりグリッド7K-51付近を中心に直径約7mの範囲に集中して分布し、若干の石器がその周囲に散在する。石器の素材は不明な石材を除くと砂岩が最も多く、安山岩・頁岩・凝灰岩・チャートと続き、黒曜石はほとんど見られない。石器はナイフ形石器が1点のみ、角錐状石器

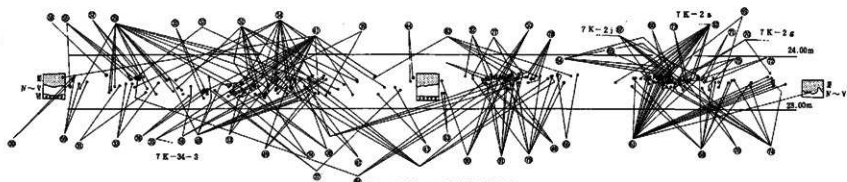
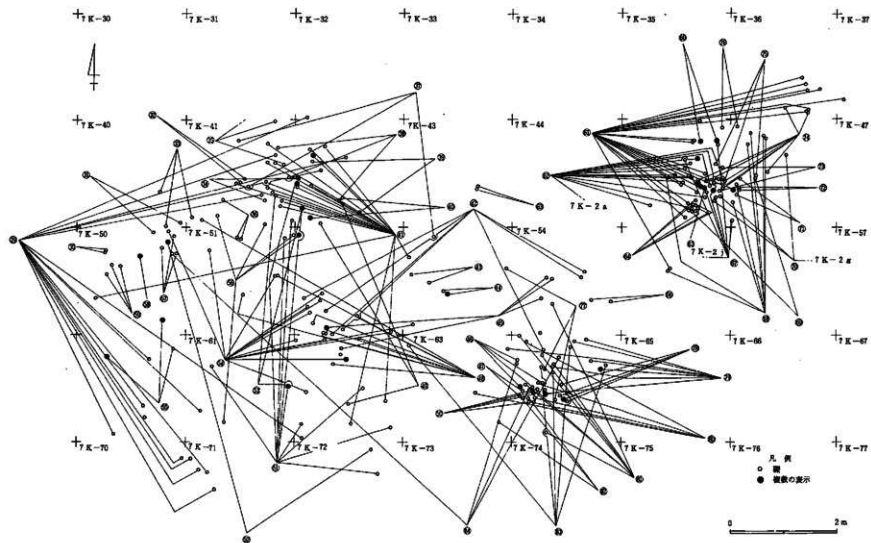


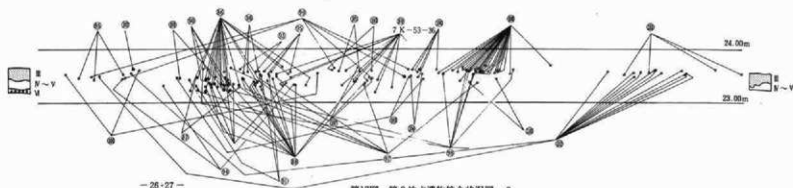
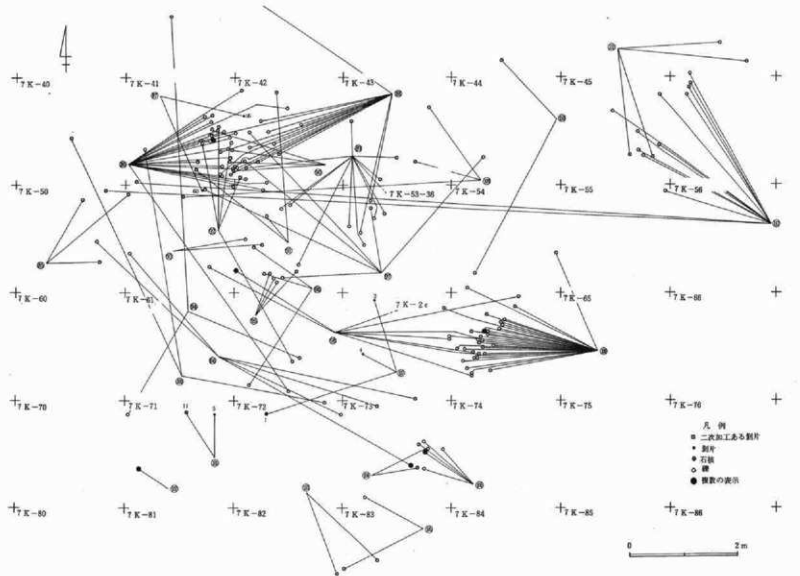
24.00m

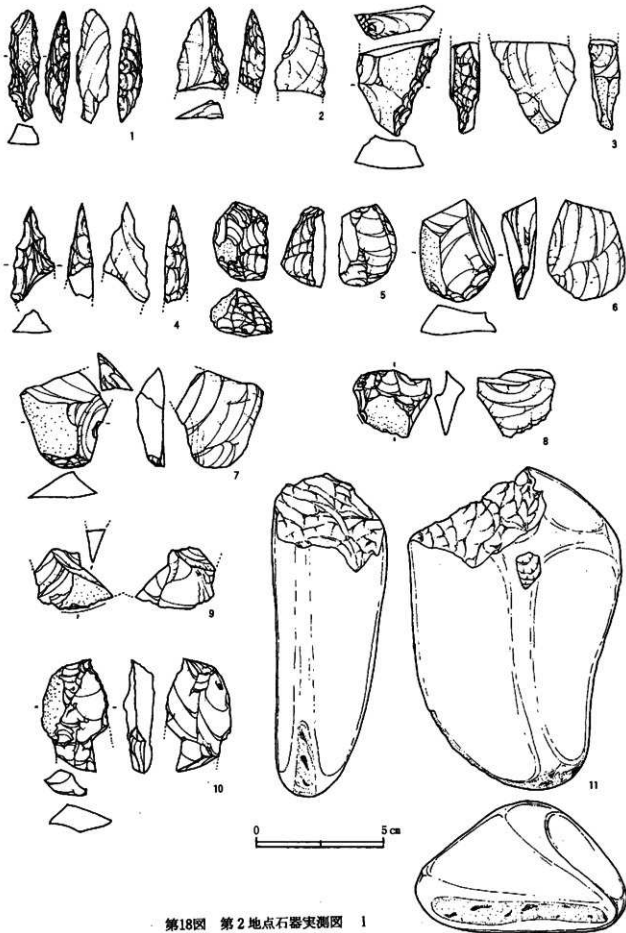
23.00m



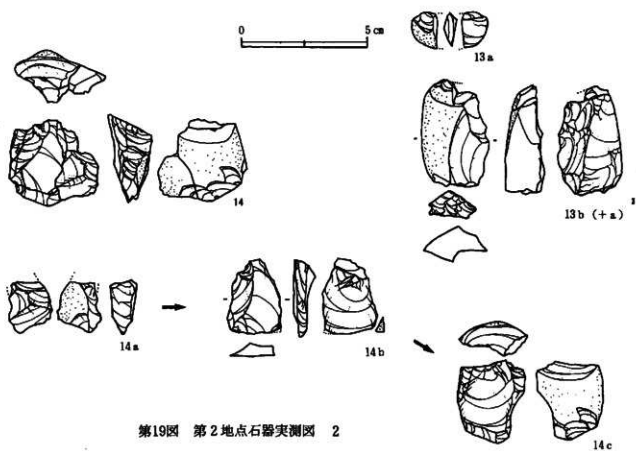
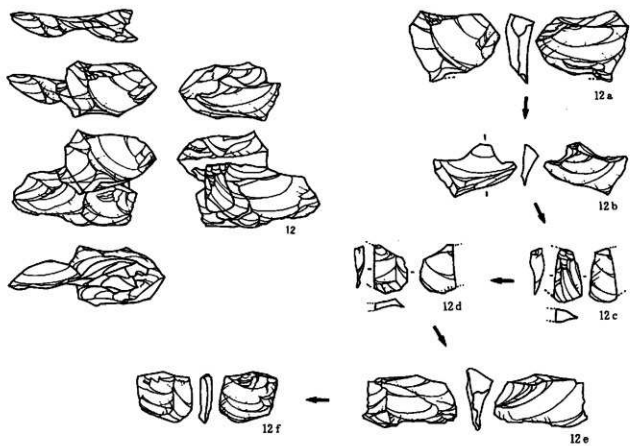
第15圖 第2地區遺物接合状況図 1



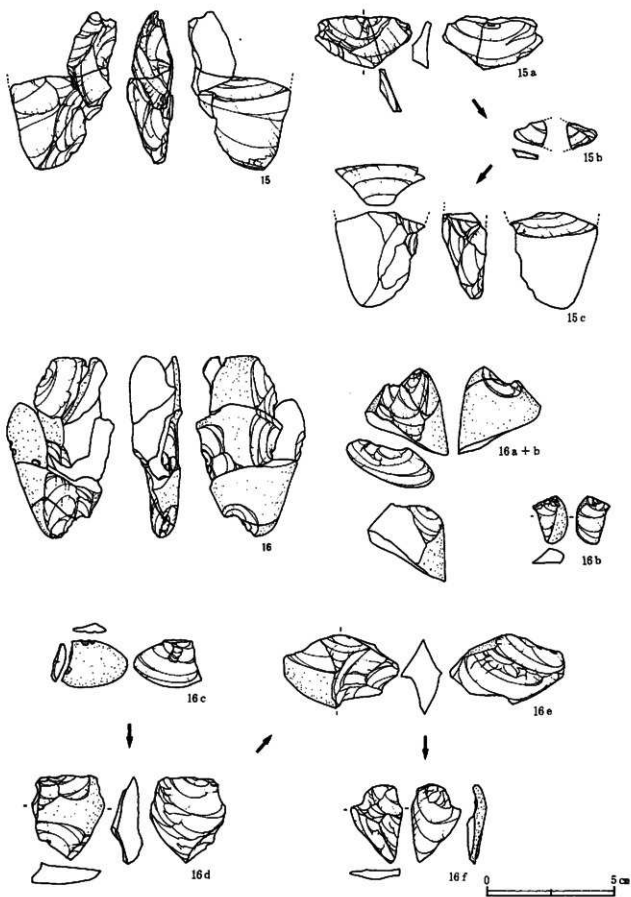




第18图 第2地点石器实测图 1



第19图 第2地点石器实测图 2



第20图 第2地点石器实测图 3



が3点、そして振器が2点と第1地点とは好対称である。また本石器群は、素材の多くを最大長が10cm内外の中・大礫に求めており、すつまりで横長または幅広い剥片生産を行っていたことが接合資料からも予測できる。産出層準は立川ルーム層のⅡ～Ⅴ層とする石器群であることが第198図の遺物の垂直分布状況からも見て取れる。本石器群はいわゆる「先土器時代文化層下総Ⅱb期」と考えられる。

第2表 第2地点石器計測表

押洞 番号	遺物		分類	計測値(mm)			重量 (g)	打面	細部調整	石材	備考
	出土地点	番号		長さ	幅	厚さ					
1	7K-54	-19	角錐状石器	4.3	1.2	0.9	4.4	欠損	二側縁	安山岩	
2	7K-41	-64	ナイフ形石器	3.2	2.0	0.9	3.7	欠損	一側縁	安山岩	
3	7K-42	-58	角錐状石器	3.6	3.3	1.1	13.1	欠損	二側縁	安山岩	
4	7K-51	-61	角錐状石器	3.6	1.7	1.0	3.6	欠損	二側縁	安山岩	
5	7K-45	-79	石核	2.8	2.5	1.6	10.4			珪質頁岩	
6	7K-42	-109	振器	3.6	3.0	1.4	13.8	欠損		砂岩	
7	7K-42	-55	振器	3.6	3.4	1.1	11.1	欠損	一端	砂岩	
8	7K-53	-12	剥片(二次)	2.3	3.0	0.8	5.6	欠損	部分的	安山岩	
9	7K-50	-73	剥片(使用)	3.2	2.3	1.3	5.2			凝灰岩	
10	7K-41	-32	剥片(二次)	4.0	3.2	1.2	10.8		部分的	安山岩	
11	7K-41	-139	蔽石	(12.0)	8.3	4.9	576.0			砂岩	
12											
12a	7K-51	-5	剥片	2.3	3.6	1.1	8.3	点状		砂岩	
12b	7K-61	-3	剥片	1.9	3.2	0.7	2.5	点状		砂岩	
12c	7K-51	-27	剥片	2.1	1.1	0.6	1.1	点状		砂岩	
12d	7K-51	-4	剥片	1.9	1.3	0.5	1.1	2面		砂岩	
12e	7K-51	-34	剥片	2.4	3.6	1.0	5.0	2面		砂岩	
12f	7K-51	-30	剥片	2.9	2.2	0.5	2.2	2面		砂岩	
13a	7K-71	-5	剥片	1.2	1.1	0.4	0.7			凝灰岩	
13b	7K-71	-11	剥片(二次)	3.8	2.7	1.5	15.1		片面	凝灰岩	
14											
14a	7K-63	-2	剥片	2.0	1.6	1.1	2.4	不明		珪質頁岩	
14b	7K-63	-4	剥片	2.2	2.0	0.9	3.8	平面		珪質頁岩	
14c	7K-72	-1	石核	2.7	2.4	1.3	8.9	平面		珪質頁岩	
15											
15a	7K-51	-23	剥片	1.9	2.6	0.6	2.9	平面		砂岩	
	7K-51	-12	剥片	1.8	1.7	0.4	1.0			砂岩	
15b	7K-51	-22	剥片	1.2	1.0	0.4	0.5	点状		砂岩	
15c	7K-51	-66	石核	3.7	3.4	1.7	14.6	2面		砂岩	
16											
16a	7K-50	-9	剥片	2.3	3.5	1.5	11.7	原面		砂岩	(+b)
16b	7K-50	-33	剥片	1.7	1.5	0.7	1.4	原面		砂岩	
16c	7K-40	-25	剥片	1.8	2.6	0.6	2.7	平面		砂岩	
16d	7K-40	-4	剥片	3.2	3.0	1.1	9.6	点状		砂岩	
16e	7K-40	-7	剥片	4.5	2.9	1.4	13.2	欠損		砂岩	
16f	7K-40	-16	剥片	2.9	2.0	0.6	2.6	原面		砂岩	

第3表 第2地点礫・礫破片接合状況

資料番号	石 材	復原率% 総重量 g	破片数	接 合 遺 物 番 号	備 考
2	チャート	50 202.3	4	40-5-11-12-17	
3	安山岩	31.4	2	40-13(2)	
4	礫灰岩	90 46.9	4	41-25-100-130-151	
5	凝灰岩	130.8	6	40-3+50-14-41-44-48-58	
6	砂岩	95 258.4	2	40-19(2)	
7	砂岩	81.4	3	41-30-107-119	
8	砂岩	70 82.8	6	41-125-143(5)	
9	チャート	60 52.1	7	41-23-59-65-142(2)+42-14-16	
10	チャート	50 59.6	9	41-11-16-22-26-62(2)+42-37-43-49	
11	礫岩	32.6	3	41-36+42-90-93	
12	砂岩	85 74.8	3	41-70+42-63-84	
13	頁岩	40 80.3	5	41-69-147-195+42-9-76	
14	チャート	80 81.0	7	41-33-69(2)+42-8-66-114-119	
15	不明	95 149.3	7	41-68-72-38+42-3-61-65-98	
16	チャート	70 75.0	25	41-18-24-42-65-120-146+42-30-34-47-72-87-102-111-112(4)-113-121+62-26-28-29-40-43+69-5	
17	礫灰岩	40 39.6	6	41-76-81+42-64(3)+62-39	
18	礫灰岩	80 67.3	6	41-80+42-81-99-104(2)+52-36	
19	チャート	70 82.2	10	41-46-108-120-132-164+42-5-51+43-2+52-1-43	
20	チャート	80.1	13	40-15-21+50-12-46-47-65-70+51-46-49+62-11-16+72-2-6	
22	花崗岩	95 121.2	5	41-65-122+42-54-71-80	
24	流紋岩	34.6	5	41-12-13-14-94+51-50	
25	砂岩	14.8	2	62-3-18	
26	チャート	60 255.8	17	40-2-35+41-2-8+50-7-39-42-45-50-54-61-67-71(2)+62-6-12+79-2	
27	チャート	85 70.5	4	41-57-75-79+71-16	
28	安山岩	34.9	2	45-45+2d	
29	チャート	70 91.0	16	32-1+41-58-134+42-18-68+60-6-7-8-9+61-2+62-44+70-2+71-3-8-13-15	
30	砂岩	18.1	2	50-5-34	
31	安山岩	21.8	2	40-32+50-63	
32	チャート	3.6	2	41-101-157	
33	砂岩	40 31.2	3	40-18-34+41-96	
34	安山岩	52.4	3	41-109+42-45(2)	
35	砂岩	95 59.1	3	34-3+41-28-180	
36	砂岩	112.0	3	41-158+51-52-53	
37	不明	44.2	3	41-36-43+53-30	
38	砂岩	89.6	3	41-87-141+42-28	
39	礫灰岩	32.2	2	42-7-122	
40	チャート	28.8	4	42-4(3)-78	
41	チャート	60 168.8	22	41-17-39-90-105-135-149-150-162-163+42-29-34(3)-44-50-53-118(2)+50-2+53-2+62-31-41	
42	不明	47.5	7	52-5-9-21-27+54-10-21+64-114	
43	安山岩	21.3	2	53-9-14	
44	安山岩	20.4	3	53-3-4(2)	
45	花崗岩	58.2	6	52-39(2)+54-6-20-24+62-7	
46	石英	56.0	10	64-8-54(7)-70-99	
47	砂岩	40.9	2	64-48-55	
48	安山岩	80.2	9	41-3+51-9-14+52-19-31-32-38+62-5-9	
49	砂岩	100 64.7	3	42-59-79+62-34	
50	砂岩	95.1	4	64-46-63-65-66	
51	チャート	40.3	11	41-53+42-38-115+51-69+61-5-8+62-14-22-38-57+72-3	

資料 番号	石 材	復原率% 総重量g	破片数量	接 合 遺 物 番 号	備 考
52	チャート	18.7	3	50-53(2)+72-5	
53			4	41-115+42-38(2)+61-5	
54	火山岩	64.8	14	50-89+51-1・14+52-11・14・24・28・29+53-1+52-2・ 8・(2)・17・24	
55	チャート	16.1	8	50-19(3)+60-3・4(4)	
56	砂岩	119.0	7	41-50-159+51-68+52-61(3)+61-7	
57	火山岩	23.8	3	50-13-16-55	
58	チャート	2.8	2	50-11(2)	
59	チャート	1.8	3	50-4・32-35	
60	粘板岩	93.7	9	45-21(2)・23(7)	
61	チャート	189.3	24	36-5・6・7・8・12・13+37-3+45-12・14・15・20・28・54(2) ・49・56・61(2)・77・78・90+46-24(2)+55-5	
62	石英	85 137.9	15	45-2・10・16・17・19・26(2)・31・32・37・46-63・64・100+2a	
63	砂岩	54.3	2	43-8・10	
64	凝灰岩	50.2	5	45-50-81・83・84・85	
65	チャート	30.6	2	45-34(2)	
66	流紋岩	61.0	2	54-12・14	
67	砂岩	127.4	8	45-18・42・54・56・97・102+46-28+2j	
68	不明	95 219.2	8	45-9+46-3・9・10・14・21・26+55-4	
69	火山岩	17.2	2	45-82+46-16	
70	火山岩	95 105.2	4	45-41・53+46-11+2a	
71	火山岩	41.7	2	46-20-30	
72	火山岩	95.6	2	46-29-33	
73	石英	49.9	2	45-30-55	
74	チャート	85 107.0	8	36-11・14+45-33・87・92・94・96+46-7	
75	砂岩	28.0	3	45-29-70+46-1	
76			2	45-24+46-18	
77	石英	27.1	3	64-19(2)・37+58-6	
78	砂岩	56.4	7	54-2+64-26・29・30・84(3)	
79	チャート	50 70.8	12	63-6+64-4・7・39(2)・50・89・107(5)	
80	石英	90.1	5	63-11+64-2・60・69・97	
81	不明	50 90.4	8	54-4+64-1・10・23・35・64・67・120	
82	火山岩	90 119.3	3	63-12+64-56-58	
83	凝灰岩	116.4	5	63-1+64-3・20・52・78	
84	砂岩	70 59.2	4	50-15+64-9・12・41	
85	砂岩	7.9	3	50-21・72+51-44	
86	砂岩	50 108.0	22	41-31・34・56・78・86・89・113・117・129・140・144(2)・153・155 +42-17・83・108・117・123+51-64+52-54+62-15	
88	砂岩	145.4	16	32-3+41-52・54・71・111・116+42-2・19・20・36・57・70・75 ・118+53-11・29	
89	砂岩	130.0	12	42-110+43-1・6・12+52-16・42・57+53-7・10・15・16・36	
90	砂岩	50 63.3	4	41-65・77・112・118	
91	不明	22.0	3	41-19+42-15+52-26	
92	砂岩	60 52.1	5	41-98・104・145+42-40+62-36	
93	火山岩	19.7	2	52-12・15	
94	火山岩	36.2	3	31-2+62-37+71-14	
95	火山岩	37.2	4	52-10・20・35・37	
96	砂岩	8.3	3	52-8・13+62-1	
97	砂岩	52.7	6	42-6・88+44-3+51-65+52-22+53-26	
98	凝灰岩	130.0	11	51-11+52-52(3)+63-8+64-5・44・63・71・119+2C	
99	チャート	25.0	7	50-26+51-3+63-17+72-7+73-10(2)+13	
100	砂岩	38.3	3	40-14+41-6+72-6	

資料番号	石材	復原率% 総重量g	破片数量	接合遺物番号	備考
102	チャート	1.5	2	71-1(2)	
103	不明	23.0	2	82-1+83-8	
104	チャート	18.4	2	73-11-15	
105	安山岩	29.8	2	73-1+83-2	
106	不明	98.0	6	73-4-5(2)-6-9-12	
108	凝灰岩	456.8	28	54-1-16+63-8-14+64-11-14-15-21-24-27-36-39-40-42-44-45-47-49-61-70-72-74(2)-75-77-86-92-108	
109	砂岩	16.4	3	43-3-4+51-54	
110	砂岩	7.1	2	34-4+54-23	
111	安山岩	213.5	4	36-4-13+45-40-48	
112	安山岩	118.0	13	36-10+45-7-25-27-37-39-59+46-4-5-15+55-7+41-97+50-55	

### 第3地点 (第8・21・22図、図版4・7)

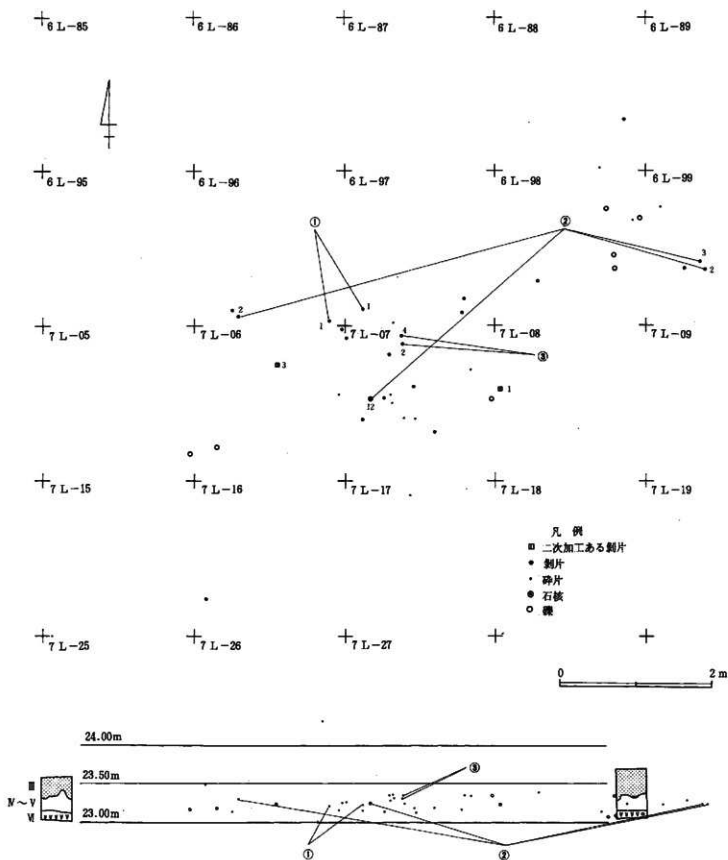
第2地点の東側15mの調査区の北東隅グリッド6L-97を中心に検出され、遺物は東西8m、南北6mのやや広い範囲に散漫に分布している。遺物総数は43点と一番少ない。出土層は立川ローム層のハードローム層(N~V層)中であり、本層を出土層準としてよさそうである。石器は二次加工ある剝片が2点、剝片が1点および接合する剝片と石核の4点の合計7点のみで、その他は礫破片である。接合資料は4の一個体のみで、それも残核に小剝片が2点接合するのみである。石材は珪質頁岩・砂岩・ホルンヘルスの3種類であり、黒曜石の出土は全くなかった。この傾向は隣接して検出された第2地点の石器群とも非常に類似している。剝片は幅広い不整形なものが多く、石刃および石刃状剝片は見られない。おそらく石器の素材においても第2地点の石器群と同様に中・大礫に求めているものと考えられる。指標となる石器が出土してはいないが本石器群も第2地点と同様いわゆる「先土器時代文化層下総Ⅱb期」と考える。

ただし、本地点の遺物の分布状況は第1・第2地点と比べてごく集中する地点が無く、どちらかと言えば散漫的である、また本地点は調査区の北東端に位置しており、遺物の分布状況を考えるとさらに東側の調査区域外へ遺物の分布が広がる可能性も十分に考えられる。さらに検出された石器の石材、出土層準等を考えると、すぐ南に位置する第2地点の石器群とも共通するところもあり、ここでは本地点の石器群についての詳細な検討は省略することにする。

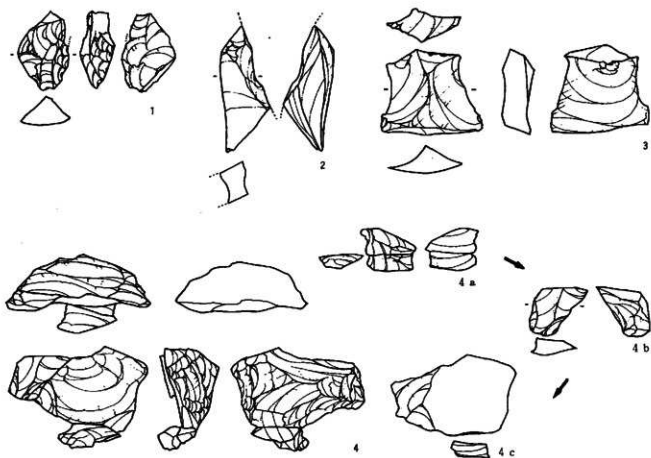
### 地点以外の出土遺物 (第23・24図、図版7・8)

ここでは、グリッドまたは遺構内などから単独で出土した遺物の中から先土器時代の所産と考えられる遺物を一括した。遺物の出土層位はいわゆる新时期テフラ層(Ⅱ層)からのものが最も多く、立川ローム層中からの出土はソフトローム層(Ⅲ層)からの角錐状石器など2点と第2黒色帯(Ⅶ層)からの二次加工した剝片1点の計3点のみであった。また、剝片の中には住居の覆土中から出土しているものもある。

石器はナイフ形石器1点、角錐状石器1点、削器2点、尖頭器1点、彫器1点、二次加工ある剝片



第21図 第3地点遺物出土状況図

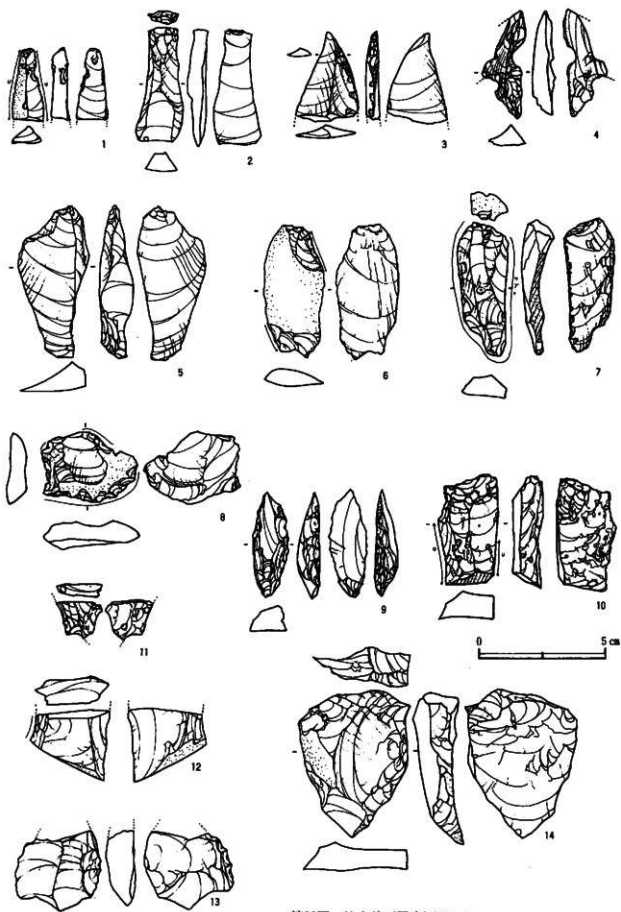


第22図 第3地点石器実測図

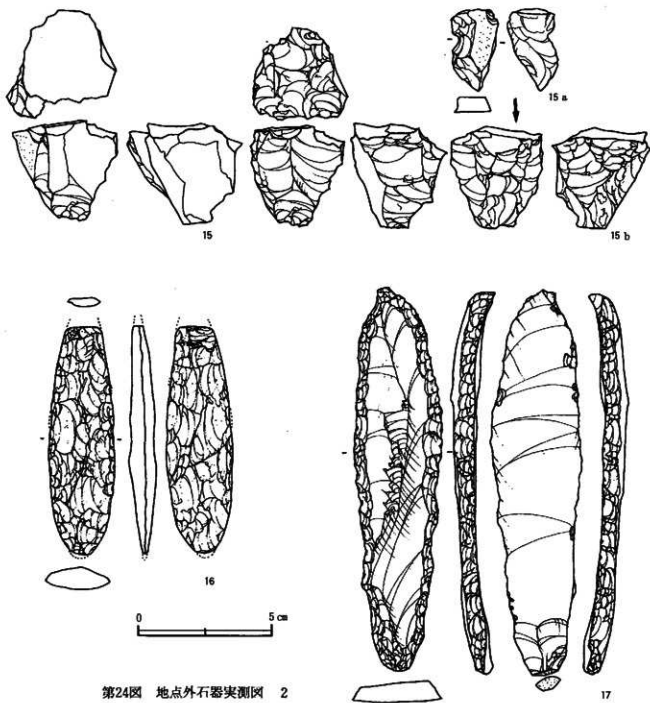


第4表 第3地点石器計測表

標号 番号	遺物		分類	計測値 (mm)			重量 (g)	打面	細部調整	石材	備考
	出土地点	番号		長さ	幅	厚さ					
1	7 L-06	-3	剝片 (二次)	2.5	2.6	1.1	5.0	平面	部分的	砂岩	
2	7 L-08	-1	剝片 (二次)	4.7	2.0	1.2	9.5	欠損		ホルムフェルス	
3	6 L-89	-1	剝片	2.9	3.7	1.2	10.8	平面		珪質頁岩	
4											
4a	6 L-99	-2	剝片	1.6	2.1	0.8	1.3	不明		ホルムフェルス	
	6 L-99	-3	剝片				0.7	不明		ホルムフェルス	
4b	6 L-96	-2	剝片	1.7	2.2	1.7	2.2	平面		ホルムフェルス	
4c	7 L-07	-12	石核	3.2	4.6	1.6	22.7	平面		ホルムフェルス	



第23图 地点外石器实测图 1



第24図 地点外石器実測図 2

4点、そして使用痕ある剥片3点である。次に石器を少し詳しく見てみよう、ナイフ形石器は3の1点で黒曜石の石刃を用い打面を取り去るように背面に加工を加えている。角錐状石器は9でやや厚めの珩質頁岩の横長剥片を用い背面両側縁の一部に刃部らしきものを残してほぼ全周にわたって鋭角な調整が加えられている。さらに基部には腹面側にも調整が加えられている。なお打面は調整により削り取られて残っていない。削器は7と8の2点でいずれも石材は黒曜石である、7は石刃状剥片を用い右辺の片面に調整を加えて削器としている、さらに先端部には調整を加えてノッチ状の凹を作りだしている。また基部を除きほぼ全周にわたって摩擦に因ると思われる摩擦の痕が観察される。8は横長剥片の端辺に腹面より連続して細部調整を加え刃部を作り出している、また打面付近にも細部調整



第5表 地点外出土石器計測表

採回 番号	遺物		分類	計測値 (mm)			重量 (g)	打面	細部調整	石材	備考
	出土地点	番号		長さ	幅	厚さ					
1	4 G-38	-3	剥片 (使用)	2.8	1.2	0.7	2.0	平面		黒曜石	a
2	4 H-88	-2	剥片	4.5	1.8	0.7	6.0	欠損		珩質頁岩	a
3	8 I-45	-2	ナイフ形石器	3.5	2.4	0.6	3.3	欠損	一側縁	黒曜石	a
4	8 I-45	-2	剥片	2.0	4.1	0.8	2.6	欠損		黒曜石	c
5	4 H-14	-3	剥片 (使用)	5.9	2.8	1.4	12.5	粉碎		黒曜石	
6	8 E-43	-1	剥片 (二次)	5.2	2.4	0.8	10.7	粉碎	部分的	安山岩	
7	6 F-15	-3	剥片 (使用)	42.4	34.0	11.6	10.0	平面		黒曜石	
8	8 I-45	-2	剥片 (使用)	3.7	2.7	0.8	7.5	欠損		黒曜石	b
9	7 E-05	-3	角雫状石器	4.1	1.4	0.9	4.6	欠損	二側縁	珩質頁岩	
10	5 H-58	-1	剥片 (使用)	4.4	2.3	1.1	13.6	欠損		黒曜石	
11	0 5 7	-9	剥片 (二次)	1.4	1.8	0.7	1.7	欠損		黒曜石	a
12	5 H-98	-2	剥片 (二次)	29.9	28.3	9.9	8.8	欠損	部分的	安山岩	b
13	0 4 5	-3	剥片 (二次)	31.5	31.6	12.4	11.6	点状	部分的	安山岩	
14	0 4 0	-9	剥片	54.3	45.7	18.6	35.5	欠損		珩質頁岩	
15											
15a	0 4 0	-3	剥片	3.0	1.7	0.7	4.0	平面		珩質頁岩	
15b	表採	C	石核	3.8	3.4	3.5	44.2			珩質頁岩	
16	11 I	-2	尖頭器	(8.1)	24.2	10.6	21.6		両面両縁加工	粘板岩	
17	10 F	-4	彫刻刀形石器	14.0	33.8	12.9	52.7	欠損	片面両縁加工	珩質頁岩	

が加えられている。16は尖頭器で、粘板岩製の縦長剥片を用い両面両側縁に調整を加えているやや細長い木葉形の尖頭器である、あいにく先端部分が背面方向に折れて欠損し、完形品ではないのが残念である。17は影器で、珩質頁岩製の大型石刃の背面の両側縁全体に腹面より鋭角に連続して調整を加えている、先端部には右方向からの彫刀面打撃によると思われる櫛状刻痕の一部が腹側側に見られる、この打点部分は欠損して観察されない。また、基部付近左側縁に小さな突起を作り出している。そのほか外見の形状はいわゆる「ホロロカ型影器」に類似している。15は接合資料である、頁岩製の石核に剥片が1個接合するのみである。石核は打面転移を繰り返している。6・11～13の4点は二次加工ある剥片で、石材は黒曜石(11)と安山岩の2種類である。いずれも片側側縁に短い連続した二次加工を腹面より加えた調整が見られる。1・5・10の3点は使用痕のある剥片で、石材はすべて黒曜石の縦長剥片である。

以上、第1～3地点および地点以外から出土した先土器時代所産の遺物についてその概要を述べた。本遺跡からは第1地点208点、第2地点は最も多く1025点、第3地点は非常に少なく43点、そして地区外からは16点合計1292点の先土器時代所産の遺物が検出されている。遺物の内容を見ると実に70%以上を礫もしくは礫破片が占め、石器と分類できるものは124点と少なく10%にも満たない量である。残りの20%は破片・削片が主である。また遺物の出土する層は立川ローム層のソフトローム層(Ⅲ層)の下部から第2黒色帯(Ⅷ層)上部にかけての広い範囲にわたる。第1～3のいずれの地点も遺物の多くが産出する層位は層準的には本県に於ける先土器時代の文化層『下総Ⅱ期』を包含す

る層準とすべて重複する。石器そのものの出土点数はあまり多いとは言えないものの、ナイフ形石器・角錐状石器・撚器および蔽石などを中心に検出されている。また細石器・槍先形尖頭器や礫器等を出土するとされる相前後の『下総Ⅲ期』・『下総Ⅰ期』の遺物の出土は第1～第3のいずれの地点でも見られず、地点外出土の遺物にはほんのわずかに検出されただけであり、このように石器等の構成面から考えても第1～3地点検出の石器群は『下総Ⅱ期』所産のものとしてよいであろうと考える。そうした中で、遺物の検出層準を多少上下に違えて検出された本遺跡の東に位置する第1地点と距離を隔てて北西に位置する第2・3地点という二つの地点では石器の器種の構成、石器素材の種類等にも明確な違いがあり、第1地点は先土器時代文化『下総Ⅱa期』に、第2・3地点は同じく『下総Ⅱb期』に、それぞれ相当すると考えられ、本遺跡には時代を違える二つの文化層が存在するといえる。

## Ⅱ．縄文時代の調査

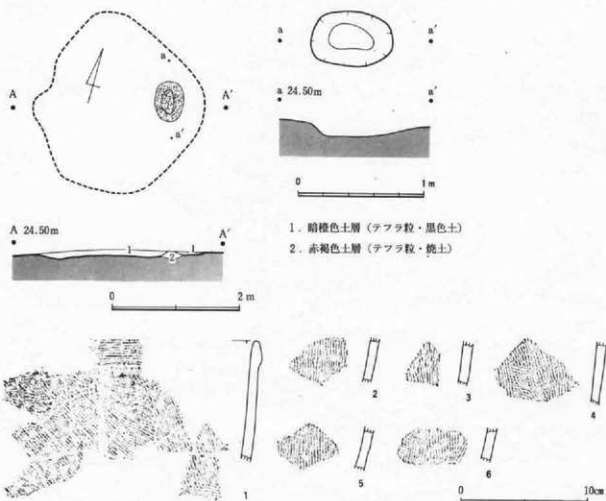
### 1. 遺構と遺物

#### a. 住居跡と遺物

調査区の北端のやや北に突き出た台地の縁に近い区域で縄文時代の遺構が多く検出された。そのうち住居跡と思われるものは9軒検出されている。数は少ないものの時期・時代は縄文時代のほぼ全域にわたっている、ここでは遺構が検出された順に出土した遺物と共にその概要を述べることにする。

#### 075号住居跡（第25図、図版9・15）

**遺構** 調査区北側の西端（E-7）に位置する。平面形は不整形円で、掘り込みは確認面から僅か8cmほど鍋底状に掘り下げた状態で検出された。最大での径は2.7mを測る。床面と壁との区別は難しく、検出した箇所は全て床面と考えられる。伊跡は床面と考えられる平坦部の東側に焼土が微かに堆積しているのが検出されただけである。柱穴及びそのほかの施設は検出されていない。



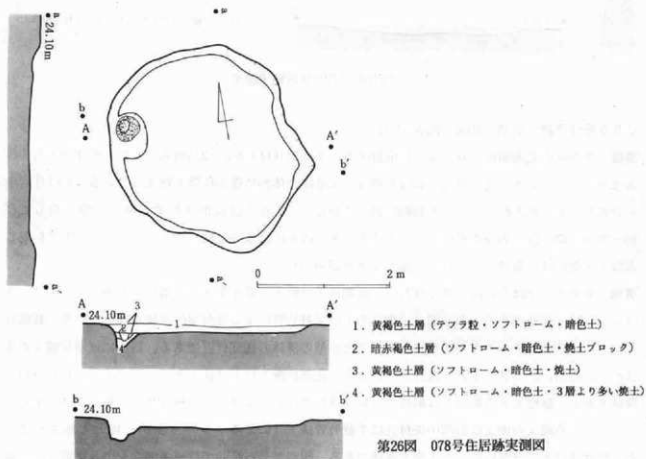
第25図 075号住居跡実測図及び出土遺物

遺物 掘り込みも非常に浅く住居の範囲もはっきり確認できない中で出土した遺物は僅かであるが、縄文土器が出土している。そのおもなものは縄文晩期の土器破片である。1は口縁部付近の破片であるが、口縁が折り返しになり多少肥厚し、燃糸文が施されている。2～6は胴部の破片と思われ、いずれも1と同様に燃糸文が施されている。出土した土器破片はすべて同一個体の可能性が充分考えられるが、残念ながら接合するものはない。千網式土器であると思われる。

#### 078号住居跡（第26図、図版9）

遺構 調査区の北端近く（H-4）に位置する。確認面から僅か12cmほど掘り下げた帆立貝に似た不整形な径約3mの掘り込みが検出されているが住居の掘り込みとしてはやや不自然であると考え。西側の壁に接して僅かだが焼土の堆積を伴う小掘り込みが検出されている、本住居にともなう炉と考えるべきか、検出された位置に疑問が残る。また床面と考えられる底部は全体に軟弱であり、硬化した痕跡はまったく確認できなかった。柱穴およびそのほかの施設は検出されていない。

遺物 遺物の出土は若干あったが、すべて小破片で図示できるものはなかった。

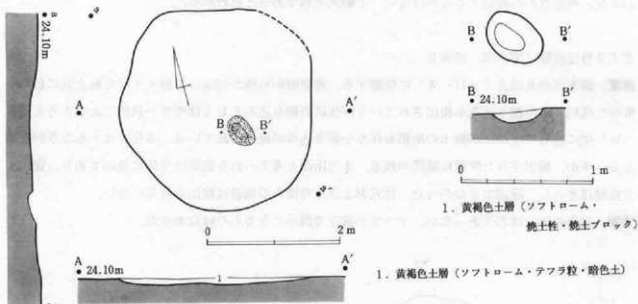


#### 079号住居跡（第27図、図版9）

遺構 調査区の北西斜面（G-4）に位置する。確認面から僅か8cmほど鍋底状に掘り下げた直径約

3mの不整形形を呈する住居跡である。壁らしき痕跡はなかった。床面と考えられる箇所は全体に軟弱である。住居中央やや南に寄って炉が検出されている、地床炉である。柱穴およびそのほかの施設は検出されていない。

**遺物** 遺物の出土は若干あったが、すべて小破片で図示できるものはなかった。

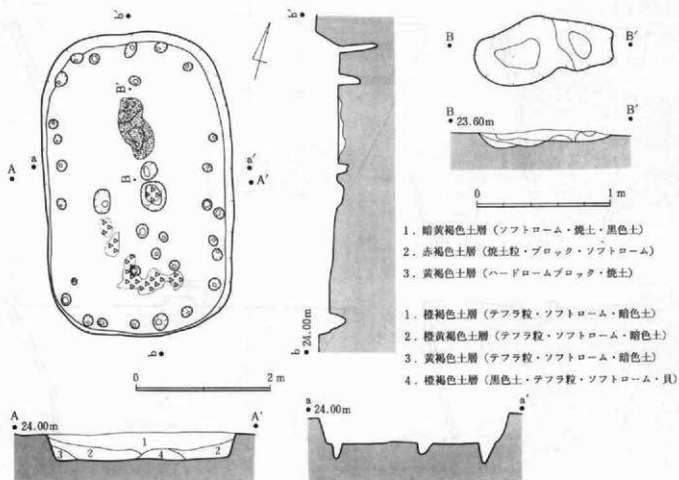


第27図 079号住居跡実測図

#### 080号住居跡 (第28・29図、図版10・15)

**遺構** 調査区の北端斜面 (H-3) に位置する。平面形状は4.5m×2.5m隅丸方形。確認面からの深さはハードルームまで達し最大で40cmを測る。床面は全体的に僅かに堅く締まっている。炉は住居中央北寄りにあり地床炉で、住居の長軸に沿って細長い。主柱穴は検出されず、壁の内側に沿って径10~20cm、深さ20~40cmの壁柱穴が一周する。そのほかには施設は検出されていない。そして炉跡の南側の床面には小規模ながら貝の堆積が4カ所認められた。

**遺物** 遺物の出土はそれほど多くはない。前期前半の胎土に繊維を含む土器がその多くを占める。1は片口を持つ深鉢である、羽状縄文の地文の上に半截竹管による幾何学的文様を施している。底部は欠くが上げ底を呈することが観察される。2は小型の深鉢の底部付近である、器面には羽状縄文が施されているが、はっきりそれとは分りにくい。底部は微かに上げ底である。3は大型の片口を持つ深鉢である。観察できる範囲では粗紐のみ施文されている。4は1と同様な片口を持つ深鉢である、ループ文と斜縄文の地文に胴部中央付近に半截竹管様工具によるコンパス文が一周して施されている。5は3ほどではないにしろ大型の深鉢である。観察できる範囲では異条縄文を羽状に施文して地文としている。口唇部には中央をくぼめた小突起が付けられている。6はやや小型の深鉢である、器面全体に斜縄文のみ施文している。7~10はいずれも深鉢の口縁部付近の破片である。7・8はともに口唇部直下にループ文を数段施文して口縁部の文様としており、以下にはループを持つ縄文を羽状



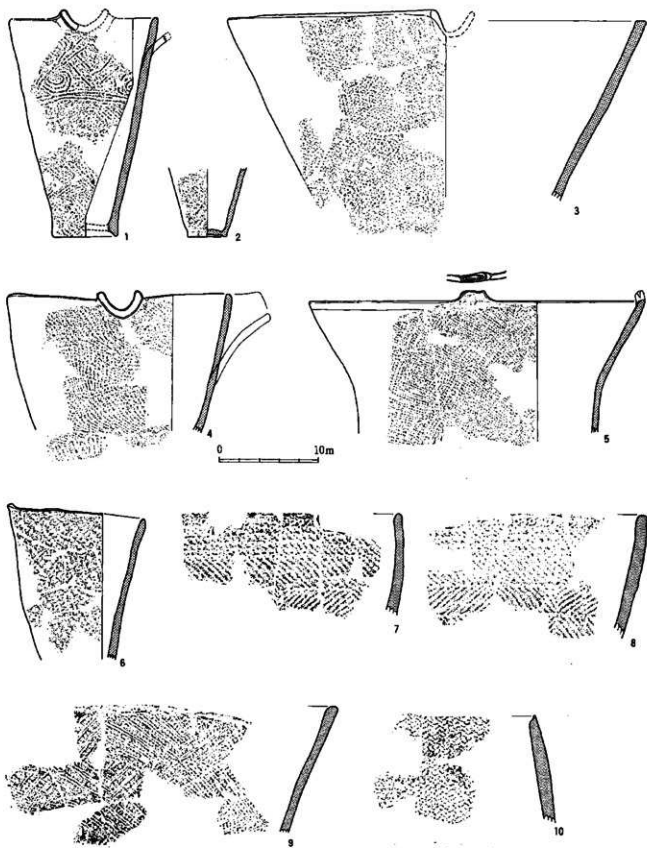
第28図 080号住居跡実測図

に施文している。9は5と同様に異条縄文を羽状に施文している。10は組紐を器面全体に施文しているのみである。底部は平底で、一部に1の様な上げ底を呈するものがある。器形を見ると多くは底部から口縁に向かって直線的に開く形状である、まれに10のように口縁に向かって内湾するものもみられる。すべて関山式土器である。

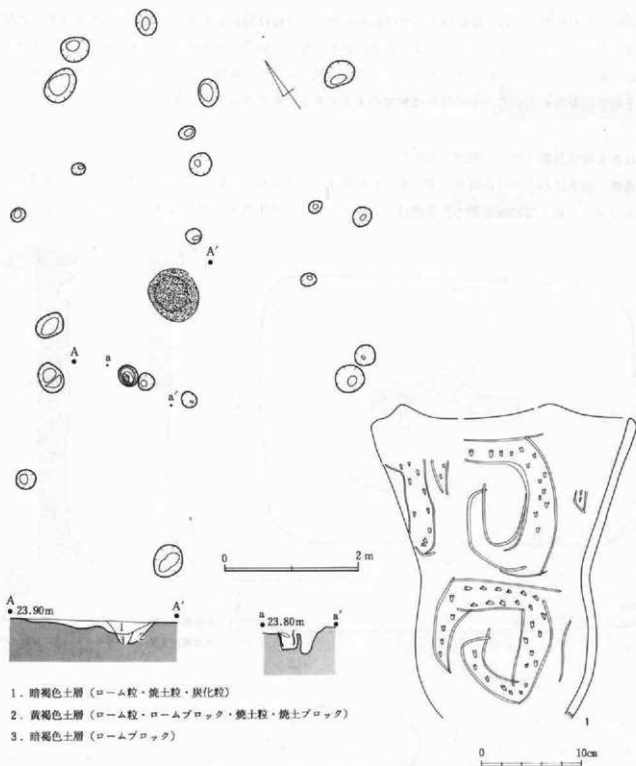
検出された貝殻は小型のハマグリが最も多く、シオフキ、マガキなどが確認できた。いずれも海水産の貝類である。

#### 084号住居跡 (第30図、図版10・17)

遺構 調査区の北東(J-8)に位置する。炉跡、および周囲に点在する多数の柱穴様の掘り込みがソフトローム上面に検出されたのみである。壁は痕跡さえも全く確認できなかった、周溝も検出されず住居の形態・規模および主柱穴等の確定も出来ない。施設の確認面は硬化している箇所もなく明瞭には床面を確認できなかった。また炉跡の南西側近くに埋甕が1基検出されている。炉跡を中心に計5m程の円形またはそれに近い形状を呈する住居跡と考えられる。しかし詳細はさらに充分な検討が必要である。



第29図 080号住居跡出土遺物



第30図 084号住居跡実測図及び出土遺物

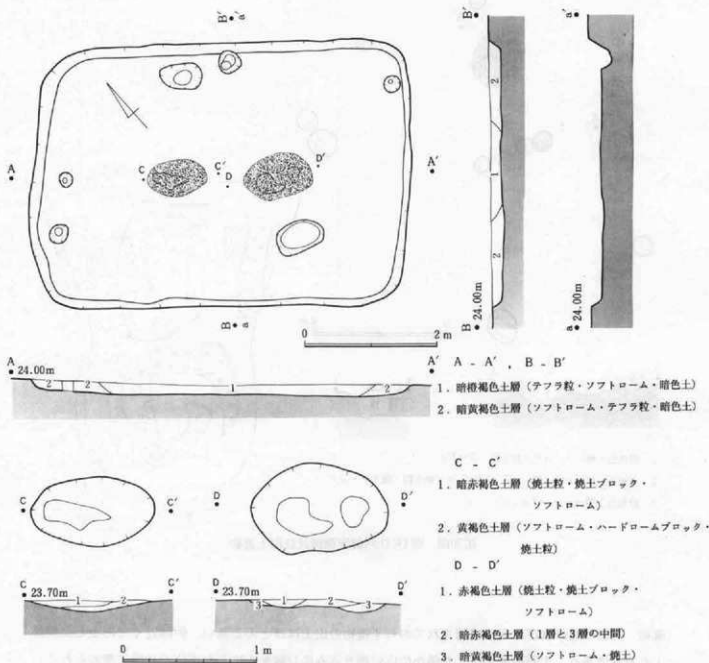
**遺物** 住居の範囲及び床面が確認されておらず遺物の出土はほとんど無い。炉跡近くで出土した埋葬1点のみである。土器の最大径より僅かに広い掘り込みに口縁を上にした正位の状態で見つめられている。土器は底部を欠き、さらに欠損部位もあり完形ではない。胴部下半部は球状を呈し、中央部に僅



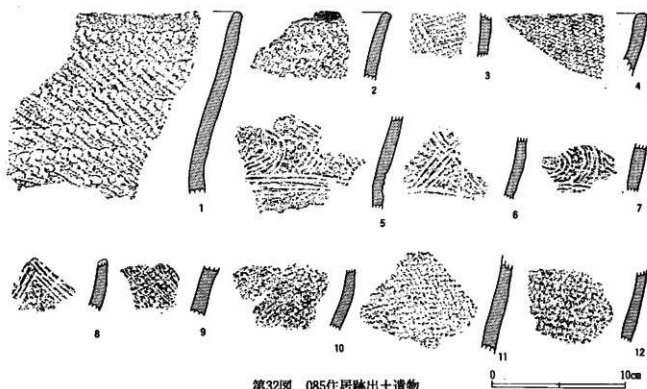
かに括れを持ち上部は口縁に向かって直線的に開く。口縁は波状を呈する。器面には無文地の上に棒様工具によりアルファベットの「J」を思わせる文様（区画帯）を4単位で一週させ、それを上下2段に配している。さらに、すべての「J」字に区画された中を棒様工具の先端をやや粗雑に刺突してその空間を埋めている。そのほかは無文のままである。称名寺式土器である。

085号住居跡（第31・32図、図版10・16）

遺構 調査区の北やや西寄り（F-6）に位置する。平面形状は5.7m×3.9mの隅丸方形。確認面からの深さは最大で20cmを測る。床面はソフトローム中に検出されたこともあって全体に軟弱であっ



第31図 085住居跡実測図



第32図 085住居跡出土遺物

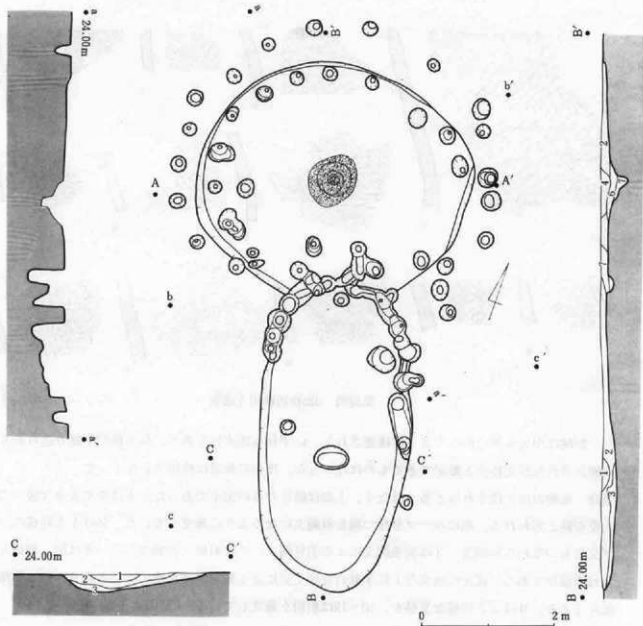
た。炉跡は中央長軸に沿って2カ所確認された、いずれも地床炉である。柱穴様の小掘り込みが6カ所検出されたが支柱穴と断定できるものはなかった。ほかの施設は検出されなかった。

遺物 遺物の出土はそれほど多くはなく、土器は破片のみの出土であった。1はやや大きな破片で、大型の鉢と思われる。端にループを持つ縄を斜縄文になるように施文している。2は1と同様にループ文をもつなわの斜縄文。3は異条縄文による羽状縄文。4は組紐文の施文。5～8は同一個体と思われる破片である。縄文の地文の上に半截竹管様工具による幾何学文を描いている。9～12は胴部の破片である。9は3と同様な文様を、10～12は組紐を施文している。「関山式土器」である。

#### 086号住居跡（第33・34図、図版11・16）

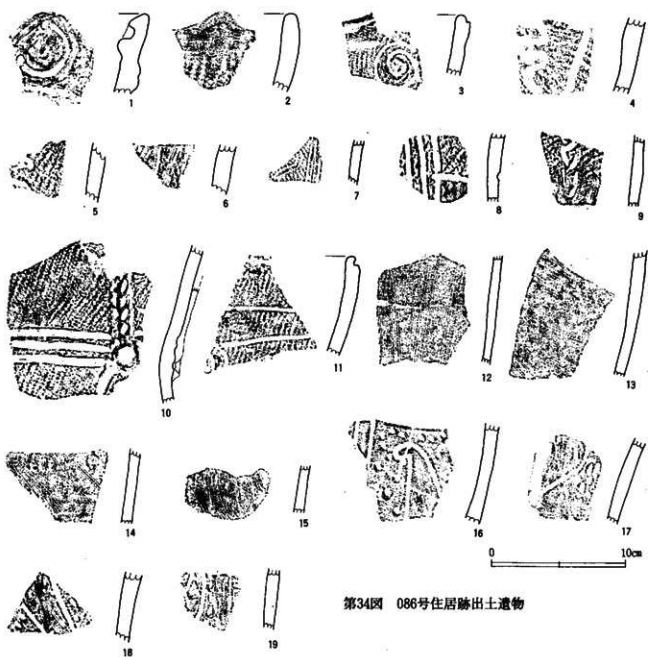
遺構 調査区の北中央（G-6）に位置する。住居本体の平面形状は直径約4.0mの円形を示し、南側に長さ4.0m、幅2.3mの張り出し部をもつ。確認面からの深さは最大で10cmと非常に浅い。床面は部分的に堅致な箇所も認められるが、全体的にはやや軟弱である。炉跡は住居はほぼ中央に検出された、地床炉であり、住居の規模に比してやや大きい。支柱穴は認められず、径20～30cm、深さ40cm以上の同程度の規模の小掘り込みが壁の内側に沿って一周している。さらに、壁の外側の一段高い遺構確認面にも壁柱穴と同様に、深さは30～39cmとやや浅くなるが小掘り込みがほぼ一定の間隔で一周する。立て替えまたは拡張が考えられる。張り出し部であるが、住居本体と接する付近には柱穴様の小掘り込みが連続して多数検出された。また中央付近には長さ54cm、短径34cm、深さ30cmの楕円形の掘り込みが検出されているが、何のための施設なのかは不明である。そのほかの施設は検出されなかった。

遺物 遺物の出土はそれほど多くはなく、後期前半の土器がその多くを占める、全て破片であった。



1. 暗赤褐色土層 (ソフトローム・**A** 24.00m  
黒色土・焼土粒)
2. 黒褐色土層 (黒色土・ソフト  
ローム・炭化粒・焼土粒)
3. 暗黄褐色土層 (ソフトローム・  
黒色土)
4. 赤褐色土層 (焼土粒・焼土ブロック **b** 24.00m  
・炭化粒・黒色土・ソフトローム)
5. 暗黄褐色土層 (ソフトローム・  
黒色土)
6. 黒褐色土層 (黒色土・ソフトローム  
・焼土粒・ブロック)
7. 暗褐色土層 (黒色土・焼土粒・  
ブロック・ソフトローム・  
ハードロームブロック) **c** 24.00m

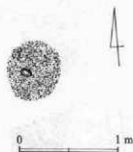
第33図 086号住居跡実測図



第34図 086号住居跡出土遺物

1は口縁の波状部分の破片で、棒状工具による沈線が、内側には肥厚した部分に円い凹みを持つ。2は口縁の波状部分の破片で無文帯を口縁部に持ち以下に縄文を施文している。3は口唇部に棒様工具による太めの沈線がめぐり、以下縄文を地文として施文し、上に棒状工具で渦巻き状に文様を描いている。4～8は胴部の破片で、地文である斜縄文の上を半截竹管または棒様工具により懸垂文を加えている。10は縄文の地文、沈線文に加えて、粘土紐を縦に貼付け上を棒様工具を押捺している。11は口縁部の破片である、地文の縄文の上に棒様工具による沈線を巡らせている。12～15は無文の器面に櫛歯状工具で数条の細く、浅い沈線による文様を描いている。16～19は無文の器面に棒様工具による沈線で区画した中に棒様工具の先端で刺突して空間を埋めている。1～15は堀之内式土器に、16～19は弥名寺式土器に分類していいだろう。

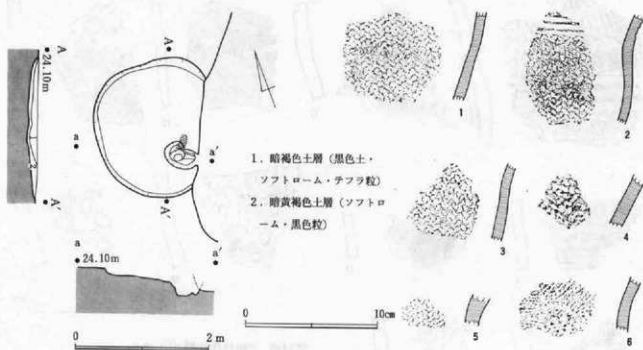
098号住居跡（第35図、図版11）



第35図 098住居跡実測図

**遺構** 調査区の北東端（E-5）に位置する。炉跡と思われる焼土とその中から礫が1点検出されたのみである。床面は痕跡も認められず、もちろん壁、柱穴等住居に伴う施設も検出されていない。はたして住居跡としてよいのか疑問が残るが、焼土の検出状況等を考えると住居にともなう炉跡と考えてもよいのではないと思われる。

**遺物** 焼土中より礫が1点とほかに土器破片が1点のみ出土したにと



第36図 P-26号住居跡実測図及び出土遺物

P-26号住居跡（第36図、図版11・16）

**遺構** 調査区の北中央（G-5）に位置し、054号住居跡と重複する。当初土坑と考えられていたが住居跡とした。平面形状は直径2.8mの円形を示すと考えられる。確認面からの深さは最大で20cmと比較的浅い。床面は緩やかに中央に向かって凹み若干鍋底状を呈する、床面は全体に軟弱である。炉跡は中央付近で検出された焼土の堆積がそれと考えられる。柱穴およびそのほかの施設は検出できなかった。

**遺物** 出土した遺物は極めて少なく、ほとんどが土器破片である。1～6はすべて土器胴部の破片である。1～3・5は地文に組紐文を施している、また2のように半截竹管様工具による平行沈線を加えているのもみられる。4はやや太く燃りのゆるい縄文を施文している。6は異状縄文を地文として施し、その上に半截竹管様工具の先端を用い押し引き文様を加えている。

以上、本遺跡から検出された住居跡についてその概要を述べてきた。外観すると住居跡の検出が若干困難であったことを除くと、住居の営まれた時代、住居の形状・伴出遺物、そして立地など条件を一にするものはほとんど無と言ってよい。住居跡075・078・079号は形状が確認面では明確に範囲を認識できたにも拘らず、調査を進めるうち不明瞭となってしまった。また098号住居跡は炉跡のみの検出にとどまった。さらに住居が営まれた時代をも特定できる伴出遺物資料が少なかった状況にある。ただし084号住居跡は炉跡と柱穴が検出されただけで壁は確認されなかったが、住居に伴うと思われる小掘り込みから完形に近い土器が検出され、時代が特定出来た住居もある。080号住居跡のように規模・施設などが検出され、土器・貝殻など遺物を多く出土するのは本住居のみであった。085号住居跡は伴出遺物が少ないが、080号住居跡とはほぼ同時期と思われる。086号住居跡は称名寺式土器を伴う住居であるが、張り出しを持ち当該時期にしても珍しい検出である。

本遺跡で検出された縄文時代の住居はほぼ同時期と考えられる080号・085号住居跡の2軒以外には同時期に営まれた住居が複数検出されていない。このことは本遺跡、言い換えれば遺跡が立地する台地上では縄文時代には小さな集落でさえ営まれていた可能性は少ないと考えられる。つまり集落以外に例えば狩猟の場としての存在などが考えられる、もちろん他の同時代の遺構、および出土した遺物も含めて総合的に検討していく必要があると思われるが、遺跡がまだ周囲に広がることが十分に考えられ、今後の調査の中で十分に検討していきたい。

## b. 土坑

今回の調査で住居跡につき数多く検出された遺構が土坑である。そのほとんどが調査区の北側の区域で検出されている。断面および平面の形状などからいわゆる陥穴に分類可能な土坑が検出されているが、総体的に遺構の検出数が少ないのでここでは一括して検出された順に出土した遺物とともにその概要を述べることにする。

### P-1号土坑（第37図、図版12）

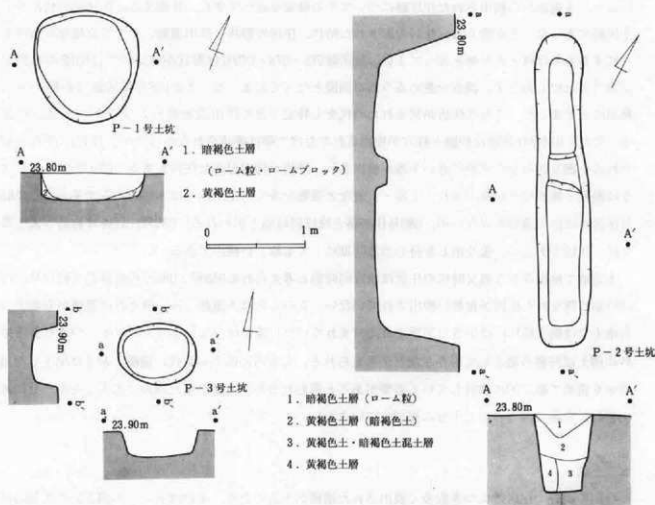
調査区中央やや西寄り（G-9）に位置する。平面形状は直径約1.2mの不整形を示し、ロームへの掘り込みは最大50cmを測る。床面は平坦で軟弱である、遺物の出土はない。

### P-2号土坑（第37図、図版12）

P-1の北（G-9）に位置する。平面形状は長さ3.1m幅0.5mの長方形を示す、ロームへの掘り込みは最大80cmを測る。床面は平坦だが中央付近で高さ20cm、幅30cmの段で南北に2分される。遺物の出土はない。平面及び断面の形状などから陥穴と考えられる。

### P-3号土坑（第37図、図版12）

調査区北側中央やや西寄り（F-8）に位置する。平面形状は長径0.8m、短径0.6mの楕円を示す。



第37図 P-1・P-2・P-3号土坑実測図

ロームへの掘り込みは最大25cmと比較的浅い。遺物の出土はない。

#### P-4号土坑 (第38図、図版12)

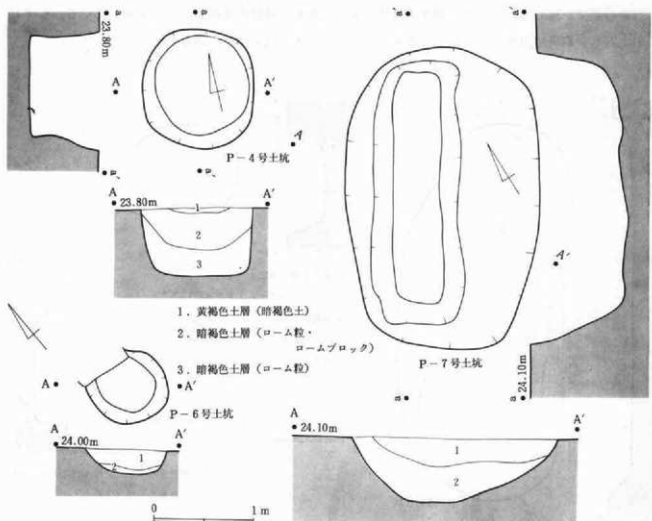
P-1の南西に隣接して(F-9)位置する。平面形状は径約1.1mの円形を示す、ロームへの掘り込みは最大60cmとやや深い。遺物の出土はない。

#### P-6号土坑 (第38図、図版12)

調査区中央西寄り(F-10)に位置する。北側を少し欠く、平面形状は直径0.8mの円形を示すと考える。ロームへの掘り込みは最大25cmと浅く、床面は鍋底状を呈する。遺物の出土はない。

#### P-7号土坑 (第38図、図版12)

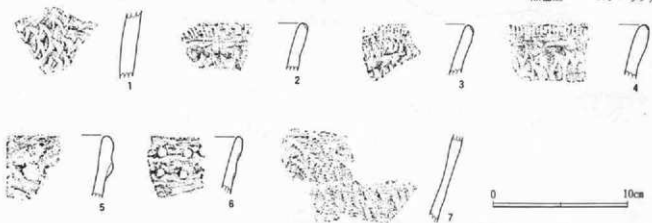
調査区北側北端近く(H-5)に位置する。平面形状は長軸3.0m短軸2.0mの隅丸の長方形を示す。ロームへの掘り込みは最大60cmとやや深い。壁の立ち上がりは全体に少し掘り過ぎていると思われる。



1. 黄褐色土層 (暗褐色土)
2. 暗褐色土層 (ローム粒・ロームブロック)
3. 暗褐色土層 (ローム粒)

1. 暗褐色土層 (暗褐色土・粒土粒・ソフトローム)
2. 暗黄褐色土層 (暗褐色土・ソフトローム)

1. 暗褐色土層 (黒色土・テフラ粒・ソフトローム)
2. 暗黄褐色土層 (テフラ粒・ソフトローム・黒色土・ロームブロック)

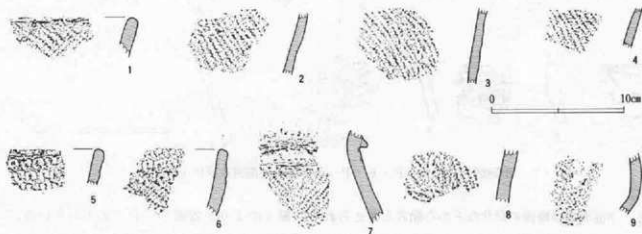
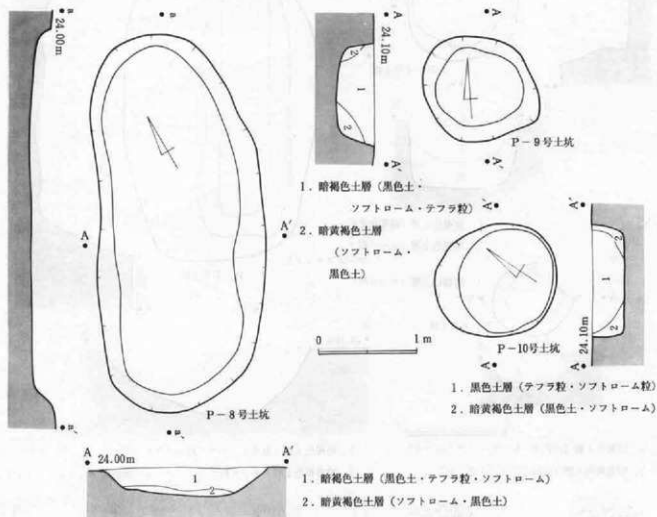


第38図 P-4・P-6・P-7号土坑実測図及び出土遺物

る。平面および断面の形状などから陥穴と考えられる。覆土中より土器破片が若干出土している。1～4は口縁部付近の破片で、いずれも口唇部直下にヘラ様工具の先で短い沈線を連続して刻み、以下を貝殻の腹縁で波状文を施している。5・6は口縁部に僅かに段を持ち、その上に棒様工具の先で



円形の刺突を施している。7は胴部の破片で放射状をもつ貝殻の腹縁で波状文を施している。いずれの土器も前期後半の浮島式土器の特徴を備えている。本土坑もほぼ当該期のものとする。



第39図 P-8・P-9・P-10号土坑実測図及び出土遺物

#### P-8号土坑（第39図、図版12）

調査区北側中央（G-8）に位置する。平面形状は長径3.7m、短径1.7mのやや長い楕円形を示す。ロームへの掘り込みは最大30cmとやや浅い、底面は軟弱である。覆土中より若干の土器破片が出土している。第39図の1～4が本土坑出土の土器である。1は口縁部の破片で、ほかは胴部の破片である。いずれも胎土には繊維を多く含み、器面には斜縄文のみが施文されている。前期前半の土器の特徴を備えており黒浜式土器に比定してよいと思われる。本土坑も当該期のものと考えられる。

#### P-9号土坑（第39図、図版12）

調査区北側北端近く（H-5）に位置する。平面形状は直径約1mの不整形円形を示す、ロームへの掘り込みは最大40cmを測る。覆土中より若干の土器破片が出土している。第39図の5～9が本土坑出土の土器である。いずれも胎土に繊維を含む。5・6は口縁部の破片である、ループ文を3段（以上）施文し以下を斜縄文としている。7～9は胴部の破片である、7は粘土紐を横位に貼付け、両側を半截竹管様工具で押し引きして文様を施している。以下は8・9と同様に斜縄文を施している。いずれの土器破片も前期前半の黒浜式土器の特徴を持つ。本土坑も当該期のものと考えられる。

#### P-10号土坑（第39図、図版12）

調査区北側北西部（H-5）に位置し、052号住居跡に隣接する。平面形状は直径1.2mの円形を示す。ロームへの掘り込みは最大20cmと比較的浅い。遺物の出土はない。

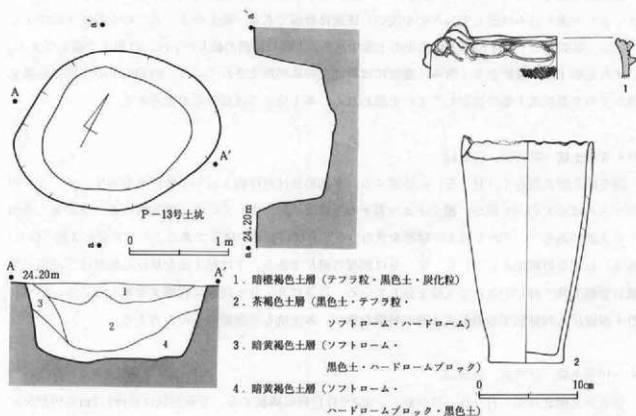
#### P-13号土坑（第40図、図版12）

調査区北側北西端の斜面（F-5）に位置する。平面形状は長径2.0m、短径1.6mの不整形円形を示す。ロームへの掘り込みは最大1.3mとかなり深い。覆土中より若干の土器が出土している。1は深鉢土器の口縁部である。胎土には繊維を含んでいたと思われる。口唇部には突起を持ち、口縁には粘土紐を貼付け「8」の字を横にした文様を描いている。以下には斜縄文を施している。2は極めてわずかに縄文を施文しているのが観察できる程度で、ほとんど無文に近い深鉢形土器である。底部から口縁に向かって直線的に開き、口縁部には粘土紐を薄く伸ばしたものを貼付けている。前期前半の土器と考えられる。本土坑もほぼ当該期のものと思われるが、さらに詳細な検討が必要である。

#### P-14号土坑（第41図、図版13・17）

P-13号土坑の北東側（F-5）に隣接する。平面形状は長径2.2m、短径1.7mの洋梨状を示す。ロームへの掘り込みは最大1mと深い。底面は軟弱で、壁の立ち上がりなども一様ではない。覆土中より土器破片が若干出土している。第41図1～4が本土坑出土の土器である。いずれも胴部の破片で胎土には繊維を含んでいる。地文として斜縄文が施され、さらに上半截竹管様工具による文様が描かれている。いずれの土器も前期前半の黒浜式土器の特徴を備えている。本土坑もほぼ当該期のもの

と考える。



第40図 P-13号土坑実測図及び出土遺物

#### P-15号土坑 (第41図、図版13・17)

P-13の北東側(G-5)に隣接する。平面形状は直径1mの円形を示す。ルームへの掘り込みは最大50cmとやや深い。覆土中より土器破片が若干出土している。第41図5~10が本土坑出土の土器である。いずれも胴部の破片である。5・6は櫛歯様工具により縦位にコンパス文が描かれている。7・8は沈線により区画された中に棒様工具による刺突が加えられている。9・10はヘラ様工具の先で平行沈線が交差するように描かれている。後期初等の称名寺式の特徴を備えている。本土坑もほぼ当該期のものと考えられる。

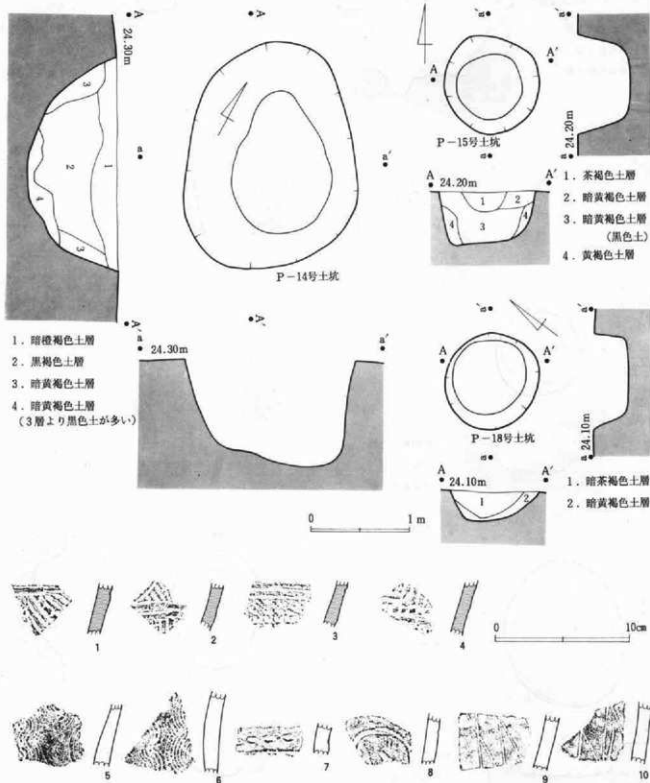
#### P-18号土坑 (第41図、図版13)

調査区北側北西部(G-5)に位置する。平面形状は直径1mの円形を示す。ルームへの掘り込みは最大30cmを測る。遺物の出土はない。

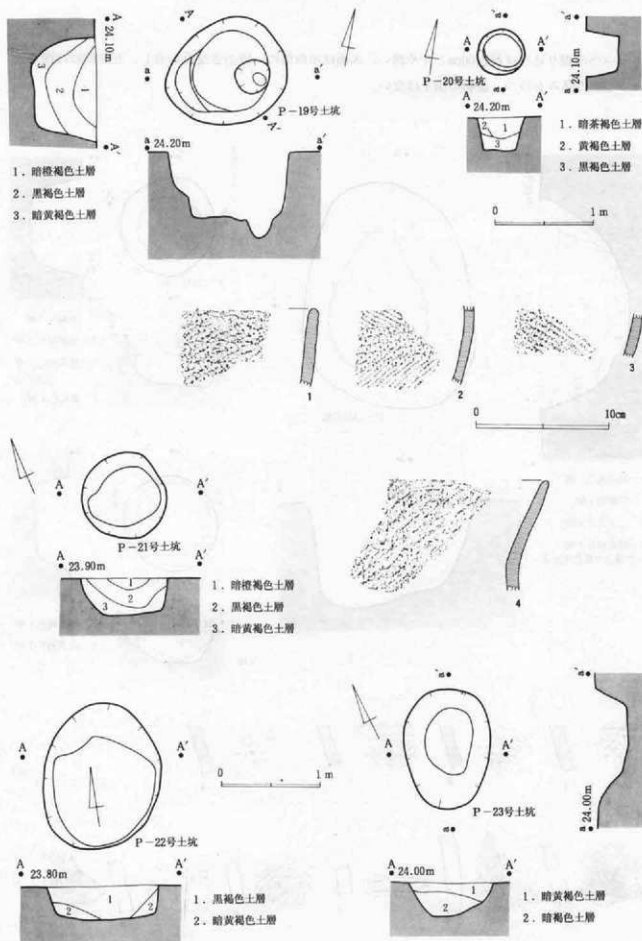
#### P-19号土坑 (第42図、図版13)

P-18号土坑の南西(G-5)に隣接する。平面形状は長径1.2m、短径1.1mのほぼ円形を示す。

ロームへの掘り込みは最大60cmとやや深い。床面は南西部に一段小さな段を有し、北東側には深さ20cmの小掘り込みを持つ。遺物の出土はない。



第41図 P-14・P-15・P-18号土坑実測図及び出土遺物



第42图 P-19·P-20·P-21·P-22·P-23号土坑实测图及出土遗物

P-20号土坑 (第42図、図版13・17)

P-19号土坑の南東(G-6)に隣接する。平面形状は直径0.5mの円形を示す。ルームへの掘り込みは最大30cmを測る。覆土中より土器破片が若干出土している。第42図1~3が本土坑出土の土器である。1は口縁部、2・3は胴部の破片でいずれも胎土に繊維を含んでいる。器面に施文されている文様はループ文と斜縄文で、前期前半の土器の特徴を備えており、関山式土器と思われる。本土坑もほぼ当該期のものと考えられる。

P-21号土坑 (第42図、図版13・17)

調査区北側中央(G-6)に位置する。平面形状は直径0.9mの円形を示す。ルームへの掘り込みは最大40cmを測る。覆土中より土器破片が1点出土した。第42図4が本土坑出土の土器である。口縁部の破片で、胎土には繊維を含み器面は斜縄文のみを施文している。前期前半の土器の特徴を備えており、黒浜式土器と思われる。本土坑もほぼ当該期のものと考えられる。

P-22号土坑 (第42図、図版13)

P-21号土坑の西側(G-6)に隣接する。平面形状は長径1.5m、短径1.2mの楕円を示す。ルームへの掘り込みは最大30cmを測る。底面がやや不整である。遺物の出土はない。

P-23号土坑 (第42図、図版13)

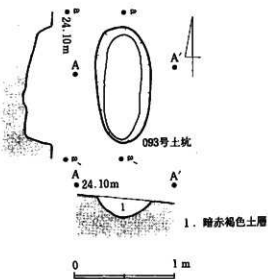
調査区北側西寄り(F-7)に位置する。平面形状は長径1.2m、短径0.8mの楕円を示す。ルームへの掘り込みは最大30cmを測る。遺物の出土はない。

093号土坑 (第43図、図版13)

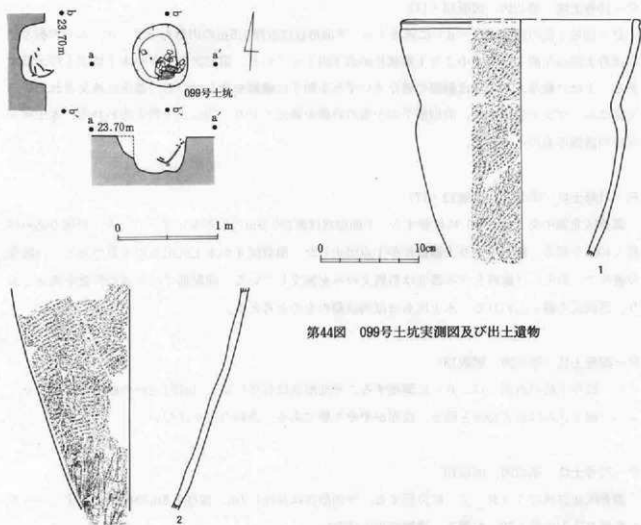
調査区北西端(G-4)に位置する。平面形状は長径1.5m、短径0.5mの楕円を示す。ルームへの掘り込みは最大30cmを測る。床面は鍋底状を呈する。遺物の出土はない。

099号土坑 (第44図、図版13・18)

086号住居跡の南側(G-6)に隣接する。平面形状は直径0.6mのほぼ円形を示す。ルームへの掘り込みは40cmを測る。覆土中より土器がまとまって出土した。第44図1・2が本土坑出土の土器である。ともに深鉢の土器である。1は口唇部直下にたく浅い沈線が一条巡り、以下を斜縄文のみ施文している。頸部には括れが見られ



第43図 093号土坑実測図



第44図 099号土坑実測図及び出土遺物

口縁は内湾する。2は胴部から底部に欠けての土器である。器面は斜縄文のみが施文され、底部付近は無文としている。土器の器形・文様などから考えると中期後半から後期初頭にかけての土器と思われる。本土坑もほぼ当該期のものとする。

以上、土坑についてその概要を述べてきた。ほとんどが規模・形状等が一様ではなく、その性格の詳細も不明な点が多い。その中においてP-2とP-7は土坑と言うよりも規模、断面、および平面の形状などが陥穴に類似しており、陥穴として分類できる。時期を推定できる遺物を出した土坑は全体の半分の10基であり、前期前半が半分以上を占め7基を数える、残りは前期後半1基・中期後半から後期初頭2基である。陥穴を含めた残りの10基は遺物の出土がほとんどなかった。また遺物については出土した土坑が半数あるもののその量は總体的にも少なく、ほとんどが土器の小破片である。P-13号・099号土坑のように復元可能な土器を出土するのは極めて少ない。

P-20号・093号・099号土坑のように規模が小さいものの性格は不明である。まして099号土坑のように遺物を出した土坑は住居の付属施設の可能性もあり、ここでは土坑として扱ったが、さらに検討が必要である。

### c. 炉穴

調査区北側の突き出した台地の縁に近い区域に散漫であるがややまとまって炉穴が検出された。単独で検出されたもの、重複して検出されたものと規模・形態も様々であった。以下にその概要を出土した遺物とともに述べることにする。

#### 077号炉穴（第45・46図、図版14・18）

**遺構** 調査区北側北東部（H-5）に位置する。3基の炉穴が重複しており、燃焼部をもとに西側から077A・077B・077Cと呼ぶことにする。077Aは長径2.6m、短径（1.4m）の長楕円を呈し、ロームへの掘り込みは最大0.6mを測る。燃焼部は底部北端の壁際に検出された。077Bは長径3.0m、短径（1.3m）の長楕円を呈し、ロームへの掘り込みは最大0.7mと3基のうちでは一番深い。燃焼部は底部北端の壁際に検出された。077Cは077Aと077Bを横切ったちで重複し、燃焼部付近のみ検出された。ロームへの掘り込みは最大0.5mを測り一番浅い。新旧関係は燃焼部の重複関係から077Aは077Bより新しいことが考えられるほか詳細は不明である。

**遺物** 覆土中より土器が少量出土している。1～3いずれも土器の内外面に貝殻の腹縁を用いての条痕文がほぼ全面に施されている大型の破片である。1・3は口縁部付近であるが、ともに口唇部には貝殻の腹縁を連続して押捺して文様としている。2は胴部の破片である。以下4～11の土器破片も器面の内外面に放射肋を持つ貝殻の腹縁を用いての条痕文がほぼ全面に施されている。いずれも茅山上層式である。

#### 081号炉穴（第47図、図版14）

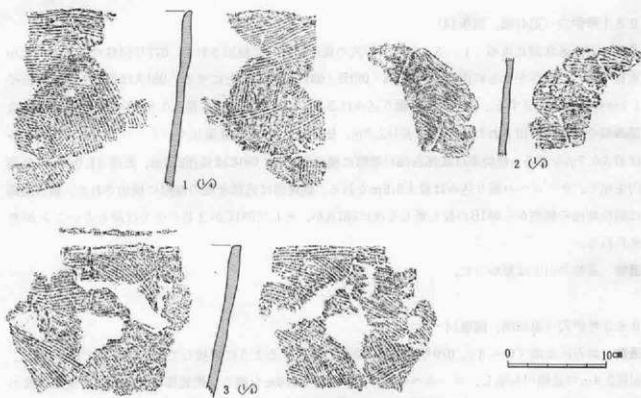
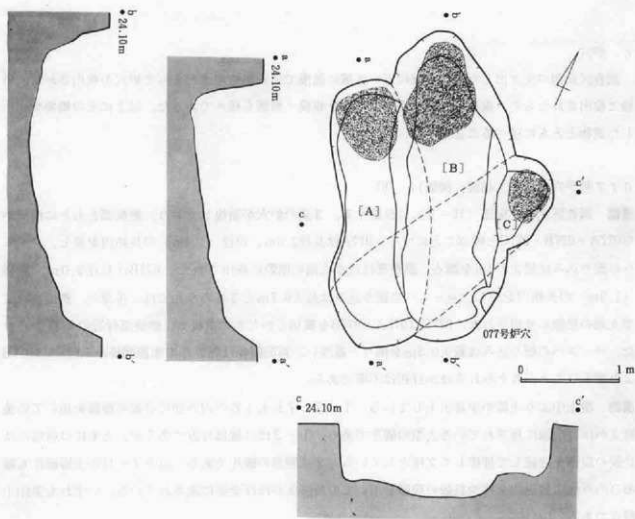
**遺構** 調査区北側北東端（I-5）、077号炉穴の南西側近くに検出された。077号同様に3基の炉穴が重複する。燃焼部をもとに南側から081A・081B・081Cと呼ぶことにする。081Aは長径2.2m、短径1.2mの洋梨状を呈する。ロームへの掘り込みは3基の中では一番深く最大0.8mを測る。燃焼部は底部西端の壁際に検出された。081Bは長径2.2m、短径（1.3m）の洋梨状を呈し、ロームへの掘り込みは最大0.7mを測る。燃焼部は底部西端の壁際に検出された。081Cは長径2.3m、短径（1.0m）の長楕円を呈し、ロームへの掘り込みは最大0.5mを計る。燃焼部は底部北端の壁際に検出された。新旧関係は層位断面の観察から081Bが最も新しく次に081Aが、そして081Cが3基の中では最も古いことが考えられる。

**遺物** 遺物の出土は無かった。

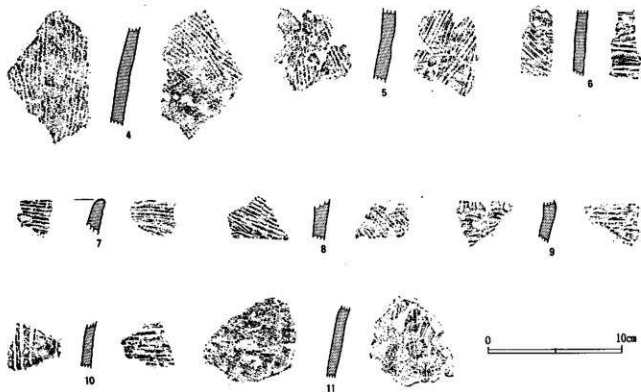
#### 083号炉穴（第48図、図版14・18）

**遺構** 調査区北端（G-4）、079号住居跡の北側に重複するように隣接して検出された。長径1.8m、短径0.8mの長楕円を呈し、ロームへの掘り込みは最大0.6mを測る。燃焼部は底部北端の壁際に検出された。底部南東隅、壁に接して小掘り込みが検出されているが性格は不明。





第45图 077号炉穴实测图及び出土遺物



第46図 077号炉穴出土遺物

遺物 燃焼部の上方から一括で出土した土器のみである。1は底部を欠くがほぼ全体を知りうる土器である。底部から口縁に向かって微かに内側に曲線を描くものはほぼ直線的に大きく開く。口唇部は一周にわたり棒様工具の連続の押捺により小さな波形を描く。土器の内外面は放射筋を持つ貝殻の腹縁を用いての条痕文がほぼ全面に施されている。2は胴部の破片で1と同様に土器の内外面は放射筋を持つ貝殻の腹縁を用いての条痕文がほぼ全面に施されている。茅山上層式である。

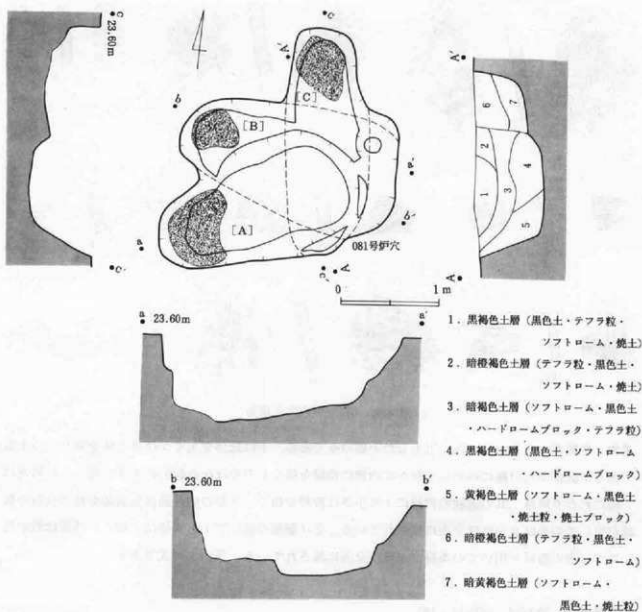
#### 89号炉穴（第48図、図版14・18）

遺構 調査区北側西部（E-7）に位置する。長径2.2m、短径1.2mの洋梨状を呈する。ロームへの掘り込みは最大でも30cmと浅い。燃焼部は底部東西両端の壁際に2カ所検出された。南東隅には張り出し状に一段高い掘り込みが検出されている。

遺物 遺物はそれほど多くはない、燃焼部付近から少量の土器が出土している。3～5は放射筋を持つ貝殻の腹縁を用いての条痕文がほぼ全面に施されている。茅山上層式である。

#### 090号炉穴（第49図、図版14）

遺構 調査区北側西部の斜面（E-6）に位置する。平面形はアルファベットの「E」に似た形を呈する、複数の遺構の重複とも考えられるので、ここでは便宜的に北から090A・090B・090C・090Dの4カ所に分割する。090Aは短径0.6m、長径1.4m以上の不整形円形を呈する、燃焼部を北端の壁際に検出。090Bは長径2.2m、短径1.4mの楕円形を呈する。090Cは長径1.4m、短径（0.8m）の楕円形を



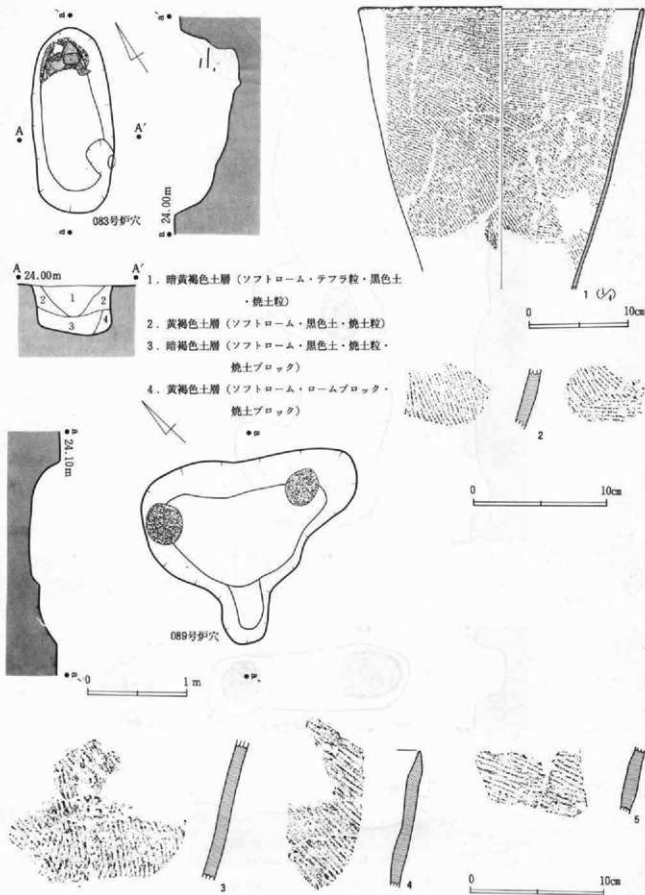
第47図 081号炉穴実測図

呈する、燃焼部を南端の壁際に検出。090Dは長径1.6m、短径0.7mの楕円形を呈し、南端壁際に小掘り込みをもつ。いずれもルームへの掘り込みは浅く、最も深い080Bで30cmを測る程度である。それぞれの新旧関係は不明である。燃焼部を有するものと持たないものとに分かれ、すべてを炉穴とするには根拠がなく090B、090Dは他の遺構になる可能性がある。

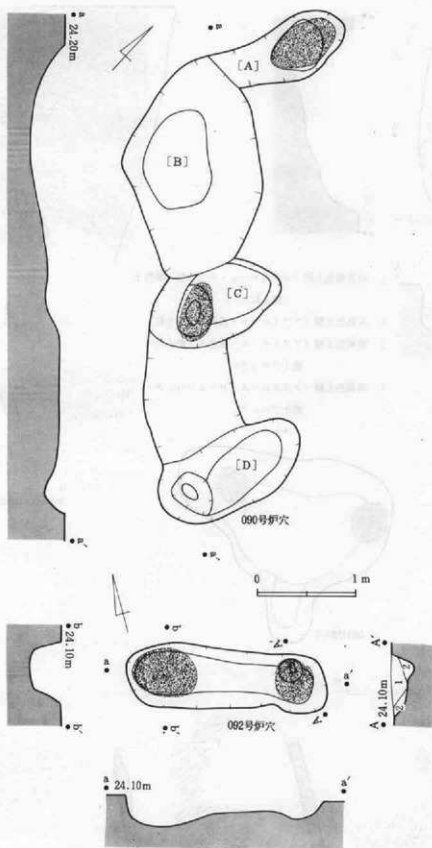
遺物 若干の土器破片が出土したのみである。

#### 092号炉穴 (第49図、図版14)

遺構 調査区北側西部の斜面(E-7)に位置し、089号炉穴の西側に隣接する。長径2.1m、短径0.6mの長楕円を呈し、ルームへの掘り込みは最大で30cmを測る。燃焼部は089号炉穴と同様に底部東西



第48図 083・089号坑穴実測図及び出土遺物



第49図 090・092号枿穴実測図

両端の壁際に2カ所検出された。

遺物 極めて僅かな土器破片が出土したのみである。

#### 094号炉穴(第50図、図版14・19)

遺構 調査区北側中央やや西寄り(F-6)に位置する。直径0.6mの不整円形を呈する。ルームへの掘り込みは最大でも15cmと浅い。底部は熱を受け、赤く変色、硬化しており遺構検出面で周囲には他の施設が検出されず本遺構が単独なため炉穴に分類しておく。燃焼部の上方の埋土中より土器が出土している。

遺物 出土した遺物は土器破片が少量のみであった。1~4の土器はいずれも内外面を放射肋を持つ貝殻の腹縁を用いての条痕文をほぼ全面に施している。1と2は接合しないが同一個体と思われる土器である、口縁部の直下には焼成前に施した、直径が3mm前後の土器を貫通する孔が穿たれ、ほぼ4cmの間隔を持って一周すると思われる。なお1の土器にはグリッド出土の土器破片(5F-46、第58図28・29)が接合する。じつに本遺構からは約14mも離れている。3・4は胴部のやや大型の破片である。

#### 095号炉穴(第50図、図版14・19)

遺構 094号炉穴の南側(G-6)に位置する。長径1.3m、短径0.7mの不整楕円形を呈する。ルームへの掘り込みは最大25cmとかなり浅い。燃焼部は底部西端壁際に検出した。

遺物 燃焼部の上方から少量の土器破片が出土している。第50図の5は微かに波状を呈する大型の鉢の口縁部付近の破片である。口唇部直下の器面に数ミリの幅で斜縄文が施文され、以下にはヘラ様工具を幅を広く、そして非常に浅くなるように押し引きして文様を描き、押し引きした両端に残る微隆起をも残して文様としている。

#### 096号炉穴(第51図、図版14)

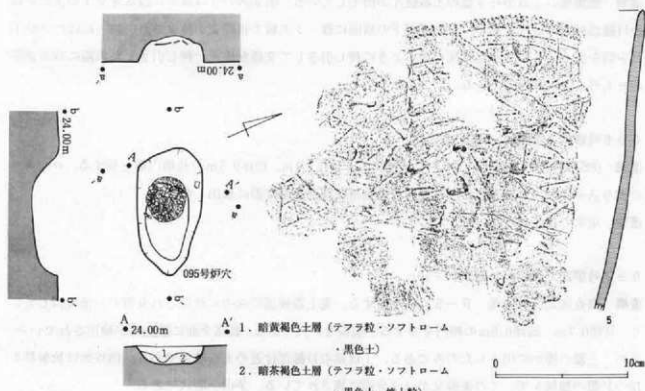
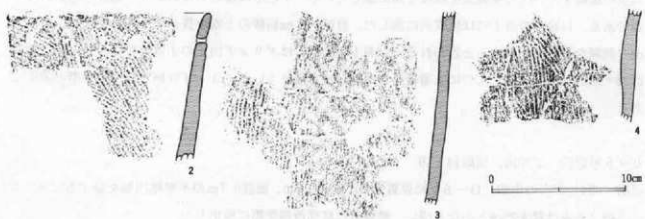
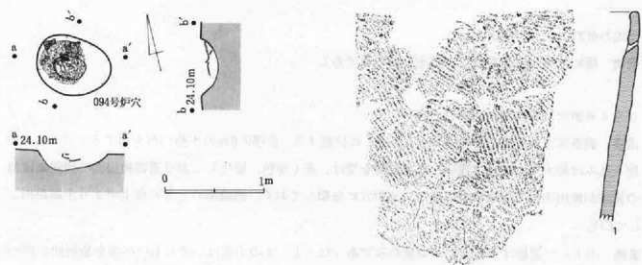
遺構 095号炉穴の南側(F-6)に位置する。長径1.1m、短径0.5mの長楕円形を呈する。ルームへの掘り込みは最大で20cmとかなり浅い。燃焼部は底部西端壁際に検出した。

遺物 遺物の出土はなかった。

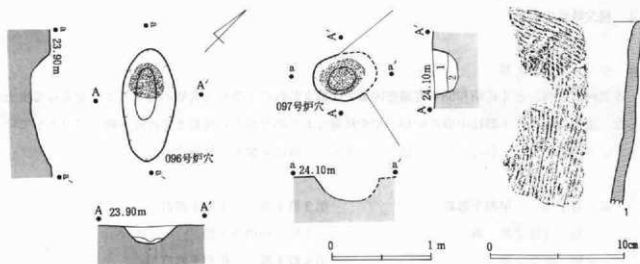
#### 097号炉穴(第51図、図版14・19)

遺構 調査区北側北西部(F-5)に位置する。先土器確認の途中に検出され東側が一部欠損している。長径0.7m、短径0.5mの楕円を呈する小規模な炉穴である。底部全面に燃焼部が検出されている。

遺物 土器が僅かに出土したのみである。1は鉢の口縁部付近の土器破片である。内外面は放射肋を持つ貝殻の腹縁を用いての条痕文がほぼ全面に施されている。茅山上層式である。



第50図 094・095号炉穴実測図及び出土遺物



1. 暗褐色土層（ソフトローム・黒色土・焼土粒）  
 2. 赤褐色土層（焼土ブロック・暗褐色土）

1. 暗黄褐色土層（ソフトローム・黒色土・焼土粒）  
 2. 暗赤褐色土層（焼土ブロック・焼土・暗褐色土）

第51図 096・097号炉穴実測図及び出土遺物

以上、炉穴についてその概要を述べたが、重複を含めた数を加えると総数は15基となる。基本的には平面形が楕円形を呈するものが多いものの重複するもの同士を除くと規模・形態は様々である。また、遺物の出土は全ての炉穴に見られたわけではなく、全く出土しないものもある。今回の調査では検出された10基のうち6基より縄文早期後半の土器が出土したにとどまった。本遺跡で検出された炉穴の時期は周囲の遺構・出土土器の状況をも考え合わせると遺物の出土が皆無であった炉穴も含め今回検出された炉穴はすべて早期後半の所産と考えてよさそうである。



## 2. 縄文時代の遺物

### a. グリッド出土土器

本遺跡の北側、とくに昭和58年度調査区域では縄文時代の土器が包含層的なまとまりをもって出土した。遺物、とくに土器は中期の時期がやや稀薄なものの早期から晩期までほぼ連続して出土している。以下に出土した土器について時期ごとに大きく5群に分類し、報告することとする。

#### 第1群土器 早期土器群

- 1類 沈線文系土器
- 2類 無文土器
- 3類 条痕文系土器

#### 第2群土器 前期土器群

- 1類 関山式土器
- 2類 黒浜式土器
- 3類 諸磯式土器
- 4類 浮島式土器
- 5類 興津式土器
- 6類 前期末の土器

#### 第3群土器 中期土器群

- 1類 初頭の土器

#### 第4群土器 後期土器群

- 1類 称名寺式土器

- 2類 堀之内式土器

- 3類 安行式土器

#### 第5群土器 晩期土器群

- 1類 千網式土器

### 第1群土器 早期土器群 (第52～58図、図版20～23)

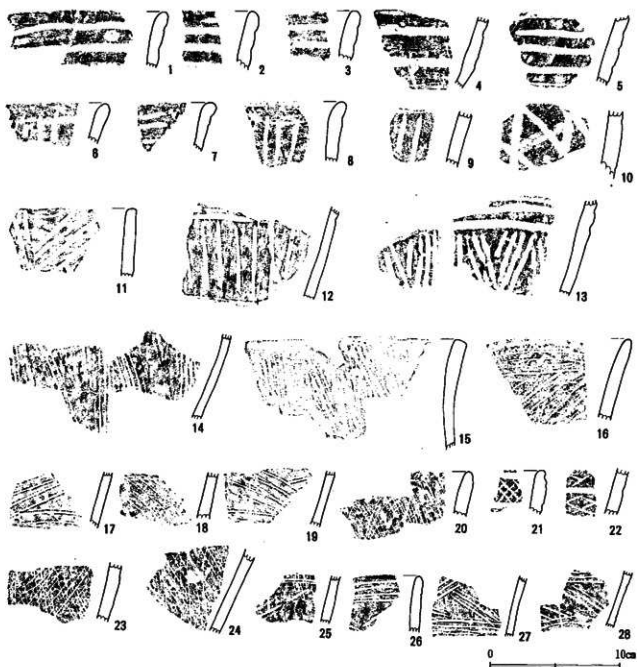
以下に3類に分類してその概要を述べる。

#### 1類 (第52～54図、図版20～22)

本類は土器の器面をほぼ平行沈線のみによって文様を描いているものを一括した。沈線の種類によりa) はぼ太い平行沈線のみによって文様が描かれているもの・b) はぼ細い平行沈線のみによって文様が描かれているもの・c) 平行沈線のほかに文様を加えているものの3種にさらに分類できる。土器の胎土には繊維質は含まれていない。

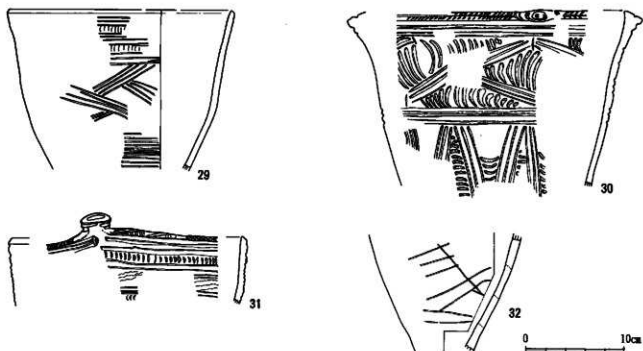
a) 文様を描く沈線の太いものを集めたものである。1～5は横方向のみに沈線を施しているもので、1～3は口縁部、4は底部付近、5は胴部である。6～13は縦方向および斜方向の沈線が加えられているもので、6～8・11は口縁部、9・10・12・13は胴部である。

b) 文様を描く沈線の細いものを集めたものである。14・15は縦位に数条の沈線を一単位として施文している。以下16～28は斜位を基本に数条の沈線を一単位として施文しているものである。16・17・26～28のように横位に描く沈線との組み合わせもみられる。20・23・24のように交差させているものもある。また21・22のように井桁状に描くものも見られる。第53図32は底部付近の土器である。ヘラ様工具の先端で細い沈線を無造作に描いている。焼成は良い。



第52図 第1群土器拓影図(グリッド出土)第1類

c) 平行沈線文の外に種類の違う沈線文・刺突文や押捺文が加えられている土器を集めたものである。29は深鉢である、口縁は直線的に開く。器面はヘラ様工具を用いて平行沈線を描き文様としている、口縁部付近では平行沈線間のやや広い空間には爪形文が連続して施文されている。30も29と同様に深鉢の土器であり、器面は棒様工具を用いて平行沈線を三本一単位を基本として描き文様としている。口唇部が肥厚し幅広くなりヘラ様工具を用い沈線を加え二分し、空間に連続して刻みを施している。胴部では平行沈線間に出来た広めの空間には平行沈線よりための弧を描く沈線がほぼ空間を埋め尽くすように施されている。31は口縁部付近の大型の破片である。口唇部には中央が凹む円筒状の突起が付き、ヘラ様工具を用いて細い沈線と刻みが施されている。以下胴部には棒様工具を用いて平



第53図 第1群土器実測図（グリッド出土）第1類

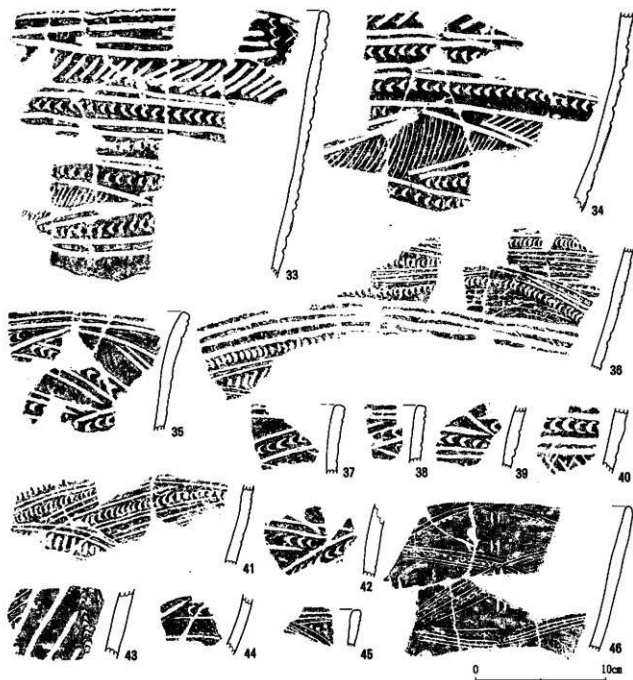
行沈線を二本一単位を基本として描き文様としている。平行沈線間のやや広い空間には連続爪形文や貝殻の腹縁の押捺が加えられている。33～46は29～31と同様な工具を用い同様な文様が描かれた土器の破片である。ただ46は細い棒様工具による平行沈線の間、または沈線に平行に放射肋を持つ貝殻の腹縁を押捺している、さらに平行沈線とはかの平行沈線との空間が広く無文帯として広い空間が残り、ほかの土器と趣を異にしている。

本類を土器器面に施されている文様によってa), b), c)の3種に細かく分類したが本類土器のほとんどが田戸下層式の特徴を備えている。分類したa)・b)の2種は田戸下層式のやや古期の様相を示し、c)は新期の様相を示している。

## 2類（第55図、図版20）

本類は土器器面に何の文様も描かない無文土器を一括した。1はほぼ完形な土器である、底部は平底としてもよいほどに平坦部が大きい。2は底部を欠くが1とはほぼ同様な土器である。焼成はいずれもよく堅致である。3はやや小型の無文土器で胴部の一部のみの出土である。焼成・胎土等を考慮すると前出の土器と同様と思われる。4は口縁部付近のみの大型の破片である。5～15は土器の底部を集めたものである。いずれも底部先端に向かって鋭角である。5～12は底部は非常に厚く、先端部がやや丸みを帯びている。13～15は底部の先端部に僅かな平坦部を持ち、前述の底部同様に底部が厚くなっている。

本類は無文土器とその尖底土器底部と思われる土器を一括した。尖底部分の形状・底部の厚さなどからほとんどが1類に分類した田戸下層式に伴うものと考えられる。若干範囲を広げても上層式を含

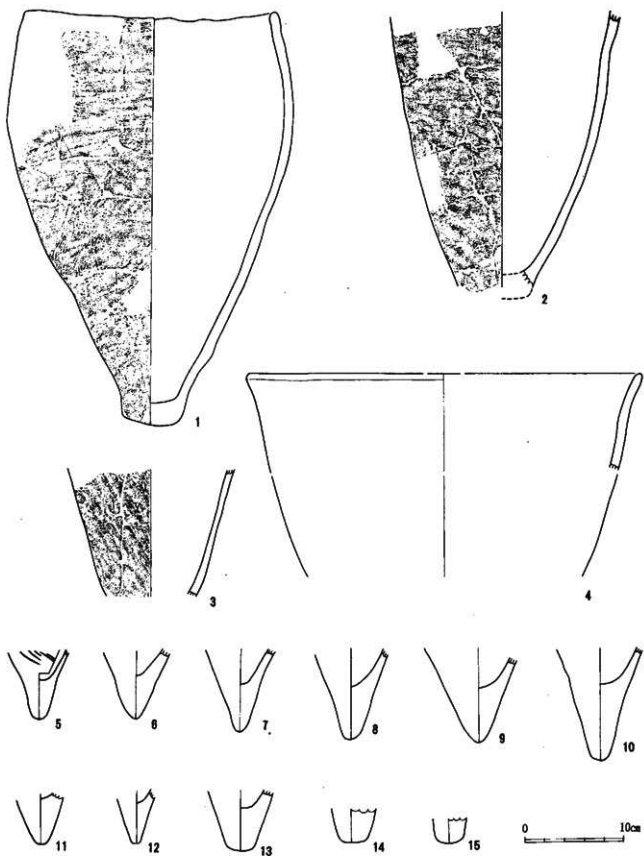


第54図 第1群土器拓影図（グリッド出土）第1類

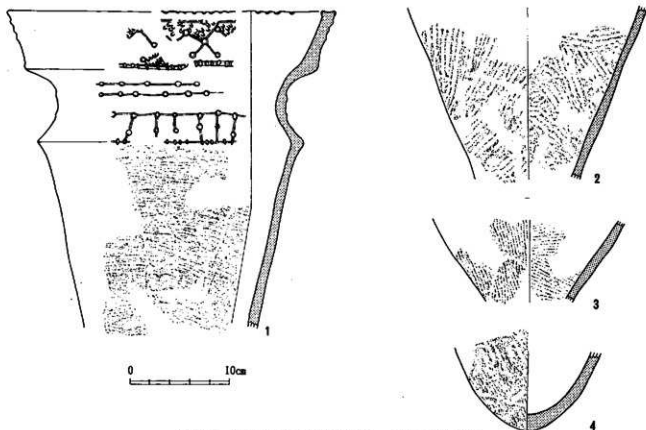
む田戸式期に、少なくとも条痕文系土器群の前段階の土器群に伴うものと考える。

3類（第56～58図、図版20・22・23）

本類は胎土に繊維を含み、土器の器面に条痕文が施されている土器を一括した。器形・文様により a) 器面に条痕文を地文とし、それに加えて条痕文以外の文様が施されているもの、一部に土器の頸部に括れが見られるものを含む。 b) 器面が条痕文のみによって施文されているものの2つに分かつことができる。



第55図 第1群土器実測図(グリッド出土)第2類



第56図 第1群土器実測図(グリッド出土)第3類

a) 類とした土器群を器形と文様の違いによってさらにa-1とa-2の二つに細分類した。

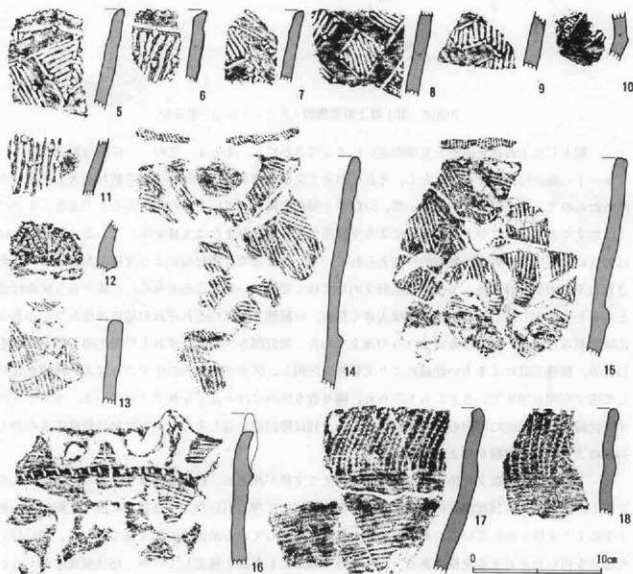
a-1) 器面に条痕文を地文とし、それに加えて文様が施され、さらに土器の括れが著しいものを集めたもので、その文様は土器の上部、口縁部と頸部に施されているものがほとんどである。第56図1は地文である条痕文の上に隆起線により文様帯を区画するかまたは文様を描いている。隆起線上には竹管による円形の刺突が規則的に加えられている。口縁部では隆起線により文様帯を区画し、区画されたその中を竹管を使って小さな爪形文の文様で埋めているところもみられ、隣り合う区画はほとんどを無文としている。また頸部は大きく括れ、口縁部と胴部のそれぞれの境には僅かながら器面に隆起がみられる。以下は条痕文のみの施文である。第57図5~11はいずれも口縁部附近の土器と思われる。棒様工具による太い沈線により文様帯を区画し、区画されたその中をさらに太い沈線を並列して描き空間を埋めているところもみられ、隣り合う区画はほとんどを無文としている。また、区画する沈線には規則的に円形の刺突を加えている。12は隆起帯を有しその上方を半截竹管様工具の押し引きによる連続の文様を加えている。

a-2) 器面に条痕文を地文とし、それに加えて文様が施され、括れを持たないものを集めたものである。第57図13~16は地文の条痕文の上に指先を当てて押し引いたような非常に浅く、幅の広い無文帯により文様を描いている。多くは曲線を描き文様としているが規則的な文様ではなく、思い付いたままを描いたと見える文様である。13~15は口唇部にも条痕を施文している。16は頸部には刻みが加えられた隆帯を持ち口縁部は波状を呈する。17・18は口縁部に貝殻の腹縁を連続して押捺して文様

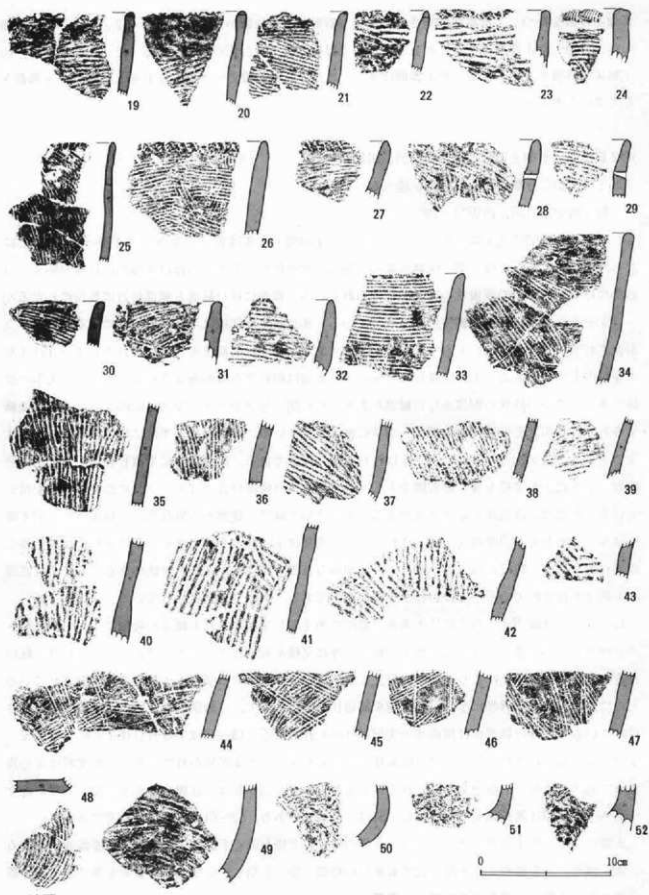
を施している。そして口縁部と以下を分けるかのように段ともつかない僅かな高まりがつけられている。括れとか区画帯の名残のようである。

b) 器面のほとんどを条痕文のみで覆うものを集めたものである。第56図2～4は器形が分かる程度に復元できた土器で、2・3は器面の内外ともに条痕文が施されている。4は底部で、あまり肥厚せず丸味を持つ底部である。第58図19～52は土器破片である、ほとんどの土器器面の内外にともに条痕が施されている。条痕の太さは様々であるが、多くが斜めの方向に施文している。19～22のように口唇部にヘラ様工具による連続した刻みを加えたもの、23～27のように貝殻の腹縁を連続して押捺するものなどもみられる。また28・29のように口縁部に孔が一定の間隔を持って開けられているものもある。48～52は底部付近の土器である。48は平底の底部で条痕文が施されている。49～52は底部付近で、いずれも丸底を呈すると思われる、底部付近には条痕はあまりみられない。

本類は土器胎土に繊維を多量に含むなど前掲の1・2類とは器形・器面に施された文様など大きく



第57図 第1群土器実測図(グリッド出土)第3類



第58図 第1群土器拓影図(グリッド出土)第3類



異なる特徴を持つ。土器器面に施された文様・器形などの特徴からa-1・a-2、bの3類に分類した。分類した土器群はそれぞれa-1)の土器群は鶺鴒ヶ島台式の特徴を、a-2)の土器群は茅山下降式の特徴を、そしてb)の土器群は茅山上層式の特徴を備えており、それぞれ当該期の土器群としてよいと考える。

## 第2群土器 前期土器群(第59～69図、図版24～31)

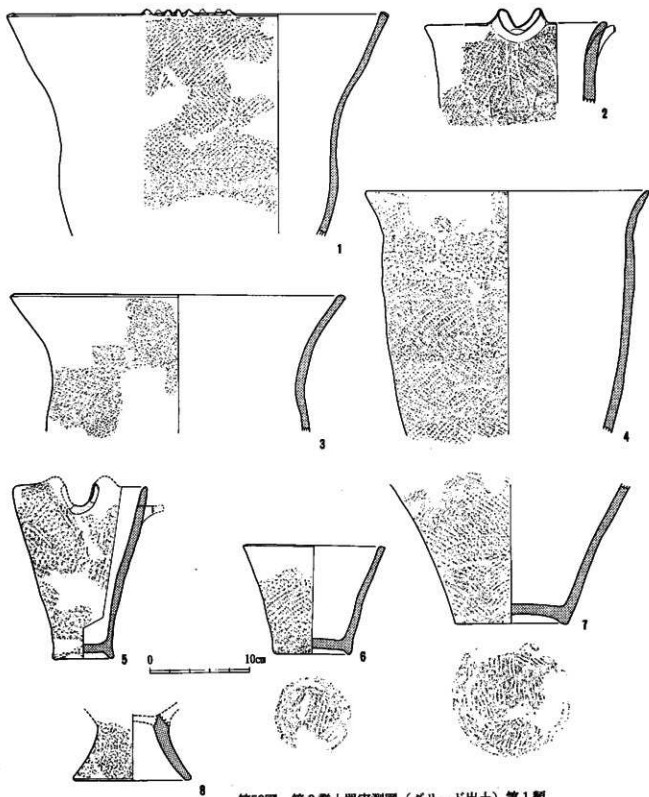
以下に6類に分類してその概要を述べる。

### 1類(第59～61図、図版24～26)

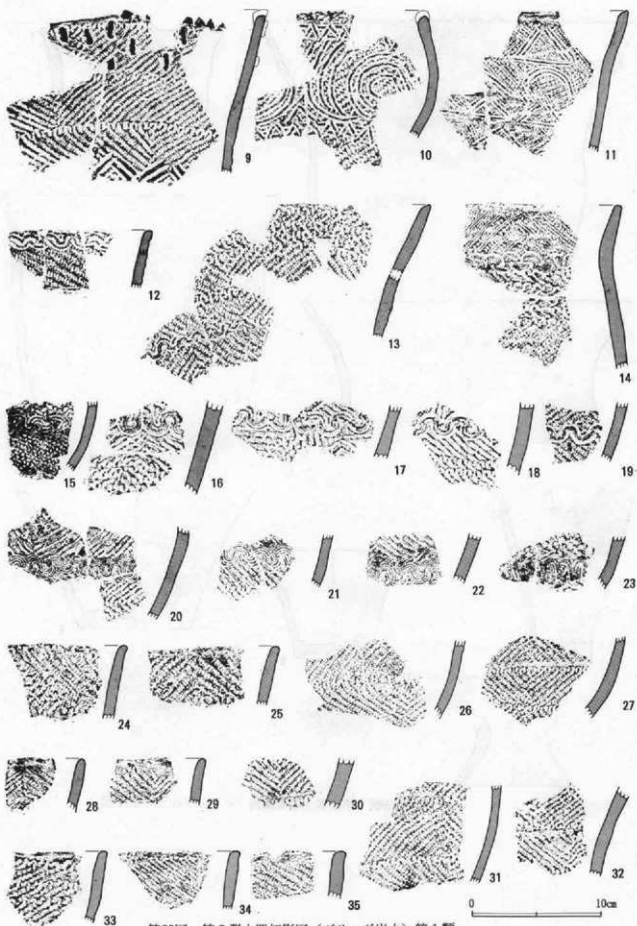
本類は前期関山式土器を集めたものである。第59図1～8は復元の結果、形状が分かるまでになった土器である。1は大型の深鉢である。頸部がやや括れ、そこからはほぼ直線的に口縁が開く。口唇部には8個一単位の鋸歯状の突起が付けられている。器面には口縁部と頸部付近に数段にわたるループ文をそれ以外には羽状縄文が施文されている。また胴部下部には半載竹管様工具によるコンパス文が施されている。2は注口をもつ深鉢の上半部である。器面は斜縄文のみ施文されている。3は大型の深鉢の上半部である。1と同様な形状を示す。器面は組紐文のみが施文されている。4は大型の深鉢である。やや円筒状の胴部から口縁部が大きく外に開く形状を示す。頸部付近にループ文が数段施文されているが、その他は異条縄文が羽状に施文されている。また胴部下部には半載竹管様工具によるコンパス文が加えられている。5は注口をもつ深鉢である。器面全体に半載竹管様工具を用い連続押し引きによる文様を施し疑似縄文としている、また口縁部付近ではループ文に似せて文様を描いている。底部は上げ底状を示す平底である。6は小型の鉢で、底部から直線的に口縁部が外に開く器面はループ文をもつ羽状縄文が施文されている。底部は上げ底の平底である。7は大型の深鉢土器の底部付近である。数段に施文されたループ文がみられる。底部は上げ底の平底である。6・7は底部にも縄文が施されている。8は台付き土器の脚部である。組紐文が施文されている。

以下9～61は関山式土器の破片である、器面に地文として施文される縄文の種類によって何種類かに分けることができる。9～23は地文の縄文以外に文様が施されているものである。9～11は口縁部付近に半載竹管様工具により連続の山形文と蕨手状の文様思わせる渦巻き文等の文様が施されているものである。9は口唇部に小さい粘土瘤を鋸歯状の突起として、口縁部には2段にはほぼ等間隔に貼り付けている。10は口唇部には鋸歯状の突起が付けられている。13～19は半載竹管様工具により真正コンパス文が描かれている。20～23は櫛歯様工具によりコンパス文が描かれている、この文様は先の真正コンパス文に対して波形文と言われているものである。24～32は羽状縄文である。33～35は斜縄文である。36～44は異条縄文である。45～51はループ文である。52～61は組紐(縄)文である。

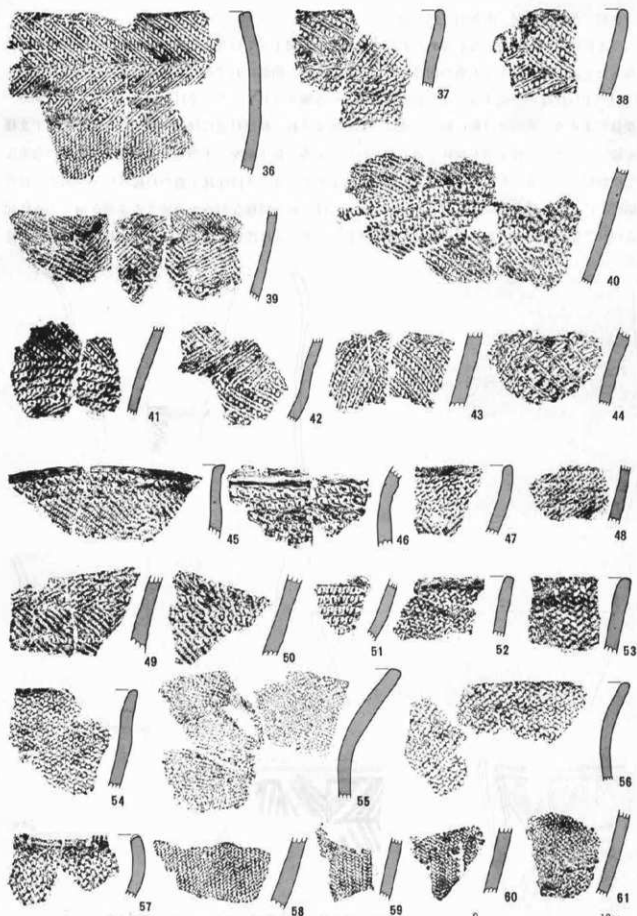
本類に分類した土器群のほとんどは、文様の種類・文様を描く手法および文様の土器器面に占める位置・割合などを観察すると関山式でも新しい時期(関山Ⅱ期)に分類される要素を多く備える土器群であり、本類の土器群は当該期の土器群と考える。



第59図 第2群土器実測図(グリッド出土)第1類



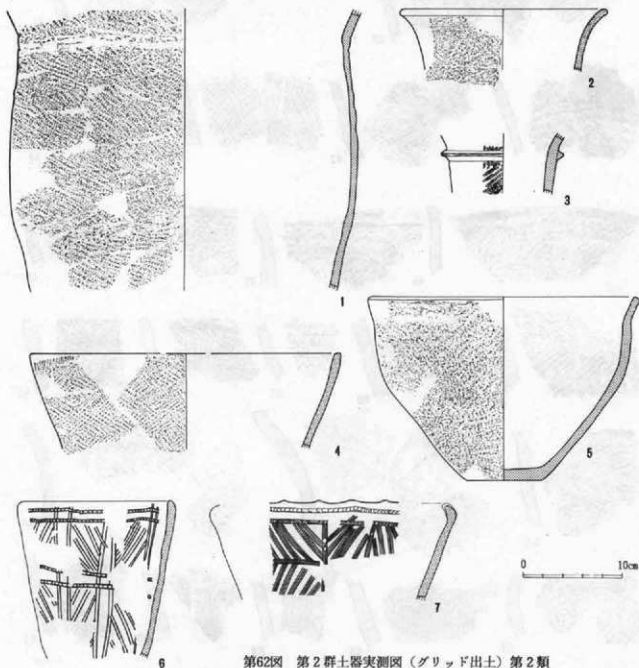
第60図 第2群土器拓影図(グリッド出土)第1類



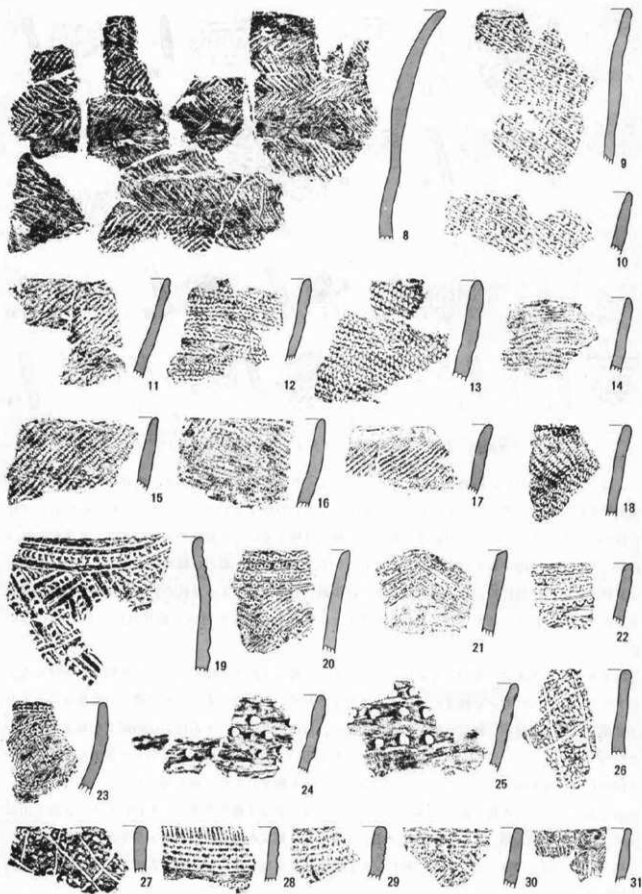
第61図 第2群土器拓影図(グリッド出土)第1類

2類 (第62~64図、図版24・26・27)

本類は前期黒浜式土器を集めたものである。第62図1~7は復元の結果、形状が分かるまでになった土器である。1は大型の円筒に近い深鉢である、頸部にわずかに括れを持ちヘラ様工具による一対の平行沈線が一巡する、ほか器面は斜縄文のみ施文されている。2は口縁部で大きく外に開く、深鉢であろう。器面には粗い縄文が地文として施文され、頸部付近にはヘラ様工具による沈線で文様を描いている。3は小型の深鉢土器の頸部付近である、粘土紐を一本巡らせ、断面を三角形になるように整形している。そのち斜縄文を器面に施文している。4は深鉢土器の口縁部付近である、口唇部直下にはヘラ様工具による刻みが巡り、以下にはこれと同様な刻みが連続する菱形を描くように加えられている。地文として羽状縄文が施文されている。5は浅鉢土器である頸部にわずかに括れを持

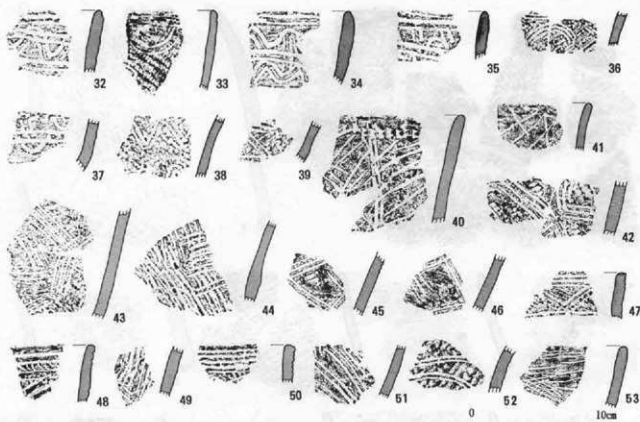


第62図 第2群土器実測図(グリッド出土)第2類



第63図 第2群土器拓影図(グリッド出土)第2類

0 10cm



第64図 第2群土器拓影図(グリッド出土)第2類

つ、器面全体を粒の粗い斜縄文のみが施されている。6は小型の深鉢である、底部から口縁に向かって緩やかに直線的に開く。丁寧に磨かれた器面に半載竹管様工具を用いての平行沈線で綾杉状に文様を描いている、さらに上から口縁部と胴部に半載竹管様工具による連続の押し引きによる爪形文が一對ずつ文様帯を区画するかのよう施文されている。7は深鉢土器の口縁部付近である、口縁は細かな波状を呈し、内側に折れる。口唇部直下には半載竹管様工具による連続の押し引文が平行に一對施文されている。以下には櫛歯様工具による4本一単位の平行沈線を用いて綾杉状に文様を描いている。

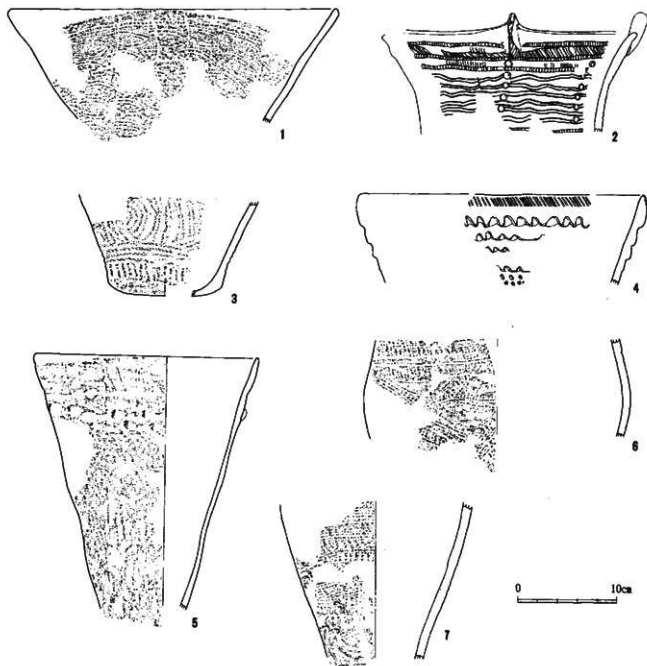
以下8～53は黒浜式土器の土器破片である。器面に施文される文様によって何種類かに分けることができる。8～16は器面が縄文のみによって施文されているものである。8は縄文の種類を変えての羽状縄文、9・10は粗い縄文に燃糸の附加条縄文、12は燃糸文が、そのほかは斜縄文が施文されている。19～25・28～31は竹管および半載竹管様工具を用いて押し引きによる爪形文や刺突文などの文様を描かれているものである。26・27はヘラ様工具により格子目状に文様が描かれているものである、ともに地文として目の粗い縄文が施文されている。32～39は半載竹管様工具を用いた平行沈線で山形文や円弧状の文様を描いているものである、地文として縄文が施されているものが多い。40～53はヘラ様工具や半載竹管様工具を用いて綾杉文や肋骨文様に文様を描いているものである。地文が無文のものが多い。

本類に一括した黒浜式土器群は近年細分化が進んでいるようであるが、本遺跡出土の土器を見る

と、第62図1～3の様に関山式土器群に続く文様の古い要素を持つものから、第62図6・7の様に新しい文様の要素を持つものまで見られ、細分の可能性もあるが、しかし本土器群の多くは遺構からの出土ではなく、包含層からの出土で、出土層位も明確に区分できなかったのは残念である。文様・器形などを観察すると、十分に細分は可能である。

### 3類 (第65・66図、図版28・29)

本類は前期諸磯式土器を集めたものである。しかし、出土した本類の土器の量は他の土器群と比較すると少ないほうである。



第65図 第2群土器実測図(グリッド出土)第3・4・5類



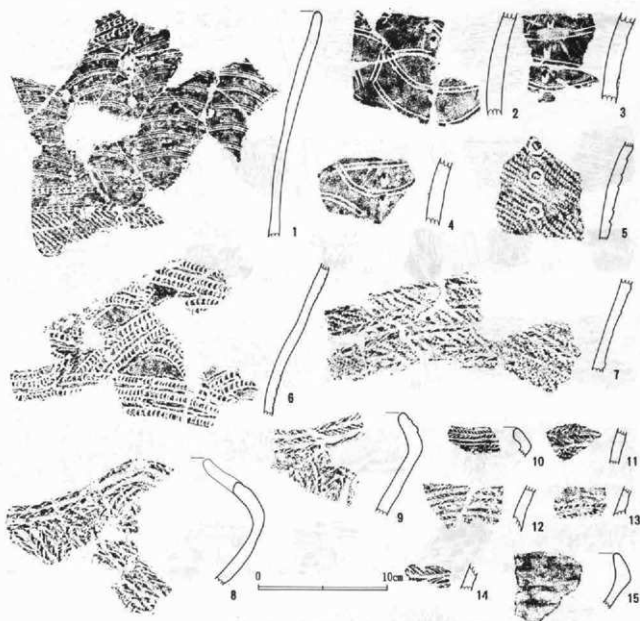
第65図1は口縁が平縁の深鉢土器の口縁部付近である、口唇部直下と胴部には文様帯を区画するかのように半載竹管様工具を用いて押し引きよる爪形文が巡る。この爪形文に挟まれた空間には半載竹管様工具による平行沈線で木の葉状に描かれた文様が5段にわたって巡っている。2は1カ所突起を持つが平縁の深鉢土器の口縁部と胴部の一部である。突起は口唇部から口縁にかけて粘土を貼り付け、上を棒様工具を押捺して刻みを加えている。口縁部以下には1と同様に文様帯を区画するかのように半載竹管様工具を用いて押し引きよる爪形文が口縁部付近に3本、胴部に1本巡る。口縁部の3本に挟まれてきた空間の上段では粘土紐を貼り付け上を棒様工具を押捺して刻みを加えている。胴部にはある間隔をもって竹管による円形の刺突が縦位に施され、この刺突を結ぶように半載竹管様工具による平行沈線が波形状に施文されている。3は深鉢土器の胴部下半部から底部にかけての土器である。細い粘土紐を土器の器面に貼り付けて平行線や渦巻状の文様を描き、さらに粘土紐の上にはヘラ様工具で斜めの刻みを細かに加えている。底部は平底を呈するが胴部下半部と接する部分は丸みをもっている。

第66図1～15は本類の土器破片である。1は口縁が波形を呈する深鉢と思われる、口縁に沿ってと胴部には文様帯を区画するかのように櫛歯様工具を用いて押し引きよる刺突文的な文様が巡る。挟まれた空間にはある間隔をもって竹管による円形の刺突が縦位に施され、この刺突を結ぶように櫛歯様工具による平行沈線が肋骨文様に施文されている。以下の胴部には縄文が施文されている。2～4は第65図1と同様な文様が施文されている。5は地文の縄文の上に竹管による円形の刺突がほぼ一定の間隔を於いて縦位に加えられている。6・7は同一個体だが接合しない、6は胴部上半部、7は胴部下半部である。器形は口縁が波形を呈する深鉢と思われる、胴部上半部では6で見られるように半載竹管様工具を用いて押し引きよる爪形文により文様を描いている、以下胴部下半部では地文の縄文の上に細い粘土紐を横位にある程度の間隔をもって貼り付け、上から棒様工具で刻みを加えている。8～15は縄文のみまたは無文の地文の上に極めて細い粘土紐を、その多くは平行何条にもわたり貼り付けて文様を描き、さらにその粘土紐の上をヘラ様工具によって斜めに細かく刻みを加え、それまでの土器とは趣を異にしている。また、これらの土器の器形をみると第66図7までの土器群とは異なる器形を呈する、それは外に開きかけた口縁部が途中で大きく内側に折れて入り込み、口縁部がいわゆるキャリパー状を呈する。

本類に分類した諸磯式土器は諸磯a式・諸磯b式・諸磯c式の3期に大きく分類されている。本遺跡出土の土器を見ると、第65図1と第66図1～5は諸磯a式に、第65図2・3と第66図8～15は諸磯b式に、第66図6・7は諸磯c式の土器群の特徴を備えておりそれぞれに分類できる。こうして見ると本遺跡出土の土器群は諸磯式期の比較的古い段階の土器群が多く出土していることになる。

#### 4類（第65・67・68図、図版29・30・31）

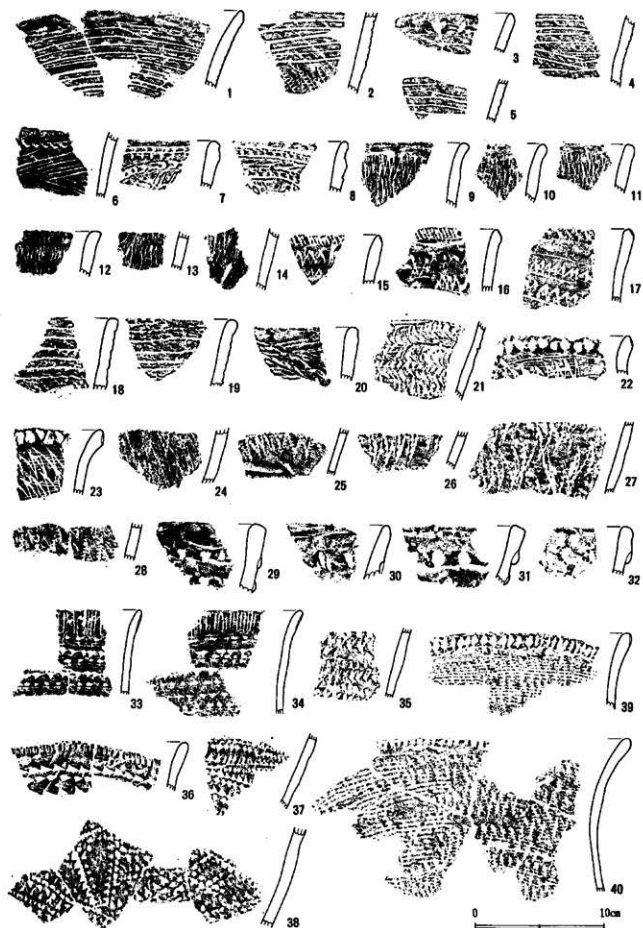
本類は前期浮島式土器を集めたものである。第65図4は平縁の深鉢の口縁部付近である。口縁部口唇部直下にはヘラ様工具による刻みが口縁に直角に施され、以下には指先の押捺による凹凸が4段



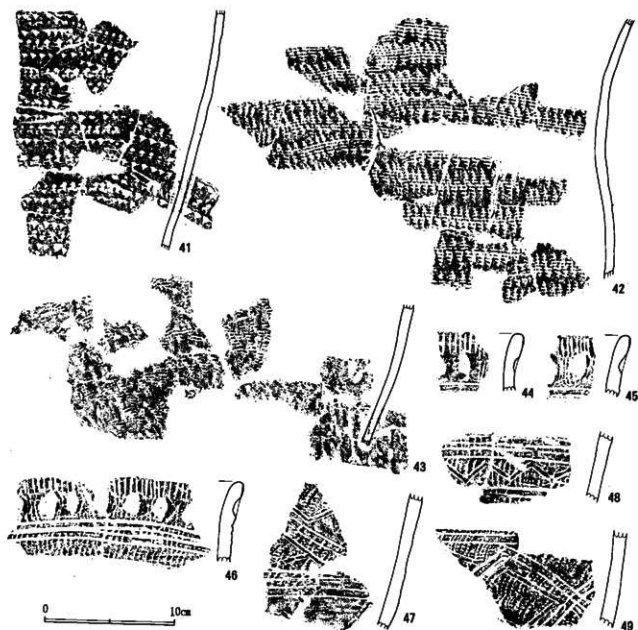
第66図 第2群土器拓影図(グリッド出土)第3類

にわたって巡る。以下胴部には貝殻の腹縁の押捺が行われ文様を作っている。5は口縁が平縁の深鉢土器の口縁部付近である、底部からはほぼ直線的に口縁に向かって開く。口縁部は無文である、胴部上半部には棒様工具の横位の押捺の結果粘土の小さな高まりが2段にわたって巡る、また胴部中央部には貝殻の腹縁を押捺して文様としている。底部付近はまた無文となる。

第67・68図1～43は本類の土器破片である。1～5は口縁部または付近の土器破片である、ヘラ様工具による沈線が複数横走る。6は胴部の破片であるが同様にヘラ様工具による沈線が複数横走る。7・8は半截竹管様工具を用いて押し引きよる爪形文が施されている。9～17は二枚貝の貝殻腹縁を用いての押捺による大きめの波形式文が連続的に施されている。15・16は口唇部に半截竹管様工具で短い平行沈線を連続して加えている。17は口唇部にも貝殻の腹縁の押捺を加えている。18～21は変形爪形文を施しているものである、18・19は貝殻腹縁の押捺の上から行っている。22・23は口唇部に



第67図 第2群土器拓影図(グリッド出土)第4類



第68図 第2群土器拓影図（グリッド出土）第4・5類

棒様工具による刺突が巡る。以下の文様は9～17と同様な文様が施されている。24～28はいずれも胴部の破片で放射肋を持つ貝殻腹縁を用いてやや大きめの波形式を施している。29～32は口縁部の破片で棒様工具による円状の刺突が複数巡る。33～38および第68図41はいわゆるヘラ様工具を用いての三角文を主体に施したものである。33・34・36は口縁部に半載竹管様工具で短い平行沈線を連続して加えている。39・40・42・43は放射肋を持つ貝殻腹縁を用いての波形式の上、または波形式と組み合わせて放射肋を持つ貝殻を用いて条痕様文様を施している。

本類に分類した浮島式土器群は本遺跡から比較的多く出土している。本類の土器群は細分化が進み大きく浮島Ⅰ式・浮島Ⅱ式・浮島Ⅲ式に分類され、さらに細かく分類されている。本遺跡出土の土器は第67図1～14は浮島Ⅰ式の、第65図4・5および第67図15～32は浮島Ⅱ式の、第67図33～40および第68図41～43は浮島Ⅲ式の土器群の特徴を備えておりそれぞれに分類できる。

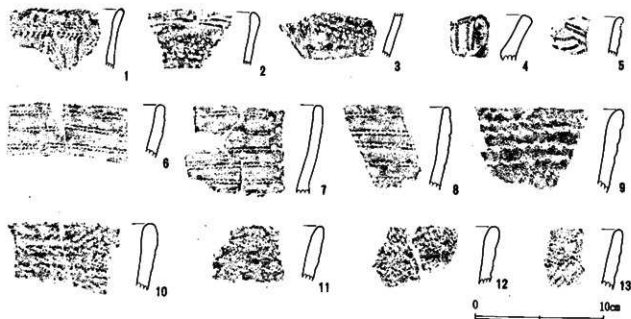
5類 (第65・68図、図版29・31)

本類は前期興津式土器を集めたものである。出土は極めて少なく第65図に示した2点の復元土器以外には第68図44～49に示した土器破片が若干出土した程度である。第65図6・7ともに深鉢形土器の胴部である。6は胴部が膨らみ浮島式土器には見られない器形をします。その胴部にはへら様工具による平行沈線の中を放射肋を持つ貝殻腹縁を用いて文様を施し、それ以外を磨消しにより無文としている。7は放射肋を持つ貝殻腹縁を用いて文様を施している、胴部下半部底部付近は無文である。第68図44～49は深鉢土器の同一個体の土器破片であると思われる。44～46は口縁部付近である、口縁部の口唇部直下には半載竹管様工具を用いての縦位の短い平行沈線が通り、以下口縁部から胴部にかけて放射肋をもつ貝殻の腹縁を縦位に押捺して地文としている。さらに地文の上にも小さな放射肋をもつ貝殻の一部を強く押捺して凹みを作ったり、半載竹管様工具を用いて平行沈線を2～4条横走させている。47～49は胴部の破片である、放射肋をもつ貝殻の地文の上を半載竹管様工具やへら様工具を用いて平行沈線により文様帯を区画したり文様そのものを描いている。

本遺跡出土の土器は興津式土器の特徴を明確に示す土器が出土していると言える。しかし残念ながら本土器の特徴的な文様の一つである貝殻磨消文があまり見られない、ただ第65図6の胴部に一部分が観察されるだけである。

6類 (第69図、図版31)

本類は前期末と思われる土器を集めたものである。1は深鉢土器の胴部上半部である。口唇部にはへら様工具および半載竹管様工具による刻みが加えられている。口縁部には放射肋をもつ貝殻の腹縁を押し引きして波形文を施している。2・3は無文の地の上に放射肋をもつ貝殻の腹縁の先を連続して押捺している。同一個体と思われる。興津式または同時期の土器に分類される可能性が高い。4

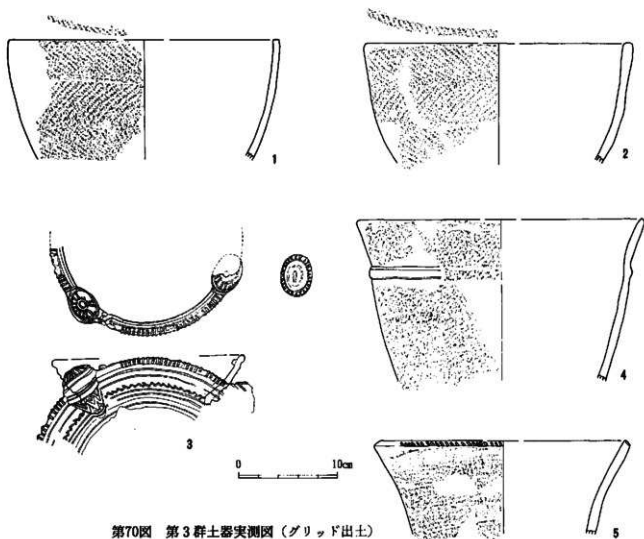


第69図 第2群土器拓影図(グリッド出土)第6類

・5は無文の地に細い粘土紐を貼り付け、その上半截竹管様工具で粘土紐を押さえるようにして連続して押し引き、爪形文様の文様を描いている。十三善提式土器の口縁部と思われる。6~13はいずれも土器の口縁部付近で、無文の地に6~8は撚糸(0段の撚り)そして9~13は単節縄文(1段の撚り)を棒様工具に巻き付け単軸絡糸体として施文したものである。うち10~13は口唇部直下にも斜縄文が施されている。6~13はいずれも口縁部が肥厚しておらず栗島台式土器と言われる土器の特徴を備える土器が多く、前期末の土器群とした。

### 第3群土器 中期土器群(第70・71図、図版32)

本群の土器は出土量も比較的少なく時期も近接するものが多かったので細かく分類せずに一括した。中期でも初頭の土器が中心である。第70図1・2はともに口縁に向かって緩やかに内湾しながら開く浅鉢型土器の口縁から胴部にかけてである。焼成・胎土など全く同様な造りの土器である。そして器面は羽状縄文のみを施文し、さらに口唇部にも縄の回転押捺による縄文を施している。2の1段目の羽状縄文には結束部の波状の縄文がみられる。3は深鉢土器の口縁部付近である。口縁部は内湾しながら大きく開く。少々特異な突起を持つ、この突起は4カ所に施されていたと思われる。口唇部



第70図 第3群土器実測図(グリッド出土)

は内側に段を有しやや肥厚する。口縁部の文様は細い粘土紐を適当な長さにして器面に貼り付けて文様としている。突起は接合しないが同一土器と思われる他の破片には突起の蓋はなく中央が凹んでいるものが付いており全てが同じ突起ではないようである。器形等を考えると五領ケ台式と思われる。4は深鉢土器の上半部である、器面全部に斜縄文のみが施されている。頸部には粘土紐を張り付け、上に縄文を施した突帯を一条巡らせている。5は4と同様に深鉢土器の上半部である、口縁は緩やかに外反する。口唇部には棒様工具による刻みが一周し、以下の器面には縄文のみが施されている。

第71図6～37は本群に分類した土器の破片である。6～13は土器胴部に結束縄文による文様が施されている一群である、6～8は横位に、9～13は縦位に施文されている。14・15は口縁部付近で、口縁が二重になりやや肥厚し、縄文が施されている。16～18は口縁部付近である、口唇部直下よりヘラ様工具による沈線が平行に巡り、平行な沈線間にはヘラ先による刺突を連続して加えている箇所もある。19は口縁付近である。口唇部は肥厚し、以下地文として斜縄文を施し上を棒様工具により文様を描いている。20は口縁付近である。無文の地に棒様工具により沈線を数条巡らし、さらにその上を細い竹管の先を斜めに連続して刺突している。21・22は胴部の破片である、地文の縄文に細い粘土紐を二条縦位に貼り付けている。23は口縁部付近の破片で、口唇部に指先の押捺に因る小さな波状をもつ。23・24・25は口縁の破片で、無節の縄文のみが施文され、口唇部直下には結節縄文が施されている。なお口縁部は頸部との堺に小さな段を持つ。26・27は口縁部の破片で、輪積痕が残る上を櫛歯様工具による沈線を施している。26は半円状の小突起をもつ。28・29は胴部の破片で、半載竹管様工具による沈線で文様を描き、さらに上を棒様工具の先で押し引き、太く短い沈線を加えている。30～33は胴部の破片で、地文の斜縄文の上に半載竹管様工具による沈線を丹念に加え文様を描いている。34は口縁部の破片で、燃糸を施文している。35は口縁部の破片で、段を有する口唇部はやや肥厚し、低く偏平な突起を持つ。さらに半載竹管様工具による小さな爪形文と沈線が細かく連続して施されている。口縁部には粘土を張り付けて隆帯を作り、半載竹管様工具により口唇部と同様な文様を施している。36は胴部の破片で、無文の器面に細い棒様工具による沈線で文様帯を区画し、その中に竹管の先を連続して刺突している。37は胴部の破片で、無文の器面に棒様工具で直線と波形のための沈線を縦位に施している。

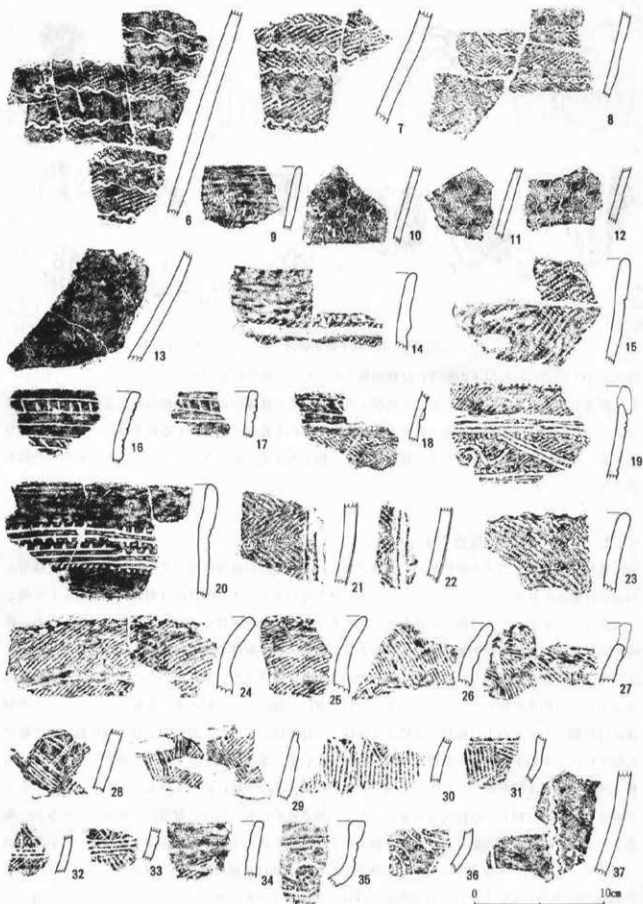
本群に分類した土器群は中期初頭のものであることは先に述べたとおりである。6～12の土器破片はいわゆる下小野式と言われる土器群の特徴を多く持つ。そして残りの13～37の土器破片の多くは五領ケ台式と言われる土器群の特徴を多く持つ。下小野式土器群は五領ケ台式に含まれるとする意見も有り、ここではあえて細分類しなかった。

#### 第4群土器 後期土器群 (第72～74図、図版33～35)

以下に3類に分類してその概要を述べる。

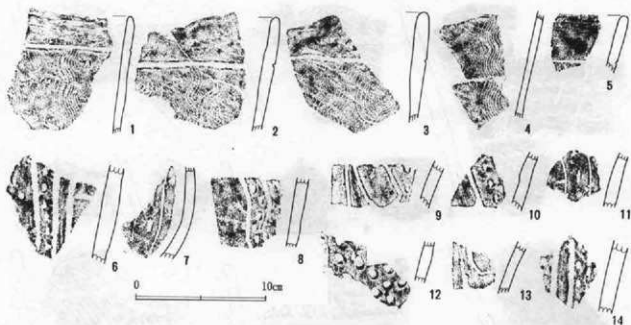
##### 1類 (第72図、図版33)

本類は後期称名寺式土器を集めたものである。1～5は口縁部に無文帯を持ち棒様工具による沈



第71图 第3群土器拓影图(グリッド出土)



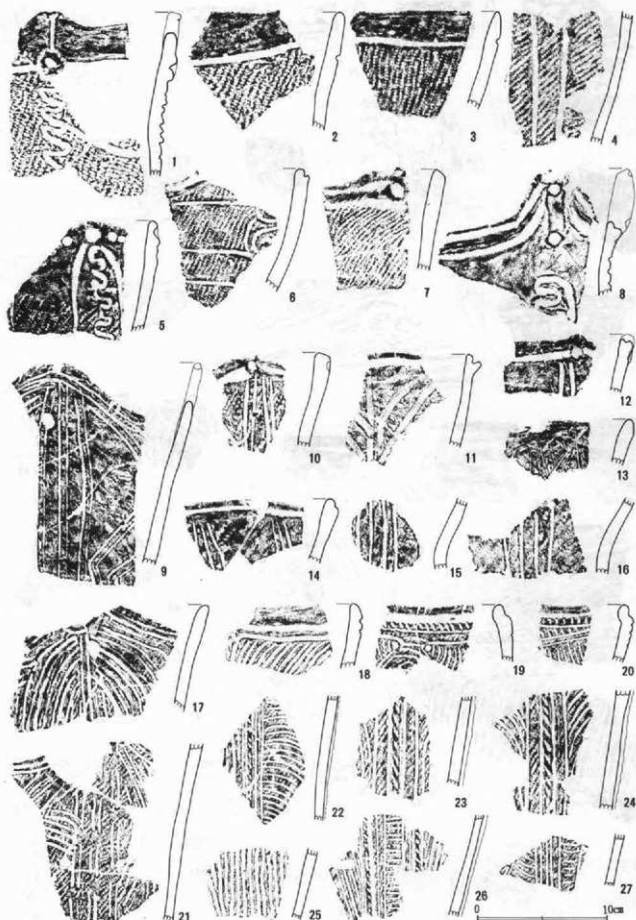


第72図 第4群土器拓影図(グリッド出土)第1類

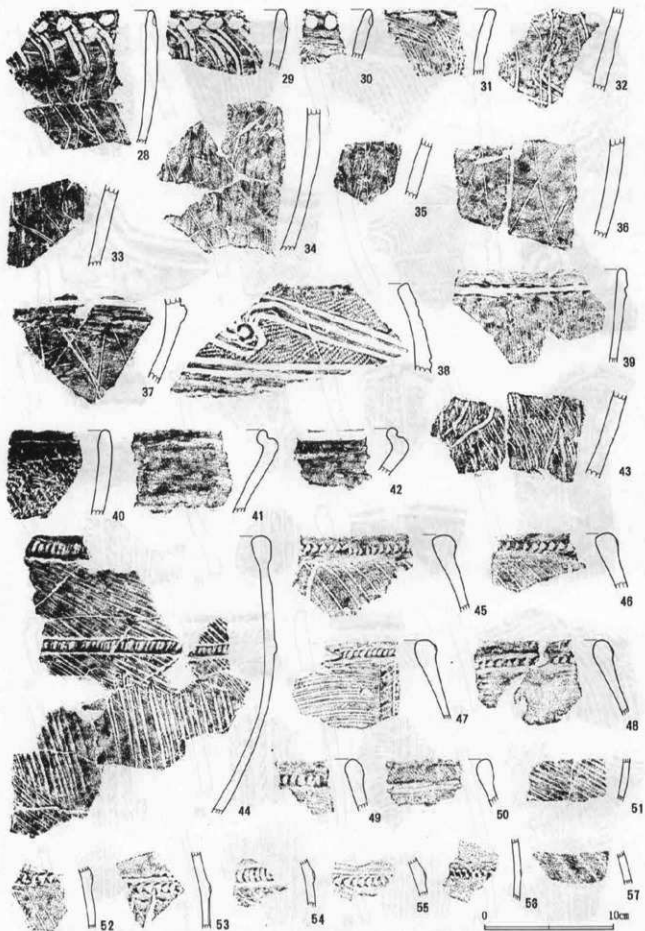
線によって区切られた以下の胴部には櫛歯様工具を用いて縦位に波形文を描いている。6~14はいずれも胴部の破片である、無文の器面に棒様工具を用いての沈線によって区切られた文様帯の中を棒様工具の先端を用いての刺突が加えられている。1~5の土器は当該期の土器群ではない可能性も多分にある。6~14の土器は称名寺式I式・称名寺II式に細分されるうちII式の土器群の特徴を備えている。

## 2類(第73・74図、図版33・34)

本類は後期堀之内式土器を集めたものである。1~4は口縁部に無文帯を持ち、以下の文様帯との境には棒様工具を用いての沈線が一条巡る。無文帯の下方である胴部には斜縄文を地文として施し上を棒様工具を用いての沈線で文様を描いている。5~16は口唇部直下に一・二条の沈線が巡り、棒様工具による円形の刺突が加えられていることがある。以下胴部の文様は棒様工具を用いての沈線によって文様が描かれており、懸垂文がその中心的位置に施されている。器面には5~7・10のように地文として斜縄文を施してあるものが多い。17~27は口縁に沿って幅のある沈線を巡らせ、以下の胴部には斜縄文の地文の上に棒様工具による沈線で文様を描いている。22~24・26の様に粘土紐を縦位に貼り付けてその上を棒様工具により刻みを加えている。第74図28~37・39は器面をヘラまたは櫛歯様工具を用いて沈線が施文されているものである、28~30は口縁に沿って棒様工具による円形の刺突が巡る。35~37は細く、直線的な沈線が交差して施されている。39は口縁部にやや太めの沈線が一条巡る。38は口縁部付近の破片で、地文の縄文の上を棒様工具による平行沈線で文様を描いている。35・36・37・38は胎土・焼成等から同一個体と思われる。40は口縁部に僅かな無文帯を持ち以下の胴部を縄文のみ施文している。40・41は無文の浅鉢と思われる土器である、口唇部にやや太めの沈線が巡る。43は地文の縄文の上に棒様工具による沈線を施している。



第73図 第4群土器拓影図（グリッド出土）第2類



第74図 第4群土器拓影図(グリッド出土)第2類・第3類

本類に分類した堀之内式土器はほとんどが堀之内Ⅰ式に含まれるものである。

### 3類 (第74図、図版35)

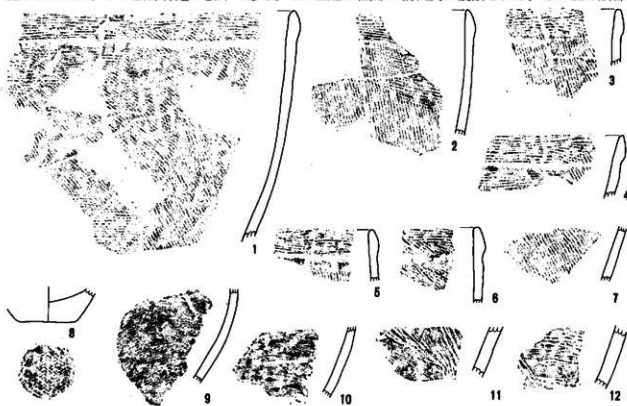
本類は後期安行式土器を集めたものである。44～50は口縁部付近、51～57は胴部の破片である。いずれも安行式に特徴的な砲弾形を呈する深鉢土器の部分と思われる。口縁部は緩やかに内湾しながら内側に入り込んでいる、口唇部直下には口縁に沿って粘土紐を張り付け肥厚しているその上にヘラ様工具による刺突が加えられているか、または50のように斜縄文を施している。また頸部付近にも口縁と同様に粘土紐をやや幅広く貼り付けて、上にはヘラ様工具による連続の刺突が加えられている。その他の胴部にはヘラ様工具による条線の文様が多くは斜めに、希に縦や横方向に施されている。

本類に分類した安行式土器は装飾もなくいわゆる粗製の土器群である。口縁部と頸部の2カ所を平行する粘土による紐線をもち条線の文様が描かれるなど安行2式の土器群の特徴を備えており、本類の土器は当該型式としてよさそうである。

### 第5群土器 晩期土器群 (第75図、図版35)

#### 1類 (第75図、図版35)

本類は晩期千網式土器を集めたものである。1～6は口縁部付近の土器破片である、口縁は微かに内湾しながら外に開き、口唇部付近はやや肥厚する。文様は摺糸文(0段の摺り)が器面の全体に施されている。7は胴部付近の破片である。8は土器の底部で網代痕が観察される。9～12は胴部か



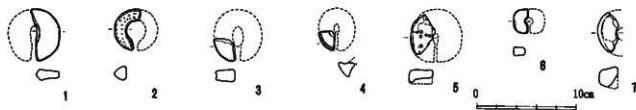
第75図 第5群土器拓影図・実測図(グリッド出土)

ら底部付近の破片である、撚糸文（0段の撚り）が器面に施されているのみである。

本類に分類した土器は出土量が極めて少ない。土器の特徴を観察すると千網式土器の特徴を多く備えており、本類の土器は当該型式のものとした。

以上、本遺跡の包含層から出土の総数約20,000点近い縄文土器を早期から晩期までの5群18類に分類し、その概要を説明してきた。出土土器のほとんどが小破片であり、一括で出土するものは少なく完形または器形が分かるまで復元出来た土器は比較的少なかった。その中であって出土量の比較的多かった土器群は遺構も検出されている第2群1・2類の前期関山式・黒浜式と第4群2類の後期堀之内式期の大きく2つの時期である。そしてそれに相い前後する時期の土器群が次いで多い。また第1群3類の早期後半の条痕文系を始めとして早期後半の土器群の出土が目立った。これは早期の炉穴の検出と関係がありそうである。そして若干量の出土ではあるが目される土器群としては第1群2類に分類した無文土器の完形土器が出土していること、および第5群に分類した土器で、出土量はさらに少ないが、千網式土器と思われる一群があげられる。この千網式土器と同じグリッド7Eから検出された075号住居跡からも若干ではあるが出土している。

#### b. グリッド出土土製品



第76図 縄文時代グリッド出土土製球状耳飾

#### 土製球状耳飾（第76図、図版36）

縄文時代前期の所産と思われる土製品が調査区の北側の包含層から数は少ないが出土している。すべて土製球状耳飾である。残念ながら遺構から出土したものはなく、さらに完形品の出土も一点もなくすべて部分のみの出土である。1は断面が扁平な五角形を示すやや薄めの耳飾り、中央の孔は円形ではなく楕円形を示すようである。2は断面が膨らみのある三角形を示す耳飾り、器面の両面は細い半截竹管様工具の先による「コ」の字状の刺突が一様に加えられ文様としている。中央の孔は大きく、円形を示し全体として「ドーナツ」を思わせる。3は耳飾りの球状部分で、断面は外側が微かに薄くなり台形を示す、また外周部分には浅い凹みを付けている。4は耳飾りの球状部分で、断面は外側が厚く中心に向かって薄くなり三角形を示す。器面は丁寧に整形され作られている。5は部分で、断面の形状は知り得ないが長方形を示すと思われる。表面には細い竹管様工具による円形の刺突が一様に施され文様としている。6は断面が微かに内側に向かって薄くなる台形を示す小型の耳飾りで、半分

ほど残る。形もほかの耳飾りとは違い隅にやや丸味を持つが方形を示すようである。7は部分で、中心に向かって僅かに厚さを増し、断面が台形を示すと思われるが、形状等の詳細は不明である。そこで焼成・胎土・形状などを見ると第95図の003住居跡出土と同様な古墳時代の紡錘車の可能性も十分に考えられる。

以上、包含層から出土した土製球状耳飾りについてその概要を述べたが、焼成は一様に良いが、とくに4は堅致である。、面白いことに出土した耳飾り7個すべてがその形状・大きさなどが違い、どれ一つとして同様な造りのものがない、加えて接合する破片もなかった。

ここに示した土製球状耳飾りに伴う土器群は本遺跡では判然としないが、他の遺跡から出土した同様の土製球状耳飾りを見ると縄文時代前期とくに後半期の浮島式土器・興津式土器が伴って出土するケースが多い。報告者の多くも土製球状耳飾りを縄文時代前期後半の浮島式期・興津式期の所産としている。

本遺跡でも縄文時代前期の土器群が多く出土しており、とくに後半期の土器群である浮島式土器・興津式土器も出土していることなどを考えると本遺跡出土の土製球状耳飾りも縄文時代前期後半の浮島式期・興津式期の所産としてよさそうである。

### c. 縄文時代の石器

昭和57・58年度と2回にわたる調査で、多数の石器が出土した。ここでは縄文時代の所産と思われる石器を遺構から出土したものと、包含層から出土したものとに分けて述べることにする。

#### 遺構出土の石器（第77～81図、図版37）

本遺跡では縄文時代の住居跡・土坑・炉穴をはじめ、遺構に伴って残る遺物も検出されているが、残念ながら縄文時代の遺構は古墳時代の遺構と比べるとはるかに検出数が少ない。したがって古墳時代の住居跡からも縄文時代の所産と思われる石器が数多く出土してきている。

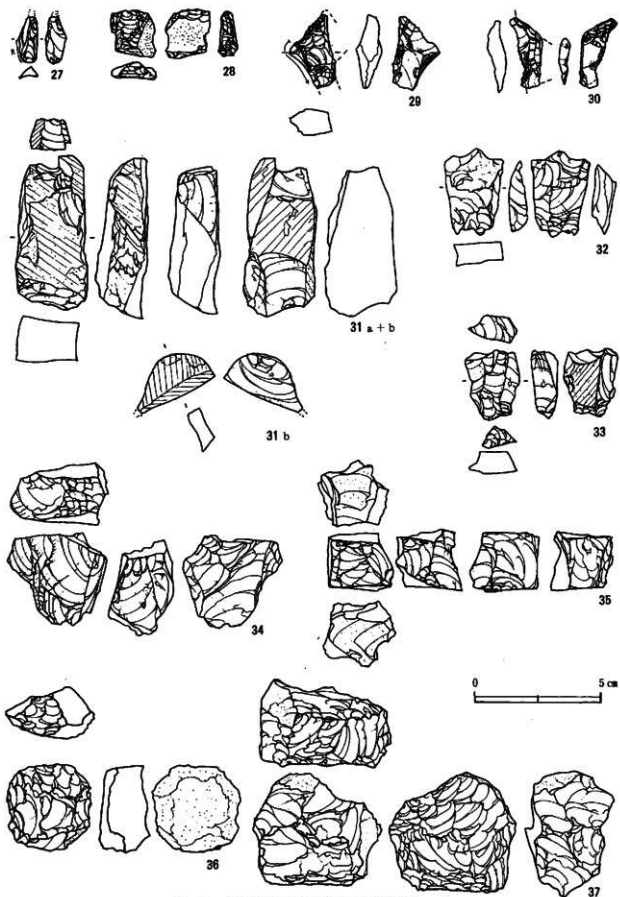
ここでは古墳時代の遺構に伴って出土している石器も縄文時代の所産と思われるものは、遺構から出土したのものとして一括して報告するものである。出土した石器を見ると石鏃が最も多く、続いて楔形石器・二次加工を受けた剥片が多く、ほかに磨石・石皿・石斧・敲石などが続く。特徴的なことは楔形石器・二次加工を受けた剥片などが石鏃と同様に多数出土していることである。

第77図1～16は石鏃およびその未完成品である。石材は黒曜石が最も多く、チャート・珪質頁岩が続く。多くが欠損しており、完形なものは3～7の5点を数える。いずれも二等辺三角形を基本形にしたもので底辺部が腹決し、脚を有するもの（凹基無茎鏃）が多く、希に24・26・28の様に底辺部の腹決がないもの（平基無茎鏃）も見られる。17～27・32は楔形石器である。剥片を用いて通常は階段状剥離様の潰れた平行する1対の刃部を有することが多い。本遺跡出土の楔形石器でも平行する1対の刃部を有するものが多く、まれに17・25のように直交する2対の刃部を有するものもある。石材は



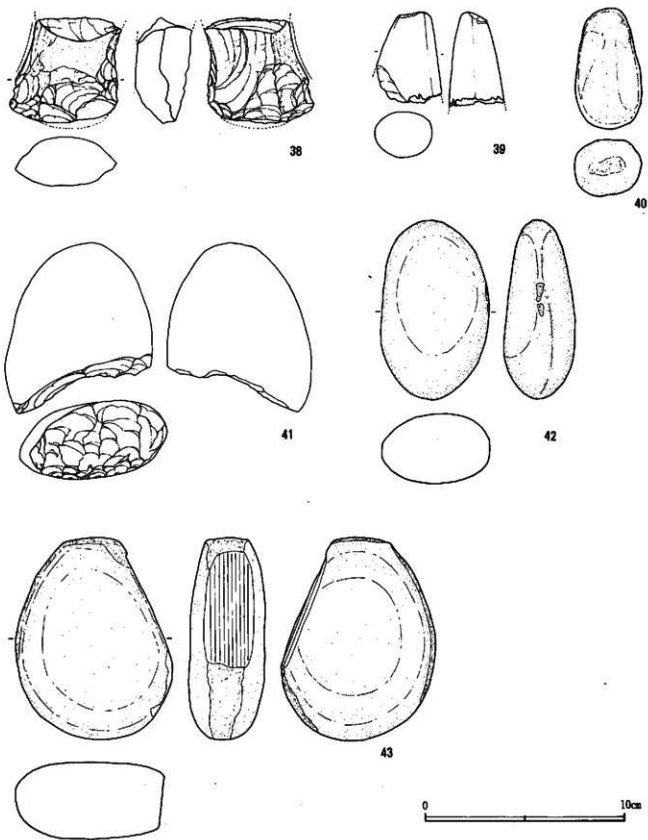
第77圖 縄文時代石器実測図（遺構出土）

1 0 5 cm

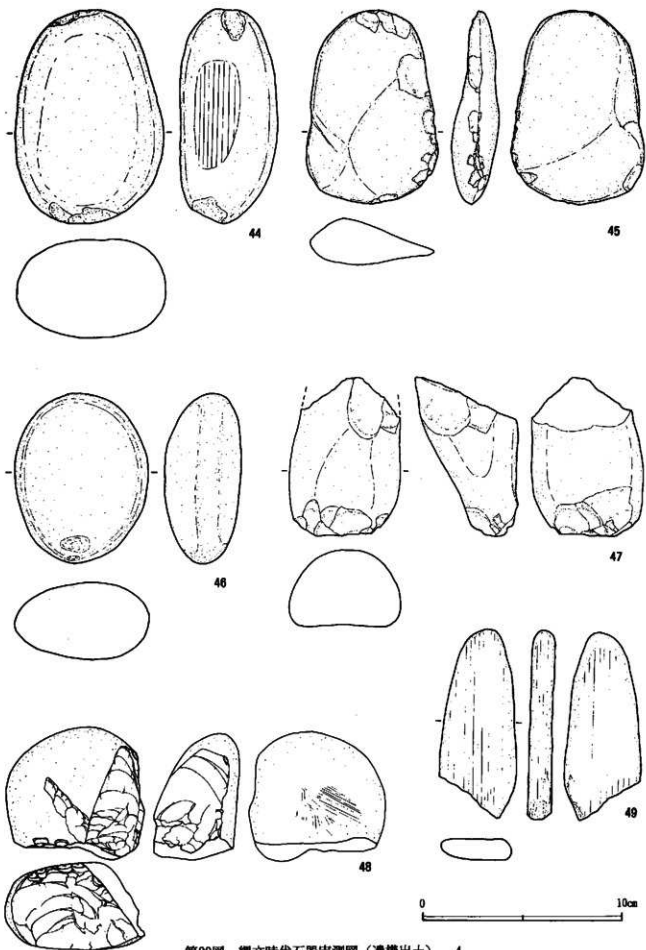


第78図 縄文時代石器実測図（遺構出土） 2

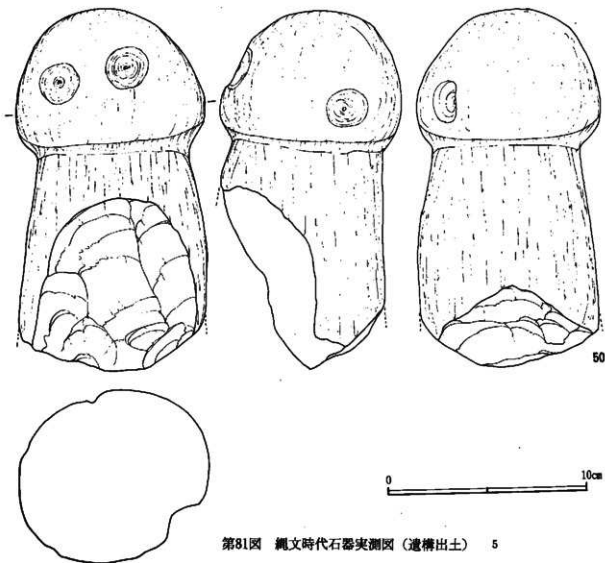




第79図 縄文時代石器実測図 (遺構出土) 3



第80図 縄文時代石器実測図 (遺構出土) 4



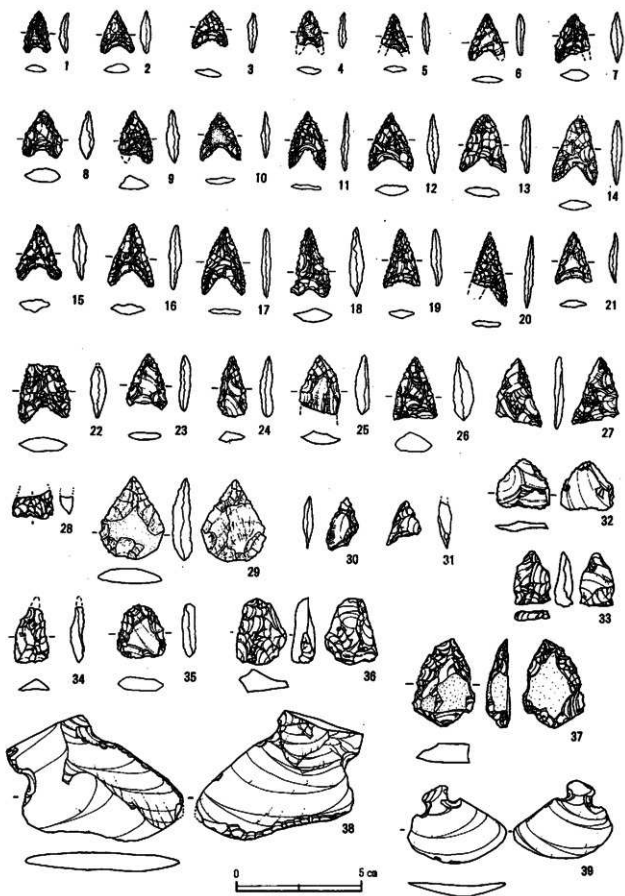
第81図 縄文時代石器実測図（遺構出土） 5

チャートと黒曜石である。28は削器である。29・30は二次加工も見られるが、欠損も多く、本来の器種を特定できない。31は石核と接合する剥片である。33～37は石核である。38は打製石斧である、半分と刃部の一部も欠く。分銅型の石斧である。39は磨製石斧片と分類したが、石材及び断面形状から考えると石棒の一部とも考えられる。40・42・44・47は敲石である。礫をそのまま使用しており、端部に敲打によると思われる使用の跡がみられる。43・46は磨石である。礫の周囲に使用による摩滅の跡がみられる。41・45・48・49は礫器である。非常に強い力で打撃を加えられたことによると思われる礫の大きな剝離・欠損がある。50は緑泥片岩製の石棒の先端部である。何か所か円錐状の凹みが見られ、本来の目的以外に使用されたことをうかがわせる。

#### グリッド出土石器（第82～93図、図版38～41）

グリッドからの石器の出土は非常に多く、種類も多い。そのほとんどが2次調査を行った調査区北の地域に集中しており、縄文土器が多量に出土した地域と一致する。

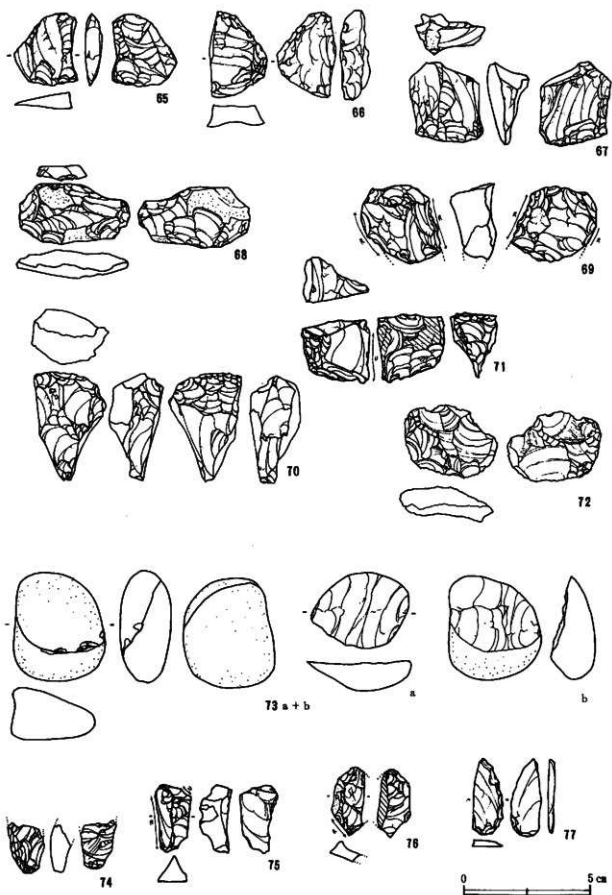
1～37は石鏃及びその未完成品である。石材は黒曜石とチャートが大半を占め、珪質頁岩が続く。



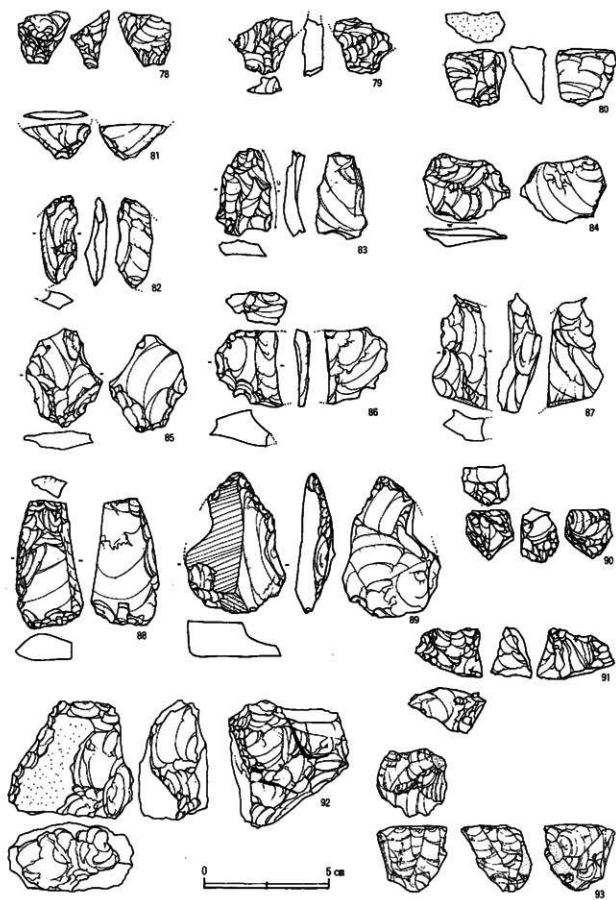
第82図 縄文時代石器実測図(グリッド出土) 1



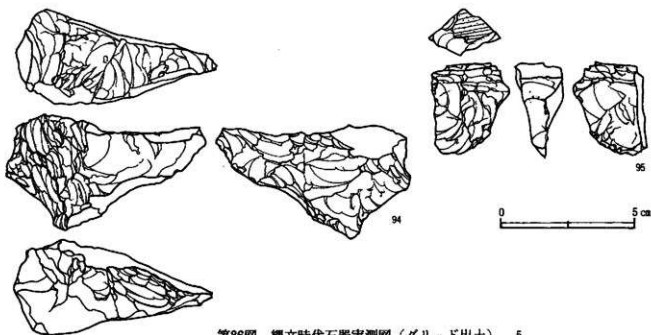
第83図 縄文時代石器実測図 (グリッド出土) 2



第84図 縄文時代石器実測図（グリッド出土） 3



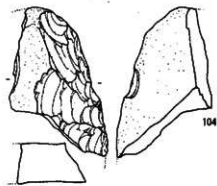
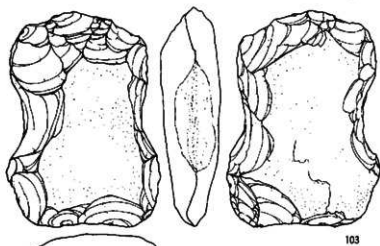
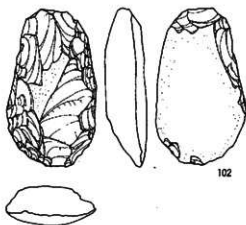
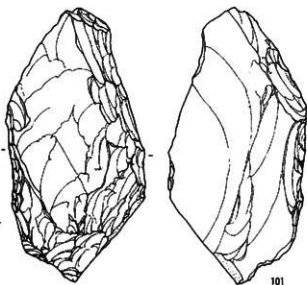
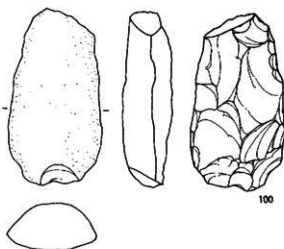
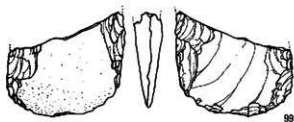
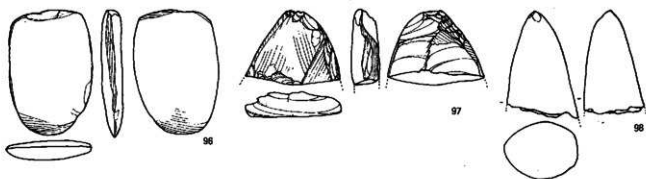
第85図 縄文時代石器実測図（グリッド出土） 4



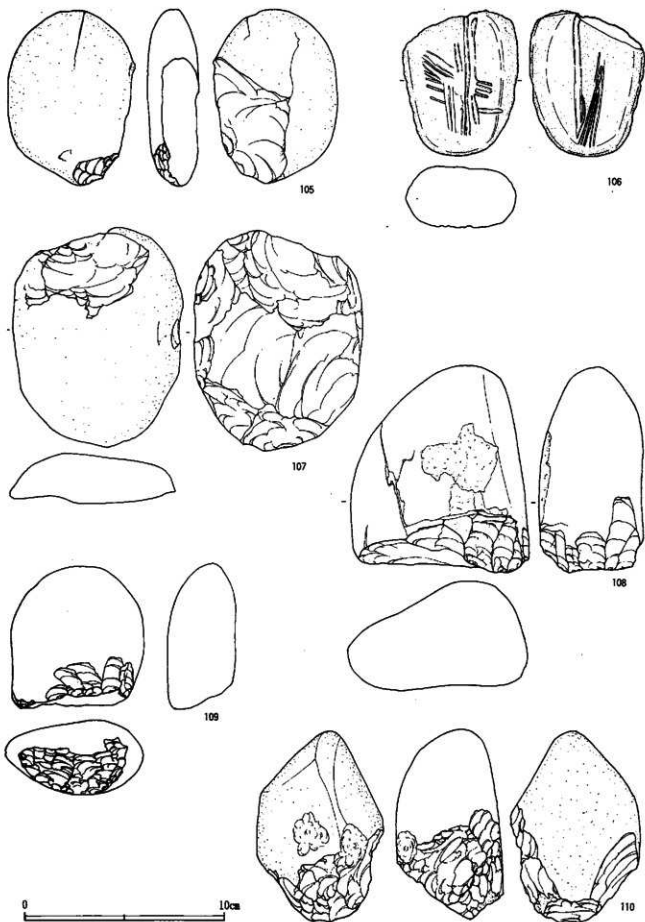
第86図 縄文時代石器実測図（グリッド出土） 5

器形は遺構から出土したものと同様に二等辺三角形を基本形にしたもので底辺部が腹挟し、脚を有するもの（凹基無茎鎌）が多い。1～23・27・30・31とはほとんどがこの種である。38・39は石匙で、ともにつまみに対して刃部が直交して作られている横形の石匙である。石材は38が礫灰岩、39が珪質頁岩である。38はやや大きめ石匙で、片面に調整が加えられ刃部が作られているが、39の方は剥片の鋭利な端部をそのまま使用したのか改めて調整が加えられてはいない。40～72・73bは楔形石器である。剥片を用いて通常は階段状剝離様の潰れた平行する1対の刃部を有することが多く、包含層出土のものもそのほとんどがそうである。なかには希に刃部を2対有するものもある。石材はチャートがほとんどを占め、黒曜石が若干に見られる程度である。73は接合資料で、楔形石器の剥片が接合してチャートの小礫に復元されたものである。74～89は剥片で、多くが、二次加工を受けており、何等かの石器として使用されたものと思われる。75のように使用痕も認められるものもある。90～95は石核である。96～98は磨製石斧である。96は扁平な礫の一端に刃部を造り出している。97は刃部を含め多くを欠損している。全体に磨かれており磨製石斧とした。98は柄の部分に円錐状につくっている、刃部を含め多くを欠損している。断面形状は円形で、石材を考えると石斧ではないかもしれない。99・104は打製石斧である。99は刃部を剝離時に生じた鋭角な端部をそのまま利用している。100は厚みがかなりあり片面に原面をのこしている、刃部と思われるところには1カ所打撃を加えているのみで刃部を造るところまでは至っていない。未完成品か。101は周囲に調整が行われているが、刃部と思われる部分はまだ原面を残しており、100と同様未完成品か。102は両面に原面を残すものの鋭角な刃部を作り出している。103は中央の袂りが浅いが典型的な分銅型の石斧である。104は石材・調整を見ると石斧としてもよさそうだが、刃部も欠き断片であるので詳細は不明である。105・107～110は礫器である。やや大型の礫を利用しており、いずれも使用による激しい剝離が見られる。108・110は礫中央部に凹みがある、礫器に使用される以前に凹石として使われていたものか。106は礫表面に幾重にも

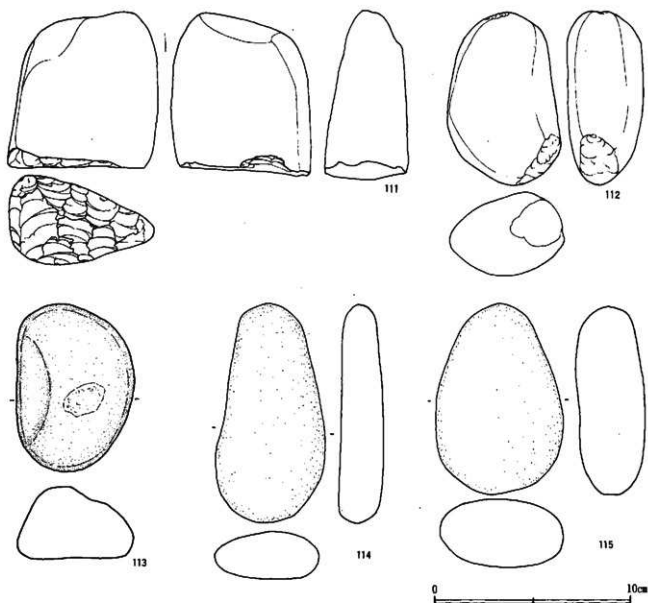




第87図 縄文時代石器実測図 (グリッド出土) 6

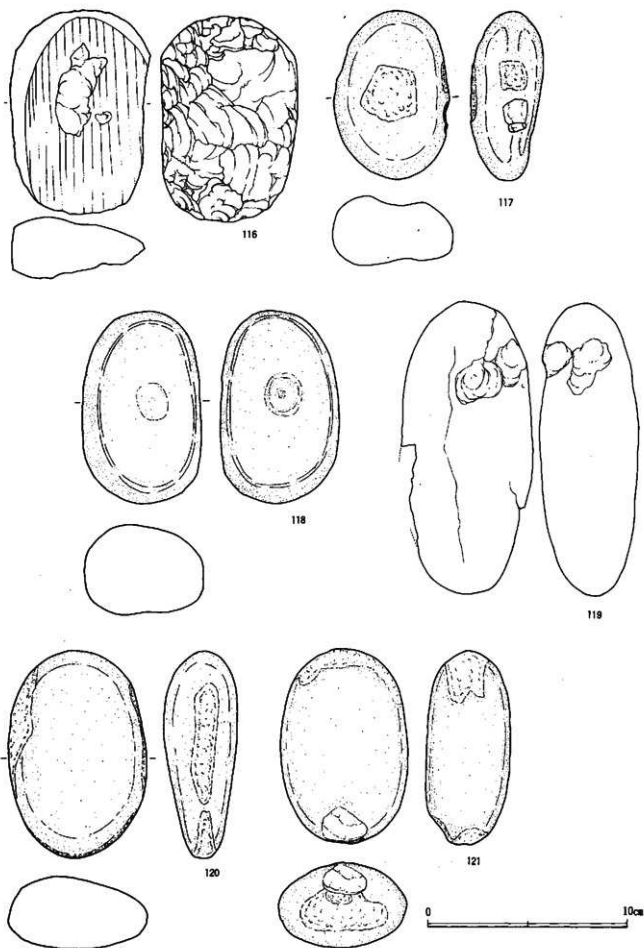


第88図 縄文時代石器実測図(グリッド出土) 7

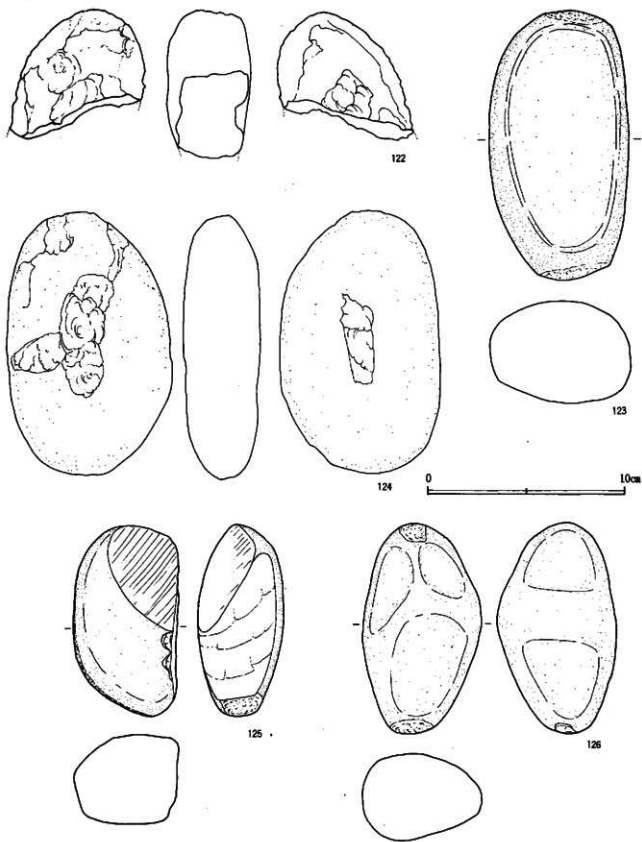


第89図 縄文時代石器実測図（グリッド出土） 8

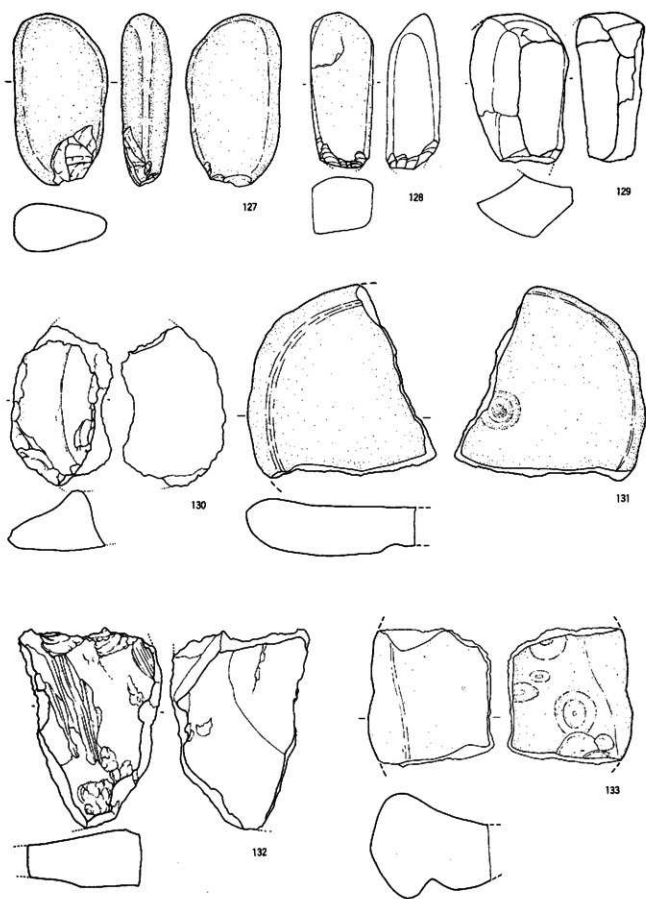
わたって幅約2mmの細い溝が引かれている。何かを研ぐのに用いたものか。111 116 118 120 122 126 129は磨石である。礫の周囲が使用によって摩滅してやや扁平になっている。118の様に礫の中央部が凹石様に凹んでいるものもある。112 119 128は敲石である。いずれも長軸の端部に使用の結果によると思われる剝離痕が見られる。113 117は凹石である。平坦部の中央付近に使用の結果と思われる凹みが見られる。また117のように側面も使用されることもある。130~136は石皿およびその破片である。136の原型に近いものはかきすべて破片である。肌が凹凸のある安山岩がその素材のほとんどである。使用の結果中央に向かって緩やかに薄くなっている。114・115は礫である。ほかにも観察しても使用痕等が認められない礫が少量ではあるが出土している、石材としては花崗岩や硬質の砂岩が多く、石器の素材と考えられないこともない。



第90図 縄文時代石器実測図（グリッド出土） 9



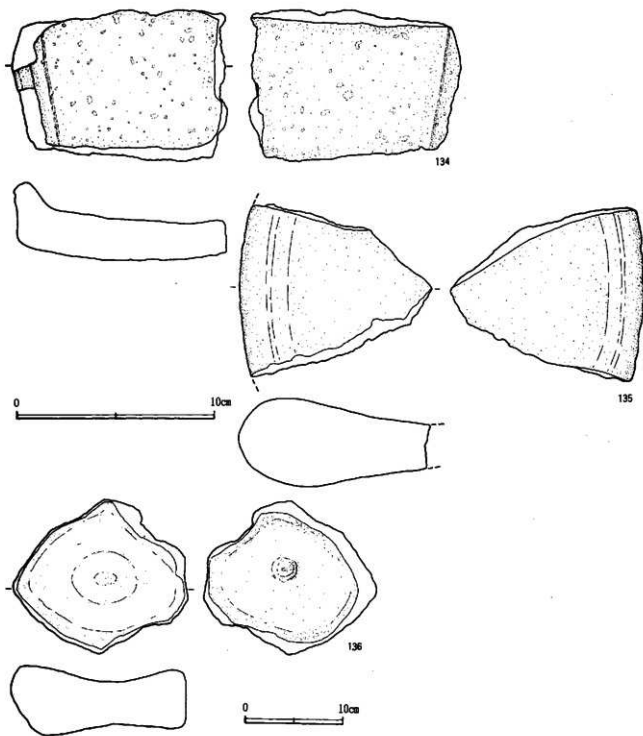
第91図 縄文時代石器実測図（グリッド出土） 10



第92図 縄文時代石器実測図 (グリッド出土)

11





第93図 縄文時代石器実測図（グリッド出土） 12

以上、縄文時代所産と思われる石器についてその概要を述べた。縄文時代の遺構の検出が少なかつたにもかかわらず遺構および包含層から多種多様の石器が多数出土している。

石鎌は形状が二等辺三角形を基本形にしたもので底辺部が腹抉し、脚を有するもの（凹基無茎鎌）が多く、底辺部の腹抉がないもの（平基無茎鎌）が少数である。大きさも多様で一定していない。縄文時代前期から中期に多く見られる特徴を持つことから当該時期に作られたものであろう。楔形石器も石鎌と同様に多量出土している、通常は階段状剝離様の潰れた平行する1対の刃部を有する。本遺跡出土の石器も多くがこれに該当するが、希に刃部を2対有するものもある。大きさは多少の差はあるもののおおむね同じ大きさである。石材は先土器時代のものと同様にチャートのもので小礫が多く使われているようであり、73のように接合して礫に完全復元出来るものもある。ほかには黒曜石・安山岩が希に石材として利用されている。縄文時代の楔形石器の出土例は近年増す傾向にあるが、本遺跡の出土量も多いほうではないかと考える。また、少数だが石核の出土もみられ、さらに二次加工を受けたチャートや黒曜石の剝片も多く出土している。この様な状況を考えると縄文時代（前期～中期と思われる）に本遺跡において石器の製作が行われていたことが十分に考えられる。

石斧は磨製石斧が4点と僅かであり、打製石斧にしても6点と全体的にも少ないと言える。磨石は13点と比較的多い、石材は多孔質の安山岩や砂岩が多く、まれに花崗岩・閃緑岩等が使われている。石皿は対をなす磨石の数に比べると出土数は少なくそれも破片が多い、完形品の出土はなかった。ただ136が唯一完形に近いと思われる。石材は全て多孔質の安山岩である。この他には敲石・石錐・スタンプ形石器等が少数だが出土している。



第6表 縄文時代石器計測表 (遺構出土)

採掘 番号	遺物		分類	計測値 (mm)			重量 (g)	打面	細部調整	石材	備考
	出土地点	番号		長さ	幅	厚さ					
1	P-11	-2	石鏃	1.6	1.3	0.2	0.4		両面	粘板岩	
2	0 6 1	-7	石鏃	(1.3)	1.5	0.3	0.5		両面	安山岩	b
3	0 5 9	-6	石鏃	1.9	1.4	0.4	0.7		両面	黒曜石	
4	0 5 8	-9	石鏃	2.0	1.4	0.4	8.8		両面	チャート	d
5	0 5 2	-16	石鏃	2.6	1.6	0.5	1.4		両面	チャート	a
6	0 0 5	-16	石鏃	2.8	1.3	0.5	1.0		両面	珪質頁岩	
7	P-2	-1	石鏃	2.9	1.6	0.4	1.6		両面	チャート	
8	0 6 0	-9	石鏃	3.4	(2.1)	0.4	2.3		両面	チャート	
9	0 5 2	-16	石鏃	1.6	(0.8)	(0.3)	0.3		両面	黒曜石	i
10	0 5 7	-2	石鏃	(1.9)	(0.9)	(0.4)	0.6		両面	黒曜石	
11	0 4 1	-5	石鏃	2.1	1.4	0.4	0.9		両面	黒曜石	
12	P-7	-4	石鏃	(1.9)	(1.7)	(0.4)	0.7		両面	黒曜石	a
13	0 5 8	-2	石鏃未製品	1.8	1.5	0.7	1.5		両面	黒曜石	b
14	0 7 2	-18	石鏃未製品	30.7	25.0	8.2	5.3		両面	メノウ	
15	0 6 3	-16	石鏃未製品	29.4	20.1	7.3	3.9		二側縁	チャート	c
16	0 6 2	-7	石鏃未製品	25.1	18.8	8.0	3.2		両面	黒曜石	c
17	0 7 7	-1	楔形石器	19.7	13.0	6.0	2.6		上下左右両端	チャート	
18	0 6 4	-2	楔形石器	20.4	18.9	5.5	2.2		上下両端	チャート	
19	0 1 8	-9	楔形石器	2.3	1.6	1.0	3.0		上下両端	黒曜石	
20	0 5 8	-5	楔形石器	25.8	17.8	8.1	3.0		上下両端	チャート	c
21	0 8 6	-11	楔形石器	17.4	23.4	9.6	4.5		上下両端	チャート	
22	0 5 8	-1	楔形石器	28.4	23.8	6.6	4.6		二側縁	チャート	
23	P-16	-2	楔形石器	22.9	28.6	10.5	7.5		上下両端	黒曜石	
24	0 6 2	-7	楔形石器	28.2	38.6	6.8	7.7		上下両端	チャート	b
25	0 6 2	-14	楔形石器	24.8	23.4	8.5	5.0		上下左右両端	チャート	
26	0 3 5	-3	楔形石器	30.3	19.4	5.6	3.3		半両面	チャート	
27	0 5 8	-9	楔形石器	18.6	8.5	5.0	0.7		部分的	チャート	c
28	0 4 4	-9	刮器	1.8	1.8	0.8	2.3		有	黒曜石	
29	P-16	-1	石鏃未製品	29.0	19.9	9.9	3.2		両面	黒曜石	a
30	P-16	-1	石鏃未製品	28.2	15.4	5.6	1.2		両面	黒曜石	b
31a	0 0 6	-6	石核	57.9	28.1	18.7	44.8		有	チャート	+b
31b	0 0 6	-2	剝片	16.1	32.1	8.2	4.3			チャート	
32	0 0 2	-15	楔形石器	33.2	22.8	8.9	7.9		上下両端	チャート	
33	0 5 8	-8	石核	26.7	20.8	9.7	5.7			黒曜石	
34	0 5 2	-18	石核	36.0	41.2	23.2	31.1			チャート	j
35	0 5 7	-10	石核	21.7	26.6	28.0	18.3			チャート	
36	0 5 1	-8	石核	34.5	35.4	19.0	22.9			チャート	
37	0 5 2	-8	石核				83.8			チャート	
38	P-7	-4	打製石斧片	(5.3)	5.3	2.6	94.3		両面	安山岩	b
39	0 8 0	-33	磨製石斧片	(4.7)	3.2	2.7	54.8		両面	緑泥片岩	b
40	0 1 0	-19	敲石	6.1	3.4	2.2	83.8			チャート	
41	0 3 0	-20	礮器	88.7	74.0	37.4	297.9		一端	砂岩	
42	0 9 9	-4	敲石	8.8	5.5	3.5	227.7			砂岩	
43	0 5 7	-9	磨石	(9.9)	(7.8)	3.9	46.0			砂岩	f
44	0 3 0	-19	敲石	10.6	7.4	4.8	479.4		有	安山岩	
45	0 8 6	-8	礮器	9.6	6.7	2.3	145.0		部分的	砂岩	
46	0 3 5	-18	磨石	8.3	6.6	3.8	279.7		有	砂岩	
47	0 5 6	-2	敲石	(8.6)	5.5	4.5	233.9		一端	凝灰岩	
48	0 5 8	-5	礮器	(6.7)	(7.1)	4.2	258.7		部分的	流紋岩	b
49	0 4 4	-17	礮片	9.3	3.9	1.2	72.9			砂岩	
50	0 3 0	-22	石鏃片	(18.0)	(8.5)	(8.1)	220.0		有	緑泥片岩	

第7表 縄文時代石器計測表(グリッド出土)

採出 番号	遺 物		分 類	計 測 値 (mm)			重量 (g)	打面	細部調整	石 材	備考
	出土地点	番号		長さ	幅	厚さ					
1	5 G-55	-3	石鏃	1.6	1.0	0.3	0.4	両面	黒曜石	a	
2	5 H-00	-2	石鏃	1.7	1.3	0.4	0.5	両面	黒曜石		
3	4 G-33	-2	石鏃	1.5	1.4	0.3	0.5	両面	珪質頁岩		
4	6 H-15	-3	石鏃	(1.5)	(1.0)	0.3	0.4	両面	凝灰岩	a	
5	6 H-15	-3	石鏃	(1.5)	(1.0)	0.2	0.3	両面	チャート	b	
6	7 I-15	-3	石鏃	1.8	(1.0)	0.2	0.4	両面	チャート		
7	4 G-76	-2	石鏃	1.9	(1.0)	0.5	0.8	両面	チャート	a	
8	4 H-73	-4	石鏃	1.9	1.5	0.5	9.0	両面	黒曜石		
9	5 F-46	-2	石鏃	2.0	(1.3)	0.5	0.8	両面	黒曜石		
10	4 G-71	-2	石鏃	(1.0)	1.6	0.3	0.6	両面	チャート		
11	一括	1	石鏃	2.3	1.4	0.2	0.5	両面	チャート	b	
12	4 G-26	-3	石鏃	2.2	1.7	0.5	1.1	両面	珪質頁岩	a	
13	5 G-一括	-2	石鏃	2.1	1.8	0.3	1.1	両面	チャート	a	
14	12G	-1	石鏃	2.5	1.2	3.4	1.2	両面	チャート		
15	4 G-56	-1	石鏃	2.1	1.7	0.5	1.0	両面	黒曜石		
16	5 G-23	-4	石鏃	2.4	1.9	0.7	1.2	両面	チャート		
17	一括	-1	石鏃	2.6	1.8	0.3	1.1	両面	チャート	a	
18	4 H-07	-2	石鏃	2.8	1.6	0.5	1.2	両面	黒曜石	c	
19	5 F-17	-2	石鏃	2.2	1.5	0.3	0.9	両面	チャート		
20	5 G-85	-3	石鏃	2.7	1.4	0.3	0.7	両面	黒曜石	a	
21	8 G-75	-3	石鏃	1.9	1.4	0.3	0.6	半両面	珪質頁岩		
22	6 H-65	-2	石鏃	2.2	2.0	0.6	2.4	両面	黒曜石	a	
23	7 E-73	-3	石鏃	2.1	1.6	0.3	1.2	両面	チャート		
24	4 G-57	-3	石鏃	2.3	1.2	0.4	1.1	両面	珪質頁岩		
25	5 G-85	-3	石鏃	(2.2)	(1.6)	0.5	1.5	両面	チャート	b	
26	一括	-1	石鏃	2.5	1.7	0.8	2.8	両面	チャート	c	
27	4 G-98	-2	石鏃	2.6	1.8	0.3	1.0	両面	黒曜石	a	
28	5 G-13	-1	石鏃	(1.1)	1.6	0.6	0.9	両面	黒曜石		
29	表採	-a	石鏃	3.1	2.5	0.7	5.2	両面	安山岩		
30	4 H-94	-2	石鏃	20.7	(12.3)	3.5	0.7	両面	チャート	e	
31	5 H-75	-3	石鏃	(18.5)	(13.2)	(4.2)	0.8	周辺	黒曜石		
32	8 H	-2	石鏃未製品	18.6	20.3	3.8	1.5	周辺	チャート	a	
33	4 G-85	-3	石鏃未製品	20.5	13.7	6.0	1.6	両面	黒曜石	a	
34	5 F-33	-2	石鏃	(21.0)	13.7	4.9	1.2	両面	チャート	b	
35	6 J-23	-1	石鏃	(20.3)	18.4	4.7	2.4	両面	チャート	a	
36	4 H-75	-3	石鏃未製品	24.9	20.3	8.8	4.2	両面	黒曜石	a	
37	5 H-54	-2	石鏃未製品	33.5	23.8	9.0	7.3	両面	チャート		
38	6 H-06	-3	石匙	7.0	5.0	0.9	24.5	周辺	凝灰岩	a	
39	7 G	-4	石匙	3.9	3.2	0.4	3.9	周辺	珪質頁岩		
40	一括	-1	楔形石器	16.7	13.7	9.9	2.0	上下両端	黒曜石	d	
41	4 H-05	-4	楔形石器	22.4	18.5	9.0	4.0	上下左右両端	チャート	c	
42	4 H-05	-2	楔形石器	17.9	16.8	9.8	3.2	上下左右両端	チャート		
43	4 G-38	-2	楔形石器	21.2	17.1	12.0	4.7	上下左右両端	チャート	b	
44	6 H-15	-3	楔形石器	21.1	8.2	9.0	1.3	上下両端	チャート	d	
45	6 H-15	-3	楔形石器	22.0	16.0	8.4	2.1	上下両端	チャート	e	
46	5 H-15	-4	楔形石器	28.3	14.7	7.1	2.7	上下両端	チャート	d	
47	5 H-一括	-2	楔形石器	36.2	13.1	6.3	3.3	上下両端	チャート	c	
48	4 H-93	-2	楔形石器	23.4	14.5	11.7	4.4	上下両端	チャート	f	
49	5 H-03	-2	楔形石器	23.0	13.5	9.8	4.4	上下両端	チャート	b	
50	5 H-47	-2	楔形石器	22.8	16.5	6.9	3.0	上下両端	チャート	b	

採洞 番号	遺物		分類	計測値(mm)			重量 (g)	打面	細部調整	石 材	備考
	出土地点	番号		長さ	幅	厚さ					
51	4H-26	-3	楔形石器	30.3	18.2	11.9	7.7	上下両端	チャート		a
52	4H-1括	-2	楔形石器	22.6	25.0	5.7	3.4	上下両端	チャート		c
53	5H-1括	-2	楔形石器	20.0	19.7	7.8	3.1	上下左右両端	チャート		a
54	7H-25	-3	楔形石器	20.8	25.7	8.0	3.4	上下両端	チャート		
55	7E-94	-1	楔形石器	16.5	24.3	8.7	4.1	上下左右両端	安山岩		a
56	5H-98	-2	楔形石器	26.1	18.5	9.0	4.4	上下両端	チャート		a
57	4H-62	-2	楔形石器	24.4	19.5	1.5	4.8	上下両端	黒曜石		a
58	7H-15	-3	楔形石器	24.6	18.1	7.8	3.9	上下両端	チャート		a
59	7E-74	-3	楔形石器	19.5	24.0	4.7	2.4	上下両端	黒曜石		
60	4G-18	-2	楔形石器	2.9	2.4	1.0	7.6	上下両端	チャート		a
61	5G-55	-3	楔形石器	21.6	19.5	10.8	5.0	上下両端	黒曜石		c
62	10E-35	-3	楔形石器	2.2	2.4	1.0	4.4	上下両端	黒曜石		
63	4H-67	-2	楔形石器	29.0	21.6	8.2	5.4	上下両端	チャート		
64	6H	-2	楔形石器	26.4	20.7	7.6	4.2	上下両端	チャート		a
65	7H-15	-3	楔形石器	28.7	25.5	7.2	4.1	上下両端	チャート		b
66	5H-59	-1	楔形石器	34.0	24.2	8.6	8.7	上下両端	チャート		
67	4I-96	-2	楔形石器	30.6	28.4	16.6	9.5	上下左右両端	チャート		
68	7E-33	-2	楔形石器	31.8	32.0	15.3	15.3	上下左右両端	メノウ		a
69	4H-47	-2	楔形石器	23.3	43.4	9.5	10.0	上下左右両端	チャート		b
70	5H-25	-4	楔形石器	43.0	30.5	20.9	22.5	上下両端	チャート		a
71	6H-05	-3	楔形石器	24.4	26.8	16.4	9.0	上下両端	チャート		b
72	5H	-3	剝片(二次)	27.6	36.4	10.8	9.8	両面	チャート		
73	4H-40	-2	剝片	4.3	3.7	2.0	15.3		チャート		a
	4H-40	-2	楔形石器				31.3				b
74	5H-66	-2	剝片(二次)	20.3	14.4	7.5	1.9	部分的	黒曜石		
75	6J-55	-1	剝片(使用)	26.3	14.6	13.3	3.2		珪質頁岩		
76	6H	-2	剝片(二次)	25.9	12.3	6.8	2.1	部分的	チャート		b
77	4G-26	-3	剝片(二次)	29.6	6.7	2.8	1.5	有	安山岩		b
78	4H-89	-2	剝片(二次)	20.1	22.0	13.2	4.2	有	黒曜石		a
79	4G-73	-6	剝片(二次)	22.3	23.4	7.6	3.4	片面	黒曜石		a
80	4H-29	-3	剝片(二次)	20.4	24.0	13.8	6.7	部分的	珪質頁岩		a
81	4H-40	-2	剝片(二次)	13.8	26.2	3.7	1.4	部分的	安山岩		c
82	4H-94	-2	剝片(二次)	34.3	14.6	7.2	3.1	部分的	安山岩		a
83	6E-35	-2	剝片	33.6	22.1	7.0	4.9	剝片	チャート		
84	7H-65	-3	剝片(二次)	25.4	34.2	5.9	3.9	部分的	チャート		a
85	4H-19	-2	剝片(二次)	37.8	30.1	8.6	9.2	両面	チャート		
86	8G-20	-1	剝片(二次)	28.8	26.4	13.6	11.4	周辺	チャート		
87	5G-1括	-2	剝片(二次)	45.7	21.2	13.9	11.3	一側縁	砂岩		b
88	7F-65	-2	削器	48.8	25.8	11.6	15.5	周辺	珪質頁岩		
89	4H-23	-4	剝片(二次)	54.9	37.2	14.1	27.0	周辺	チャート		b
90	7J-29	-1	石核	19.1	19.7	16.5	5.7	有	流紋岩		
91	3H-91	-2	石核	19.2	30.0	14.2	6.9	有	チャート		
92	4H-90	-2	石核	49.1	45.8	26.4	66.0		チャート		c
93	13H	-2	石核	2.5	2.6	2.6	14.4	有	黒曜石		
94	5H-62	-2	石核	42.2	75.5	33.1	80.3	有	チャート		
95	4I-31	-1	石核	32.9	24.1	17.8	13.1	有	チャート		

採回 番号	遺物 出土地点	番号	分類	計測値(mm)			重量 (g)	打面	細部調整	石 材	備考
				長さ	幅	厚さ					
96	7 K	-2	磨製石斧	6.2	4.2	1.1	46.7		全面	蛇紋岩	
97	4 H-47	-2	磨製石斧	(3.7)	(4.8)	(1.4)	33.8		片面	珪質頁岩	a
98	4 I-61	-2	磨製石斧	(5.3)	(3.5)	(3.0)	66.4		両面	砂岩	
99	9 I-35	-2	打製石斧	(4.8)	(6.0)	(1.2)	32.8		周辺	砂岩	
100	4 G-46	-2	礫器	(8.6)	(4.7)	(2.6)	32.6		半両面	頁岩	
101	7 F-15	-2	未打製石斧	(13.6)	(7.7)	(17.8)	183.1		周辺	變成岩	
102	4 H-38	-2	打製石斧	7.6	4.5	1.9	76.1		半両面	珪質頁岩	
103	3 H-97	-1	打製石斧	10.5	7.7	3.0	302.7		両面	砂岩	b
104	4 H-92	-2	打製石斧	(8.1)	(4.5)	(2.2)	72.1		片面	粘板岩	
105	5 H-89	-2	礫器	8.7	6.3	2.7	188.5		部分的	砂岩	
106	9 F- <sup>43</sup> <sub>40</sub>	-1	砥石	7.5	5.7	3.2	170.6		有	安山岩	
107	13 F- <sup>45</sup> <sub>39</sub>	-1	礫器	(10.8)	(8.6)	(2.7)	315.0		片面	安山岩	
108	15 H- <sup>58</sup> <sub>59</sub>	-2	礫器	10.2	9.1	5.2	680.0		一端	閃緑岩	凹み
109	4 H-49	-2	礫器	(7.1)	6.9	3.5	244.3		一端	花崗岩	b
110	4 H-一括	-2	礫器	(9.4)	6.1	5.1	351.8		一端	閃緑岩	e
111	4 H-66	-3	磨石	(8.0)	7.5	4.2	366.0			不明	
112	5 H-31	-2	蔽石	8.7	5.7	3.9	284.7			石英	
113	5 I-50	-2	磨石	8.3	5.8	3.7	247.8			砂岩	
114	5 H-02	-2	礫	10.7	5.6	2.4	203.1			花崗岩	a
115	4 H-17	-1	礫	9.3	6.4	3.3	271.5			砂岩	b
116	5 H-01	-2	磨石	12.1	69.4	(31.0)	144.6			安山岩	b
117	4 G-18	-2	磨石	8.4	5.8	3.4	227.7			花崗岩	d
118	4 H-07	-2	磨石	9.6	6.0	4.3	397.5		凹み	安山岩	b
119	4 G-76	-2	蔽石	14.3	6.8	5.0	655.0		凹み	閃緑岩	b
120	5 F-33	-2	磨石	10.1	(6.9)	3.7	337.5			砂岩	c
121	4 H-55	-3	蔽石	9.7	6.6	4.3	372.0			砂岩	b
122	9 G	-2	磨石	(7.2)	5.9	4.3	188.7			安山岩	
123	8 G	-5	磨石	(13.4)	7.1	4.7	680.0			砂岩	
124	4 H-14	-1	磨石	13.0	8.2	4.1	532.0		凹み	安山岩	b
125	7 E-25	-3	磨石	9.6	(6.1)	4.4	326.3			砂岩	a
126	4 H-一括	-2	磨石	10.3	5.9	4.4	326.3			不明	d
127	4 H-09	-2	礫器	(8.5)	4.7	2.5	138.8		一端	花崗岩	
128	4 G-08	-2	蔽石	(7.8)	3.3	2.8	121.6			砂岩	
129	7 E-40	-2	磨石	(7.5)	(4.5)	(3.9)	138.7			砂岩	
130	5 I-61	-1	石皿片	(7.9)	(5.0)	(2.6)	106.2			安山岩	
131	4 H-16	-2	石皿片	(8.5)	(9.7)	(2.7)	284.0		凹み	安山岩	c
132	4 G-49	-1	石皿片	(9.9)	(6.8)	(3.2)	147.3		両面	安山岩	
133	6 I-70	-2	石皿片	(6.7)	(6.0)	(5.5)	217.3			安山岩	
134	4 H-06	-1	石皿	(7.4)	(10.7)	(3.2)	170.9			安山岩	
135	15 E	-1	石皿片	(8.7)	(9.7)	(4.4)	408.6		有	安山岩	
136	4 H-26	-3	石皿	(15.4)	(17.4)	(7.2)	2132.0		凹み	安山岩	e

### Ⅲ. 古墳時代の調査

#### 1. 遺構と遺物

##### a. 住居跡

2次にわたる調査で検出された遺構のうち、最も多く検出されたのが古墳時代の住居跡であり、その数は70軒を数える。調査区のはほぼ全域にわたり分布し、ほとんどが単独で検出され、重複するものはきわめて僅かであった。ここでは遺構から出土した遺物とともにその概要を検出された順に述べることとする。なお、図示した土器の観察結果は各住居跡ごとに表にて遺物挿図に続けて示した。

##### 002号住居跡(第94図、図版42・65)

**遺構** 調査区中央やや西寄り(F-9)に位置する。平面形状は6.4m×5.9mの隅丸方形。確認面からの深さは最大で50cmを測る。床面は全体に軟弱で凹凸が激しい。炉は検出されず床面に焼土が4カ所検出されたにとどまった。柱穴様小掘り込みが焼土の下部からの1カ所のみ検出された以外遺構に伴う施設は検出されなかった。

**遺物** 1, 2は高杯である。1の杯部はゆるやかに内湾し碗形を呈し、脚部が大きく広がり、杯部をしのぎ、4カ所の穿孔をもつ。2は杯部である、1と同様にゆるやかに内湾する。3は小型の器台である。器受部は皿形を呈し、器受底部には孔が穿たれている。また脚部には一段6カ所の穿孔を持つと思われる。4は土玉で、厚さ29mm、幅27mm、孔径4mmを測り表面を磨いて形を整えている。

##### 003号住居跡(第95図、図版42・86)

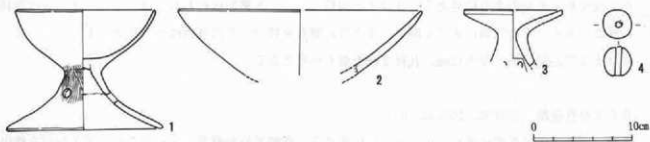
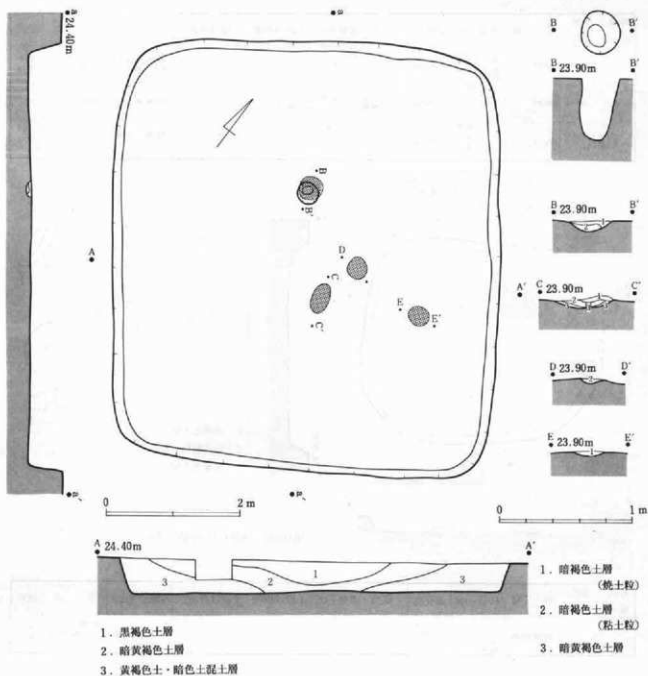
**遺構** 002号住居跡の北東に(F-9)に位置する。平面形状は(3.6m)×3.0mの隅丸方形。確認面からの深さは最大で30cmを測る。床面は全体に軟弱である。炉は検出されず、また柱穴等の施設の検出は無かった。

**遺物** 1は高杯の脚部の破片である。2は土製の紡錘車である。直径5.3cm、厚さ2cm、孔径0.8cmを測る、表面はナデにより丁寧に整形されており焼成は良好である。

##### 004号住居跡(第96図、図版42)

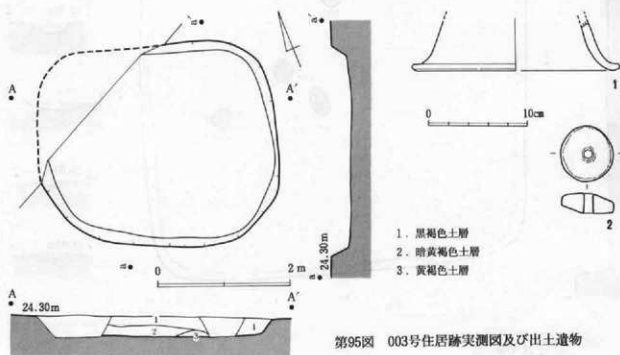
**遺構** 調査区中央やや北寄り(G-8)に位置する。平面形状は5.7m×5.0mの隅丸方形。確認面からの深さは最大で50cmを測る。床面は全体に平坦で中央部を中心に堅致である。炉は中央やや西寄りに検出された。柱穴がほぼ対角線上に4カ所検出された。いずれも径が40cm前後、深さが30cm～50cmと規模が揃っている。また住居の北西隅と南東隅には床面より一段低い凹みがあるが性格などは不明である。

**遺物** 1～3は甕の口縁部である。1は外面頸部以下にハケ様工具による整形が行われ、その他はナデによる整形である。2は口縁部には折った布の角を用いたと思われる連続の押捺が行われて、あた



第94图 002号住居跡実測図及び出土遺物

坪図 番号	遺物 番号	器 種	法量 cm	遺存度	成形・調整手法	上段は内面・下段は外面	胎 土	色 調	焼成
1	2,8	高杯	口 14.0 底 15.8 高 12.0 最大 24.5	80%	ヘラミガキ ナゲ		粗織、赤色 粒子多量	暗褐色	やや 不良
2	2,8P-1	高杯		33%	ヘラによるていねいなミガキ ヘラ調整のものもヘラミガキ		粗織多量	明褐色	良
3	3,12, 14	器台	9.8 9.4 9.3	50%	ヘラミガキ ヨコナゲ、ヘラミガキ		粗織やや多い	暗茶褐色	良



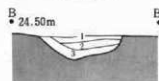
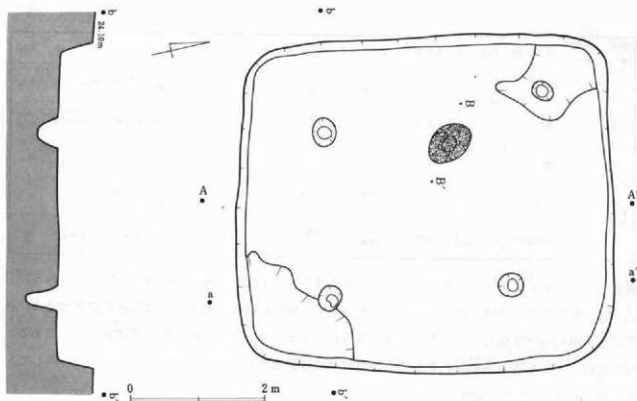
第95図 003号住居跡実測図及び出土遺物

坪図 番号	遺物 番号	器 種	法量 cm	遺存度	成形・調整手法	上段は内面・下段は外面	胎 土	色 調	焼成
1	3	高杯脚部	口 20.8 底 高 最大	12%	ヨコナゲ ナゲ		中粒砂多量	赤褐色 内面暗黄褐色	やや 不良

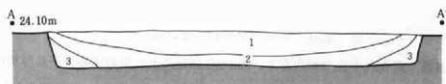
かも段を有するのように見える。3は1と同様だが、ハケ整形は行われてはいない。4、5は高杯の脚部である。4は外側に大きく開き、4カ所に穿孔を持つ。5は外面にヘラミガキを行っている。6は土玉で、幅13mm、厚さ12mm、孔径3mmを測り小形である。

#### 005号住居跡(第97図、図版43・65)

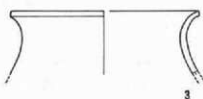
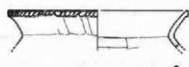
遺構 調査区中央部東はずれ(I-9)に位置する。南側半分を攪乱により削られ北側半分のみ検出された。平面形状は一边4.3mの隅丸方形と考えられる。確認面からの深さは最大で45cmを測る。床面は全体に平坦で中央部を中心に堅致である。炉は検出されずその存在は不明、柱穴は東の壁際に1カ所検出された、径40cm深さ20cmと浅い。



1. 暗黄褐色土層 (焼土粒)
2. 焼土粒・焼土ブロック瓦土層
3. 生焼土層 (地山)



1. 黒褐色土層
2. 暗黄褐色土層 (ロームブロック)
3. 暗褐色土層



第96図 004号住居跡実測図及び出土遺物



母図 番号	遺物 番号	器 種	法量 cm	遺存度	成形・調整手法 上段は内面・下段は外面	胎土	色調	焼成
1	20.	甕	口底 20.5 高 5.9 最大 17.9	6%	ヘラナゲ ハケ調整、ヨコナゲ	白色中粒砂 練少量	黒褐色	不良
2	14.	甕	18.7 3.9	25%	ヘラナゲ、ヘラケズリ ヘラナゲ	中粒砂多量	暗赤褐色 内面暗黄褐色	やや 不良
3	5.	甕	18.7 6.7	20%	ヨコナゲ、ヘラケズリ、ヘラナゲ ヨコナゲ	中粒砂多量	暗褐色 内面黄褐色	良
4	21.	高杯脚部	18.0 4.9	12%	ハケ調整、ヘラミガキ ヘラミガキ	中粒の黒色 粒子多量	明黄褐色	良
5	3.16. 18	高杯脚部	12.4 7.2	30%	ヘラナゲ、ハケ調整 ハケ調整、ヘラミガキ	中粒砂多量	暗黄褐色	良

遺物 1は口縁部を欠くが、胴部の下半部に最大径をもつ土師器である、形状から壺と思われる。2は小型の鉢である。3は口縁部のみで下半部は欠く、壺の口縁部である。4は高杯の杯部である、杯底部との境に明瞭な稜をもつ。5～7は小型器台である。5・6はほぼ完形、7は脚部のみである。脚部にはいずれも3カ所の穿孔を有するが器底部には穿孔を有しない。8は土玉で半分欠損している。幅(35mm)、厚さ(32mm)を測る。

#### 006号住居跡(第98・99図、図版43・66・86)

遺構 調査区中央やや西寄り、002号住居跡の北に位置する。平面形状は4.5m×4.0mの隅丸方形。確認面からの深さは最大で80cmを測る。床面は平坦で一様に踏み固められている。炉は中央やや北側に検出された。柱穴は検出されなかったが、住居南側の壁際には貯蔵穴(56cm×56cm×52cm)が1カ所検出された。床面上には焼土が2カ所、炭化材が壁に沿うかたちで検出され、本住居が焼失住居であることを伺わせる。またの南東隅には粘土の堆積も見られた。

遺物 1・2は甕である。1は口縁部には指頭による押捺が連続してみられる。2はほぼ完形である、口縁部にヘラ先による刻みを一部施している。3は壺の口縁部である。4は壺の頸部と思われる、粘土紐を貼り付けその上にヘラ先による刻みを連続して施している。5～8は高杯の脚部であると思われる。5～7はともに3カ所に穿孔を有しているが、6・7は裾を大きく広げる5と趣を異にしており器台の可能性も考えられる。8は穿孔を持たず、形状などを考えると台付甕の脚台部の可能性が考えられる。9は器台の脚部で、3カ所に穿孔を有し、さらに器受底部に穿孔を穿つ。11・12は土玉である。11は厚さ37mm、幅36mm、孔径5mm、12は厚さ34mm、幅36mm、孔径5mmを測る。ともに孔は一方より開けられ、表面を丁寧に磨いて形を整えている。13は銅鐻の先端部である、柳葉形を呈すると考えられるが、基部が欠損しているので詳細は不明である。

#### 007号住居跡(第100図、図版43・66)

遺構 調査区のはほぼ中央(H-9)に位置する。平面形状は4.2m×4.1mの隅丸方形。確認面からの深さは最大で55cmを測る。床面は平坦で一様に踏み固められている。炉は北側やや東寄りに検出され



採回 番号	遺物 番号	器 種	法量 cm	遺存度	成形・調整手法	上段は内面・下段は外面	胎土	色調	焼成
1	8	甕	口 底 6.8 高 18.7 最大 20.6 9.2	66%	ヘラナゲ ナゲ, ヘラナゲ		細砂多量	暗茶褐色 内面暗赤褐色	良
2	5	鉢	6.7 10.2 8.8	25%	ナゲ, ヘケナゲ ナゲ		細砂多量	暗茶褐色	やや 不良
3	10	甕	6.2	33%	ヨコナゲ ヨコナゲ		粘土粒子多 量	暗茶褐色	良
4	12	高杯杯部	14.4 7.3	50%	ヘラミガキ ヘラミガキ		中粒砂多量	茶褐色	良
5	11	蹄台	8.0 9.4 8.35	100%	ヨコナゲ, ヘラナゲ ヨコナゲ, ナゲ		中粒砂多量	茶褐色	良
6	9	蹄台	10.1 13.5 10.1	83%	ヨコナゲ, ヘラミガキ, ナゲ ヨコナゲ		中粒砂多量	黄褐色	良
7	15	蹄台	12.2 8.9	50%	ヘラケズリ, ナゲ, ヘラナゲ ヘラナゲ, ヘラミガキ		中粒砂多量	暗褐色	良

た。柱穴は検出されなかったが、住居南東隅の壁際には貯蔵穴（径41cm深さ35cm）が1カ所検出された。床面上には焼土の堆積が3カ所、さらに炭化材が多量に検出され、本住居が焼失住居であることを伺わせる。

遺物 1は甕の下半部である、内外面ともススの付着がみられる。2は甕の口縁部である、頸部より直線的に開口する。1と2は同一個体と思われる。3は高杯の杯部である、杯底部付近には稜を持たず碗様に開口する。4・5は土玉である、4は厚さ33mm、幅36mm、孔径4mmを測る、一部を欠損しているが丁寧に磨いて形を整えている。5は厚さ29mm、幅32mm、孔径4mmを測る、表面を丁寧に磨いているが整形は良くない。

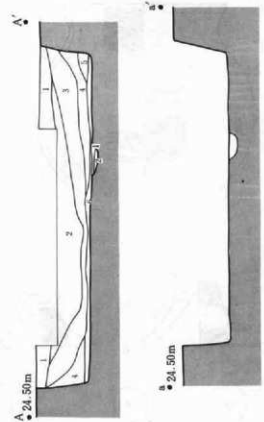
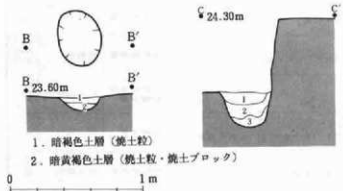
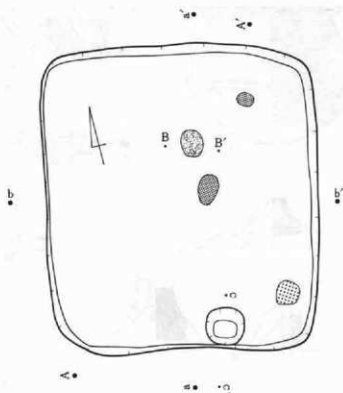
#### 008号住居跡（第101図、図版44・66）

遺構 007号住居跡の北側に隣接して位置する。平面形状は4.4m×3.9mの隅丸方形。確認面からの深さは最大で40cmを測る。床面は平坦で一様にやや軟弱である。炉は中央やや西寄りに検出された。柱穴は検出されなかったが、住居北西隅の壁際には貯蔵穴（52cm×32cm×32cm）が1カ所検出された。遺物 1は甕で内外面ともナゲにより整形されている、断面では粘土の輪痕度も観察された。2は小型の鉢である。3は高杯の脚部である、穿孔が3カ所に穿ってある。4は土玉である、厚さ30mm、幅36mm、孔径6mmを測る。5は管玉である、4分の3を欠損している、方形に近い形状をすと考える。

#### 009号住居跡（第102図、図版44）

遺構 調査区中央西端、002号住居跡の南西に隣接する。平面形状は3.9m×3.8mの隅丸方形。確認面からの深さは最大で50cmを測る。床面は平坦で一様に踏み固められている。炉は北側やや東寄りに検出された。柱穴は検出されなかった。東側壁際の床面上に少量の粘土の堆積が見られた。

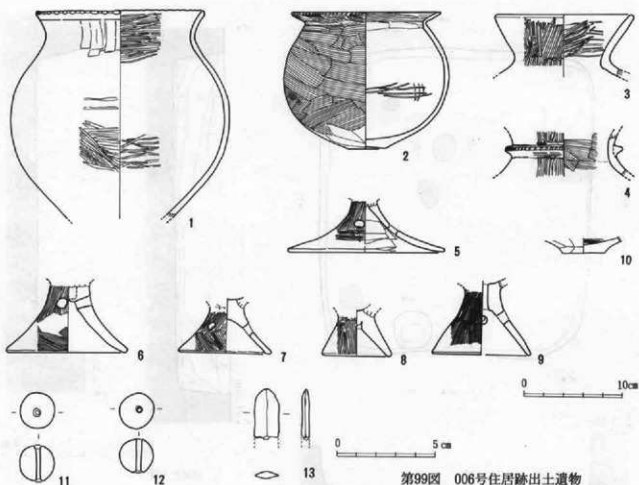
遺物 1は甕である、胴下半を欠損する。2は甕の底部である。3は高杯の脚部である。他の土器と



1. 黒褐色土層
2. 黒色土層
3. 暗褐色土層
4. 暗黄褐色土層
5. 暗黄褐色土層 (焼土粒)
6. 暗黄褐色土層 (焼土粒・炭化材・炭化粒)

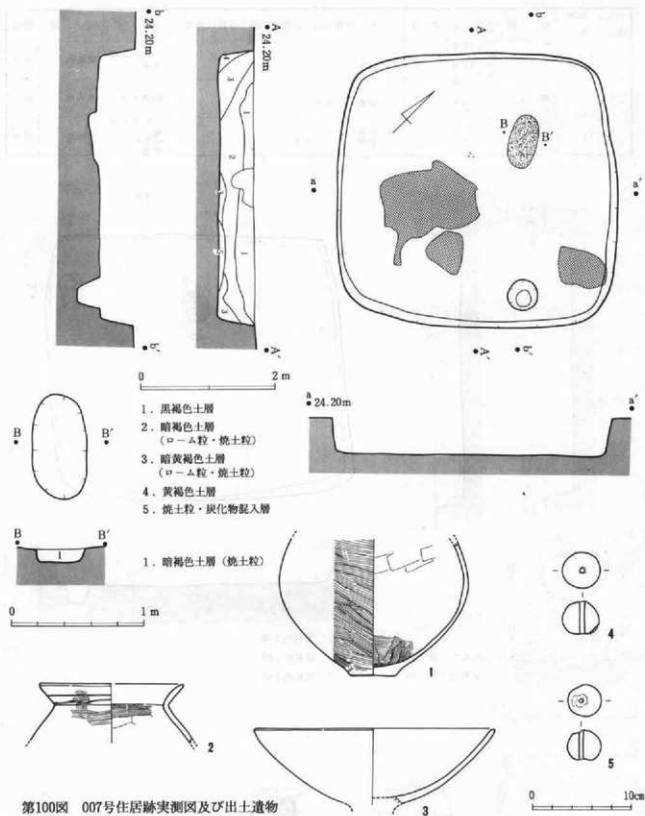
1. 暗褐色土層 (焼土粒・炭化物)
2. 暗褐色土層 (焼土粒・炭化物)
3. 暗黄褐色土層

第98図 006号住居跡実測図



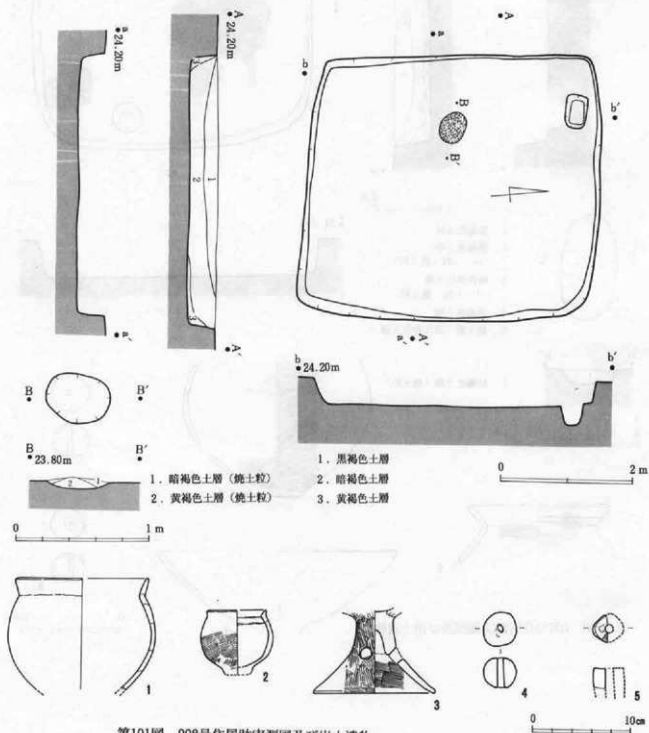
第99図 006号住居跡出土遺物

採回 番号	遺物 番号	器 種	法量 cm	遺存度	成形・調整手法 上段は内面・下段は外面	胎土 色	調 色	焼成
1	8,14, 15,18	甕	口 16.7 底高 20.8 最大 21.8 15.3 4.3 13.8 16.9 14.0	20%	ヘラナゲ ヨコナゲ (スス付着)	中粒砂少量	灰褐色	良
2	1,7	甕	4.3 13.8 16.9 14.0	99%	ヘラナゲ ハケ調整 (ヨコ), ヘラケズリ	中粒砂多量	茶褐色	やや 不良
3	11	壺口縁部	6.4	33%	ハケ調整 ヘラミガキ	中粒砂多量 細砂少量	暗茶褐色	良
4	4	壺頸部		8%	ハケ調整ナゲ ハケヘラミガキ, ヘラケズリ, ヘラミガキ	細砂多量	暗赤褐色	良
5	4,8,13 28	高杯	15.9 5.0	50%	ヘラケズリ ヘラケズリ, ヨコナゲ	中粒砂多量	暗茶褐色	良
6	8	高杯	12.0 6.7	30%	ハケ調整ナゲ ヘラミガキ, ハケメ (スス付着)	中粒砂少量	暗黄褐色	良
7	3,8	高杯	9.2 5.4	40%	ヘラによる成形 ヘラミガキ	中粒砂多量	暗黄褐色	良
8	8	台付薬台	7.2 4.6	41%	ヘラによる成形 ヘラミガキ	中粒砂少量	暗褐色	良
9	14	薬台	10.0 7.3	16%	ナゲ ハケ調整, ヨコナゲ	中粒砂多量	暗褐色～黒 褐色	良
10	8	甕底部	4.2	16%	ハケメ及びヘラケズリ ヘラケズリ	雲母粒砂砂	赤褐色 内面黒褐色	良



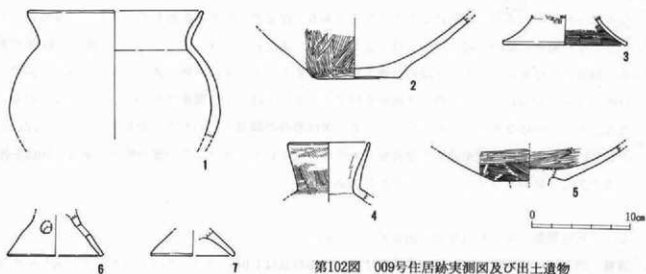
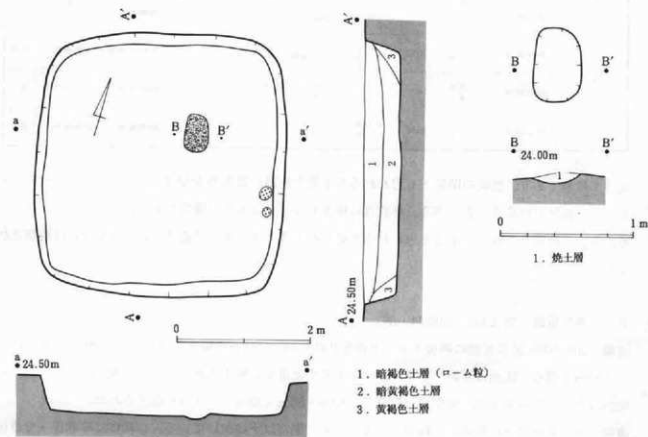
第100図 007号住居跡実測図及び出土遺物

挿図 番号	遺物 番号	器 種	法量 cm	遺存度	成形・調整手法	上段は内面・下段は外面	胎土	色調	焼成
1	1,3,5, 9,14	甕	口 13.2 底 高 11.9 最大14.7 5.9	90%	全面ナデ		白色の細礫 多量	黒褐色	不良
2	1	甕	6.2 7.2	25%	ナデ ハケ調整, イガキ		細礫多量	赤褐色	良
3	11	高杯	12.3 8.3	50%	ハケ調整, ナデ ハケ調整, ヘライガキ		中粒砂を多量 赤色粒子を 少量	明褐色	良



第101図 008号住居跡実測図及び出土遺物

採図 番号	遺物 番号	器 種	法量 cm	遺存度	成形・調整手法	上段は内面・下段は外面	胎土	色調	焼成
1	2, 5, 6, 7, 8, 9, 11	甕	口底 高最大 4.5 14.5	33%	ヘラケズリ, ヘラケズリ, ナデ(スス付着), ハケ調整		中粒砂多量	暗茶褐色	やや 不良
2	2, 6	甕	24.0	11%	ハケ調整, ヨコナデ, ヘラケズリ ハケ調整, ヨコナデ		中粒砂多量	黒褐色 内面暗褐色	良
3	10	高杯	24.0 7.5	50%	ヘラミガキ ヘラミガキ		粗砂少量 中粒砂多量	赤褐色	良



第102図 009号住居跡実測図及び出土遺物



挿図 番号	遺物 番号	器 種	法量 cm	埋存度	成形・調整手法 上段は内面・下段は外面	胎 土	色 調	焼成
1	10,12	甕	口 17.4 底 12.7 最大21.1	33%	ヘラナゲ ヘラナゲ, ナゲ	細礫やや多い	茶褐色	良
2	15	甕底部	8.5	11%	ヘラミガキ ヘラミガキ	中粒砂を多量 粘土, 礫多量	灰褐色	不良
3	3,10	高杯脚部	16.8	16%	ナゲ, ハケナゲ, ハケ調整 ハケ, ナゲ	長石粒多量	灰褐色 内面暗褐色	良
4	13	壺口縁部	8.3 5.8	33%	ヘラナゲ, ナゲ ミガキ, ハケ調整一部ヘラミガキ	細礫多量	暗茶褐色, 黒褐色部分あり	良
5	10,11	高杯杯部	7.0 3.6	20%	ヘラミガキ, ハケ調整, ヘラミガキ	中粒砂多量	暗茶褐色	不良
6	3	器台脚部	9.6 4.2	16%	ヘラケズリ, (ヘラ?) ナゲ ヘラケズリ, ナゲ	細礫多量	茶褐色 外面黒斑有り	良
7	3	器台脚部	8.3 2.6	25%	ハケ調整, ナゲ ナゲ, 軽いヘラミガキ	細礫多量	淡茶褐色	良

比べて薄手であり、焼成の関係とも思われるが土器の色調が須恵質を呈する。4は壺の口縁部である。5は高杯の杯底部付近である、杯底部に稜をもつ。6は器台の脚部である、穿孔は3カ所穿つと考える。7は器台の脚部であると思われるが破片が下部すぎて決定は避けたい、なお穿孔は観察されない。

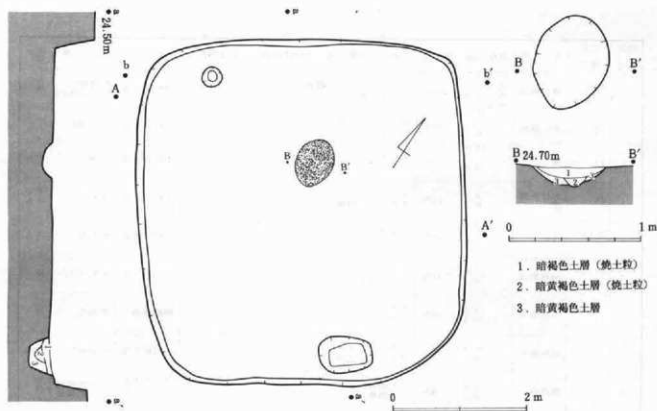
#### 010号住居跡 (第103図、図版44・66)

遺構 009号住居跡の東側に隣接する。平面形状は5.2m×5.0mの隅丸方形。確認面からの深さは最大で54cmを測る。床面は平坦である。炉は中央やや北寄りに検出された。柱穴は東の隅に1カ所のみ検出された。住居南西隅の壁際には貯蔵穴(80cm×55cm×32cm)が1カ所検出された。

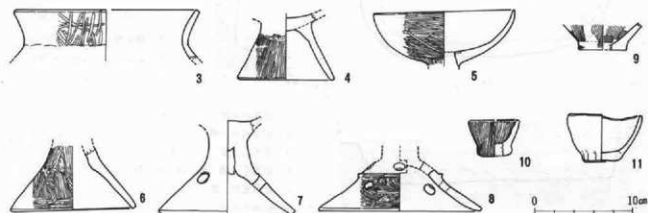
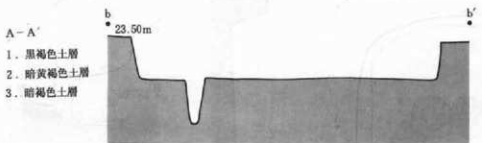
遺物 1・2は複合口縁壺の口縁部である、ともに胴部以下は欠いている。口縁には棒状浮文をほぼ等間隔に一周にわたり貼り付けている。また棒状浮文の上には細い縄状のもので刻みを施している。頸部には粘土の円形浮文を2個一組で4対貼り付けていると思われる。2も1と同様口縁部に棒状浮文を貼り付けているが、間隔はより広くなっており、浮文の上に刻みを加える工具もヘラ様になっている。また複合口縁の下端にはヘラ様工具で刻みを一周にわたり施している。3は甕の口縁部である、頸部以下は欠いている。4は台付甕の脚台部である。5～7は高杯である。5は杯部で、脚部とは接合部分で割られている、形状は碗形を呈する。6・7はともに脚部であるが、6には穿孔を穿っていないが、7には3カ所の穿孔を穿っている。8は器台の脚部と思われる。脚を大きく開き中段に稜を持ち、稜の上下に位置を違えて穿孔を4カ所に穿っている。9は小型の甕の底部である。10は手捏土器である、鉢形を呈する。11は小型の鉢である。

#### 011号住居跡 (第104～106図、図版45・67・68)

遺構 調査区中央西側(F-10)に位置する。平面形状は4.0m×3.5mの隅丸方形。確認面からの深

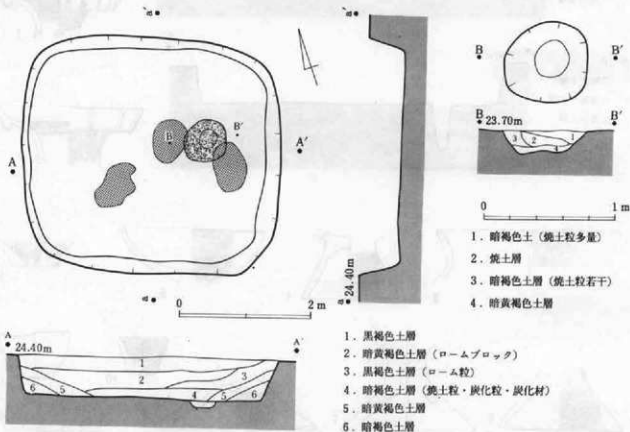


1. 暗褐色土层 (纯土粒)
2. 暗黄褐色土层 (纯土粒)
3. 暗黄褐色土层

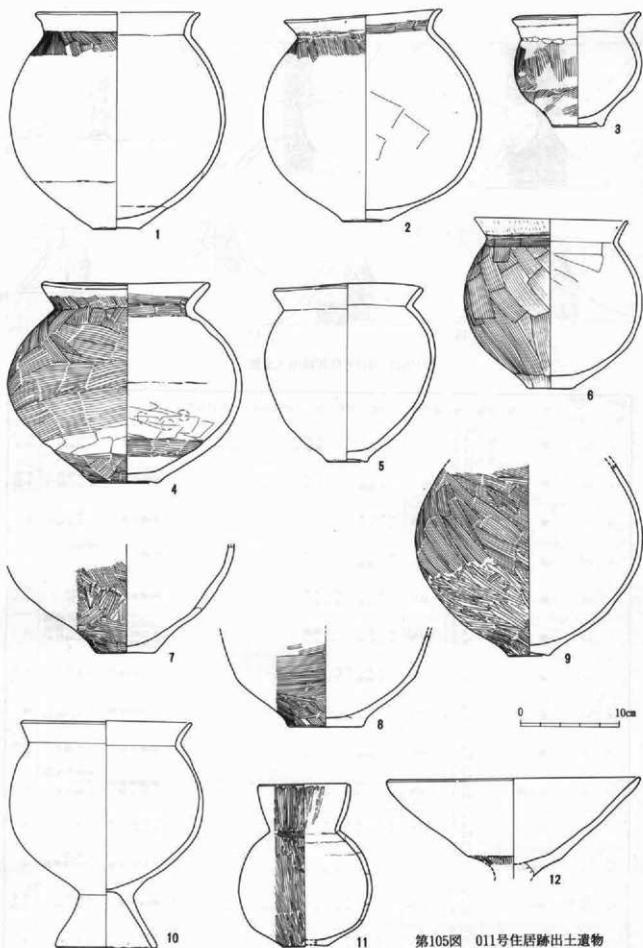


第103图 010号住居跡実測図及び出土遺物

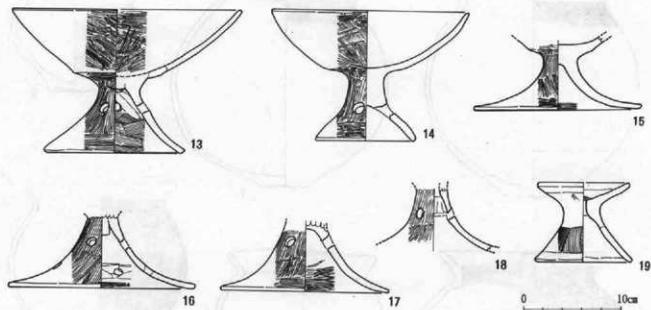
採回 番号	遺物 番号	器 種	法量 cm	遺存度	成形・調整手法	上段は内面・下段は外面	胎 土	色 調	焼成
1	12.16	窪口縁部	口底 12.7 5.0 高さ 最大 15.0	33%	ヘラミガキ、ハケ調整 ヘラナゲ後ハケメ		中粒砂少量	淡黄褐色 内面明褐色	良
2	2.12, 21	窪口縁部	6.1 18.8	26%	細いヘラミガキ ヘラナゲ		中粒砂多量	暗黄褐色	やや 不良
3	21	甕	4.9	6%	ヨコナゲ ナゲ、ヘラミガキ		中粒砂多量	黒褐色	不良
4	20	台付腰脚部	9.7 6.7	25%	ナゲ ナゲ、ハケ調整		中粒砂多量	茶褐色	やや 不良
5	2.13, 21	高杯	14.0 5.6	60%	ヘラミガキ ヘラミガキ		中粒砂多量	暗黄褐色	良
6	2.12, 13.14	高杯脚部	12.6 6.4	41%	ナゲ ヘラミガキ		中粒砂少量	暗黄褐色	良
7	11.17	高杯脚部	13.8 9.4	40%	ナゲ ヘラナゲ		細砂多量	茶褐色	良
8	1.10	高杯器台	16.3 4.1	40%	ヘラナゲ、ナゲ ナゲ、ヘラミガキ		中粒砂多量	暗黄褐色	不良
9	1.18	甕底部	4.8 2.5	8%	ハケ調整、ナゲ ハケ調整、ヘラナゲ		長石粒多量 (1~2mm 大)	外面暗褐色 内面灰褐色	良
10	13	手捏土器	5.1 3.0 3.6	33%	ヘラミガキ ハケ調整		細砂やや多い	黒褐色 内面暗黄褐色	良
11	18	小型鉢	7~7.5 3.2~3.8 4.7	100%	ナゲ ヘラナゲ、ナゲ		細砂やや多い	茶褐色	良



第104図 011号住居跡実測図



第105图 011号住居跡出土遺物



第106図 011号住居跡出土遺物

押図 番号	遺物 番号	器 種	法量 cm	遺存 残	成形・調整手法 上段は内面・下段は外面	胎 土	色 調	焼 成
1	14, (32)	甕	口 16.4 底 4.5 高 21.8 最大 21.6 15.7 4.8	50%	ハケメナダ, ヘラナダ ヘラナダ, ハケ調整ヨコ, ヘラミガキ	粗織多量	黒褐色 内面褐色	やや 不良
2	12	甕	21.35 21.8 13.0 5.95 16.5 12.95	90%	ヨコナダ, ヘラナダ ハケ調整, ヘラケズリ, ヘラナダ	粗織多量	暗茶褐色 内面暗褐色	やや 不良
3	2	甕	16.7 6.6 20.9 23.2 14.7 4.1 17.75 17.1	100%	ハケナダ ヨコナダ	粗織多量	明褐色 内面暗褐色	良
4	29	甕	16.7 6.6 20.9 23.2 14.7 4.1 17.75 17.1	96%	ヨコナダ, ヘラケズリ ハケ調整	粗織やや多 い	暗黄褐色 1部暗赤褐 色	不良
5	23	甕	15.3 4.7 16.9	90%	ヘラヨコナダ, ナダ ハケ調整全面ナダ	粗織多量	暗褐色～ 暗紅色	やや 不良
6	24	甕	15.3 4.7 16.9	100%	ヨコナダ, ハケ調整 ヨコナダ, ヘラナダ	粗織は若干 赤色粒子, 石灰粒	全体に暗褐 色 暗褐色に 赤褐色が まじる	良
7	16	甕	6.0 10.8	33%	ミガキ, ナダ ハケ調整, 下部のみミガキ	中粒砂多量	暗褐色	不良
8	20	甕	7.7 4.1	33%	ハケナダ ヨコハケ調整	中粒砂多量	茶褐色 内面暗褐色	良
9	22	甕	4.1 18.9 22.6 17.3 10.0 22.3	45%	ナダ ハケ調整, ヘラミガキ	粗織多量	暗茶褐色	やや 良
10	18	台付甕	9.3 4.5 16.1 13.5 25.5	100%	ヨコナダ, ヘラナダのちミガキ, ヘラナダ ヨコナダ, ヘラナダ	粗織多量長 石粒少量	黄褐色を呈 する 赤褐色を呈 する	良
11	13	甕	9.8	75%	タテヘラミガキ, ヘラナダ タテヘラミガキ, ヘラミガキ	中粒砂多量 赤色粒子	茶褐色	良
12	15	高杯杯部	9.8	50%	ヘラナダ ヘラナダ, タテヘラナダ	中粒砂多量	赤褐色 内面暗茶褐 色	良
13	10, 16, 17	高杯	23.0 14.1 14.6	90%	ヘラミガキ 上ヘラミガキ, 外ヘラミガキ, ヘラナダ	粗織多量	赤褐色 内面黒色	やや 不良
14	26, 27, 29	高杯	20.2 10.3 13.3	100%	ヘラミガキ, ヨコナダ ヘラミガキ, ヘラナダ	粗織やや多 い	茶褐色	良

脚部 番号	遺物 番号	器 種	法量 cm	遺存度	成形・調整手法 上段は内面・下段は外面	胎土	色調	焼成
15	30	高杯脚部	口 底 高 最大 17.1 7.6	50%	ナゲ ヘラミガキ、ハケメナゲ	中粒砂やや 多い	淡黄褐色	良
16	28	高杯	18.8 7.0	50%	ヘラミガキ、ナゲ、ケズリ、ミガキ	中粒砂少量 中粒の赤色 粒子多量	淡黄褐色	良
17	19	高杯	17.1 7.2	45%	ヘラミガキ、ヨコナゲ	中粒砂少量	暗黄褐色	やや 不良
18	21	高杯		40%	ヘラケズリ、ミガキ ナゲ	細砂多量	暗黄褐色	不良
19	25	器台	9.4 9.8 7.9	70%	ナゲ ヘラヨコナゲ、ハケメナゲ	細砂多量	暗黄褐色	良

さは最大で60cmを測る。床面は平坦で一様に踏み固められており堅い。炉は中央やや東寄りに検出された。柱穴は検出されなかった。焼土の堆積が3カ所にみられた。

遺物 1～9は甕である。口縁部が頸部から外反して立ち上がっている、胴部の中位前後に最大径を有し、全体として球形に近い形状を示す。3はやや小形であるが完形である、輪積痕が観察される。7～9は胴下半部のみである。10は完形の台付甕で焼成は非常に良好である。11は壺である、ヘラにより表面をミガキ整形している、また輪積痕が観察される。12～18は高杯である、完形は14の1点のみである。12は杯部のみである、杯底部との境には稜を持つ。15を除き脚部には3カ所に穿孔を有する、16では位置を違えて上下二段に穿孔を持つ。19は器台である、器受底部には穿孔が1カ所穿たれている。

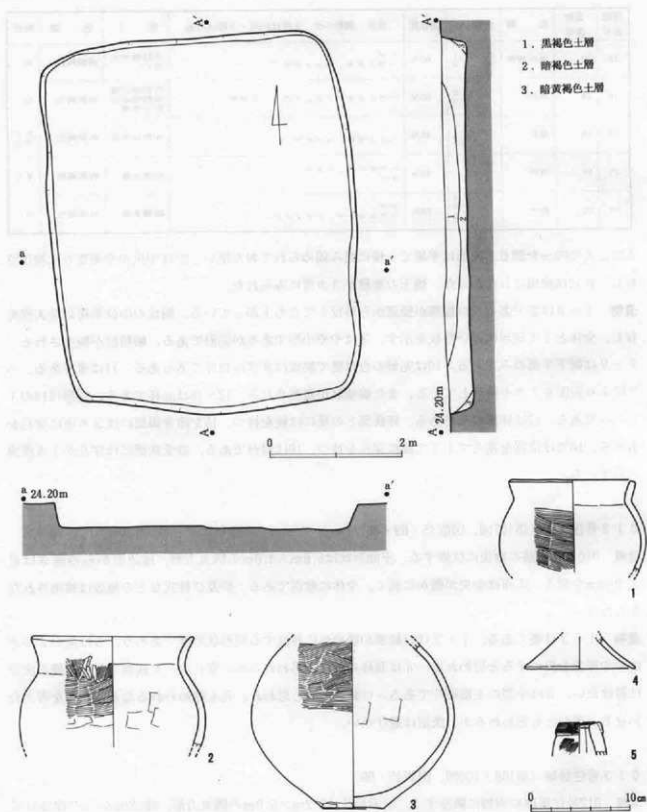
#### 012号住居跡（第107図、図版45・69・86）

遺構 010号住居跡の南東に位置する。平面形状は5.6m×4.6mの隅丸方形。確認面からの深さは最大で40cmを測る。床面は中央が微かに高く、全体に軟弱である。炉及び柱穴などの施設は検出されなかった。

遺物 1～3は甕である。1・2は口縁部が緩やかに外反する同形状の甕であろう。3は前の2つとはやや形状を異にすると思われる。4は高杯の脚部と思われるが、穿孔なども観察されず器種の決定は避けたい。5は小型の土器破片である。口縁部付近と思われ、孔も認められるなど形状等を考え合わせると器台とも思われるが、決定は避けたい。

#### 013号住居跡（第108・109図、図版45・69）

遺構 012号住居跡の南側に隣接する。平面形状は5.2m×5.0mの隅丸方形。確認面からの深さは最大で50cmを測る。床面は中央が微かに凹む。炉は中央やや西側に検出された、この上には焼土が少量堆積していた。柱穴は対角線上に4本検出され、いずれも径50cm深さ70cm前後を計る。うち3本は柱を抜いたともとれる斜めの掘込みが見られる。他に東側壁際に柱穴様の小掘込みが1カ所検出されている。



第107图 012号住居跡実測図及び出土遺物

押出番号	遺物番号	器種	法量 cm	遺存度	成形・調整手法 上段は内面・下段は外面	胎土	色調	焼成
1	2.7.10	甕	口底径 12.8 9.2 最大径 14.8 16.0	10%	ヘラナデ ナデ	細織多量	暗茶褐色	やや良
2	4.7.10 10P-1	甕	11.0	14%	ヨコナデ、ヘラナデ ハケ調整、ヘラケズリ	細織	暗褐色	良
3	4.6	甕	6.1 16.4 20.6	58%	ヘラナデ ハケ調整、ヘラケズリ、ナデ	細織	褐色	良
4	4.7	高杯	11.0 3.3	10%	ナデ、ナデ	細織	褐色	良
5	8	器台?	4.2	5%	ヘラナデ ハケ調整、ヘラケズリ	細織、織母 粒少量	黒褐色 内面黒色	良

遺物 1～4は甕である、完形はないが1は口縁の一部を除きほぼ完形である。ヘラミガキ・ナデによる整形が行われている。5～8は台付甕である、5の頸部に輪痕が観察された。6は口唇部をヘラで面取りされている。7・8は台付甕の脚部である。9・10は複合口縁壺の口縁部である、ともに胴部以下は欠いている。9はヘラによる整形が割合に丁寧な作業として行われている。破片に等しい10の口縁には棒状浮文が観察され、等間隔に一周にわたり貼り付けていると思われる。また棒状浮文の上にはヘラ様工具の先で刻みを施している。11・12は脚部のみである。11は高杯の脚部と思われる、穿孔が3カ所に穿たれている。12は器台の脚部と思われる、穿孔が3カ所に穿たれている。13・14は同一個体の器台と思われるが接合しないのでここでは別々に扱うこととする。13は器受部である、14は脚部である、裾部と脚の上部を欠く、稜を有しその上には刻みを施している。また4カ所の大小2種類の穿孔を位置を違えて計8カ所穿っていると思われる。

#### 014号住居跡（第110図、図版46・69）

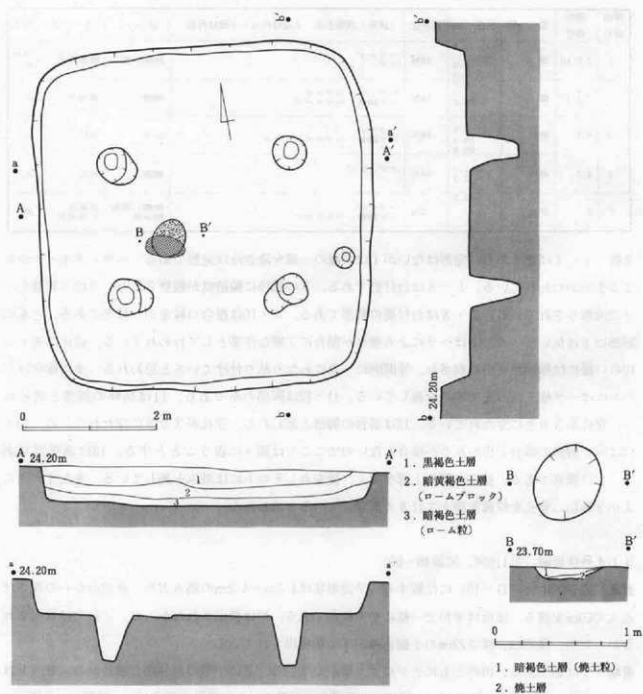
遺構 調査区中央（G-10）に位置する。平面形状は4.3m×4.2mの隅丸方形。確認面からの深さは最大で20cmを測る。床面は平坦で一様にやや軟弱である。炉は検出されなかった。主柱穴は検出されなかったが、径22cm、深さ22cmの小掘込みが1カ所検出されている。

遺物 1は甕である、内外ともにナデにより整形している。2は小型の台付甕と思われる。3～5は土玉である。3は完形で厚さ40mm、幅39mm、孔径6mmを測る、4も完形で厚さ40mm、幅37mm、孔径5mmを測る、5は多くを欠損している、推定値を示すと厚さ（53mm）、幅（43mm）、孔径（5mm）になる。いずれの土玉も丁寧に整形されている。

#### 015号住居跡（第111図、図版46・69）

遺構 調査区中央東側（H-10）に位置する。平面形状は3.9m×3.6mの台形に近い隅丸方形。確認面からの深さは最大で40cmを測る。床面は平坦で中央を中心に堅く締まっているが、周辺は一様にやや軟弱である。中央付近の床は貼り床が行われており、意識的に堅く締めたものと思われる。炉および柱穴などの施設は検出されなかった。



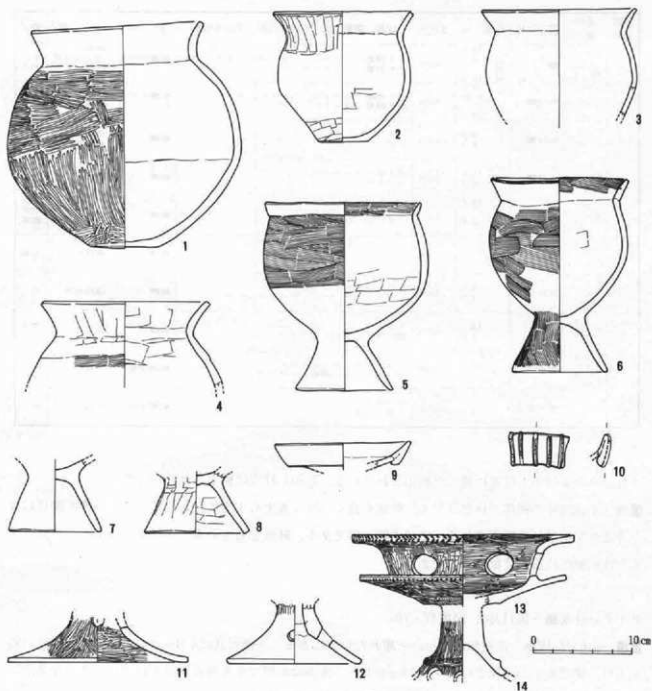


第108図 013号住居跡実測図

**遺物** 1は台付の器である、器形から判断すると甕のようだが下半部のみであるので決定は避けることにする。2は台付甕の脚部である。3は高杯の脚部である、穿孔は観察されなかった。4～6は器台の脚部である。いずれも穿孔が穿たれているが、4・5は3カ所、6は2カ所観察され、5・6には器受部底部にも穿孔を観察できる。

016号住居跡 (第112図、図版46・70・86)

**遺構** 調査区はやや南西端 (E-11) に位置する。平面形状は5.3m×5.2mの台形に近い隅丸方形。確認面からの深さは最大で30cmを測る。床面は平坦で一様にやや軟弱である。炬は中央西寄りに検出



第109図 013号住居跡出土遺物

挿図 番号	遺物 番号	器 種	法量 cm	遺存度	成形・調整手法 上段は内面・下段は外面	胎 土	色 調	焼成
1	1, 4, 7, 8, 11, 14, 16, 17	甕	口 17.1 底 8.9 高 22.6 最大23.1	84%	ヨコナデ、ヘラミガキ ヘラケズリ、ヘラミガキ	粗織やや多 い	淡黄褐色	良
2	13, 20, 30	甕	13.4 4.8 13.2	58%	ヨコナデ、ヘラナデ ヘラケズリ、ナデ	粗織	暗褐色	良
3	9, 13	甕	15.2 11.0	65%	ヨコナデ、ナデ ヨコナデ、ヘラケズリ	粗織	暗褐色	不良
4	7, 16	甕	16.0 8.1	13%	ヨコナデ、ヘラナデ、ハケメナデ	粗織	黒褐色	良

採掘 番号	遺物 番号	器 種	法量 cm	遺存度	成形・調整手法 上段は内面・下段は外面	胎 土	色 調	焼成
5	7.11, 14.23, 26	甕	口 15.5 底 9.7 最大16.4	60%	ハケ調整、ヘラナデ、ヘラケズリ、ナデ ハケ調整、ヘラケズリ、ナデ	細礫やや多い	黒褐色 内面暗黄褐色 唇部暗褐色	やや 不良
6	13.22	台付甕	13.7 9.45 13.7	83%	ハケ調整、ヨコナデ、ヘラナデ、ナデ ハケ調整、ヨコナデ、ナデ	細礫やや多い	黒褐色	良
7	13	台付甕	9.2 7.2	18%	ナデ ナデ	細礫	青褐色 薄黒褐色	良
8	19	台付甕	10.0 6.2	25%	ナイナイナヘラナデ ヘラナデ	細礫	褐色	三次 焼成?
9	8	甕	13.6 2.6	10%	ヨコナデ ヘラナデ、ヨコナデ	細礫	暗褐色	二次 焼成?
10		甕		4%		細礫	薄褐色	不良
11	3.5.7	高杯	18.0 4.3	25%	ヘラヨコナデ ヘラヨコナデ、ヘライガキ、ヨコナデ	細礫	薄黄褐色	良
12	1.2.7, 11.13, 22	器台	13.0 6.0	40%	ナデ 軽いヘライガキ、ヘラナデ	細礫	黒褐色	やや 良
13	1.2.7, 8.13, 14.24, (30)	器台	22.0 7.1	30%	ヘライガキ、孔ハケメナデ ヨコナデ、ハケ調整、ヘラナデ	細礫少量	茶褐色	良
14		器台脚部	6.0	25%	ヨコナデ ヘライガキ	細礫多量	茶褐色	良

され、その東側中央付近に焼土が検出されている。しかし柱穴は検出されなかった。

遺物 1は高杯の脚部で杯部は欠く。焼成も良くヘラミガキも丁寧に行われている、杯部と脚部の接合方法が欠損部分で観察される。2は手捏土器である、鉢形をしている。3は土玉である、欠損が多く形状も製作技法も詳細は不明である。

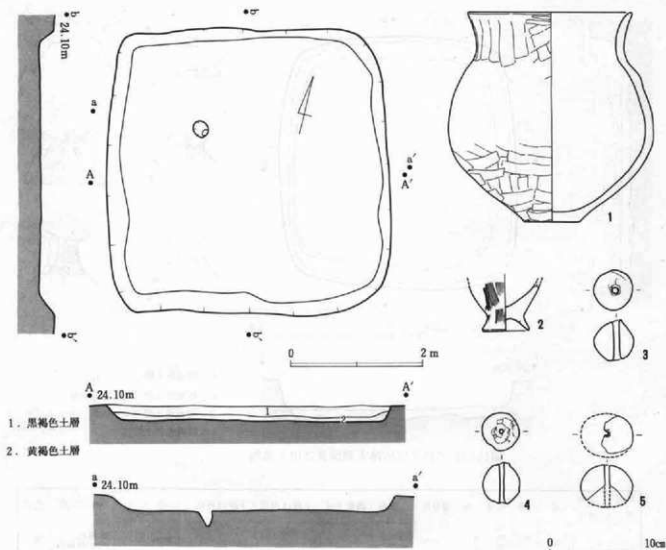
#### 017号住居跡(第113図、図版47・70)

遺構 016号住居跡の南東側に9mほど離れた位置にある。平面形状は4.0m×4.0mの台形に近い隅丸方形。確認面からの深さは最大で50cmを測る。床面は平坦で中央付近が僅かに堅いものの全体的には軟弱である。伊および柱穴などの施設は検出されなかった。

遺物 1は台付甕である。口縁部に僅かに段を持つ、輪積痕が観察される。2は甕の底部である。3は高杯の脚部で杯部、裾部分を欠く、穿孔は観察されない。4・5は小型の器台である。ともに脚部が器受部よりわずかに広がり、脚部には穿孔を有しないが、器受部底部に穿孔が穿たれている。6は小型の土器である。胴部は球状ではなく鉢状を呈し口縁は直線的に大きく開く。

#### 018号住居跡(第114図、図版47・70)

遺構 調査区の中や西側(F-13)に位置する。平面形状は4.2m×4.1mの隅丸方形だが、東側の壁が一部張り出し、全体に不整形である。確認面からの深さは最大で30cmを測る。床面は中央が微かに



第110図 014号住居跡実測図及び出土遺物

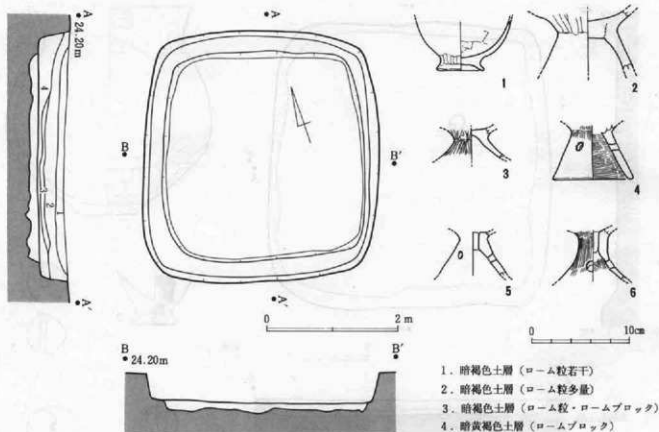
採図 番号	遺物 番号	器 種	法量 cm	遺存度	成形・調整手法	上段は内面・下段は外面	胎土	色調	焼成
1	2	壺	口 底 高 最大 16.4	71%	ナグ、ヘラナグ ヘラナグ、ヘラケズリ→ナグ、ヘラケズリ		細礫	黒褐色 褐色	不良
2	1	小型台付 壺	4.4	37%	ヘラナグ、ハケメ→ナグ ハケ調整、ナグ		細礫	薄褐色	良

凸み、全体的に踏み固められており堅くなっている。炉は中央やや北西寄りに検出されている。柱穴は検出されなかった。

遺物 1は高杯の杯部で、脚部を欠く。碗状に緩やかに曲線を描き開口する。そのほか図示できるような遺物は出土していない。

#### 019号住居跡（第115図、図版47・70）

遺構 017号住居跡の東側10mのところろに位置する。平面形状は3.3m×3.1mの隅丸方形だが、北側の壁が全体に少し張り出している。確認面からの深さは最大で25cmを測る。床面は中央が微かに凸

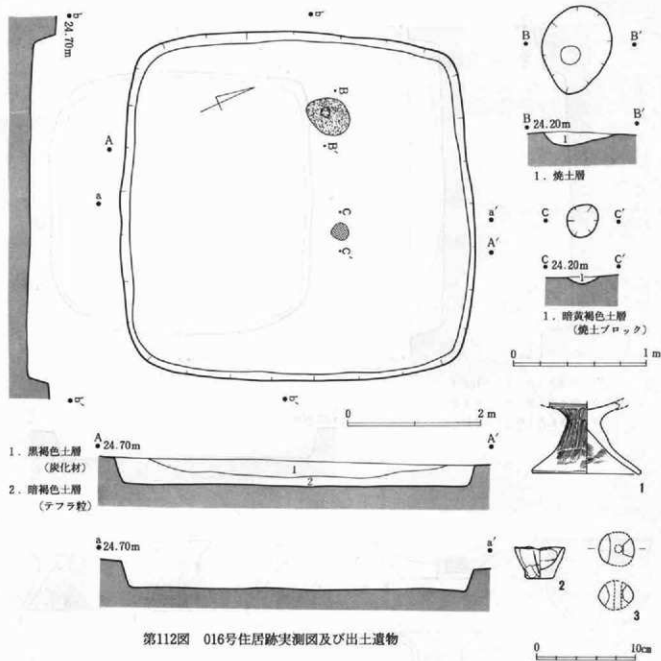


第111図 015号住居跡実測図及び出土遺物

挿図 番号	遺物 番号	器 種	法量 cm	遺存度	成形・調整手法	上段は内面・下段は外面	胎 土	色 調	焼成
1	5	甕	口 底 4.6 高 5.0 最大 9.0	35%	ヘラナブ ナブ		細礫	暗褐色 内面暗褐色	良
2	2	台付甕	5.9	18%	ヘラナブ ナブヘラナブ		中粒砂	暗赤褐色	堅軟
3	2	高杯脚部	3.1	20%	ヘラミダキ、ナブ ヘラミダキ		細礫	薄褐色	堅軟
4	8	器台	8.0 5.5	18%	ハケ調整 ハケ調整、ナブ		細礫	薄赤褐色	堅軟
5	7	器台	4.2	20%	ヘラナブか?		細礫	薄暗褐色	堅軟
6	7	器台		16%	ハケ調整 ハケ調整		中粒砂	薄褐色	堅軟

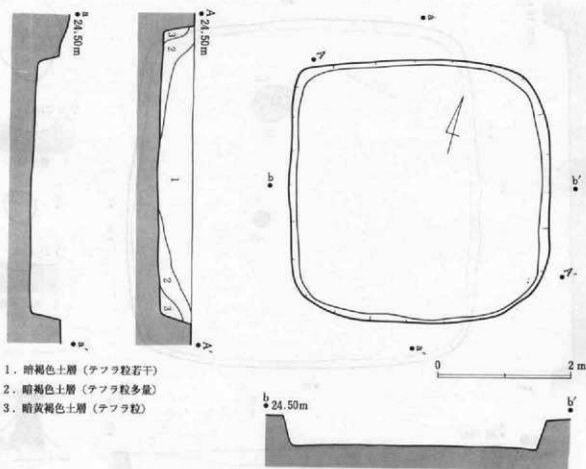
み、全体的にやや軟弱である。炉および柱穴などの施設は検出されなかった。

遺物 1は小型の甕である、作りは全体に良くない。口縁は直線的に上方へ開く、底部は高台状に厚く張り出している。そのほか図示できるような遺物は出土していない。

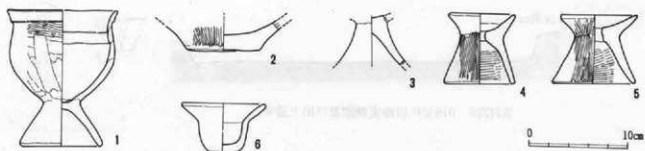


第112図 016号住居跡実測図及び出土遺物

採図 番号	遺物 番号	器 種	法量 cm	遺存度	成形・調整手法	胎 土	色 調	焼成
1	3	高杯	口 底 11.1 高 7.25 最大	55%	ヘラミガキ、ヘケ調整、ナデ ヘラミガキ、ヘケ調整	中粒砂多量	茶褐色	良
2	14	手捏土器	5.0 2.5 3.2	83%	ヘラケズリ及びビナデ ナデ、ヘラケズリ及びビナデ	雲母粒少量	黒褐色	良



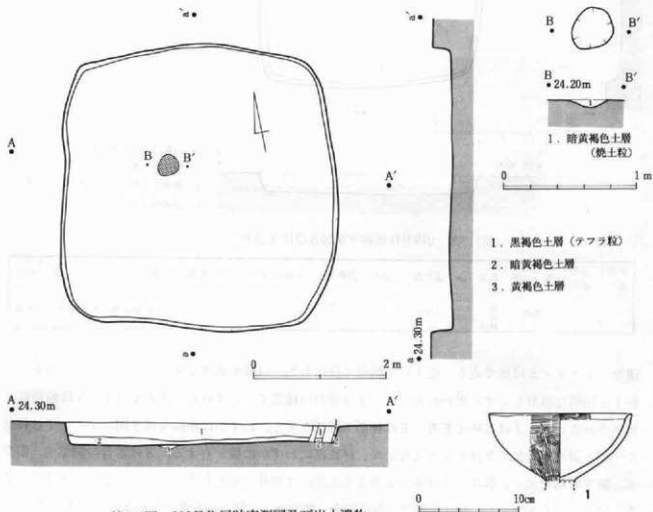
1. 暗褐色土層 (テフラ粒若干)
2. 暗褐色土層 (テフラ粒多量)
3. 暗黄褐色土層 (テフラ粒)



第113図 017号住居跡実測図及び出土遺物

邦国 番号	遺物 番号	器 種	法量 cm	遺存度	成形・調整手法	上段は内面・下段は外面	胎 土	色 調	焼成
1	9	台付壺	口 11.0 底 8.3 高 13.6 最大10.8	60%	コナデ, ハラナデ, ハラナデ→ナデ コナデ, ハラナデ		細礫多量	黒褐色 内面淡茶褐色	やや 不良
2	3	壺底部	7.3	20%			細礫多量	茶褐色	不良
3	6	高杯		20%	ナデ ナデ, ナデ		中粒砂多量	茶褐色	良
4	10	器台	6.75 7.2 7.1	90%	ハラミガキ, ナデ, ハケ調整 ハラミガキ		細礫多量	暗褐色	不良

採回 番号	遺物 番号	器 種	法量 cm	遺存度	成形・調整手法	上段は内面・下段は外面	胎土	色調	焼成
5	11	脚台	口 7.7 底 8.5 高 0.85 最大	85%	ヘラミガキ、ハケ調整 ココナダ、ヘラミガキ		細粒	暗黄褐色	良
6	12	埴?	口 8.5 底 2.9 高 5.05	90%	ココナダ、ヘラナダ ココナダ、ナダ		細粒少量	暗黄褐色	良



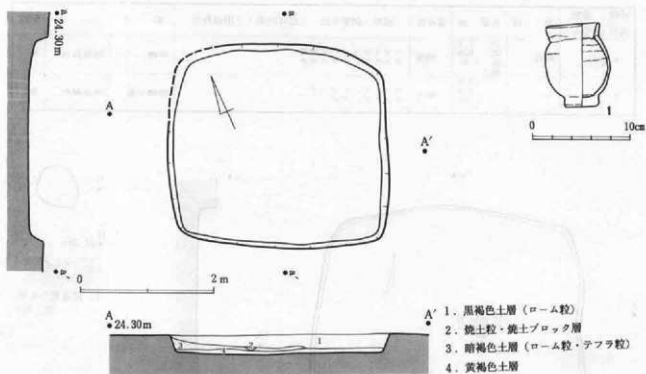
第114図 018号住居跡実測図及び出土遺物

採回 番号	遺物 番号	器 種	法量 cm	遺存度	成形・調整手法	上段は内面・下段は外面	胎土	色調	焼成
1	12	高杯	口 14.5 底 6.9 高 最大	30%	ハケ調整、ナダ ハケ調整、ヘラミガキ		中粒砂多量	暗赤褐色	不良

020号住居跡 (第116・117図、図版48・70)

**遺構** 015号住居跡の南西側 (H-10) に位置する。平面形状は6.0m×5.9mの隅丸方形。確認面からの深さは最大で45cmを測る。床面は中央付近が僅かに凸み、全体的に堅く締まっている。埴は中央西寄りに検出された。柱穴は対角線上に4本検出された、径が20~30cm、深さ45cm前後で小さく深い。東壁際に攪乱を受けて一部壁と柱穴が影響を受けている。





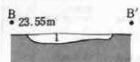
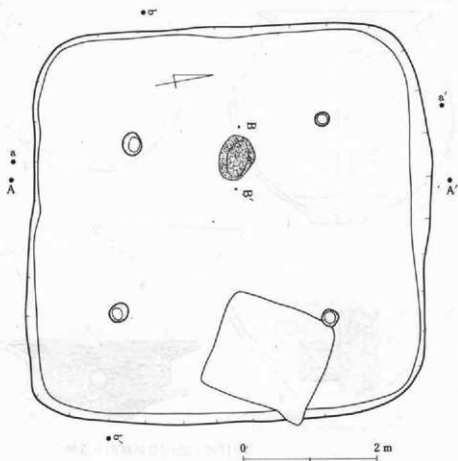
第115図 019号住居跡実測図及び出土遺物

採回 番号	遺物 番号	器 種	法量 cm	遺存度	成形・調整手法	上段は内面・下段は外面	胎土	土色	調	焼成
1	7	小型壺	口 5.5 底 3.5 高 8.45 最大	100%	ナゲ、ヘラナゲ		中粒砂少量	暗黄褐色		不良

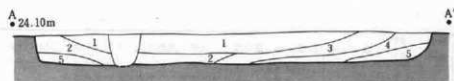
遺物 1・2・5は壺である。最大径を胴部中位にもち、口縁が大きく開く。2・5は上半部を欠くが1と同様な器形を示すと思われる。3・4は壺の口縁部で、いずれも下半部を欠く。3は輪積痕が観察される。6・7は高杯である。6は杯部で脚部を欠く、わずかに曲線を描き開口する。7は杯部の一部と脚の裾を欠き全体を知りえないが、杯底部にわずかに稜を有する。8は器台の脚部で、器受部と脚部の裾を欠く、脚部には3カ所と器受部底部には穿孔が穿たれている。9は器台の器受部である。10・11は土玉である。10は完形で、厚さ29mm、幅34mm、孔径5mmを測る、形状はやや歪んでいる。11は半分欠いているが、現存値は厚さ42mm、幅42mm、孔径8mmを測る。

#### 021号住居跡 (第118・119図、図版48・71・86)

遺構 019号住居跡の東側に隣接する。平面形状は5.9m×5.8mの隅丸方形。確認面からの深さは最大で65cmを測る。床面は中央付近が僅かに凸み、全体的に堅く締まっている。炉は中央やや西寄りに検出された。柱穴は対角線上に4本検出された、径が30~40cm、深さ85cm前後で小さくかなり深い。ほかには炉の西側の壁際に小さな凹みが、東壁際には一段低い場所がありさらに小掘込みが掘られている。ともに性格など詳細は不明である。本住居からは焼土の堆積は見られなかったが、炭化材が多量に検出され、焼失住居であることを何かわせる。

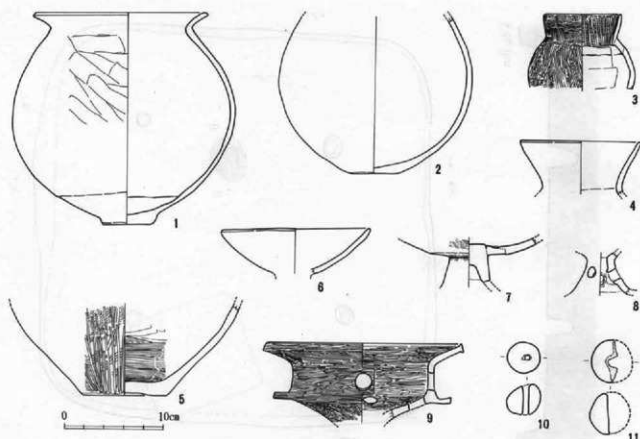


1. 暗黄褐色土層 (焼土粒・焼土ブロック)



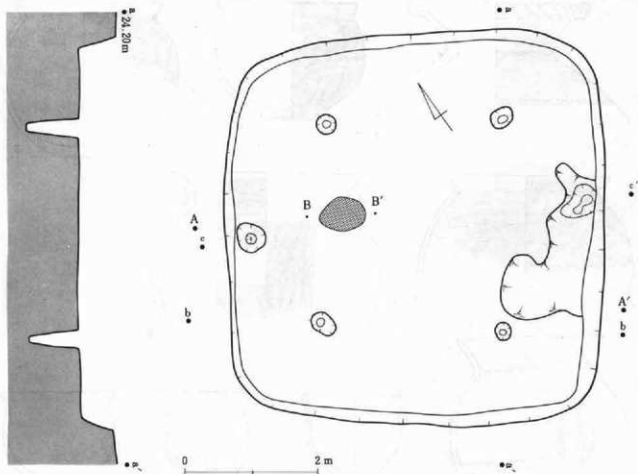
- |                         |                   |
|-------------------------|-------------------|
| 1. 黒褐色土層 (ロームブロック)      | 4. 暗褐色土層 (ローム粒若干) |
| 2. 暗褐色土層 (ローム粒多量)       | 5. 暗黄褐色土層 (テフラ粒)  |
| 3. 暗褐色土層 (ローム粒・ロームブロック) |                   |

第116図 020号住居跡実測図

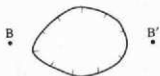
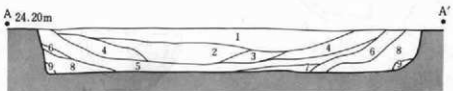


第117図 020号住居跡出土遺物

挿図 番号	遺物 番号	器種	法量 cm	遺存度	成形・調整手法 上段は内面・下段は外面	胎土	色調	焼成
1	11.14, 15.16	壺	口 17.5 底 5.2 高 21.3 最大22.4	83%	ヨコナデ, ヘラナデ, ヘラケズリ ヘラナデ, ヘラミガキ	中粒砂多量 細粒少量	黒褐色	不良
2	5.9.11 14.16	壺	4.6 18.9	50%	ヘラナデ, ヘラケズリ, ナデ	細粒多量	黒褐色 内面暗茶褐色	不良
3	1.8.9, 11	壺	7.7 10.7 12.15	40%	ヘラミガキ, ヘラナデ, ハケメ, ヘラミガキ	細粒多量	暗茶褐色	良
4	8.13	壺	5.4	25%	ヘラナデ ヘラケズリ, ナデ	中粒砂多量 細粒少量	暗褐色	不良
5	15	壺	8.6 9.1 16.65	22%	ヘラナデ, ハケ調整 ハケ調整, ヘラミガキ	細粒, 赤色 粒子やや多い	黒褐色 内面暗褐色	やや 不良
6	14	高杯	4.85	37%	ナデ, ヘラケズリ, ナデ	中粒砂多量	暗茶褐色	やや 不良
7	1.3.8	高杯		33%	ヘラミガキ, ナデ ハケ調整, ナデ, ヘラミガキ	中粒砂多量	暗黄褐色	不良
8	11	器台		35%	ヘラナデ ヘラナデ	中粒砂多量	赤褐色	良
9	1.5.8, 9.11, 15.17	器台	19.5 7.8 20.2	37%	ヘラミガキ ヘラミガキ, ハケ調整, ヘラミガキ	中粒砂少量	暗茶褐色	良



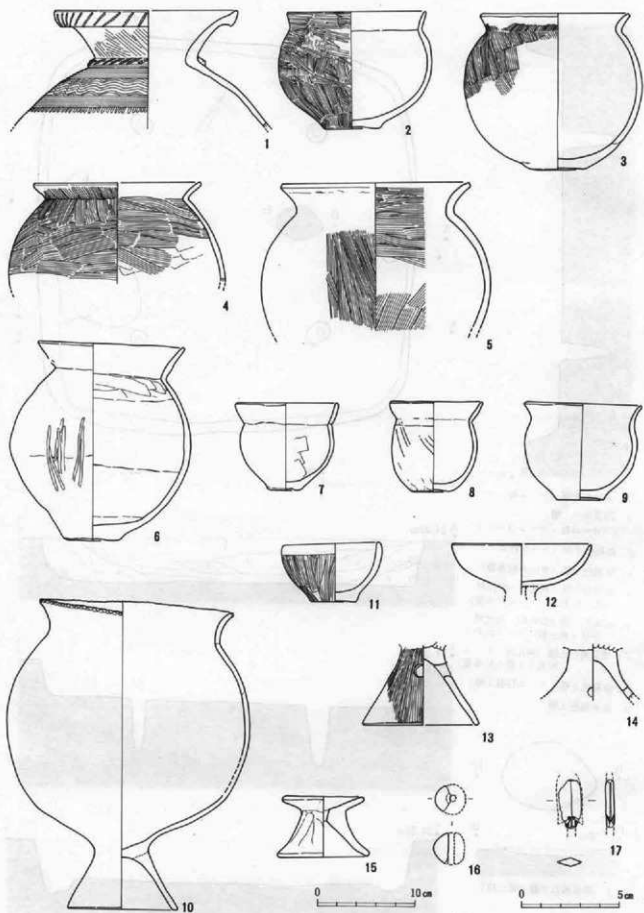
1. 黒褐色土層 (ローム粒)
2. 暗黄褐色土層  
(ローム粒・ロームブロック)
3. 暗褐色土層 (ローム粒若干)
4. 暗褐色土層 (ローム粒多量)
5. 暗褐色土層 (炭化粒・炭化材・焼土粒若干・ローム粒多量)
6. 暗褐色土層 (炭化粒・炭化材多量・焼土粒・ローム粒若干)
7. 暗黄褐色土層 (炭化材・ローム粒若干・焼土粒多量)
8. 暗褐色土層・ローム粒混土層
9. 暗黄褐色土層



1. 暗黄褐色土層 (焼土粒)



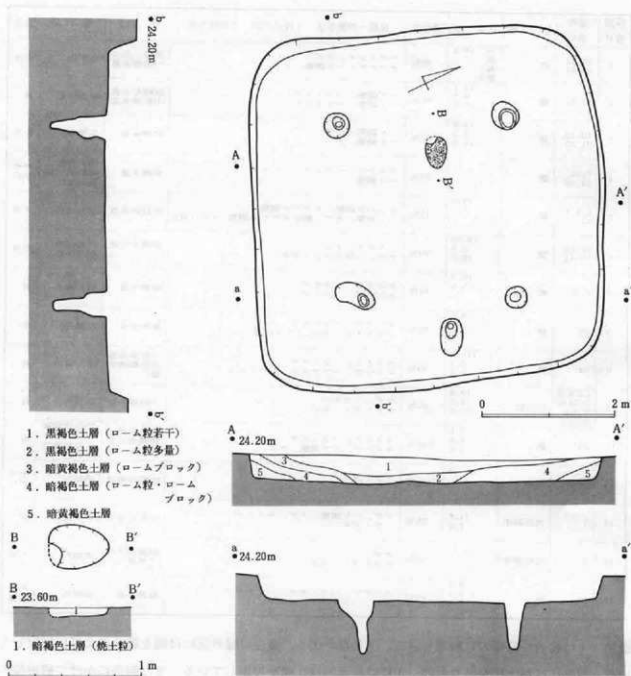
第118図 021号住居跡実測図



第119图 021号住居跡出土遺物

探出 番号	遺物 番号	器 種	法量 cm	遺存度	成形・調整手法 上段は内面・下段は外面	胎 土	色 調	焼成
1	16.22, 23.54	甕	口 18.3 底 高 最大	30%	ヘラミガキ、ナデ ヨコナデ、ハケ調整、ナデ	織母、長石 の細砂多量	淡褐色	不良
2	21.25	甕	14.1 5.7 12.0	87%	ハケ調整、ヘラミガキ ハケ調整、ヘラミガキ	細砂七少量 中粒砂多量	暗茶褐色	良
3	10.13, 21.33	甕	14.9 5.2 15.8	60%	ハケ調整、ナデ ハケ調整、ナデ	細砂多量	黒褐色	不良
4	7.10, 13.36	甕		33%	ヨコナデ、ヘラケズリ、ハケ ハケ調整	細砂多量	暗茶褐色 広範囲に黒 斑有り	やや 不良
5	1.3,7, 34	甕	19.0	12%	ヨコハケ調整、タテハケ調整 ハケ調整、ナデ、細いタテハケ調整(スス付着)	中粒砂多量	暗茶褐色	不良
6	16.18, 22.54	甕	14.65 5.6 19.9	90%	ヘラナデ、ナデ ナデ、一部にヘラミガキ	細砂やや多 い	淡黄白色 局部黒色	不良
7	7.35	甕	10.4 3.5	84%	ヨコナデ、ヘラナデ ヨコナデ、ヘラナデ	細砂多量	暗茶褐色	良
8	28	甕	9.2 4 9.0	90%	ヨコナデ、ヘラケズリ、ナデ ヘラケズリ、ナデ、(スス付着)	細砂多量	暗褐色	良
9	19	甕	11.75 4.7 9.7	90%	ヨコナデ、ヘラミガキ ヨコナデ、ヘラケズリ、ヘラミガキ	中粒砂多量 赤色細砂多 量	暗赤褐色	良
10	1.3,9,15 11,20,32 37,116, 39,40-2	台付甕	19.5 11.2 30.5	60%	ナデ、ヘラナデ ヘラケズリ、ナデ	中粒砂多量	暗茶褐色	良
11	20	鉢	9.5 6.6 6.0	100%	ヨコナデ、ヘラミガキ ヨコナデ、ハケ調整、ナデ	赤色粒子、 細砂長石若 干	内面淡黄褐 色 外面淡褐色 と黒色	良
12	26	高杯	17.0	20%	ヘラミガキ ヘラミガキ	中粒砂多量	暗褐色	やや 不良
13	1	高杯脚部	11.7 7.6	25%	ナデ、ハケ調整、ナデ、ヨコナデ ヘラミガキ	中粒砂多量	暗茶褐色	良
14	3	高杯脚部		20%	ナデ ヘラケズリ、ナデ	細砂赤色粒 子多量	黄褐色	不良
15	27	器台	8.2 9.2 6.2	80%	ヨコナデ、ヘラミガキ、ヘラケズリ、ナデ ナデ、ヘラケズリ、ナデ	細砂多量	淡褐色	やや 不良

遺物 1は複合口甕の口縁部付近で、下半部を欠く。複合口縁外面には縄を棒状浮文様に押捺している。頸部には粘土紐を貼り付け、上に口縁部同様に縄を押捺している。また胴部にかけて櫛歯様の工具で波形文を直線ではさみ施文している。以下の胴部には赤彩した痕跡が残る。2～9は甕である。完形品はない、2～5は主にハケにより整形が行われている。2はヘラケズリが加えられている。6～9はヘラケズリやヘラミガキにより整形が行われている。7～9は器高が10cm以下の小型の甕である。10は台付甕である。口唇部にヘラ様工具で刻みを施している。11は完形の小型の鉢である。ハケにより整形が行われ、口縁部にはナデを加え整形している。12～14は高杯である。12は杯部で内湾しながら開く、脚部を欠く。13・14は脚部で杯部を欠く、いずれも3カ所に穿孔を穿っている。15は小型の器台で、器受部は小さく直線的に開く、器受部底部に穿孔を穿つ。16は土玉である、大半を欠く。17は銅線の先端部である、刃部はほぼ一周にわたり欠損している。残存部からでは形状の詳細は分からないが扇状形ではないかと思われる。006号住居跡出土のものとは形状が違うと思われる。

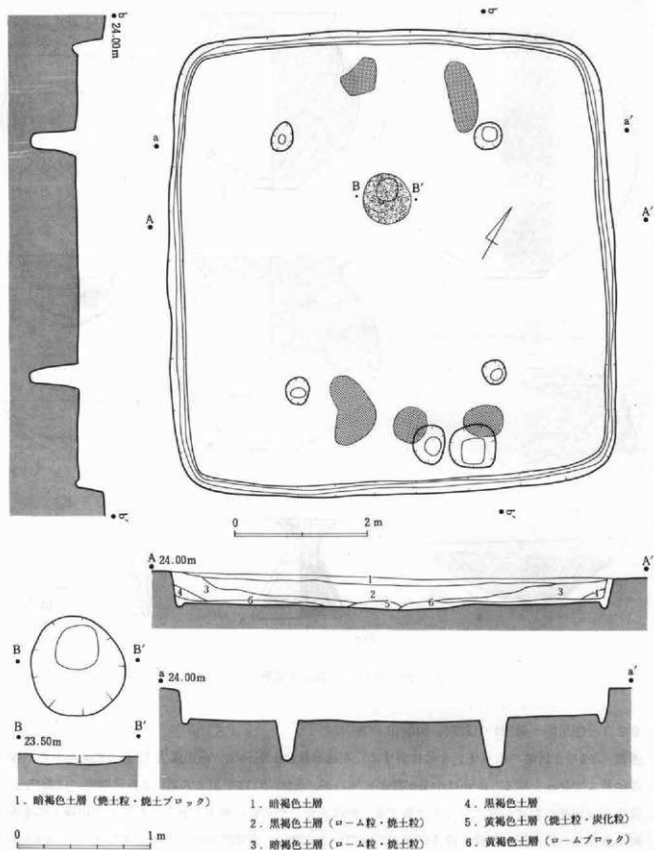


第120図 022号住居跡実測図

0 2 2号住居跡 (第120図、図版48)

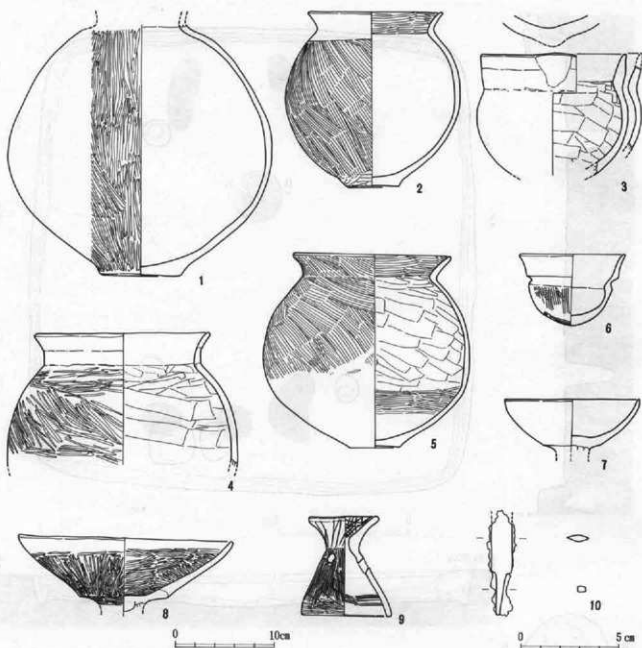
**遺構** 018号住居跡の東側に隣接する。平面形状は5.3m×5.3mの隅丸方形だが、東側の壁がやや曲線を描く。確認面からの深さは最大で40cmを測る。床面は平坦だが、中央付近が僅かに堅いものの全体的には軟弱である。炉は中央やや西寄りに検出されたが、一部攪乱を受けている。柱穴は対角線上に4本検出された、径が30~40cm、深さ70cm前後で小さく深い、うち3カ所は上方に段を持つように口の部分を広くしている。東の壁付近には54cm×32cm、深さ50cmの小掘込みが検出されている。

**遺物** 若干の遺物の出土は見られたものの図示できるものはない。



第121図 023号住居跡実測図





第122図 023号住居跡出土遺物

023号住居跡 (第121・122図、図版49・72・86)

**遺構** 020号住居跡の南東側近くに位置する。平面形状は6.9m×6.7mの隅丸方形。確認面からの深さは最大で46cmを測る。床面は中央が微かに凹むが、全体的には平坦である、さらに壁際には幅15cm、深さ10cm前後の周溝が壁に沿って一周する。炉は中央やや北側に検出された。柱穴は対角線上に4本検出された、径が35cm前後、深さ60cm～80cmで小さく深い。南壁際のやや東寄りに貯蔵穴(70cm×60cm×50cm)が1カ所と小掘込み(径50cm、深さ44cm)が検出された。焼土の堆積が北と南の壁付近に5カ所みられ、また炭化材の検出も少量だが有ることから本住居は焼失住居であることが伺える。

**遺物** 1は口縁部を欠くが、下半部に胴部の最大径を持つこと、さらに頸部の屈曲部分の形状より壺

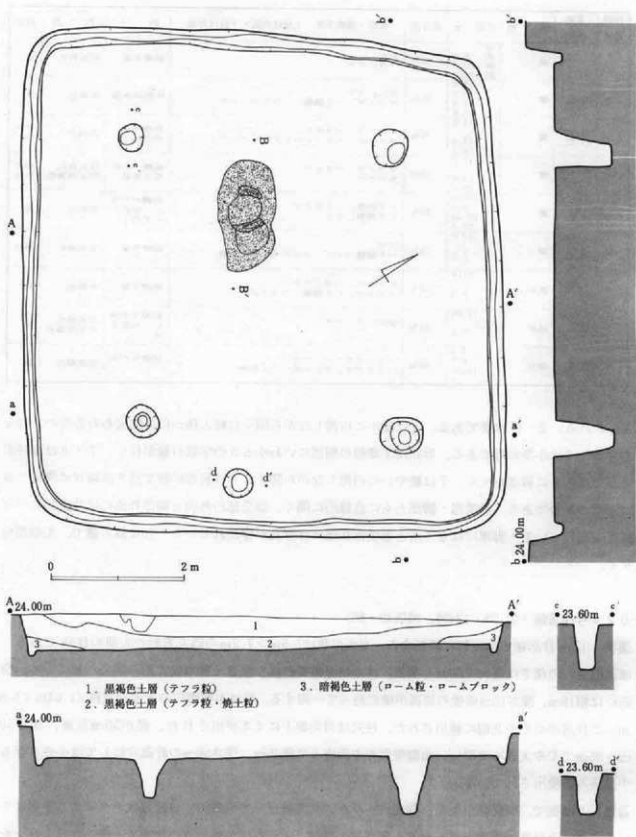
挿入 番号	遺物 番号	器 種	法量 cm	遺存度	成形・調整手法 上段は内面・下段は外面	胎 土	色 調	焼成
1	14	甕	口 底 8.0 高 20.1 最大径 26.2 13.8	65%	ナデ ヘラミガキ	細砂多量	灰黄褐色	良
2	21, 24	甕	5.2 17.8 17.8 14.6	80%	丁寧いナデ ヨコナダ、ハケ調整、ヘラナダ、ナデ	中粒砂多量	茶褐色	良
3	12, 13, 21, 22	甕	13.4 15.2 17.6	75%	ヨコナダ、ヘラナダ ヨコナダ、ヘラナダ→ナダ、ヘラケズリ	細砂多量、 赤色粒子	灰褐色	やや 不良
4	4, 7, 13 15, 22	甕	16.0 14.9 23.0	16%	ヨコナダ、ヘラナダ ヨコナダ	細砂、赤色 粒子多量	暗灰褐色 内面黄褐色	やや 不良
5	1, 4, 7, 15, 27	甕	5.0 19.45 20.7 10.6	80%	ハケ調整、ヘラケズリ、ヘラミガキ ハケ調整、ナデ	細砂やや多 い、長石、 石英若干	黄褐色	良
6	14, 17, 20, 22	埴	7.2	75%	ナデ ハケ調整→ナダ、ヨコナダ、ハケ調整	細砂多量	暗茶褐色	不良
7	1, 7, 16 23	高杯	21.8 7.3	50%	ヨコナダ、ヘラミガキ ヨコナダ、ハケ調整、ヘラミガキ	細砂少量	茶褐色	良
8	18	高杯	13.65 5.5	45%	全面ヘラミガキ	細砂やや多 い、石英若 干	黒茶褐色 内面暗褐色	良
9	13-22	器台	7.2 9.1 10.65	99%	ヘラミガキ、タンナダ? ヘラミガキ、タテの広いハケ調整	細砂やや多 い	灰茶褐色	良

と思われる。2～5は甕である。3は僅かに内湾しながら開く口縁と僅かに外に膨らむ程度の片口を有する。6は小型の埴である、形状は半球形の胴部にいわゆる5の字状口縁が付く。7・8は高杯の杯部で、ともに脚部を欠く。7は緩やかに内湾しながら開く、8は底部に稜を持ち直線状に開く。9は小型の器台である。器受部・脚部ともに直線的に開く、器受部内外面と脚部外面には地文的にヘラ描きを施している。脚部には3カ所と器受部底部には穿孔が穿たれている。10は鉄の鎌で、先端部を欠く。

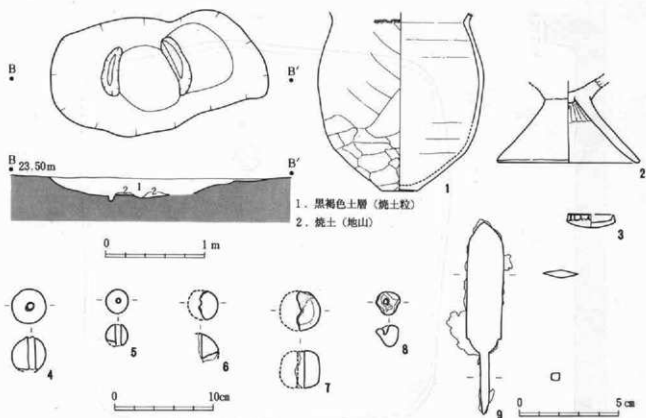
#### 0 2 4 号住居跡 (第123・124図、図版49・86)

遺構 023号住居跡の南西側に隣接する。平面形状は7.5m×7.2mの隅丸方形の大型の住居である。確認面からの深さは最大で50cmを測る。床面は平坦で四隅を除き一様に堅く踏み固められている。壁際には幅15cm、深さ10cm前後の周溝が壁に沿って一周する。炉は不整形円の大きな規模(1.64m×0.8m)で住居中央やや北側に検出された。柱穴は対角線上に4本検出された、径が50cm前後、深さ50cm～85cmでやや大きめで深い。南側壁際やや西寄りに径45cm、深さ56cmの貯蔵穴にしては小さすぎる小掘込みが検出されている。

遺物 1は甕で、口縁部を欠く、胴部はヘラケズリで整形しているが、口縁部はナデにより整形している。2は台付甕の脚部と思われる。甕底部と脚部との接合部が整形前の状態で、僅かな段と粘土を貼り付けたときの指圧痕が残る。3は杯形をする手捏土器で、口縁部には指圧痕が一周し僅かに稜を作っている。4～7は土玉で完形品はない、以下順に現存の計測値を厚さ・幅・孔径の順で示す。4は(34mm)・35mm・6mm、5は(21mm)・23mm・5mm、6は(27mm)・(29mm)、7は37mm・(40mm)



第123図 024号住居跡実測図



第124図 024号住居跡炉跡実測図及び出土遺物

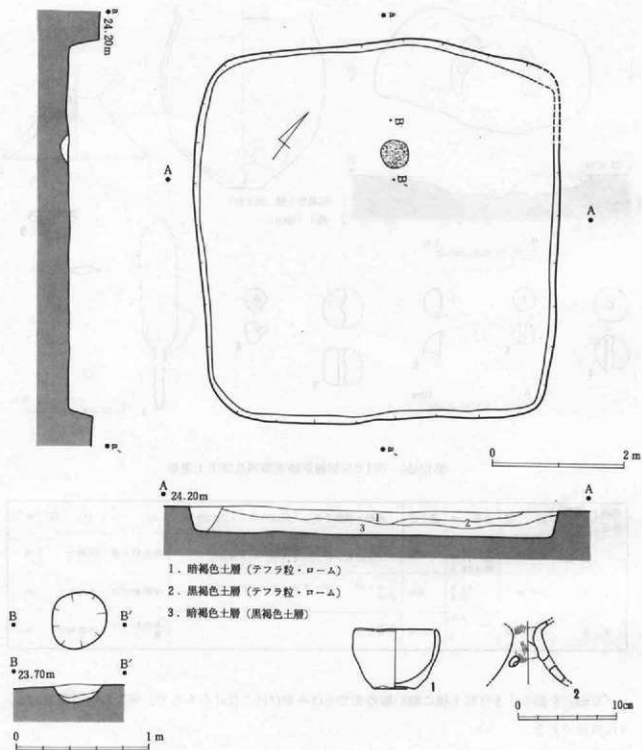
押図 番号	遺物 番号	器 種	法量 cm	遺存度	成形・調整手法	上段は内面・下段は外面	胎 土	色 調	焼成
1	1, 2, 3, 8, 9, 11 13, 14, 19	小型鉢	口 底 36. 高 17.9 最大16.8	55%	ヘラナゲ、ヘラケズリ、もナゲ ハケメのもナゲ、ヘラズリ、ヘラズリ		長石粒多量	黒褐色	良
2	3	台付鉢	14.4 8.4	8%	ヘラナゲ、ヘラケズリ、ナゲ、ヨコナゲ ナゲ		中粒砂多量	茶褐色	良
3	8	手捏土器	4.6 1.3	25%	ナゲ ヘラナゲ		赤色粒子少 量	淡黄褐色	良

・(6mm)を測る。8は粘土塊に細い棒の先でくぼみを付けただけのもので、何なのか不明である。  
9は鉄鏝である。

0 2 5号住居跡（第125図、図版49・72）

遺構 調査区の南側やや西寄り（F-13）に位置する。平面形状は5.5m×5.5mの隅丸方形だが全体にやや不整である。確認面からの深さは最大で36cmを測る。床面は平坦で一様に軟弱である。炉は住居中央やや北寄りに検出された。柱穴などそのほかの施設は検出されなかった。

遺物 1は小型の鉢である、内外面ともに浅い凹凸があり手捏土器の様な感じを受ける。2は器台の脚部で、器受部と裾部を欠く、3カ所に穿孔を穿っている。



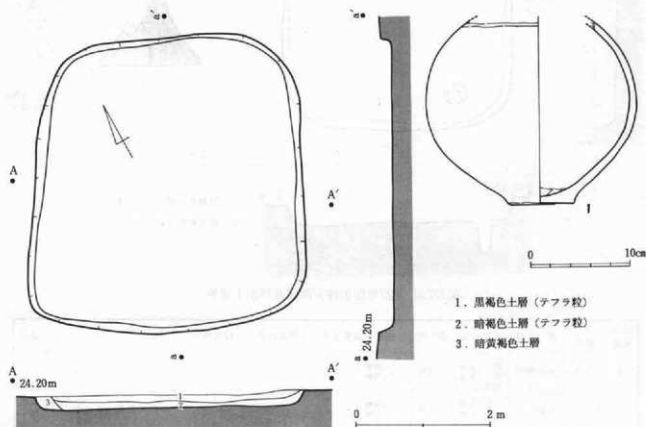
第125図 025号住居跡実測図及び出土遺物

採図 番号	遺物 番号	器 種	法量 cm	遺存度	成形・調整手法 上段は内面・下段は外面	胎 土	色 調	焼成
1	11	小型鉢	口 8.2 底 4.2 高 6.0 最大	100%	ヘラナゲ, ナゲ ヘラナゲ, ナゲ, ヘラケズリ, ナゲ	中粒砂多量	茶褐色	良
2	8	器台	6.2	40%	ヘラケズリ, ナゲ 高いハケ調整, ハケ調整, ナゲ	中粒砂多量	炭褐色	不良

026号住居跡（第126図、図版50・72）

**遺構** 調査区南側中央（G-13）に位置する。平面形状は4.4m×4.2mの台形に近い隅丸方形だが、本来は正方形であると考えられる。確認面からの深さは最大で20cmと浅い。床面は平坦で全体的には踏み固められて堅くなっている。炉および柱穴等の施設は検出されなかった。

**遺物** 1は口縁部を欠く土器である、形状を見ると壺と思われる。



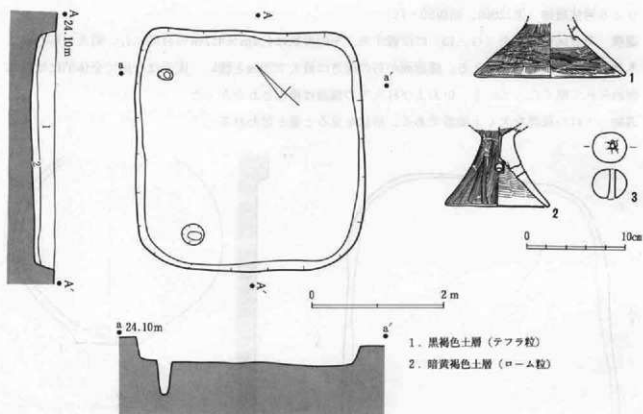
第126図 026号住居跡実測図及び出土遺物

挿図番号	遺物番号	器種	法量 cm	遺存度	成形・調整手法	上段は内面・下段は外面	胎土	色調	焼成
1	2 130-05 1 15-1	壺	口 底 6.6 高 18.3 最大20.8	40%	ヘラナデ ヘラナデ、ナデ		中粒砂多量	暗茶褐色	やや不良

027号住居跡（第127図、図版50・72）

**遺構** 025号住居跡の東6mに位置する。平面形状は3.6m×3.5mの隅丸方形。確認面からの深さは最大で30cmを測る。床面は中央が微かに凸み全体的に軟弱である。炉は検出されなかった。柱穴様の小掘込みは2カ所検出されたが、いずれも柱穴とすることには消極的である。

**遺物** 1は高杯の脚部と思われる、杯部を欠く、穿孔は観察されない。2は器台の脚部である器受部を欠く、脚部に3カ所と器受部底部に穿孔を穿っている。3は土玉である、厚さ29mm、幅34mm、孔径6mmを測る。



第127図 027号住居跡実測図及び出土遺物

邦図 番号	遺物 番号	器 種	法量 cm	遺存度	成形・調整手法	上段は内面・下段は外面	胎 土	色 調	焼成
1	1.6.7	高杯脚部	口 底 高 最大 15.2 5.6	37%	ハケ調整 ハケ調整		中粒砂多量	暗黄褐色	不良
2	9	瓶台	10.3 7.9	41%	ハケ調整 ハケ調整		中粒砂多量	赤褐色	やや良

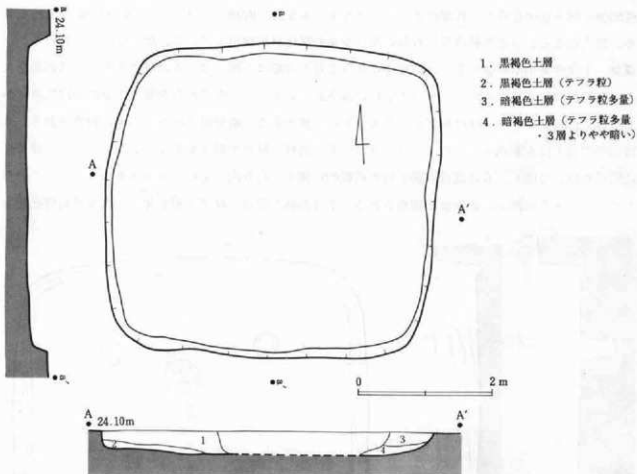
#### 029号住居跡（第128図、図版50）

**遺構** 025号住居跡の南4mに位置する。平面形状は5.0m×4.7mの隅丸方形だが北辺と西辺が外側に弓状に若干張り出している。確認面からの深さは最大で32cmを測る。床面は中央が微かに凸み全体的には軟弱である。住居床面南東側に攪乱を受けている。炉および柱穴等の施設は検出されなかった。

**遺物** 遺物の出土は僅かであり、図示できるものはなかった。

#### 030号住居跡（第129・130図、図版51・73）

**遺構** 調査区南側やや東（H-13）に位置する。平面形状は5.6m×5.4mの隅丸方形。確認面からの深さは最大で60cmを測る。床面は平坦で、全体的によく踏み固められている、さらに壁際には幅18cm、深さ14cmの周溝が壁に沿って一周する。炉は中央やや北寄りに検出された。柱穴は対角線上に4カ所検出された、径が30cm～35cm、深さ50cmを計る。南壁やや寄りに径50cm、深さ70cmを計る小掘込みが



第128図 029号住居跡実測図

検出された、貯蔵穴と考えられる。東と南の周溝上方に焼土の堆積が2カ所にみられ、また北の壁付近に炭化材の検出も少量ながら有ることから本住居は焼失住居であることが伺える。

**遺物** 1は複合口縁壺である、下半部を欠く。口縁部及び頸部には文様は施されていない、頸部にヘラナデによる整形痕が残るのみである。2～6は甕である。2は内外面ともヘラナデにより整形されている、3は底部を欠く甕である、口唇部は上方に若干つまみ上げられている。4は5の字状口縁を持つ北陸系の土器である。5は唯一完形の甕である。胴部の内外面ともヘラケズリにより整形し、外面上半部にヘラミガキを雑に施しており、一部が口縁部にも及んでいる。6は甕の底部である。7は小型の台付甕である、整形が終了していないのか輪積痕が内外面に多く観察される。8は台付甕の脚部である。9は高杯の杯部である、脚部を欠く。10は高杯の脚部で、杯部と裾を欠く、4カ所に穿孔を穿っている。11は器台の器受部で脚部を欠く。器受部底部には穿孔を穿っている。

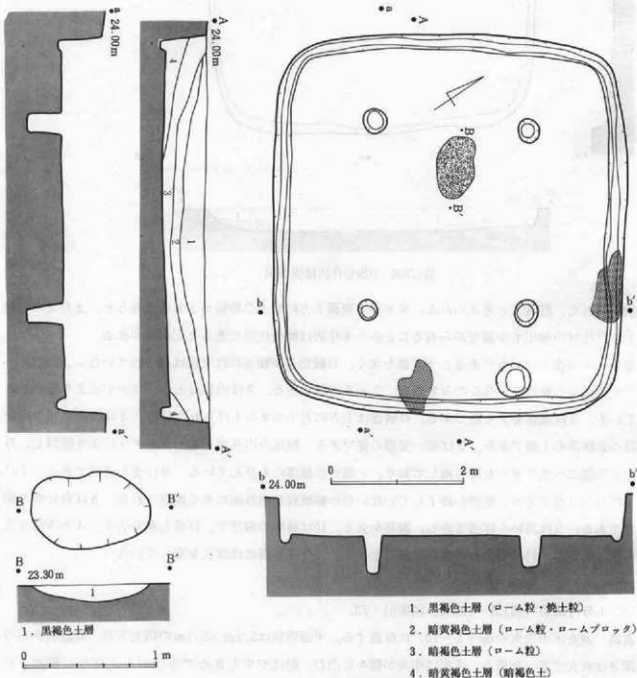
### 031号住居跡 (第131・132図、図版51・73)

**遺構** 調査区中央東の端 (I-10) に位置する。平面形状は5.2m×5.1mの隅丸方形。確認面からの深さは最大で35cmを測る。床面は中央が微かに凸む。炉はやや大きめで住居中央北寄りに検出された。柱穴は対角線上に4カ所検出された、形状および深さにはばらつきがある。ほかには南の壁際に

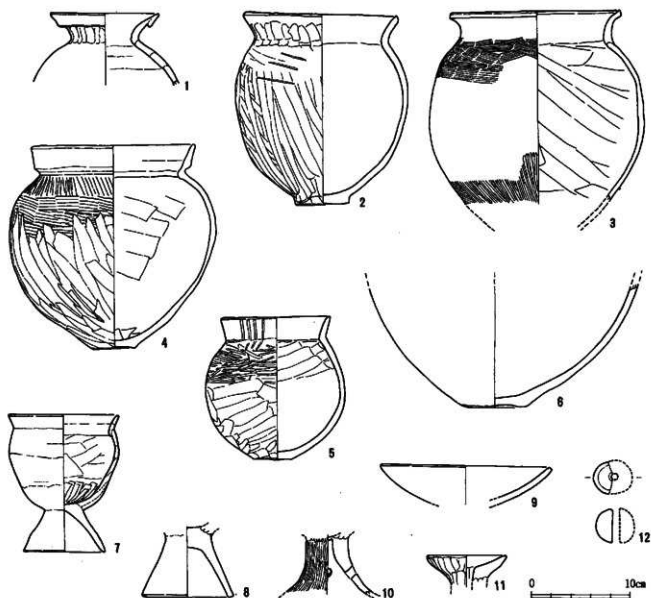


径50cm、深さ25cmを計り、底部にさらに小さな掘込みを持つ貯蔵穴とも思える施設が検出されている。焼土のまとまった堆積は見られないが、少量の炭化材が検出している、焼土住居なのだろうか。

遺物 1はやや小型の壺である、口縁部を欠き器種の詳細は不明。2～4は甕である。2は底部を欠く、頸部にはハケ目のちへラミガキが粗に施されている。また頸部から胴部上半分にかけてススがやや厚く付着している。3は胴部がやや丸みを持つ甕である、輪積痕が内外面に多少観察される。4は胴部の最大径を胴部下位に持つ。5・6はともに高杯の杯部で脚部を欠く。5は内湾ぎみに緩やかに曲線を描いて開く。6は底部に稜を持ち直線的に開く、内外面ともにへラミガキにより丁寧に磨かれている。また脚部との接合痕が観察される。7は高杯の脚部で杯部と裾を欠く、3カ所に穿孔を穿



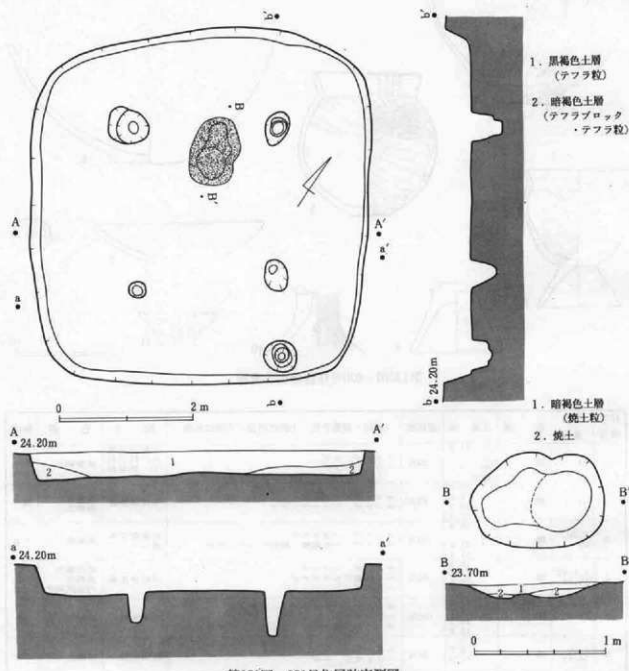
第129図 030号住居跡実測図



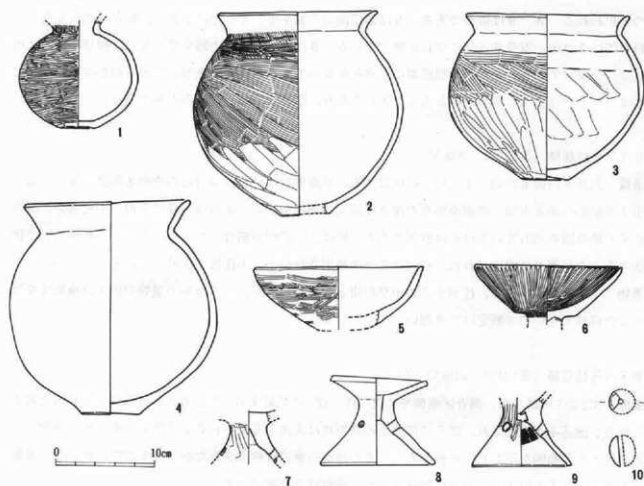
第130図 030号住居跡出土遺物

挿図 番号	遺物 番号	器 種	法量 cm	遺存度	成形・調整手法 上段は内面・下段は外面	胎 土	色 調	焼成
1	14	壺	口 底 高 最大 11.0 7.1	22%	ヘラナゲ, ナゲ ヘラナゲ, ナゲ	中粒砂少量 赤色粒子若干, 雲母若干	灰黄褐色	良
2	21	甕	15.8 5.2 19.4 22.4 16.8	85%	ヨコナゲ, ヘラナゲ ヨコナゲ, ヘラナゲ, ナゲ	中粒砂多量	暗褐色 黒褐色	良
3	8, 10, 28	甕	21.9 21.4 16.3	60%	ヨコナゲ, ヘラケズリ ヨコナゲ, ヘケ調整, 細長いヘラミガキ	石英粒子多 量	黒褐色	不良
4	1, 6, 10 15, 18	甕	4.1 20.2	80%	ヨコナゲ, ヘラナゲ ヘケ調整のみヨコナゲ ヘラケズリ	中粒砂多量	暗赤褐色 灰褐色 内面灰褐色	不良
5	12	甕	10.9 3.7 14.3 13.9	100%	ヨコナゲ, ヘラミガキ, ヘラケズリ ヘラミガキ ヨコナゲ一部ミガキのヘラミガキ, ヘラケズリ	細砂多量	暗褐色	良
6	1, 10, 16, 17	甕	6.7 12.3	25%	ナゲ ヘラケズリ, ナゲ	細砂少量	暗褐色	不良

採回 番号	遺物 番号	器 種	法量 cm	遺存度	成形・調整手法 上段は内面・下段は外面	胎土	色調	焼成
7	10.23, 26	台付椀	口 10.9 底 9.0 最大 11.1	33%	指オサエナデ、ヘラナデ、ヘラナゲナデ 指オサエナデ、ナデ、ヘラケズリナデ	細礫少量	黒褐色 脚部黄褐色	やや 良
8	1.6	台付鉢脚 部	9.2 7.0	18%	ナデ、ヘラケズリ、ヘラナゲ ヘラケズリ、ナデ	細礫多量	黒褐色	やや 不良
9	1.3.6	高杯	17.2 3.9	33%	ヘラナゲ ヘラナゲ	細礫多量	暗赤褐色	良
10	3	高杯脚部	5.6	40%	ナデ ヘラミガキ	中粒砂多量	茶褐色	良
11	24	器台	7.9 3.0	80%		細礫多量	暗褐色	やや 不良



第131図 031号住居跡実測図



第132図 031号住居跡出土遺物

挿図 番号	遺物 番号	器 種	法量 cm	遺存度	成形・調整手法	上段は内面・下段は外面	胎土	色調	焼成
1	9, 20, 21, 23, 27	壺	口 底 高 最大 13.0 3.8 10.5 16.0	55%	ヘラケズリ, ナゲ ヘラケズリ, ヘラミガキ, ヘラケズリのもナゲ		細礫多量	赤褐色	良
2	16, 19, 21, 25	壺	4.9 20.4 20.9 16.6	87%	ヨコナゲ, ヘラケズリ, ナゲ ヨコナゲ, ハケメー部ヘラミガキ, ヘラナゲ		細礫多量	暗赤褐色	やや 不良
3	18, 19, 20	壺	4.7 19.8	75%	ヨコナゲ, ヘラズリ, ナゲ ヨコナゲ, ハケ調整, ヘラケズリ, ナゲ		細礫多量	黒褐色	不良
4	2, 5, 19 20, 21, 24	壺	16.7 21.5 6.0 20.7 17.2	83%	ヘラヨコナゲ, ヘラナゲ ヘラヨコナゲ, ヘラケズリ軽いイガキ, ナゲ		細礫砂多量	黄褐色	やや 不良
5	11	高杯杯部	6.1	45%	ナゲ 荒いハケ調整, ナゲ		細礫やや多い	暗黄褐色	不良
6	13	高杯	14.8 5.6	50%	ヘラミガキ, ハケ調整, ヘラミガキ		中粒砂多量	暗褐色 赤褐色	やや 不良
7	14	高杯脚部	5.2	25%	ナゲ ヘラナゲ, ナゲ		中粒砂少量	暗赤褐色	やや 不良
8	12	脚台	9.2 10.9 8.9	90%	ヘラミガキ ヘラミガキ		細礫, 赤色 粒子, 長石 若干	褐色 内面褐色	良
9	15	脚台	10.0 6.8	50%	ヘラミガキ, ヘラナゲ		中粒砂多量	赤褐色	不良

つと思われる。8・9は器台である。8は器受部の一部を少し欠くだけであり、整形も焼成も良い。脚部には3カ所と器受部底部に穿孔が穿っている。9は器台の脚部で器受部を欠く、脚部には3カ所に穿孔が穿ってある、また器受部底部にも穿孔が穿ってあるが器面の整形のため両端が少し塞がってしまった。10は土玉であるがほとんどを欠いており、厚さ(29mm)を測るのみである。

#### 032号住居跡(第133図、図版51)

**遺構** 調査区南側東の端(I-12)に位置する。平面形状は5.3m×4.7mのやや北西隅が僅かに張り出す不整形の隅丸方形。確認面からの深さは最大で35cmを測る。床面は一様に平坦、中央部分が東西にやや踏み固められているほかは軟弱である。炉は2つの炉が結合したように形状を不整形にして住居中央やや北寄りに検出された。柱穴は2カ所検出されたが、本住居の主柱穴とは考えがたい。

**遺物** 土師器底部である、径が小さく小型の埴とも思われるが、このほかの遺物の出土は極めて少なく接合資料もないので断定はできない。

#### 033号住居跡(第134図、図版52・74)

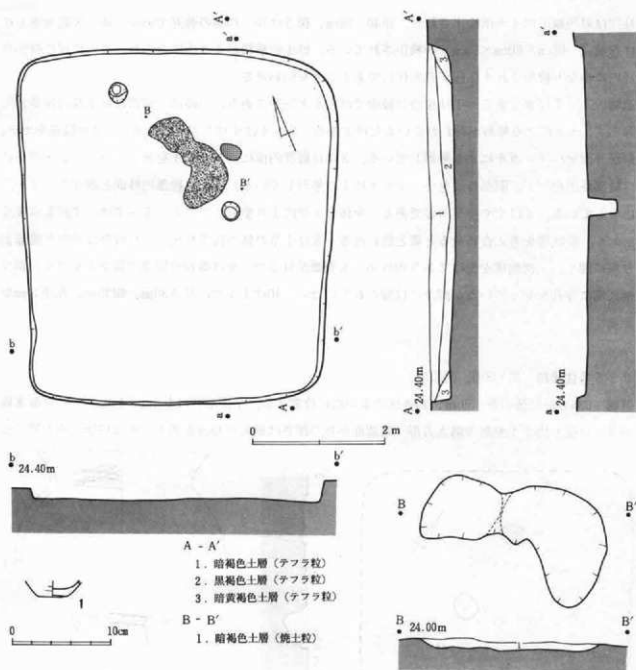
**遺構** 032号住居跡の西、調査区南側やや東(H-12)に位置する。炉と考えられる焼土と柱穴と考えられる小掘込みが検出され、さらにに焼土の南側には床面と考えられるよく踏み固められた箇所(2点鎖線でその範囲を示した)が検出した。そのほかの施設は検出されなかったものの、次に示す遺物が若干ではあるが出土しており住居跡とした。破線はその推定である。

**遺物** 1は壺の上半部である、ヘラナデの整形を施し、頸部内面にヘラミガキを加えている。2は小型の鉢で完形である。外面頸部に輪積痕が観察される。

#### 034号住居跡(第135図、図版52・74・86)

**遺構** 033号住居跡の東に隣接する。平面形状は4.7m×4.5mの僅かに北隅が張り出す隅丸方形と考えるが、東側4分の1を攪乱により破壊されており形状、規模の詳細は不明である。確認面からの深さは最大で33cmを測る。床面は平坦で、堅く踏み固められている。炉は検出されなかった。柱穴は対角線上と思われる箇所(2)に4カ所検出された、径30~40cm、深さ40cm前後を測る。炭化材が若干出土している。

**遺物** 1は口縁部を欠く土師器である、胴部の形状などを考え合わせると壺と思われる。底部には木葉痕が観察される。2は壺である、ナデによる整形が施されている。口唇部には布を折って作った角を押捺し刻み様の文様が加えられている。3は壺で底部を欠く、内外面ともナデによる整形が施されている。4は壺の底部で、木葉痕が観察される。5はほぼ完形の高杯である、脚に対して杯部が大きく緩やかに内湾しながら開く、脚部は3カ所の穿孔が穿たれている。6は高杯の脚部で、杯部と裾を欠く。3カ所の穿孔が穿たれている。7は器台である。8は器台である、器受部は直線的に開き、脚部は器受部より大きく開く。脚部には3カ所と器受部底部に穿孔が穿たれている。9は鉄製の刀子の



第133図 032号住居跡実測図及び出土遺物

挿図 番号	遺物 番号	器 種	法量 cm	遺存度	成形・調整手法	上段は内面・下段は外面	胎 土	色 調	焼成
1	5	土師器底 部	口 底 高 最大 2.8	10%	ナデ ヨコナデ、ナデ		細礫、瓦石 粒、赤色粒 子	黄褐色 内面黄褐色	良

茎の部分と思われる、僅かに木質の付着物が観察できる。

#### 035号住居跡 (第136・137図、図版52・75)

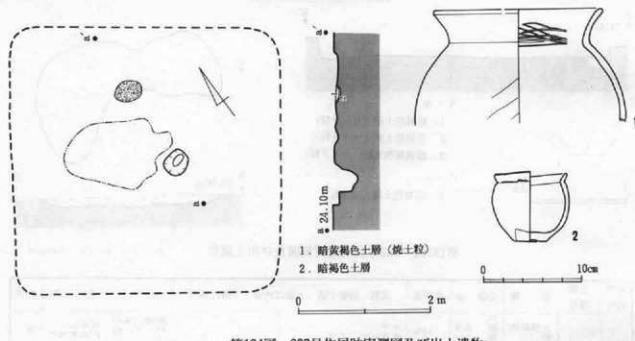
**遺構** 034号住居跡の南東に隣接する。平面形状は6.6m×6.4mの隅丸方形。確認面からの深さは最大20cmと浅い。床面は平坦で、全体的によく踏み固められている。炉は住居中央北寄りに検出された。

柱穴は対角線上に4カ所検出された、径40～50cm、深さは50～70cmの範囲である。南の壁際東寄りには貯蔵穴(60cm×60cm×50cm)が検出されている。焼土の堆積が4カ所にみられ、さらに炭化材が住居内にかなり検出され本住居が焼失住居であることを伺わせる。

遺物 1～7は壺である。1は複合口縁壺でほとんど完形である、口縁部・頸部には文様は施されておらず、ナデによる整形が行われているだけである。2～4はすべて完形である。2は口縁部をナデ、胴部外面をヘラミガキにより整形している。3は口縁部内面にヘラミガキを施し、ほかは2と同様に口縁部外面をナデ、胴部外面をヘラミガキにより整形している。また口縁部内外面と胴部の一部が黒色をしている。4はやや小型の壺である。全体をナデにより整形している。5～7はいずれも口縁部を欠く。形状等を考え合わせると壺と思われる。8は小型の鉢で底部を欠く、口縁部は肥厚し頸部より急に開く。二次焼成を受けており内外面とも剝離が目立つ。9は器台の脚部で器受部を欠く。器受部底部に穿孔を穿っているが脚部には穿たれていない。10は土玉で、厚さ30mm、幅35mm、孔径5mmを測る。

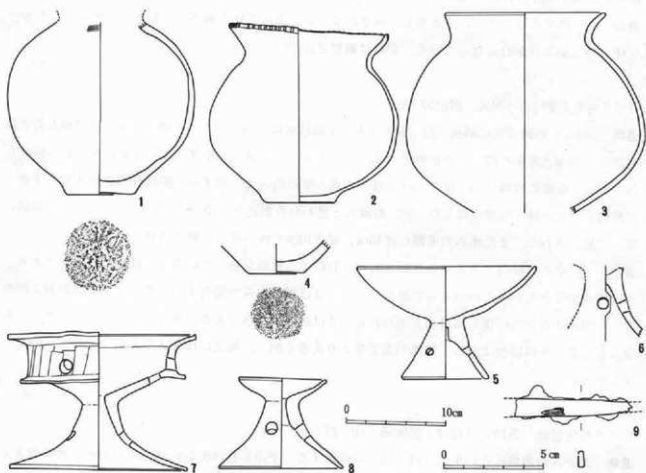
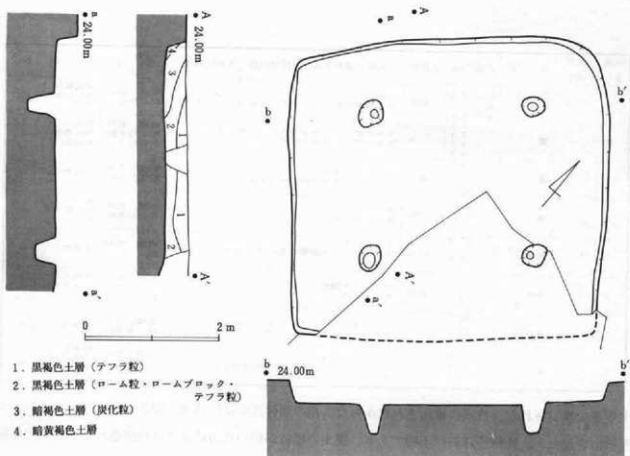
### 036号住居跡(第138図、図版53)

遺構 035号住居跡の南へ9m、調査区の東の端に位置する。平面形状は4.6m×4.0mのやや南東隅が僅かに張り出す不整形の隅丸方形。確認面からの深さは最大で45cmを測る。炉は住居の南の壁に接



第134図 033号住居跡実測図及び出土遺物

採図番号	遺物番号	器種	法量 cm	遺存度	成形・調整手法	上段は内面・下段は外面	胎土	色調	焼成
1	1	壺	口 17.0 底 7.2 高 最大21.7 3.4 6.9	25%	コナダのもヘラミガキ、コナダ コナダ、ヘラナダのもナデ、ヘラナダ		細粒、長石粒赤色粒子	黒褐色一部 赤褐色 内面淡赤褐色	良
2	2	小型鉢		100%	コナダ、たて方向のナデ、ヘララズリ		赤色粒子多量、細粒 炭粒少量	淡黄褐色	良



第135図 034号住居跡実測図及び出土遺物



押図 番号	遺物 番号	器 種	法量 cm	遺存度	成形・調整手法 上段は内面・下段は外面	胎土	色調	焼成
1	10.11	壺?	口 底 7.0 高 18.9 最大 1.6	40%	ナデ ハケ調整のヘラミガキ、ヨコヘラミガキ	細礫、長石 粒赤色粒子	桃黄褐色 内面剝離が はげしい	良
2	11	壺	7.4 17.7 19.3 16.0	70%	ヨコナデ、ヨコ方向のヘラミガキ、ナデ ヨコナデ、ヘラヨコナデ、ヘラケズリ	細礫、長石 粒、石英粒 赤色粒子	黒褐色 内面褐色、 黒褐色	良
3	11	壺	24.2	80%	ヨコナデ、ナデ ヨコナデ、ヨコ方向のヘラナデ	細礫、赤色 粒子長石粒	淡黄褐色	良
4	17	壺		11%	ナデ マテ方向のナデ	細礫、長石 粒、石英粒	褐色 内面黒茶褐 色	良
5	11	高杯	17.9 9.0 11.2	95%	ミガキ、ナデ ヨコナデ、ハケ調整のナデ、ヨコナデ、ヘラ ミガキ	細礫、長石 粒	淡褐色	良
6	14	高杯		40%	ナデ、ハケ調整 マテ方向のヘラミガキ	細礫、赤色 粒子、長石 粒	黒褐色 内面黒茶褐 色	良
7	2	器台	18.9 18.0 13.8	80%	ヘラミガキ、ナデ、ヘラナデ、ヨコナデ ヨコナデ、ヨコナデ、ヘラミガキ、ヨコナデ	細礫、長石 粒、石英粒	淡褐色	良
8	11	器台	8.8 12.4 9.1	55%	ヘラミガキ、ナデ ヨコナデのちミガキ、マテ方向のナデ、ヨコナ デ	細礫、雲母 赤色粒子若 干	淡褐色 内面淡褐色 一部 赤褐色	良

する様に検出された。柱穴は検出されなかった。南の隅付近には径75cm、深さ15cmの浅い窪みが1カ所検出されたが、性格等詳細は不明である。焼土の堆積が炉の周辺に2カ所検出されたが、炭材等焼失に関係すると思われる遺物は検出されなかった。

遺物 1は鉢である、ナデによる整形が施されている。2は高杯の脚部と思われる。裾のところをヘラ様工具で面取りを行こなっている。穿孔は観察されない。

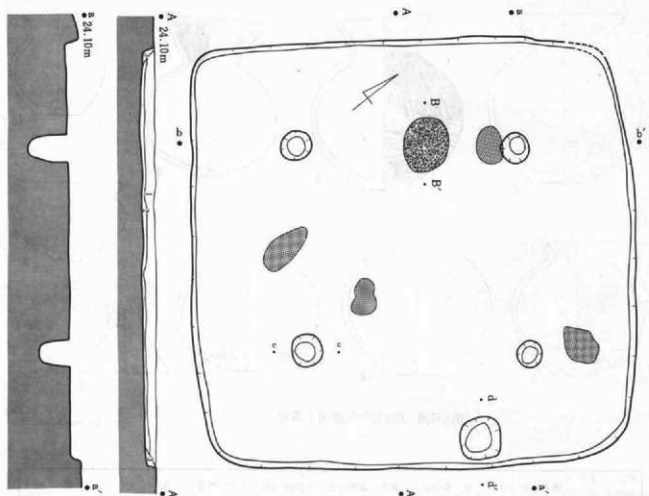
### 037号住居跡(第139図、図版53・75)

遺構 024号住居跡の北に隣接(G-11)する。平面形状は4.0m×3.5mの隅丸方形。確認面からの深さは最大10cmと非常に浅い。床面は貼り床でハードルームブロックを多く用い平坦に堅く踏み固められている。壁際には幅15cm、深さ10cm前後の周溝が壁に沿って一周する。炉は住居の中央やや東寄りに検出された。柱穴の検出はなかった。貯蔵穴と思われる掘込み(100cm×50cm×32cm)が南の周溝に接して検出された。また南西の壁際に径45cm、深さ10cmの浅い窪みが検出されている。

遺物 1は壺の口縁部である。内外面ともハケ目による整形を施している。2は壺の口縁部である、二次焼成を受けており内外面とも剝離が目立つ。3は脚部のみで接合する上部は欠く、器形および整形から判断すると台付甕の脚部部と思われる。4は高杯の脚部である、杯部を欠く。4カ所に穿孔を穿っている。5は器台である。脚部が器受部より大きく開く、脚部には3カ所と器受部底部に穿孔が穿たれている。

### 038号住居跡(第140~142図、図版53・76・77)

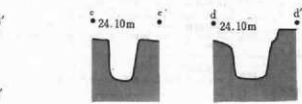
遺構 調査区の南端に近い東側(G-15)に位置する。平面形状は6.4m×6.2mのやや不整の隅丸方形。確認面からの深さは最大35cmを測る。床面は中央部分が微かに凸み部分的には堅く締まっている



1. 黒褐色土層 (炭化物・  
テフラ粒)
2. 暗褐色土層 (炭化物)
3. 暗黄褐色土層



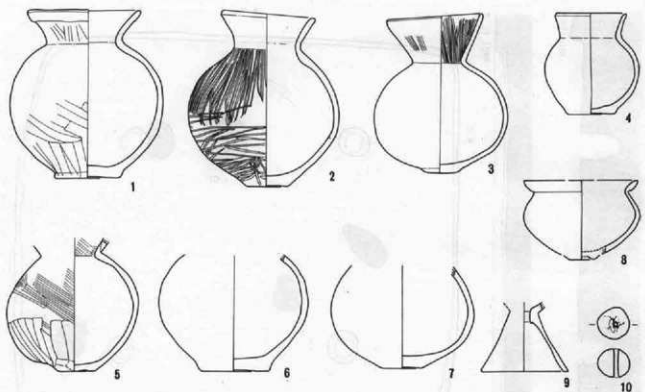
B  
B'  
23.90m



1. 暗褐色土層 (黄土粒)

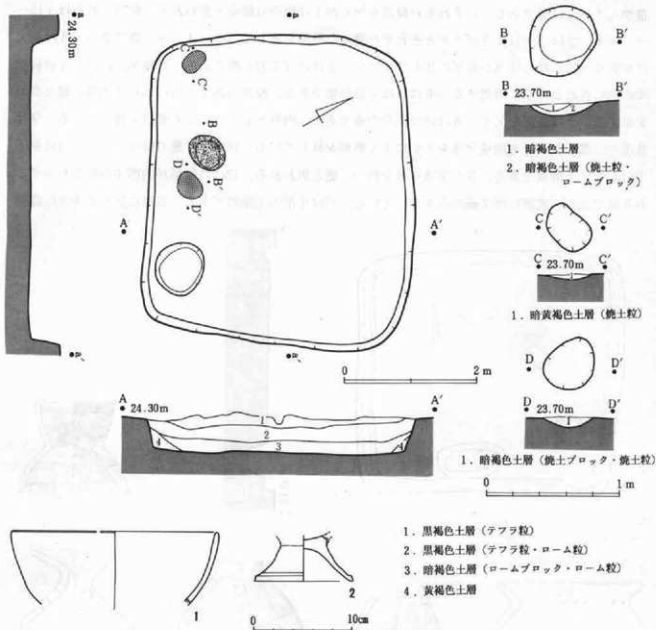


第136図 035号住居跡実測図



第137図 035号住居跡出土遺物

挿図 番号	遺物 番号	器 種	法量 cm	遺存度	成形・調整手法	上段は内面・下段は外面	胎土	色調	焼成
1	11	甕	口 11.3 底 6.5 高 17.1 最大 15.6	98%	ナゲ、ミガキ、ヨコナゲ ヨコナゲによる整形、ハケ調整のみナゲ、 ヘラケズリ、ナゲ		中粒砂、長石粒 石灰粒 赤色粒子	淡黄褐色	良
2	7	甕	8.0 4.2 17.6	100%	ヘラによるヨコナゲ ヘラによる整形のみヨコナゲ、ヘラミガキ ヘラミガキ、ヘラミガキ		細礫、産母 を若干、赤色 粒子を含む	淡褐色（上半） 暗茶褐色（下半） 内面淡褐色	良
3	9	甕	9.7 3.7 16.0 13.7	98%	ヨコナゲのみヘラミガキ ハケミヨコナゲ、ハケミナゲ、ヘラミガキ、ヘ ラによる整形		細礫（大き め） 長石粒、赤 色粒子	黒色及び明 褐色 内面黒色	良
4	8	甕	7.2 4.9 10.3 9.8	100%	ナゲ ヨコナゲ、ナゲ、ナゲ		細礫、赤色 粒子、長石 粒	暗茶褐色、 黒 内面暗茶褐 色	良
5	14	甕	3.8 13.6	80%	ハケ調整、ナゲ ヨコナゲ、ハケ調整、ヘラケズリ、ヘラによる 整形		細礫、赤色 粒子、長石 粒	淡褐色	
6	10, 13, 15	甕	7.3 15.3	40%	ヘラナゲ ナゲ、ヘラによる整形、ヘラケズリ		細礫、赤色 粒子、長石 粒産母若干	淡黄褐色、 内面淡黄褐 色	良
7	16	甕	4.1 14.7 11.8	80%	ナゲ ヨコヘラミガキ、ヘラによる整形		細礫、赤色 粒子、長石 粒若干 石灰粒若干	赤褐色 黒色褐色	良
8	2	鉢	2.3 7.9 12.0	30%	ナゲ		細礫、長石 粒	赤褐色と黒 色 内面赤褐色	やや 不良
9	22	器台	8.7	100%	ナゲ ナゲ、ミガキヘラミガキ		細礫、長石 粒	褐色	良

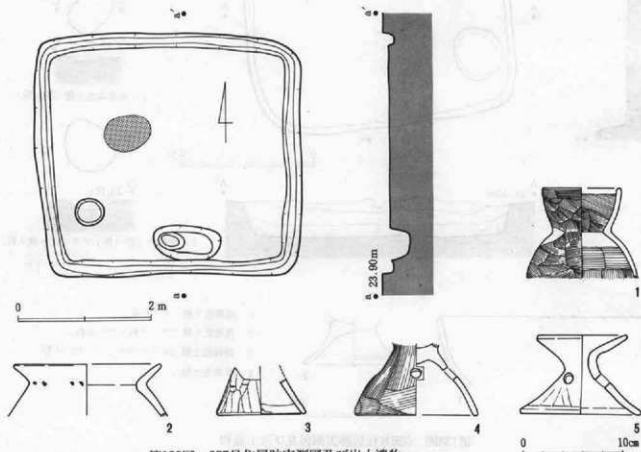


第138図 036号住居跡実測図及び出土遺物

探図 番号	遺物 番号	器 種	法量 cm	遺存度	成形・調整手法 上段は内面・下段は外面	胎 土	色 調	焼成
1	6	鉢	口底 高最大 20.8	25%	※コナダ、ヘラによる整形 ※コナダ、斜め方向のナダ（ハケ調整とも見える）	細網、長石 粒、赤色粒 子、雲母少 し	褐色一部黒 褐色 内面褐色	良
2	3	高杯	10.0	10%	※コ方向の「ガキ ナダ、タテ方向の「ガキ	細網、長石 粒、赤色粒 子	褐色 内面褐色	良

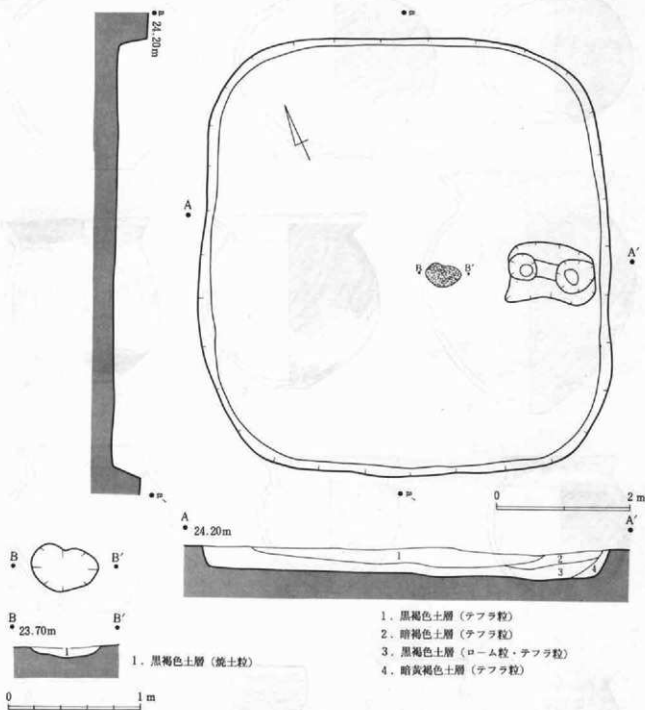
箇所もみられるが全体としては軟弱である。炉は住居のはば中央僅かに東側に検出された。柱穴は炉の東側に連続して2カ所検出された、この掘込みは溝でつながっており柱穴と言う性格の施設ではないと考える。その性格等詳細は不明である。焼土の堆積はなかったが、炭化材が少量出土しており焼失住居であることを伺わせている。

遺物 1～3は壺である、いずれも口縁部を欠くが1は複合口縁壺と思われる。胴部の外面は1はヘラミガキ、2はハケ目、3はナデとそれぞれ違った整形を施している。4～9は甕である。4は最大径を胴部上位に持ち底部が器形に比して小さい。5はほぼ完形の甕である、口縁が急に広がり口唇部で内側に折れるように内湾する。6はほぼ完形の甕である、頸部があまり内に入らず円筒の様な器形を呈する。7は底部を欠く。8はほぼ完形の壺である、内外ともナデにより整形を施している。9は底部の一部を欠く、8同様全体をナデにより整形を施している。10は台付甕の脚部である。11は胴下半分を欠く土師器である、5の字状口縁を持つ。甕と思われる。12は口縁部が内湾する碗形を呈する有孔鉢である。底部に径7mmの孔を穿っている。13は小型の土師器である。器形に比して大きな底部



第139図 037号住居跡実測図及び出土遺物

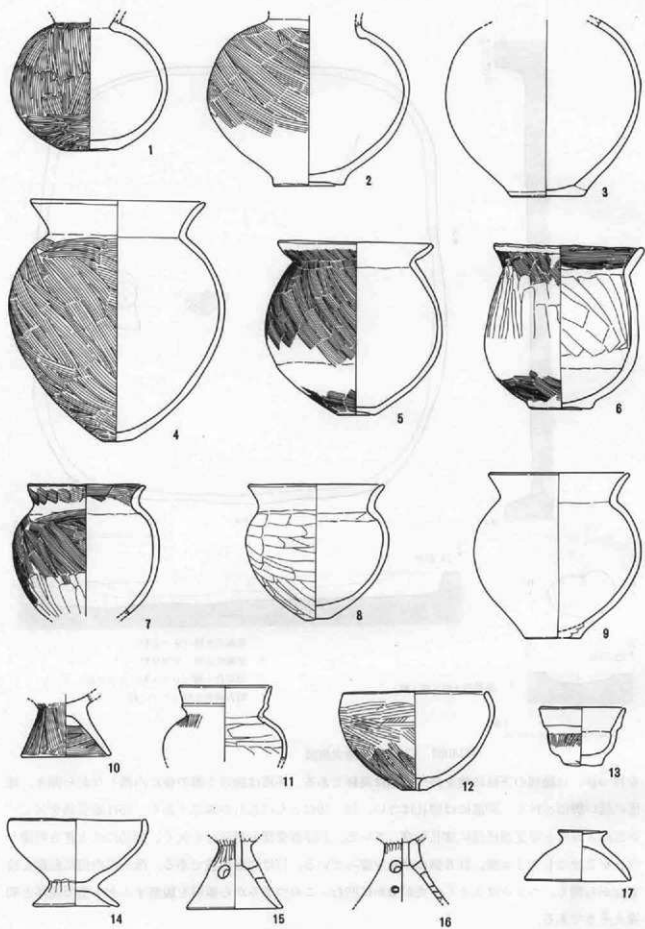
挿図 番号	遺物 番号	器 種	法量 cm	遺存度	成形・調整手法 上段は内面・下段は外面	胎土	色調	焼成
1	1	壺	口 底 高 最大 8.0 14.8	30%	ハケ調整、ナデ、ヨコ方面ハケメ ナデ、ヨコ方向ハケメ、ハケメ、タテ力内にハケ調整	細砂少量	黒褐色	良
2	1	甕		25%	ヨコナデ、ハケ調整 ヨコナデ、ハケ調整	細砂多量長 石粒赤色粒 子	赤褐色 内面赤褐色	良
3	1	台付甕脚 部	12.4 7.1	37%	ヘラケズリのも丁寧なナデ ヘラケズリ	細砂少量、 長石、石英 若干	褐色	良
4	1	高杯脚部	10.8 4.8	45%	ナデ ハケ調整	細砂、長石 粒、赤色粒 子若干	淡黄褐色	良
5	1	器台	9.0 12.2 8.0	50%	ヘラケズリのもナデ、ヨコナデ、ヘラケズリの も丁寧なナデ ヘラケズリのもナデ、ヨコナデ、ヘラケズリ、 ヨコナデ	長石粒多量	赤褐色	良



第140図 038号住居跡実測図

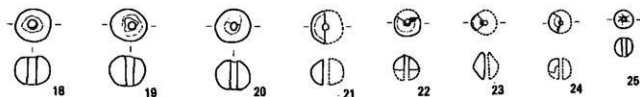
を持つが、口縁部の下位に稜を持つ。14は高杯である。杯部は碗形土器の様に内湾しながら開き、底部に低い脚部が付く。脚部には穿孔はない。15・16はともに器台の脚部である。15は器受部を欠く、脚部に3カ所と器受部底部に穿孔を穿っている。16は器受部と裾部分を欠く、脚部には大きさの違う穿孔を2段にして3カ所、計6個の穿孔を穿っている。17は完形の蓋である。微かに内側に曲線を描きながら開く。つまみは大きく中央が微かに凹む。このつまみから器形を観察すると小型の高杯と間違えそうである。

18～25は土玉である。18～20と25の4個は完形で、25をのぞく3個はやや大きめで孔の径も大きく



第141图 038号住居跡出土遺物

0 10cm



第142図 038号住居跡出土遺物

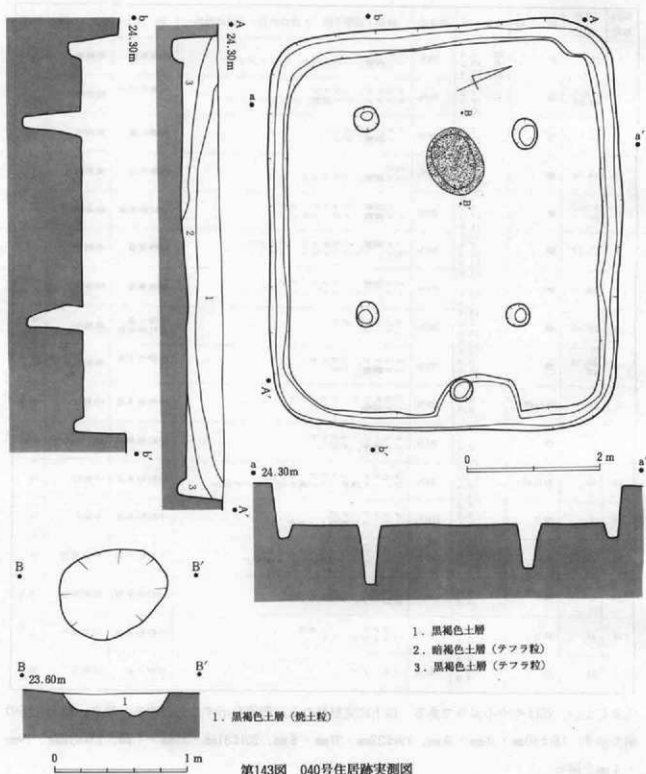
挿図 番号	遺物 番号	器 種	法量 cm	遺存度	成形・調整手法 上段は内面・下段は外面	胎 土	色 調	焼成
1	22	壺	口 底 5.4 高 13.5 最大 15.4	66%	ナデ ハケ調整、ヘライガキ、ヘラズリ	細礫多量	茶褐色	良
2	1,3,7, 12,29	壺	7.2 17.3 20.4	50%	ヨコナデ、ヘラナデ ヨコナデ、ハケ調整、ナデ、ヘラズリ	細礫やや多い	暗茶褐色	やや良
3	19	壺	7.3 17.9 19.7	66%	ナデ、ナナム ハケ調整、ナデ	細礫少量	黄褐色	良
4	14,16	壺	3.2 23.7 21.6	75%	ナデ ハケ調整、ヘラズリ、ナデ	細礫多量	淡茶褐色	良
5	4,20, 23	壺	15.8 4.0 17.0 18.0	90%	ハケ調整、ヨコナデ、ナデ ハケ調整、ナデ、ハケメ	中粒砂多量	暗茶褐色	良
6	12,13	壺	15.1 6.4 16.3 15.6	90%	ハケ調整、ヘラズリ、ヘラナデ ナデ、ハケヘラズリ、ヘライガキ	細礫多量	茶褐色	良
7	28	壺	11.5 13.1 14.4 13.8	75%	ハケ調整、ヘラナデ、ナデ ナデ、ハケ、ナデ、ハケ	細礫多量	暗茶褐色	やや不良
8	29,30	壺	2.6 13.5 14.5	90%	ヨコナデ、ナデ ヘラナデ	細礫少量、 中粒砂多量	黄褐色	やや良
9	25,28, 29	壺	14.5 5.6 16.5 16.8	75%	ヨコナデ、ヘラナデ ハケ調整、ナデ	細礫やや多い	黄褐色	やや不良
10	24	台付壺	9.0 6.3	25%	ヘラズリ、ナデ、ヘラ ハケ調整	中粒砂多量	暗褐色	不良
11	7	壺	9.7 7.4 12.3	87%	ヨコナデ、ヘラナデ ハケ調整、ナデ	中粒砂多量	暗茶褐色	不良
12	15	有孔鉢	14.5 2.35 9.9 15.6	22%	ヨコナデ、ヘラナデ、ナデ 荒いハケ調整、タシ歯を使ってナデとか	中粒砂多量	茶褐色	良
13	35	増?	9.6 3.7 5.8	100%	ヨコナデ、ナデ ナデ、ハケ調整、ナデ	中粒砂多量	茶褐色	良
14	7,12	高杯	13.5 8.6 8.65	60%	ヘラナデ、ヘラズリ、ナデ ヘライガキ、ヘラナデ、ヨコナデ	中粒砂多量	暗茶褐色	良
15	8	舞台	9.6 6.9	16%	ヘラナデ 軽いヘラナデ、ヘラナデ	中粒砂多量	暗茶褐色	不良
16	18	舞台	6.4	20%	ヘラナデ、ヘライガキ ヘライガキ、ナデ	中粒砂多量	暗茶褐色	やや良
17	21	壺	4.8 10.6 4.9	90%	ナデ、ナデ	細礫多量	赤褐色	良

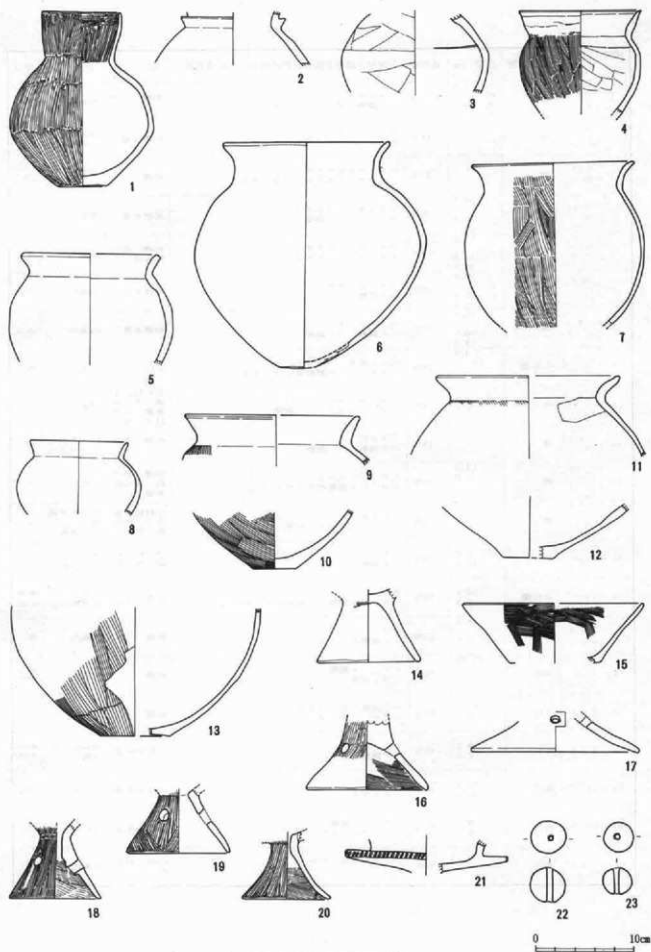
焼成もよい。25はやや小ぶりである。以下に完形品のみ計測値を示すこととする。厚さ・幅・孔径の順で示す。18は30mm・36mm・9mm、19は32mm・37mm・8mm、20は31mm・35mm・7mm、25は19mm・19mm・4mmを測る。



040号住居跡 (第143・144図、図版54・77)

**遺構** 調査区の南端の近く (F-15) に位置する。平面形状は6.0m×5.2mの隅丸方形。確認面からの深さは最大50cmを測る。床面は平坦で堅く踏み固められている。壁際には幅20cm、深さ20cm前後の周溝が壁に沿って一周するが、北東隅で若干内側に膨らみ、東側では貯蔵穴のような台形状に内側に膨らんでいる、ともにその性格等詳細は不明である。炉は住居中央やや西寄りに検出された。柱穴は





0 10cm

第144图 040号住居跡出土遺物

押出 番号	遺物 番号	器 種	流量 cm	遺存度	成形・調整手法 上段は内面・下段は外面	胎 土	色 調	焼成
1	2.7.8. 9	壺	口 7.9 底 5.0 高 12.7 最大14.5	75%	ヘラミガキ ハケ調整、ナデヘラミガキ	細織や多い	明茶褐色	良
2	31	壺		11%	ナデ、ヘラナデ ナデ、ヘラケズリのもヘラミガキ	細織少量	赤褐色 内面黒褐色	良
3	9.15. 30	壺		33%	ヘラケズリのもナデ ヘラケズリのもナデ、ヘラケズリ	細織	黒褐色 内面灰褐色	良
4	10.15. 27	壺	12.2 10.3 12.1 14.2	25%	ヘラナデ、ヘラケズリ ヨコナデ、ハケ調整	細織多量	黒褐色	不良
5	6.15. 28.30	壺	10.8 16.4 16.9	26%	ヘラケズリのもナデ ヨコナデ、ヘラケズリ	細織、長石 粒多量	黒褐色	良
6	18.20. 29. 15P-7	壺	22.4 23.4 16.2	40%	ヨコナデ、ナデ ハケ調整、ナデ?	細織多量	茶褐色	不良
7	2.8.9. 18.28	壺	16.1 18.0 9.8	40%	ヘラナデ、ナデ ハケ調整、ハケ調整	細織多量	暗褐色	不良
8	7.8.12 18.19	小型壺		18%	ヘラミガキ、ヘラナデ ヘラナデ、ハケ調整後ヘラミガキ	細織	黒褐色	良
9	2.9.12 15.22. 28	壺	4.4 5.5	28%	ヘラナデ、ナデ ナデ、ヘラナデ、ハケ調整	長石粗粒多 量、中粒砂 多量、赤色 粘土少量	黒褐色	良
10	2.9.12 14	壺		13%	ヘラナデ ハケ調整、ハケ調整	細織、雲母 若干	外面茶褐色 内面灰褐色	良
11	6.7.9. 11.12. 15.18. 19	壺	18.4 5.6	25%	ナデ、ヘラケズリ。 ナデ、ハケ調整のもヘラナデ	細織、長石 粒、雲母粒 多量	黒褐色	良
12	6.7.9. 11.12. 15.18. 19	壺		11%	ヘラケズリ ヘラケズリ、ヘラミガキ	中粒砂多量 長石、赤色 粘土若干	外面暗茶褐色 内面灰褐色	良
13	9.30	壺	5.0 12.5	16%	ナデ ハケ調整	雲母粒、細 織、長石粒	黒褐色 内面暗褐色	良
14	24	台付壺	10.6 7.3	24%	ナデ ナデ、ハケ調整、ヘラケズリ、ナデ	細織多量	暗褐色 暗茶褐色	やや 不良
15	2.7.9. 30	高杯	18.3 5.7	25%	ナデ ハケ調整のもナデ	細織	茶褐色	良
16	15.30	高杯	12.25 6.6	25%	ナデ、ハケ調整 ヘラミガキ	細織	灰褐色	やや 不良
17	8.9.10	高杯	17.0 3.0	12%	ハケ調整のもヘラナデ ミガキ、ヘラナデ	細織	黒褐色	良
18	2.8.9	鉢台	9.2 7.5	45%	ナデ ハケ調整、ナデ	中粒砂多量	赤褐色～暗 灰褐色	やや 不良
19	23	鉢台	10.3 6.5	48%	ナデ ヘラミガキ	中粒砂多量	暗灰褐色	不良
20	12.18	鉢台	9.0 6.7	50%	ナデ、ハケ調整 ヘラミガキ、ナデ	中粒砂多量	暗赤褐色	不良
21	1.3.12	鉢台		25%	ナデのもヘラミガキ ナデ	細織、長石	灰褐色	良

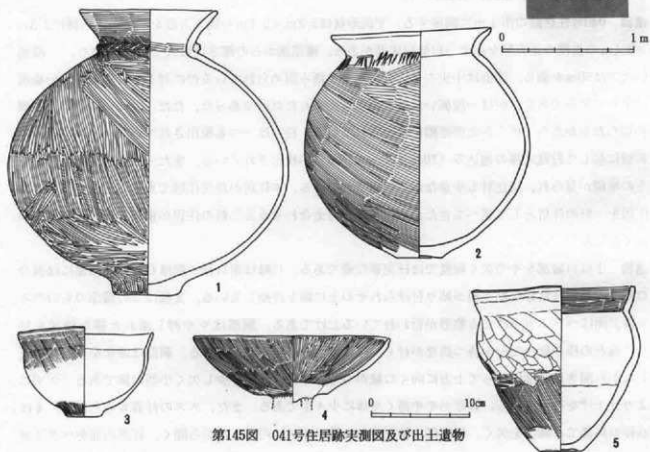
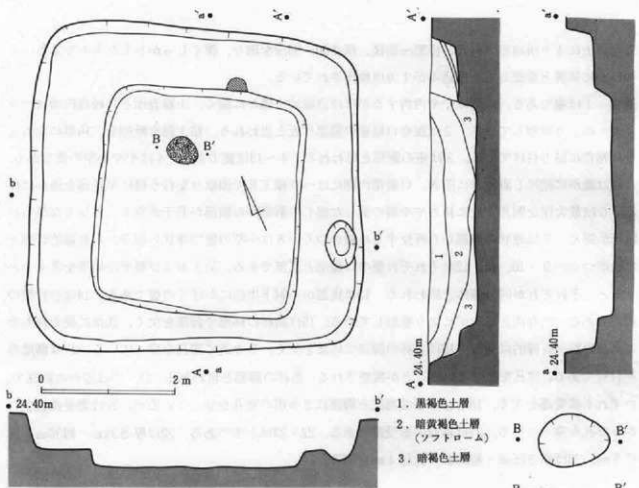
対角線上に4カ所検出された、径35cm前後、深さ60~90cmを測り、深くしっかりしたものである。そのほかに周溝と重複して小掘込みが1カ所検出されている。

遺物 1は壺である、口縁はやや内湾するがほぼ直線的に僅かに開く。土器表面と口縁部内面はヘラミガキにより整形している。2は複合口縁壺の頸部付近と思われる。粘土紐を断面を三角形になるように頸部に貼り付けている。3は壺の胴部と思われる。4~13は甕である。4はやや小型の甕である、口縁は微かに肥厚し直線的に開き、口唇部内側にはヘラ様工具で面取りを行う様に平坦部を僅かに作る。6は最大径を胴部上位に持ちやや肩の張った感じの胴部から頸部が若干直立し、外反しながら口縁部が開く。7は球状の胴部から外反する口縁がつく。8は小型の甕で球状の胴部から直線的に開く口縁がつく。9・10、11・12はそれぞれ甕の口縁部と底部である、胎土および整形技術等を考え合わせると、それぞれが同一個体と思われる。13は底部から胴下半部にかけての甕である。14は台付甕の脚部である、内外面ともナデにより整形している。15は高杯の杯部で脚部を欠く、底部に稜を持ちそこから口縁が直線的に開く。16は高杯の脚部で杯部を欠く、3カ所に穿孔を穿っている。17は脚部の裾付近である、穿孔を穿っていることが観察される。高杯の脚部と思われる。18~20は器台の脚部で、いずれも器受部を欠く。18と19は器受部底と脚部に3カ所の穿孔を穿っているが、20は器受部底部にのみ穿孔を穿っている。21は器台の器受部である。22・23は土玉である。22は厚さ34mm・幅36mm・孔径5mm、23は厚さ26mm・幅29mm・孔径4mmを測る。

#### 041号住居跡(第145図、図版54・78)

遺構 040号住居跡の南4mに隣接する。平面形状は5.2m×5.1mの隅丸方形を示すが、内側に3.3m×3.1mの規模の正方形を示す一段低い床面がある。確認面からの深さは最大で70cmを計り、一段高い所では50cmを測る。床面は中央の低い場所が堅く踏み固められているのに対して、周囲の高い場所は全体に軟弱である。炬は一段低い床面北側に検出されただけであった、ただ一段高い床面にも内側に切られるかたちで焼土が北側壁際に検出されている。柱穴は一つも検出されていない。高い床面東の壁に接して貯蔵穴様の掘込み(70cm×50cm×15cm)が検出されている。また一段低い箇所からは焼土の堆積が見られ、炭化材も少量ながら検出されている、本住居が焼失住居であることが伺える。本住居を一軒の住居として述べてきたが、諸状況を考え合わせると二軒の住居が重複している可能性が高くなった。

遺物 1は口縁部をやや欠く程度ではほぼ完形な壺である。口縁は素口縁で肥厚しない。頸部には複合口縁壺で見られた様な粘土紐が貼り付けられその上に縄を押し捺している。文様はこの頸部のもののみで器表面はヘラミガキによる整形が行われているだけである。胴部はやや押し潰れた様な球状を呈し、高台の様な微かな段を持つ底部が付く。2はほとんど完形の甕である。胴部は球状を呈し、外反しながら開き口唇部に至って上方に向く口縁がつく。3は口縁部を少し欠く小型の鉢である。ナデにより仕上げを行っている、器厚がやや薄く全体に少々歪である。また、ススの付着もみられる。4は高杯の杯部で、脚部を欠く。杯底部に稜を持ち口縁が僅かに内湾しながら開く。杯部内面をヘラミガ



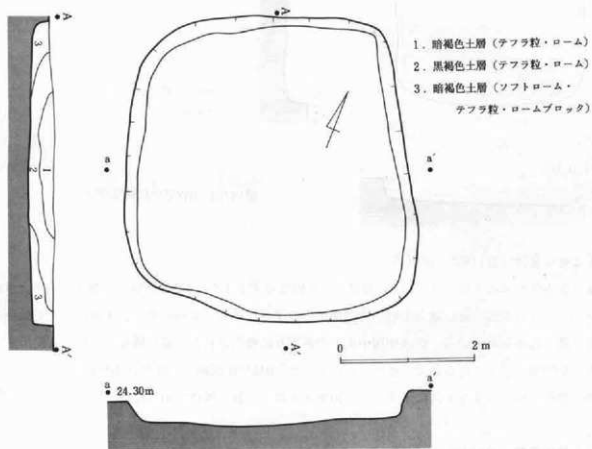
第145図 041号住居跡実測図及び出土遺物

挿図 番号	遺物 番号	器 種	法量 cm	遺存度	成形・調整手法 上段は内面・下段は外面	胎土	色調	焼成
1	13	甕	口 13.8 底 6.7 高 28.15 最大径 28.4 16.1	87%	ハケ調整, ハケメヘラミガキ ハケ調整, 荒いヘラミガキ, ハケメヘラミガキ	細礫多量	黄褐色	やや 良
2	7, 10, 16	甕	4.8 17.8 22.8 15.6	100%	ヨコナデ, ヘラケズリ, ナデ ヨコナデ, 浅いハケ調整	細礫多量	黄褐色	良
3	1	鉢	3.5 8.9	90%	ヘラナデ ハケ調整, ナデ	細礫多量	暗褐色	不良
4	11	高杯	20.0 6.1	45%	ヘラミガキ ヨコナデ, ハケ調整, ヘラミガキ	細礫多量	暗茶褐色	良
5	14	甕	16.5 4.5 16.4 16.3	100%	ハケ調整, ヘラケズリ, ナデ ヨコナデ, ナデ, ヘラナデ, ハケ調整	細礫多量	黄褐色	良

キにより丁寧に仕上げている。5は完形の甕である。胴部最大径を上位に持つ甕であるが、径を違えて作ってしまったものか、製作途中の歪みなのか、胴部中位に段を持つ。全体的に雑な作りである。

#### 042号住居跡(第146図、図版54)

遺構 041号住居跡の西側に隣接する。平面形状は一辺4.2mの隅丸方形と考えるが、調査の段階でやや南東隅が膨らみ台形に近い形状になってしまった。確認面からの深さは最大で36cmを測る。床面は全体に軟弱である。炉および柱穴などの施設は検出されなかった。



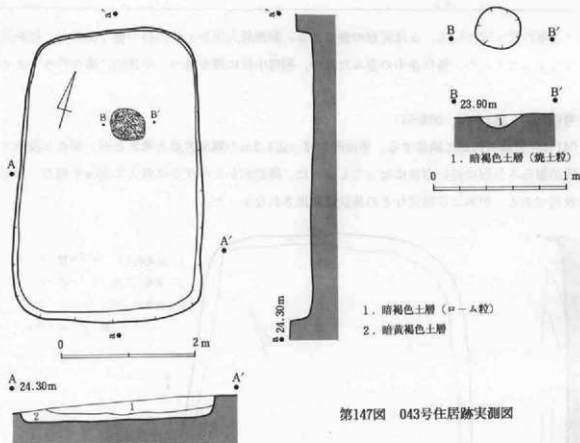
第146図 042号住居跡実測図

遺物 遺物の出土は極めて少なく図に示すことの出来る土器・土製品等はなかった。

#### 043号住居跡 (第147図、図版55)

遺構 042号住居跡の南で調査区の南端の緩やかな傾斜地に位置する。平面形状は4.4m×2.8mの台形に近い隅丸方形。確認面からの深さは最大で30cmを測る。床面は平坦で、全体に軟弱であった。炉は住居中央北側に検出された。柱穴の検出はなかった。

遺物 遺物の出土は極めて少なく図に示すことの出来る土器・土製品等はなかった。



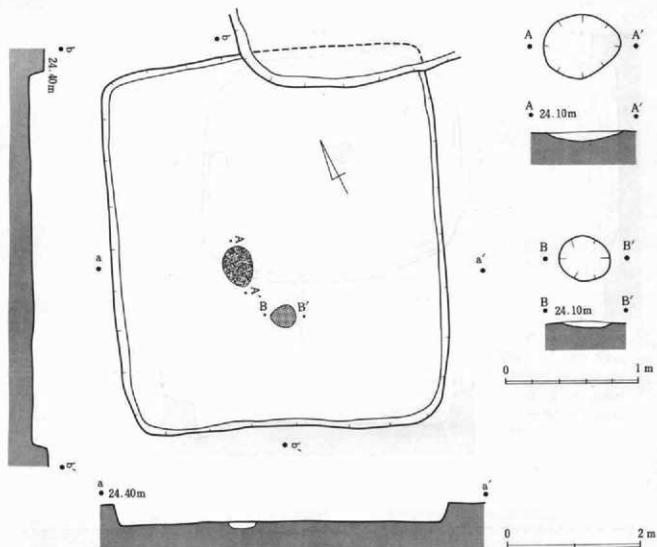
#### 044号住居跡 (第148図、図版55)

遺構 調査区の南端東側 (G-16) に位置し、北側で接するように045住居跡と重複する。平面形状は5.5m×5.0mの方形に近い隅丸方形。確認面からの深さは最大で30cmを測る。床面は中央が微かに凸み強く踏み固められている。炉は住居中央やや西寄りに検出された。南に隣接して焼土も検出されている。柱穴およびその他の施設は検出されなかった。045号住居跡との関係は本住居が古い。

遺物 遺物の出土は少なく図に示すことの出来る土器・土製品等はなかった。

#### 045号住居跡 (第149図、図版55・78)

遺構 044号住居跡の北に接するように重複する。平面形状は3.9m×3.4mの隅丸方形。確認面から

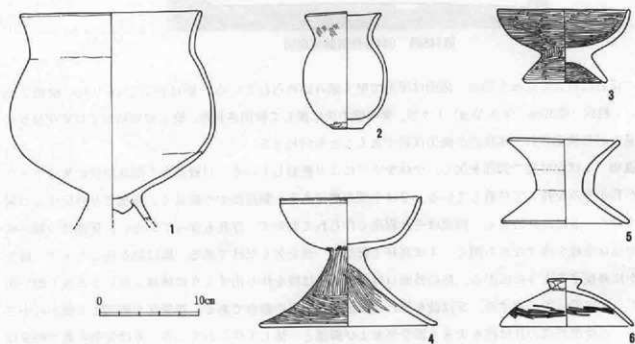
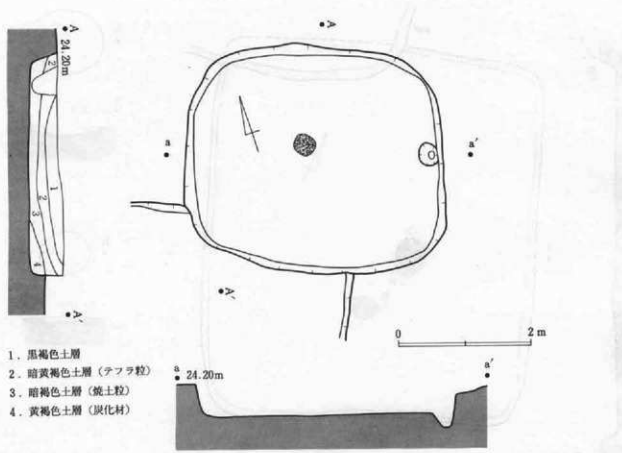


第148図 044号住居跡実測図

の深さは最大で42cmを測る。床面は平坦で堅く踏み固められている。炉は住居はぼ中央に検出された。柱穴(径30cm、深さ20cm)1カ所、東の壁中央に接して検出された。焼土の堆積および炭化材が少量ながら検出され、本住居が焼失住居であることを伺わせる。

**遺物** 1は台付甕で脚部を欠く。全体をナデにより整形している。口縁部から胴部中位に欠けてススが若干厚みを持って付着している。2は小型の甕である、胴部はやや細長く、頸部より外反する口縁が付く。3は高杯である、脚部はそれ程高く作られておらず、穿孔も穿っていない。杯部は口縁が碗の様な曲線を描きながら開く。4は高杯で脚部の一部を欠くだけである。脚は裾を杯より大きく緩やかに外反するように広がる。杯の外開口唇部直下には段を作り出すように棒様工具による浅く細い溝が口縁に沿って一周する。5は鼓を思わせる形状の完形の器台である。器受部が脚部より微かに小さい。器受部底部の孔は径も大きく器受部および脚部と一体して作られている。6は完形の蓋で焼成はよい。丁寧に作られたつまみを持ち緩やかに内湾しながら開く。





第149図 045号住居跡実測図及び出土遺物

押出 番号	遺物 番号	器 種	法量 cm	遺存度	成形・調整手法 上段は内面・下段は外面	胎 土	色 調	焼成
1	3.6	白付甕	口 18.25 底 20.95 高 20.8 最大 7.8 3.1 6.4 8.6	75%	ヘラナデ、ナデ ヘラナデ、ケズリ	中粒砂多量	暗茶褐色	不良
2	10	小形甕	13.4 8.5 7.2	83%	ヨコナデ、ヘラナデ、ナデ、ケズリ、ナデ ヘラナデ、ヨコナデ、ナデ、ナデ	中粒砂多量	茶褐色	良
3	5	高杯	14.4 18.2 12.7	86%	全国ヘラミガキ 全国ヘラミガキ	中粒砂多量	暗褐色	良
4	3.8	高杯	11.4 8.5 12.8	70%	ヨコナデ、ヘラケズリ、ヘラミガキ、ヨコナデ ヨコナデ、ハケ調整、ヨコナデ、ハケ調整、ナ デ、ミガキ	中粒砂多量	茶褐色	良
5	7	鉢台	13.2 4.8	100%	ヨコ方向のヘラミガキ、ヨコ方向のヘラによる 成形 メテ方向のヘラミガキ、ナナイ方向のヘラミガ キ、ヨコ方向のヘラミガキ	細粒赤色粒 子多量、雲 母若干、長 石粒	赤褐色 内面赤褐色	良
6	11	甕		100%	メテ方向のハケ調整、ヨコ方向のハケ調整 ヘラナデ、メテ方向のヘラ調整ハケ調整 ヨコナデ、ハケ調整成形のもの	細粒赤褐色 粒やや多く 雲母・赤色 粒子若干	赤褐色 内面赤褐色	良

#### 046号住居跡（第150図、図版55・79）

**遺構** 044号住居跡の東側、調査区の南端に位置する。平面形状は4.7m×4.0mの隅丸方形。確認面からの深さは最大で25cmを測る。床面は中央が微かに凸み、堅く踏み固められているが、周辺部は若干軟弱である。炉は住居のほぼ中央に検出された。ほかに焼土の堆積が3カ所検出された。

**遺物** 1・2は高杯である。1は欠損が多少あるが完形に近い。杯部は底部に稜を持ち緩やかに内湾しながら開く。脚は杯部に比して径は小さく広がる、3カ所に穿孔を穿っている。2は脚部を多少欠くがほぼ完形の高杯である。杯部は底部に稜を持ちほぼ直線的に開く。脚は杯部に比して径は多少小さく、3カ所に穿孔を穿っている。3は口縁部を多少欠くが完形に近い鉢形を呈する有孔鉢である。底部に径5mmの孔を穿っているのみである。内外面とも特に底部付近は丁寧にヘラミガキが施されている。

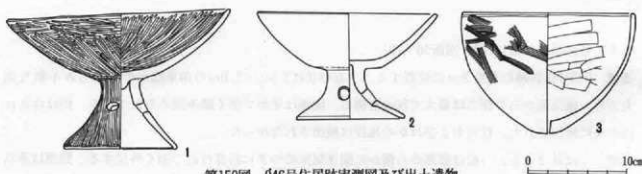
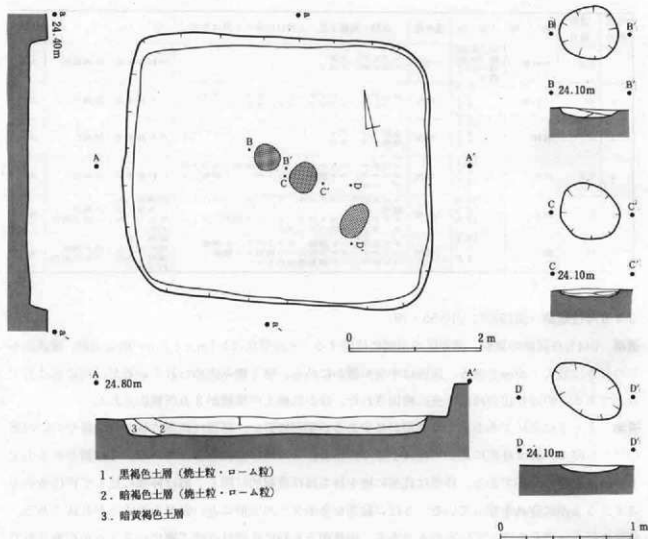
#### 047号住居跡（第151図、図版56・79）

**遺構** 045号住居跡の北東3mに位置する。平面形状は3.5m×3.0mの南東隅がやや膨らみ不整な隅丸方形。確認面からの深さは最大で20cmを測る。床面は平坦で堅く踏み固められている。炉は住居のほぼ中央に検出された。柱穴およびほかの施設は検出されなかった。

**遺物** 1は鉢である、口縁は頸部から微かに開き気味につき口唇部付近で強く外反する。頸部は非常に微かな稜を持つ。

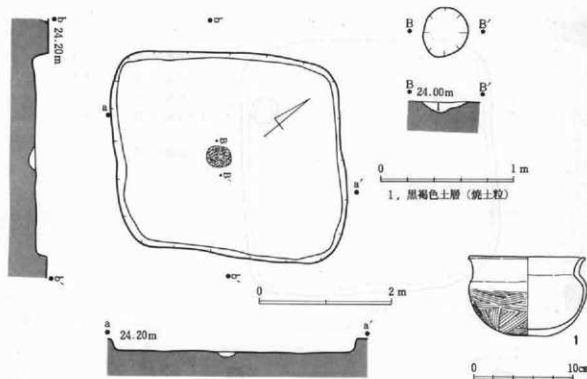
#### 048号住居跡（第152図、図版56・79・86）

**遺構** 035号住居跡の東3mの調査区の端に位置する。平面形状は3.8m×3.8mの隅丸方形。確認面からの深さは最大で40cmを測る。床面は一部に若干の凹みがあるものの全体に平坦である。炉および柱穴は検出されなかった。東の壁北寄りに接するように貯蔵穴（45cm×40cm×26cm）が検出されている。



第150図 046号住居跡実測図及び出土遺物

採回番号	遺物番号	器種	法量 cm	遺存度	成形・調整手法	上段は内面・下段は外面	胎土	色調	焼成
1	1, 4, 5, 8, 043-1	高杯	口 22.5 底 11.5 高 13.8 最大	83%	ナデ, ヘラミガキ, ハケ調整, ナデ ヘラケズリ, ヘラミガキ		中粒砂多量	淡黄褐色	やや不良
2	11	高杯	17.7 10.8 10.7	90%	ヨコのヘラナデ ヨコナデ, ナデのハケ調整のものヨコナデ		細粒赤色粒子多量, 長石粒	赤褐色 内面暗褐色	良
3	14	有孔鉢	17.2 2.8 11.9	95%	ヘラナデ, ヘラミガキ ヨコナデ, ハケ調整, ヘラミガキ		細粒赤色粒子, 長石粒 少し石英若干	淡黄褐色	良



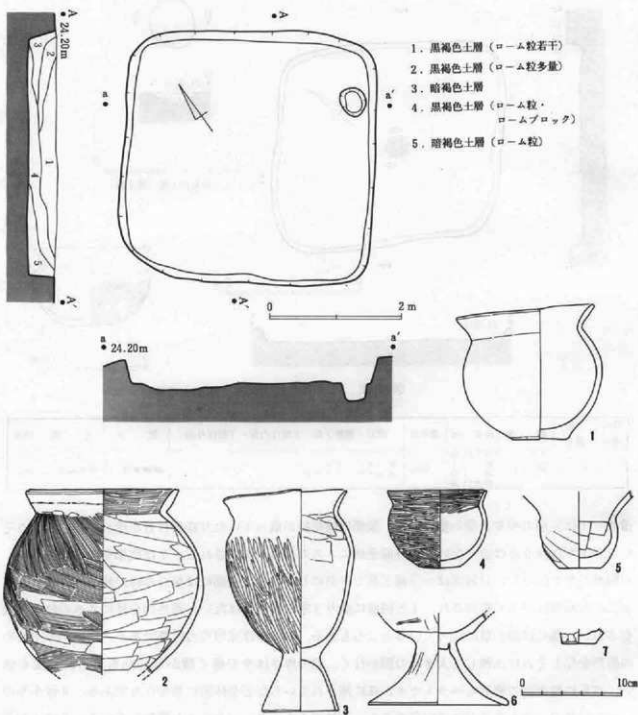
第151図 047号住居跡実測図及び出土遺物

採回 番号	遺物 番号	器 種	法量 cm	遺存度	成形・調整手法 上段は内面・下段は外面	胎土	色調	焼成
1	3	鉢	口 11.6 底 4.1 高 7.9 最大11.8	66%	コナデ、ナデ コナデ、ハケナデ	細礫多量	明茶褐色	良

遺物 1は完形のやや小型の甕である。頸部に輪積痕が残っていたり底部付近が潰れて傾斜したりそれほど丁寧な作りとは思えない。器外面全体にススの付着が観察される。2は底部を欠く甕である。口縁部が多少肥厚し、口唇部はヘラ様工具で平坦にしている。頸部には接合の跡が残り、口縁部及び胴部にも輪積痕が多く観察され、1と同様に余り丁寧な作りではない。器外面全体にススの付着が観察され、一部には薄い層になっているところもある。3はほぼ完形の台付甕である。胴部がやや長めの器形を呈しそれに比較して大きめの脚が付く。器の厚さはやや薄く微かな凹凸も見られ焼成も悪い、さらに器表面の整形もヘラミガキが雑に施されているなど全体的に雑な作りである。4は小型の鉢で、口縁の一部を欠くがほぼ完形である。内外面ともヘラミガキにより整形している。5は小型壺の胴部である、口縁部を欠く。焼成は非常によく堅致である。6は高杯の脚部である、杯部と裾の一部を欠く。杯部底に稜を有する。脚部には穿孔を持たない。7は手捏土器である、底部付近の残存で成形の跡が観察できる程度でどのような器形を呈するかは不明である。

#### 051号住居跡（第153図、図版56）

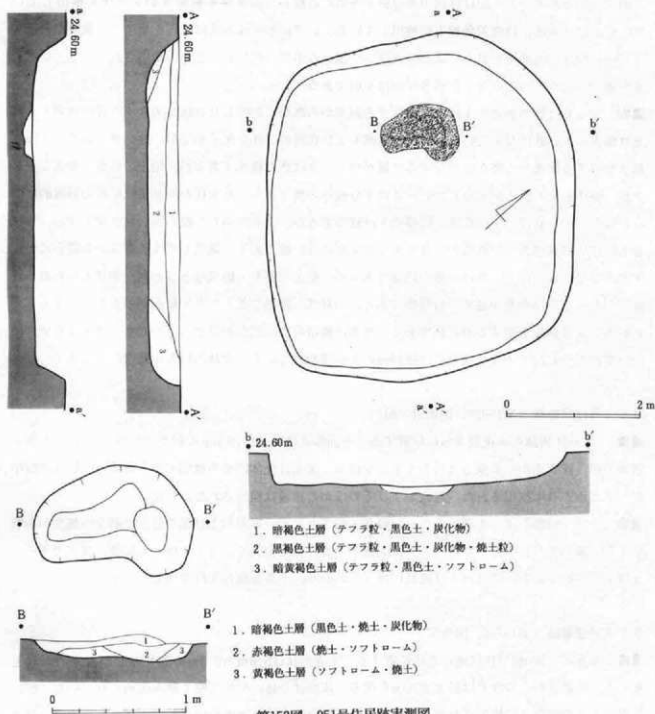
遺構 調査区北側の北西部（G-5）に位置する。平面形状は5.1m×4.6mの北の壁が張り出す不整な隅丸方形。確認面からの深さは最大で45cmを測る。床面は中央が微かに凹み堅く踏み固められてい



第152図 048号住居跡実測図及び出土遺物

邦図 番号	遺物 番号	器 種	法量 cm	遺存度	成形・調整手法	上段は内面・下段は外面	胎土	色調	焼成
1	10	壺	口 14.2 底 6.0 高 13.4 最大 14.1 15.4	100%	ヘラナデ, ナデ ヨコナデ, ヘラナデ		細織赤色粒 子を多く	暗褐色	良
2	1.2.9	壺	19.9 12.55	90%	ハケ調整, ヘラケズリ ヨコナデ, ヘラのアタリ, ハケ調整とヘラケズ リ		細織を多く	暗茶褐色	やや 良
3	7	台付壺	7.8 21.9 13.0	100%	ナデ, ヘラナデ, ナデ ナデ, 荒いヘラミガキ		細織を多く	暗茶褐色 黒褐色	やや 不良

挿図番号	遺物番号	器種	法量 cm	遺存度	成形・調整手法	胎土	色調	焼成
4	11, 12	鉢	口底高最大 10.0 4.0 7.6 9.9	69%	ヘラミガキ ヘラケズリ, ヘラミガキ	細礫を多く	黄褐色	良
5	6	小型壺	4.3	60%	ナデ, ヘラケズリ ハケ調整のちナデ, ヘラケズリ	細礫少量	茶褐色	良
6	8	高杯	13.8	50%	ナデ ヘラミガキ, ヘラナデ	赤色粒子, 細礫少量	淡黄褐色	良
7	1	手捏土器	3.1 1.2	25%	ナデ ナデ	細礫, 長石, 赤色粒子若干	黄褐色	良



第153図 051号住居跡実測図

るが、周囲はやや軟弱である。炉は大きく不整形で住居の中央やや北に偏って検出された。柱穴およびそのほかの施設は検出されなかった。

遺物 遺物の出土は少なく、図示できるものはなかった。

#### 052号住居跡（第154・155図、図版57・80）

遺構 051号住居跡の北東側5mに位置する。平面形状は8.5m×7.2mの東の壁が膨らむやや不整な隅丸方形。確認面からの深さは最大で40cmを測る。床面は中央に向かってわずかに凹み、全体的に堅く踏み固められている。炉は住居中央北側と西側に近接して大きな不整形な炉2カ所を検出している。柱穴は4カ所、ほぼ対角線上に検出している、いずれも平面形状は楕円を呈する。規模は長径30～40cm、深さ50cm前後を計る。ほかには浅い小掘込みが南の壁付近に2カ所検出されている、いずれも貯蔵穴と言うものではなく性格等詳細は不明である。

遺物 1～6は甕である。1は球状を呈する胴部から微かに肥厚した口縁が大きく直線的に開く。底部は僅かに上げ底になっている。2は口縁部および底部の一部を欠くが完形に近い甕である。1同様球状を呈する胴部から僅かに外反する口縁が付く。3は甕の底部であるが、胎土・整形・焼成など2と同一個体と思われるが接合しない。4は半分残存の甕である。最大径を胴部下位に持ち直線的に開く口縁が付く。底部は1の底部と同様に上げ底であるが、より内向して縁が高台状に突出する。5は2と同様に口縁部および底部の一部を欠くが完形に近い甕である。球状を呈する胴部から僅かに外反する小さな口縁が付く。6は甕の底部であるが、胎土・整形・焼成など5と同一個体と思われるが接合しない。7はやや小さめの台付甕である、口縁部と脚部を欠く。若干縦長が器形を呈すると思われる。8は鉢形を呈する有孔鉢である。外面は輪積痕での凹凸が目立つ、内面もミガキよりナデに近い整形が行われている。底部には径16mmの孔が穿たれている。全体的に多少雑な作りである。

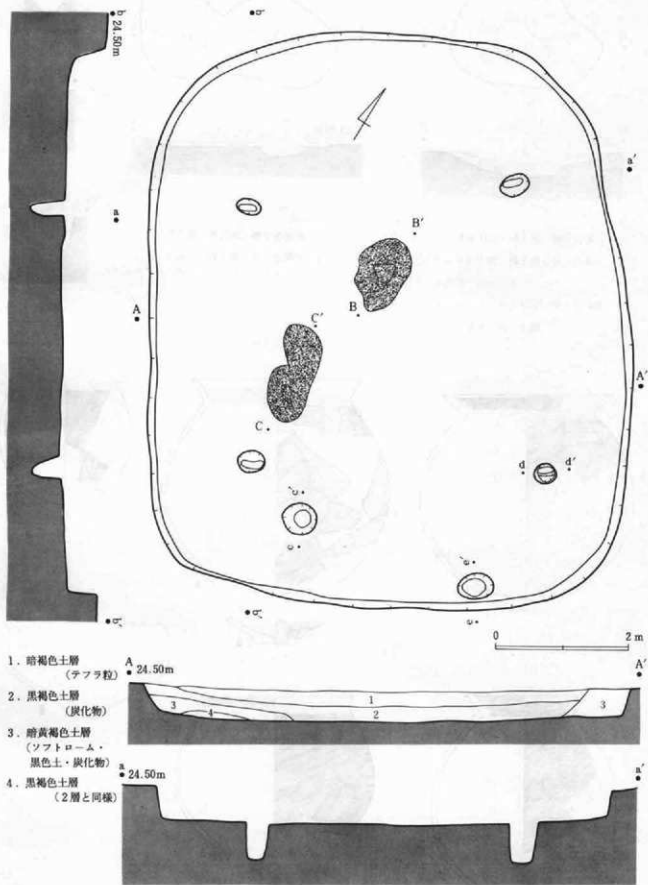
#### 053号住居跡（第156図、図版57・81）

遺構 052号住居跡の南東側4mに位置する。平面形状は3.7m×3.6mの壁がやや外へ膨らむ不整な隅丸方形。確認面からの深さは最大で30cmを測る。床面は全体にやや軟弱の傾向にある。炉は住居中央やや北西寄りに検出された。柱穴およびそのほかの施設は検出されなかった。

遺物 1は土師器胴部下半部である、口縁部・頸部を欠く。器形および頸部付近の縄文の施文から判断すると壺と思われる。2は甕である、胴部下半部・底部を欠く。3・4はともに甕の底部である。5は小型の碗である、底部は上げ底状になっており、小さな高台を作り出している。

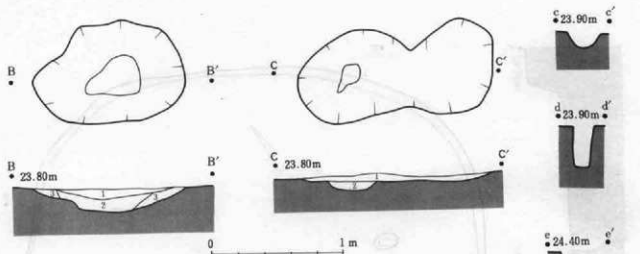
#### 054号住居跡（第157図、図版57）

遺構 調査区北側086号住居跡の北に位置する。平面形状は5.9m×5.3mの隅丸方形が本来の形状と考える。確認面からの深さは最大で70cmを測る。床面は全体に平坦で堅く踏み固められている。炉は住居中央やや東寄りに検出された。主柱穴はほぼ対角線上に4カ所検出された、径は40cm前後、深さ



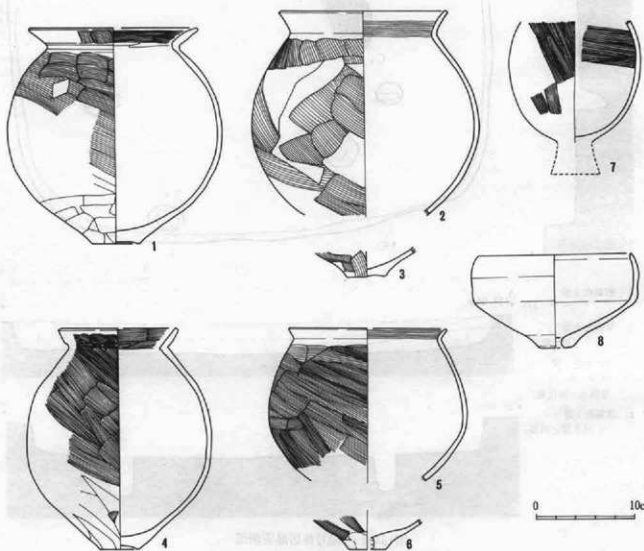
第154図 052号住居跡実測図





- 1. 暗褐色土層 (焼土粒・炭化物粒)
- 2. 赤褐色土層 (焼土粒・焼土ブロック・ソフトローム・暗色土)
- 3. 黄褐色土層 (ソフトローム・ロームブロック・焼土・炭化物粒)

- 1. 暗褐色土層 (炭化物・焼土粒)
- 2. 赤褐色土層 (焼土粒・焼土ブロック・ソフトローム・ハードロームブロック)



第155図 052号住居跡実測図及び出土遺物

採回 番号	遺物 番号	器 種	質量 cm	遺存度	成形・調整手法 上段は内面・下段は外面	胎 土	色 調	焼成
1	9.11. 12.13. 21	甕	□ 17.0 底 4.8 高 21.9 最大21.8	56%	ハケ調整、ヘラミガキ、ヘラナデ、ヘラケズリ ハケ調整、ナデ、ハケ調整、ヘラケズリ	細砂多量	黒褐色	良
2	9.11. 12.13 21	甕	17.2 23.2	46%	ハケ調整、ナデ、ヘラケズリ ハケ調整、ヘラケズリ	細砂多量	赤褐色	良
3	9.11. 12.13. 21	甕		11%	ハケ調整、ナデ、ヘラケズリ ハケ調整、ヘラケズリ	細砂多量	赤褐色	良
4	9.11. 13.21	甕	12.0 4.0 21.7	48%	ハケ調整、ヘラナデ、ヘラナデ ヘラナデ、ナデ、ハケ調整、ヘラケズリのちナ デ	細砂多量	黒褐色	良
5	7.9.13 17.21	甕	16.0 20.2	48%	ハケ調整、ナデ、ヘラナデ、ナデ、ヘラケズリ ナデ、ハケ調整、ヘラケズリ	細砂多量	茶褐色	良
6	7.9.13 17.21	甕		11%	ハケ調整、ナデ、ヘラナデ、ヘラケズリ ハケ調整、ナデ、ヘラケズリ	細砂多量	赤褐色	良
7	9.11. 12.21	台付甕		45%	ハケ調整、ナデ ハケ調整、ヘラミガキ	細砂少量	黒褐色	良
8	1.7.9. 11.12. 21	有孔鉢	13.0 15.4 9.2 17.0	91%	ナデ、ヘラナデ、ヘラケズリ ナデ、ヘラナデ、ヘラケズリ	細砂	暗褐色	良

は1.0～1.3mと全体に深い。東側の壁際には深さ25cmと45cmの連続する小掘込みが検出された。

遺物 遺物の出土は少なく、図示できるものはない。

#### 055号住居跡（第158図、図版58・81）

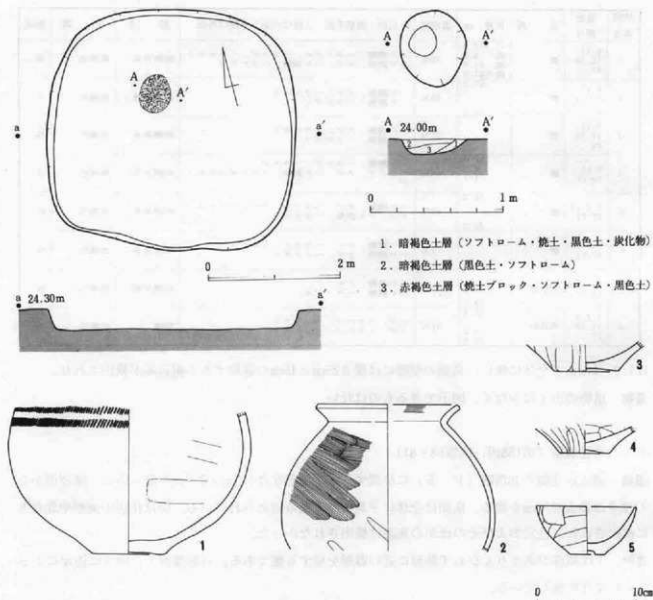
遺構 調査区北側の北西隅（F-5）に位置する。平面形状は4.0m×3.7mの隅丸方形。確認面からの深さは最大で30cmを測る。床面は全体に平坦で堅く踏み固められている。炉は住居中央やや北寄りに検出された。柱穴およびそのほかの施設は検出されなかった。

遺物 1は頸部があまりくびれず鉢形に近い器形を呈する甕である。口唇部直下の内外に指頭による押捺を交互に施している。

#### 056号住居跡（第159・160図、図版58・81・86）

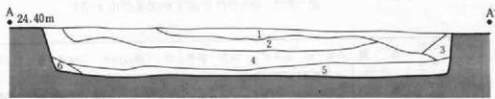
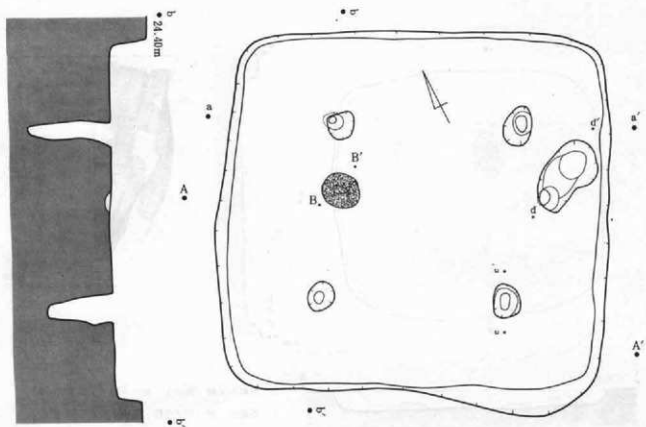
遺構 055号住居跡の南側9mに位置する。平面形状は4.8m×4.4mの隅丸方形。確認面からの深さは最大で65cmを測る。床面は全体に平坦で北東部分は堅く踏み固められているものそのほかはやや軟弱である。炉は住居中央で北寄りに検出された。主柱穴はほぼ対角線上に4カ所検出された、径は30cm前後、深さは45cm前後を測る。ほかには性格が不明な凹みが炉の北側と南側の壁に接した2カ所検出された。また炉の南に径45cm、深さ36cmの小掘込みが検出されている。

遺物 1は底部を欠く甕である。球状の胴部から口縁が外反しながら開く。口唇部には棒状工具を交互に連続して押捺し、波状にしている。2・3はいずれも土師器の下半部であり、いずれも甕の下半部と思われる。4は土玉で厚さ29mm、幅30mm、孔径6mmを測る。焼成もよく作りも丁寧である。5は鉄製品である、錆びがはげしく原形を知るのが難しい、断面を見ても刃部らしきものも見られず製品を特定できない。

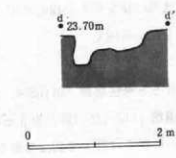
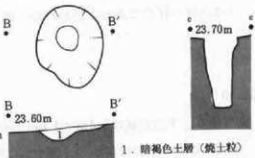
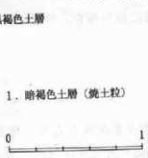
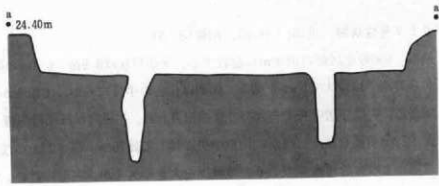


第156図 053号住居跡実測図及び出土遺物

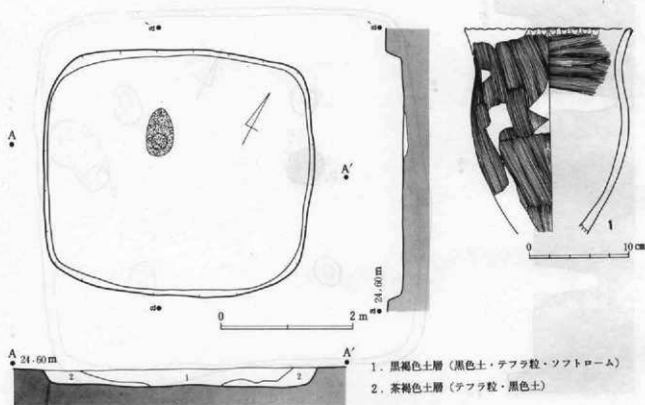
群団 番号	遺物 番号	器 種	法量 cm	遺存度	成形・調整手法 上段は内面・下段は外面	胎土	色調	焼成
1	1.4.7. 8	壺	口 14.0 底 9.2 高 最大 14.8	35%	ヘラケズリ, ヘラナダ スリケシ, ヘラミガキ	細織少量	黒褐色	良
2	1.4.7. 8	壺	14.8	35%	ハケ調整, ナダ, ヘラナダ ヘラナダ, ナダ, ハケ調整, ヘラミガキ	細織少量	黒褐色	良
3	1.4	壺底部		16%	ヘラケズリ, ヘラナダ ヘラナダ, ヘラケズリ	細織少量, 石英若干	外面赤褐色 内面赤褐色	良
4	2	壺底部		16%	ヘラケズリ ヘラケズリ	細織やや多 い, 英石若 干, 赤色粒 子若干	褐色	良
5	4.6	陶	10.0 3.5 4.7	80%	ヘラナダ ナダ, ヘラケズリ, ヘラミガキ, ナダのちケズ リ	細織	茶褐色	良



1. 暗褐色土層 (テフラ粒・ソフトローム)
2. 黒褐色土 (焼土粒)
3. 茶褐色土層 (テフラ粒・ソフトローム)
4. 暗茶褐色土層 (テフラ粒・ソフトローム・ロームブロック)
5. 暗黄褐色土層 (テフラ粒・ソフトローム・ロームブロック)
6. 黒褐色土層



第157図 054号住居跡実測図



第158図 055号住居跡実測図及び出土遺物

採回 番号	遺物 番号	器 種	法量 cm	遺存度	成形・調整手法 上段は内面・下段は外面	胎土	色調	焼成
1	1.2,3, 4,5	壺	口 16.8 底 最大16.0	40%	ハケ調整, ナデ ナデのち指でおさえる, ハケ調整, ハケ×メリ	細礫若干	黒褐色	良

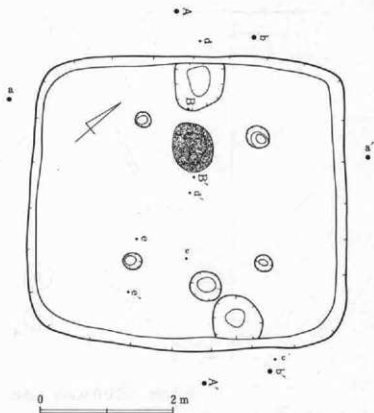
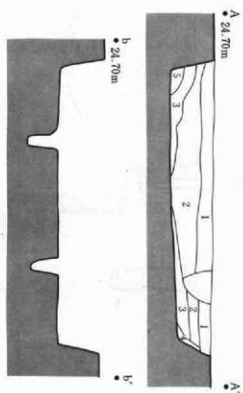
#### 057号住居跡 (第161・162図、図版58・81)

**遺構** 056号住居跡の南4mに位置する。平面形状は8.9m×6.8mの隅丸で胴の張る長方形。確認面からの深さは最大で53cmを測る。床面は住居の中央に向かって緩やかに凹み、全体としてはやや軟弱である。炉は住居中央やや北寄りに検出された。主柱穴はほぼ対角線上に沿って検出された。径60cm、深さ70cm前後を計る。ほかに南壁中央に接して径75cm、深さ20cmの浅い小掘込みが検出された。

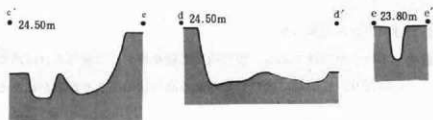
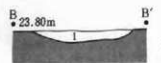
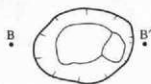
**遺物** 1は複合口縁壺である。口縁部を大きく欠くが、完形に近い。内外面ともナデによる整形が行われている。底部付近にはヘラミガキも行われている。内面は剥離が激しい。2は高杯の杯部である。底部に稜を持ち直線的に開く。3は高杯の杯部であると思われる。底部に稜を持ち、口縁は多少内湾しながら開く。

#### 058号住居跡 (第163図、図版59)

**遺構** 057号住居跡の東5mに位置する。平面形状は5.4m×4.6mのやや不整な隅丸方形。確認面からの深さは最大で40cmを測る。床面は住居の中央に向かって緩やかに凹み、部分的には堅い部分が見られるものの全体としてはやや軟弱である。炉は住居ほぼ中央に検出された。柱穴およびそのほかの

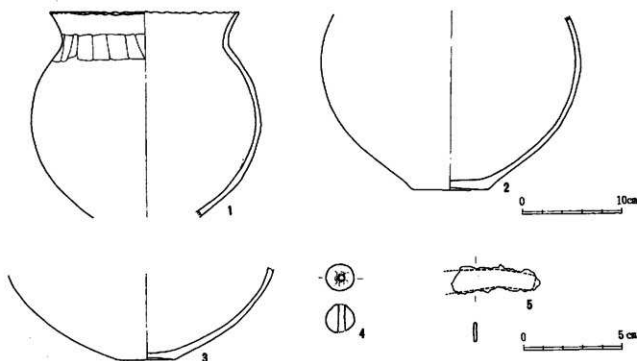


1. 暗褐色土層 (テフラ粒)
2. 黒褐色土層 (テフラ粒)
3. 暗黄褐色土層 (ソフトローム・黒色土・焼土)
4. 黄褐色土層 (ソフトローム・黒色土)
5. 暗黄褐色土層 (3層と同様)



1. 黄褐色土層 (ソフトローム・焼土・黒色土)

第159図 056号住居跡実測図



第160図 056号住居跡出土遺物

押図番号	遺物番号	器種	法量 cm	遺存度	成形・調整手法	上段は内面・下段は外面	胎土	色調	焼成
1	1.5, 7, 9, 10, 11	鉢	口 18.8 底 高 23.0	60%	コナダ, ナダ コナダ, ヘラケズリ, ヘラミガキ		細礫やや多い	灰茶褐色	良
2	1.5, 9, 14, 15	鉢	7.8 26.2	40%	ヘラによるコナダ, ナダ ヘラナダ, ヘラケズリ		細礫やや多い	黄褐色	良
3	6, 7	鉢	5.5	30%	ナダ ナダ方向のヘラナダ		細礫少量	褐色	良

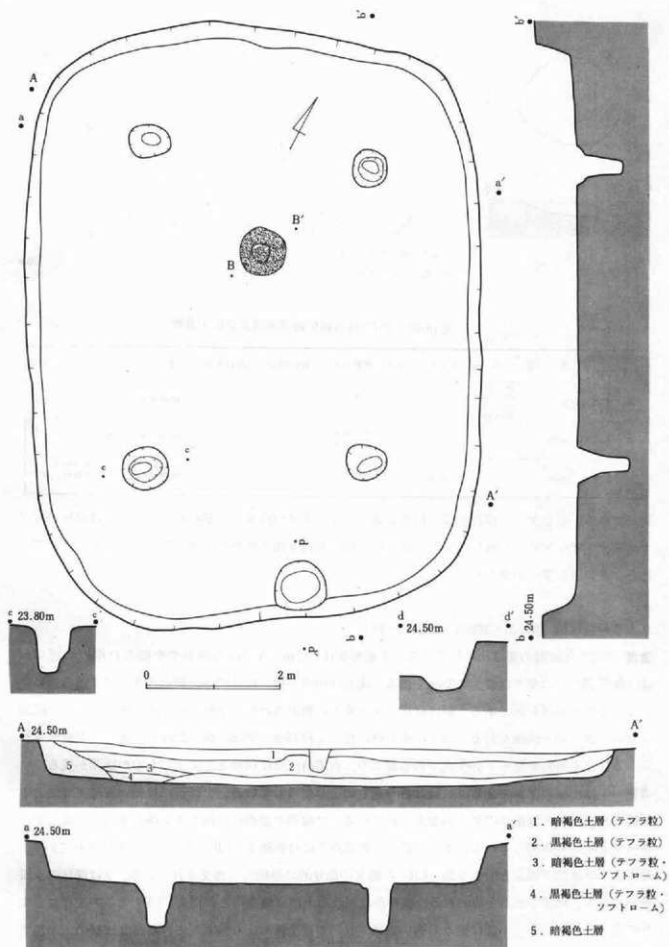
施設は検出されなかった。

遺物 1は小型の鉢である、頸部内側に稜を持ち、口縁部がほぼ垂直に付く。2は碗である、底部は上げ底になり、底部端にはやや幅のある高台状の高まりが微かにある。

#### 059号住居跡（第164図、図版59）

遺構 調査区北側西端近く（E-8）に位置する。平面形状は3.7m×3.2mの平行四辺形に近い隅丸方形。確認面からの深さは最大で48cmを測る。床面は全体に平坦で中央付近は踏み固められているものの周囲はやや軟弱である。炉はほぼ中央やや北寄りに検出された。柱穴およびそのほかの施設は検出されなかった。

遺物 1は壺である。頸部内側に稜を持ち、棒様工具による細い沈線が外側に加えられ、口縁部が直線的に開く。胴部外面は頸部直下から雑なハケ目が綾杉状に施され、中央付近には頸部と同様に細い沈線が加えられている。さらに底部付近には粘土紐が潰れたように雑に付けられている。2は高杯の



第161図 057号住居跡実測図





第162図 057号住居跡伊跡実測図及び出土遺物

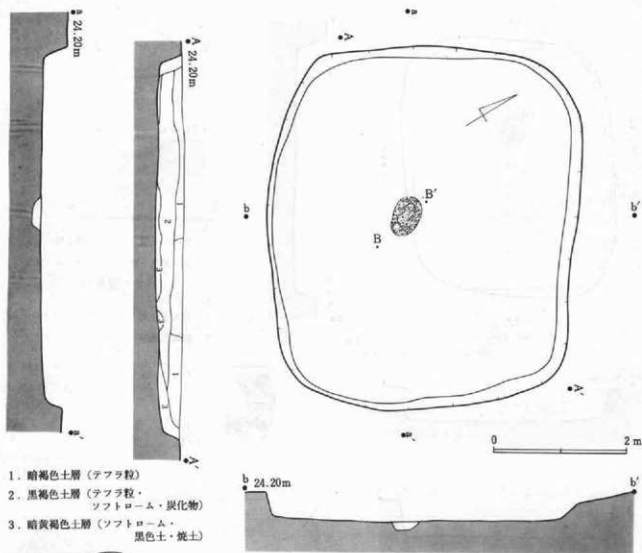
採回 番号	遺物 番号	器 種	法量 cm	遺存度	成形・調整手法	上段は内面・下段は外面	胎 土	色 調	焼成
1	2.4.11	壺	口 16.0 底 6.0 高 18.0 最大16.8 22.0	70%	ヨコナデ、ナデ ヨコナデ、ヘラケズリ、ナデ、ヘラミガキ		細砂少量	赤褐色	良
2	1.5.11	高杯	19.4	25%	ナデ、ヘラミガキ ナデ、ヘラミガキ		細砂少量	暗褐色	良
3	2.3	高杯	19.4	33%	ナデ、ヘラナデ ナデ、ヘラミガキ		細砂少量	外面淡褐色 内面淡黄褐色	良

脚部である、裾を欠く。穿孔が段と位置を違えて3カ所ずつ計6カ所穿たれている。3は高杯の杯部である、大半を欠く。口縁に向かって微かに内側に曲線を描きながら大きく開く。4は器台の脚部である、3カ所に穿孔が穿たれている。

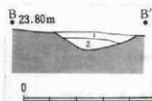
#### 060号住居跡（第165・166図、図版59・81）

**遺構** 059号住居跡の東9mに位置する。平面形状は7.2m×5.0mの南がやや影らむ楕円に近い形状。確認面からの深さは最大で35cmを測る。床面は中央が微かに凹み、炉の周囲が強く踏み固められているが周囲は軟弱である。炉は住居中央北寄りに検出された。支柱穴は4カ所検出された、径20～30cm、深さ40～50cmを計る。ほかに南の壁に接して径75cm×50cm、深さ25cmの小掘込みが検出されている。出土遺物を見ると弥生式土器も混じり、古墳時代の住居跡としてよいものか疑問が残る。

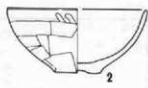
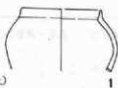
**遺物** 1は小型の深鉢である。口縁は折り返しにより肥厚している、口唇部には細い棒様工具による連続の押捺により鋸歯状の刻みが加えられている。口縁部の表面には細く丸い棒の先端を2段に平行させて連続して刺突している、また内側の口唇部直下には斜縄文（LR）が一周して施文されている。器表面は口縁部の縄文と同じ単節（LR）の縄文が部分的に連続して施文されている。2は深鉢の土器破片である、胴部であると思われる。緩やかな屈曲の上部は無文帯と斜縄文（LR）のみの文様帯が交互に設けられている。下部は撚りの弱い燃糸（R）の絡条体により施文している。3は甕の下半部である。器表面は2と同様に撚りの弱い燃糸（R）をほぼ連続して施文している。底部には木葉痕が観



1. 暗褐色土層 (テフラ粒)
2. 黒褐色土層 (テフラ粒・ソフトローム・炭化物)
3. 暗黄褐色土層 (ソフトローム・黒色土・焼土)

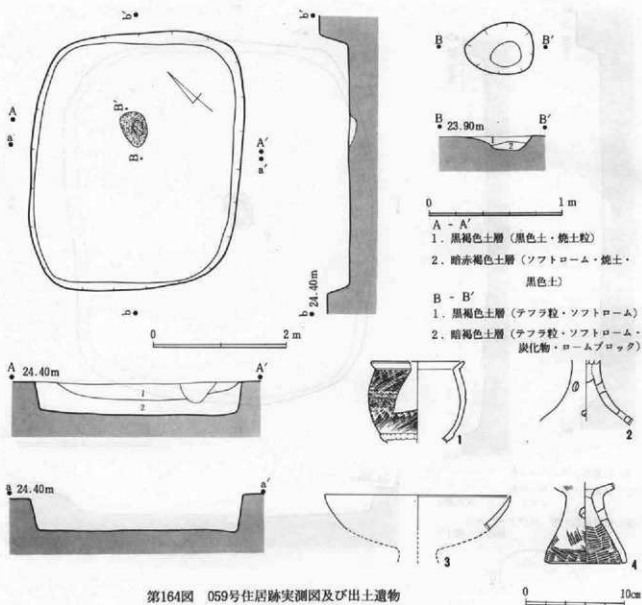


1. 黒褐色土層 (黒色土・焼土)
2. 赤褐色土層 (焼土・ソフトローム・黒色土)



第163図 058号住居跡実測図及び出土遺物

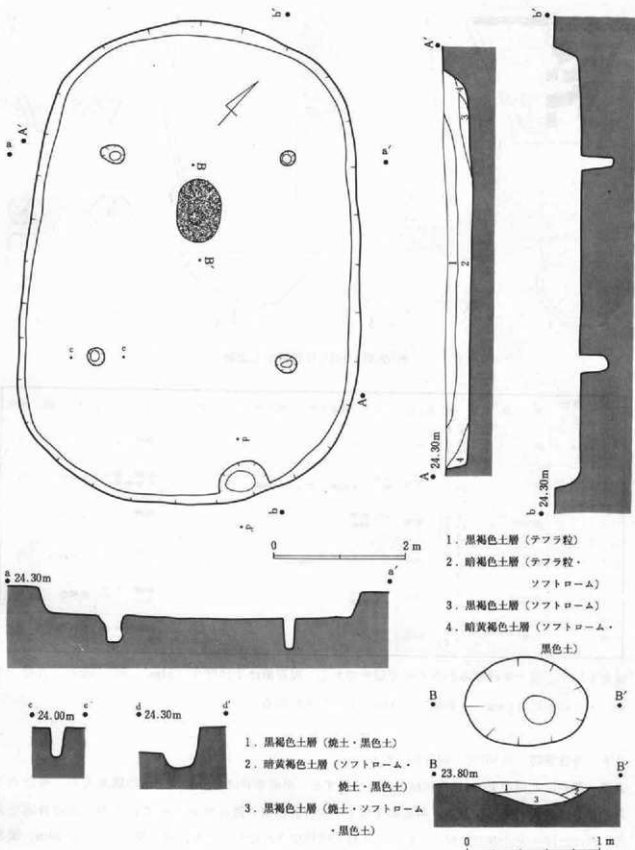
挿図番号	遺物番号	器種	法量 cm	遺存度	成形・調整手法	上段は内面・下段は外面	胎土	色調	焼成
1	5.7.10	鉢	口 底 高さ 最大 8.0	33%	縄なへラナゲ ナゲ、へラナゲ		細礫やや多い、赤色粒子若干	淡黄褐色	良
2	9.10	碗	1.4 4.6 6.3	25%	ナゲ、へラナゲ ナゲ、へラナゲ、へラケズリ		細礫	灰褐色	良



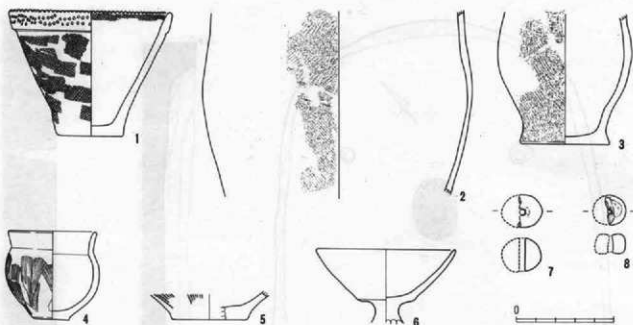
第164図 059号住居跡実測図及び出土遺物

挿図番号	遺物番号	器種	法量 cm	遺存度	成形・調整手法	上段は内面・下段は外面	胎土	色調	焼成
1	1.2.3	壺	口底高最大 9.5 8.1 18.9	35%	ヨコナゲ、ナゲ ヨコナゲ		粗織	胴下部に黒斑有 暗茶褐色	良
2	4	高杯	3.3	40%	ナゲ ヨコ方向のヘラナゲ		粗織少量	赤褐色	良
3	3.5	高杯	3.3	45%	ナゲ、ナゲ、ヘラミガキ ハケメ、弱いタテヘラミガキ		粗織少量	赤褐色	良
4	2,5	器台	5.9 3.3	50%	ナゲ ナゲ		粗織少量	乳灰白色、 黒斑あり	やや軟質

察される。4 は一部を欠くがほぼ完形の小型の甕である。整形も焼成も非常に良い。5 は甕の底部である。6 は高杯の杯部である、脚部を欠く。杯底部には僅かな稜を持ち、杯部は口縁に向かって微かに内側に曲線を描きながら大きく開く。7・8 は土玉である。いずれも半分のみが残存である。7 は



第165図 060号住居跡実測図



第166図 060号住居跡出土遺物

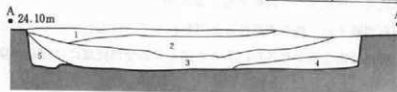
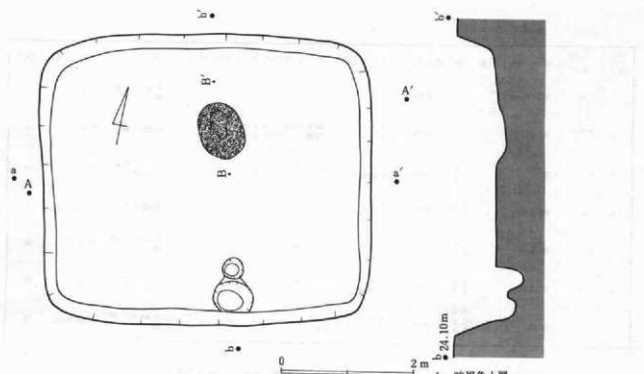
押図 番号	遺物 番号	器 種	法量 cm	遺存度	成形・調整手法	上段は内面・下段は外面	胎土	色調	焼成
1	2, 6, 10	鉢	口 16.6 底 6.5 高 12.4 最大	66%	ヘラナゲ, ナゲ		細礫少量	明茶褐色	良
2	3, 6, 10 12	鉢	18.7 27.5	35%	ナゲ 粗いハケ調整, 密なハケ調整		細礫, 雲母 片やや多い	茶褐色	良
3	1, 2, 6	壺底部	9.2 13.2 13.7	45%	ハケ調整, ナゲ ハケ調整		細礫, やや 少ない	暗赤褐色	良
4	1, 2, 7	壺	9.0 3.5 8.6 9.5	95%	ヨコナゲ, ナゲ ヨコナゲ, ナゲのもハケナゲ		細礫, やや 多い	明茶褐色	良
5	3	壺底部	9.7 2.8	8%	ハケナゲ ハケ調整		細礫, やや 少ない	赤褐色	良
6	4	高杯	14.1 5.4 7.2	50%	ナゲ ナゲ		細礫やや多 い	乳灰色 黒 斑有	良

球状を呈するが、8は厚みがなくやや扁平である。現存値は7は厚さ(34mm)、幅(33mm)、孔径(5mm)・8は順に(19mm)、(30mm)、(4mm)をそれぞれ測る。

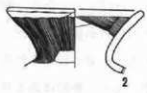
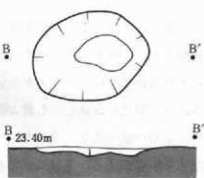
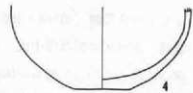
#### 061号住居跡(第167図、図版60・82)

**遺構** 調査区北側中央004号住居跡の北に位置する。平面形状は4.9m×4.3mの隅丸方形。確認面からの深さは最大で55cmを測る。床面は平坦で中央付近が堅く踏み固められているが周囲は軟弱である。炉はほぼ中央北寄りに検出された。支柱穴は検出されなかったが、南の壁に接して径30cm、深さ40cmと径60cm×50cm、深さ30cmの小掘込みが検出されている。

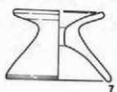
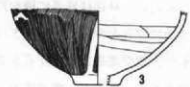
**遺物** 1は複合口縁壺の口縁部である。口縁は肥厚しヘラ様工具で刻みを加えた棒状浮文が7本を1単位にして4単位付く。2は壺の口縁部である。3～6は土師器底部付近である。3は土師の胴部下



1. 暗褐色土層
2. 黒褐色土層
3. 暗黄褐色土層 (黒色土・テフラ粒・ローム粒)
4. 暗褐色土層
5. 暗黄褐色土層 (ソフトローム・黒色土)



1. 黒褐色土層 (黒色土・焼土粒・ソフトローム)



第167図 061号住居跡実測図及び出土遺物

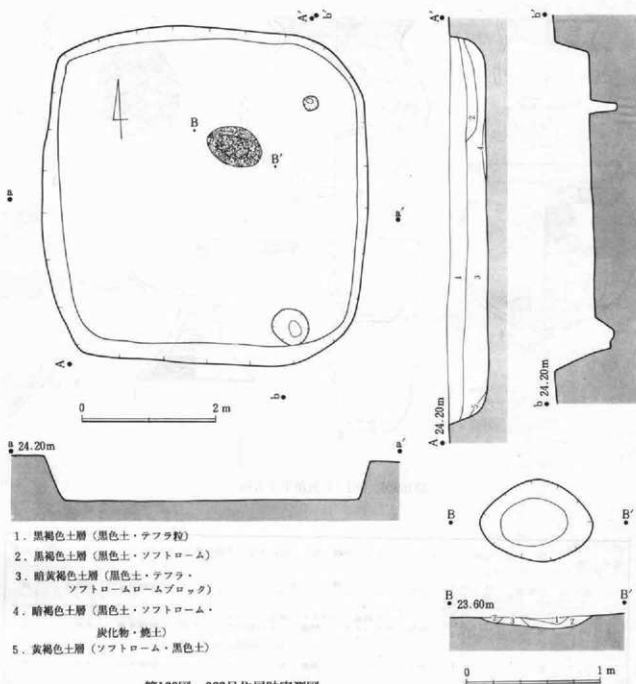
検出 番号	遺物 番号	器 種	法量 cm	遺存度	成形・調整手法	上段は内面・下段は外面	胎 土	色 調	焼成
1	4.8	壺口縁部	口 径 最大	33%	ヘラナゲ、ヘラケズリ ヘラナゲ		1mm大の細 調	灰褐色	良
2	9.84- 55-1	壺口縁部		30%	ヘラナゲ、ハケ調整及びヘラナゲ、ナゲ ヘラナゲ、ハケ調整、ヘラケズリ		細調少量	黒褐色	良
3	6	壺?	4.6 7.2	16%	ヘラケズリ、ヘラナゲ ハケ調整、ヘラナゲ、ヘラケズリ		1~2mm大 の細調	黒褐色	良
4	15	壺底部	5.4 8.0	33%	ヘラナゲ ヘラミガキ、ヘラナゲ		細調若干	赤褐色 内面黒褐色	良
5	8.11	壺底部	4.0 4.7	33%	ヘラミガキ、ヘラケズリ		蜜母粒、細 調	黒褐色	良
6	5.8	壺底部	4.8 4.0	16%	ヘラケズリ、ヘラナゲ ハケ調整、ヘラケズリ、ヘラナゲ		1~2mm大 の長石粒	黒褐色	良
7	6	器台	9.0 10.6 6.8	35%	ミガキ、ヘラナゲ ヘラナゲ、ミガキ		1mm大の細 調	黒褐色	良

半部である、残っている器形および底部の形状等から判断すると壺の胴部下半部と思われる。残り4~6は器形および底部の形状等から判断すると壺の底部付近と思われる。7は器台である。器受部が脚に対して大きく直線的に開き、脚部は器受部よりさらに大きく開く。器受部底部には穿孔が穿たれている。

#### 062号住居跡（第168・169図、図版60・82）

遺構 調査区北側ほぼ中央（G-6）に位置する。平面形状5.0m×4.9mの隅丸方形。確認面からの深さは最大で55cmを測る。床面は平坦で、中央付近が堅く踏み固められているが周囲は軟弱である。炉は中央よりやや北東に寄って検出された。柱穴（径20cm、深さ40cm）は炉の北東側に1カ所検出されたのみである。ほかに南壁に接して径60cm、深さ30cmを測る貯蔵穴様の小掘込みが検出されている。

遺物 1は小型の広口壺である。胴部はやや押し潰された球状を示し、微かに内湾する口縁部がほぼ真直ぐに開く。2~6は壺である。2は完形の壺である。最大径を胴部下位に持ち底部がやや小さめである。3は口縁部を多少欠くが、ほぼ完形である。胴部外面はハケ目の後や粗にヘラミガキを施している。また胴部外面にはススの付着が観察された。4は2と3に比べ胴部が球状を示し最大径も胴部中位に持つ。胴部の一部にススの付着が観察される。5は完形の小型の壺である。全体をナゲにより整形している。6は小型の壺である。整形はあまり丁寧ではなく多少歪がある。7は高杯である、若干の欠損はあるものの完形に近い。杯部は底部に稜を持ち直線的に大きく開く。脚部は緩やかに反外しながら開く、途中に4カ所に穿孔を穿っている。8は完形の小型の器台である。器受部は直線的に開き口唇部に僅かに稜をもつ、器受部底部には穿孔を穿つ。脚部も器受部と同様に直線的に開き4カ所に穿孔を穿っている。焼成も良く作りが丁寧である。

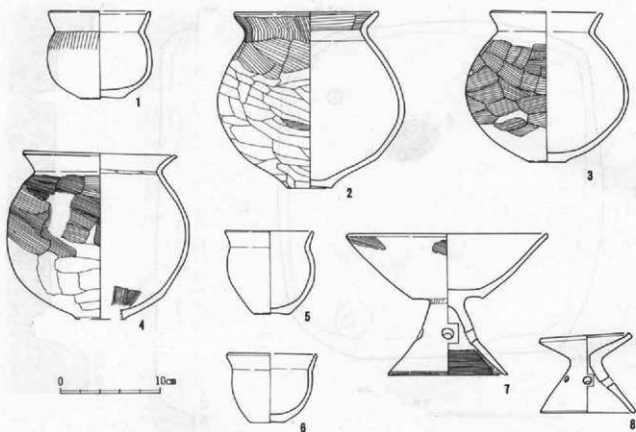


第168図 062号住居跡実測図

063号住居跡 (第170図、図版60)

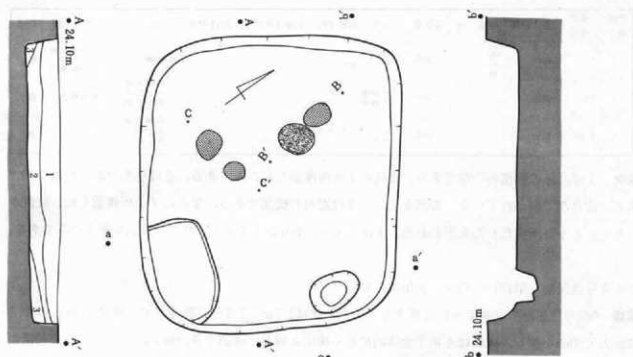
**遺構** 062号住居跡の東12m (H-6) に位置する。平面形状は4.4m×3.9mの南東角が若干膨らむ隅丸方形。確認面からの深さは最大で47cmを測る。床面は平坦で、中央付近が堅く踏み固められているが周囲は軟弱である。炉は中央よりやや北東寄りに検出された、しかし周囲には覆土に焼土粒子を多く含む同様なものがあり、本住居に伴う炉がいずれなのか詳細は不明である。柱穴は検出されなかった。住居の東の隅には径75cm×55cm、深さ30cmの貯蔵穴様の小掘込みが検出され、南東角には径1.6m×0.9m、深さ40cmの土坑様の性格不明な掘込みが検出されている。本住居の東壁に沿ってと、土坑様掘込みの上には焼土の堆積がみられた、焼失住居の可能性を伺わせる。





第169図 062号住居跡出土遺物

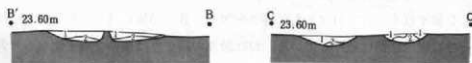
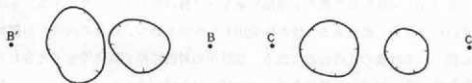
挿図 番号	遺物 番号	器 種	法量 cm	遺存度	成形・調整手法 上段は内面・下段は外面	胎 土	色 調	焼成
1	6, 8, 23	小型壺	口 10.2 底 4.4 高 8.5 最大 10.6	100%	ヘラナゲ, 雑なミガキ ナゲ, ヘラミガキ, ヘラナゲ, ヘラケズリ	細礫多量	暗褐色	良
2	20	壺	15.2 4.4 17.8 18.8	95%	ハケ調整, ヘラナゲ, 雑なヘラナゲ ナゲ, タテハケ調整, ハケ調整のちヘラナゲ ヘラナゲ	細礫多量	赤褐色	良
3	9, 21	壺	11.4 3.8 15.0 16.4	88%	ナゲ, ヘラナゲ ヘラナゲ, ハケ調整のちヘラミガキ, ヘラケズ リ	細礫多量	黒褐色	良
4	8, 11, 25, 26 27	壺	15.4 5.0 16.5 19.2	65%	ヘラケズリ, ヘラナゲ, ハケ調整及びナゲ ナゲ, ハケ調整のちナゲ, ハケ調整, ヘラケズ リ	細礫少量	赤褐色	良
5	22	小型壺	9.0 3.2 8.2 8.9	100%	ヘラナゲ ナゲ, ヘラナゲ, ヘラケズリ	細礫	赤褐色	良
6	1, 8	小型壺	9.2 3.3 6.7 8.3	60%	ナゲ, 雑なヘラナゲ ヘラナゲ, ナゲ, 雑なナゲ	雲母粒, 細 礫	黒褐色	良
7	24	高杯	12.2 13.9 20.4	77%	ナゲ, ミガキ, ヘラケズリ ナゲ, ハケ調整, 雑なミガキ, ナゲ, ヘラナ ゲミガキ	雲母粒, 細 礫, 長石粒	黒褐色 内面赤褐色	並
8	27	器台	9.6 7.8 9.2	100%	ミガキ, ヘラナゲ, ヘラナゲ ヘラケズリ, ナゲ, 雑なミガキ, ナゲ	細長石粒多 量	赤褐色	良



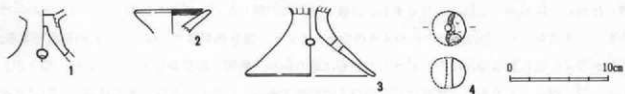
0 2 m



1. 黒色土層 (黒色土・テフラ粒)
2. 暗褐色土層 (黒色土・テフラ粒・焼土)
3. 暗黄褐色土層 (テフラ粒・ソフトローム粒・黒色土ソフトローム)



1. 暗黄褐色土層 (焼土粒)
2. 暗黄褐色土層 (焼土粒・焼土ブロック)
1. 黒褐色土層
2. 焼土粒・焼土ブロック層



第170図 063号住居跡実測図及び出土遺物

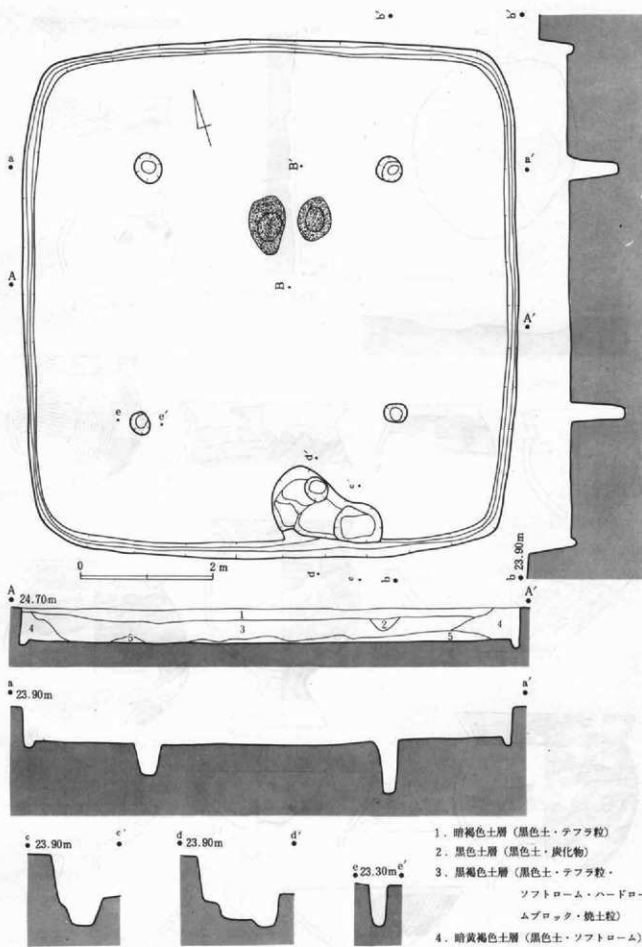
押印 番号	遺物 番号	器 種	法量 cm	遺存度	成形・調整手法	上段は内面・下段は外面	胎土	色調	焼成
1	8	高杯	口 底 高 径大 7.6	30%	ヘラケズリ ナデ、ミガキ		粗織	外面淡黄褐色 内面暗褐色	良
2	13	器台		50%	ハケ調整、ナデ ハケ調整、ヘラナデ		粗織少量、 赤色粒子少量、石炭若 干	淡黄褐色	良
3	5,10	器台		10%	ナデ、ヘラケズリ後ナデ ヘラナデ、ヘラミガキ、ヘラケズリ		粗織多量、 赤色粒子少量、炭母若 干	褐色	良

遺物 1は高杯の脚部の一部である、穿孔を1カ所確認したのみである。2は小型の器台の器受部である、接合部で割がれている。脚部を欠く。3は器台の脚部である、穿孔は2カ所確認した、位置から考えると4カ所穿たれたと思われる。4は土玉で、半分以上を欠く。厚さは31mmを測るのみである。

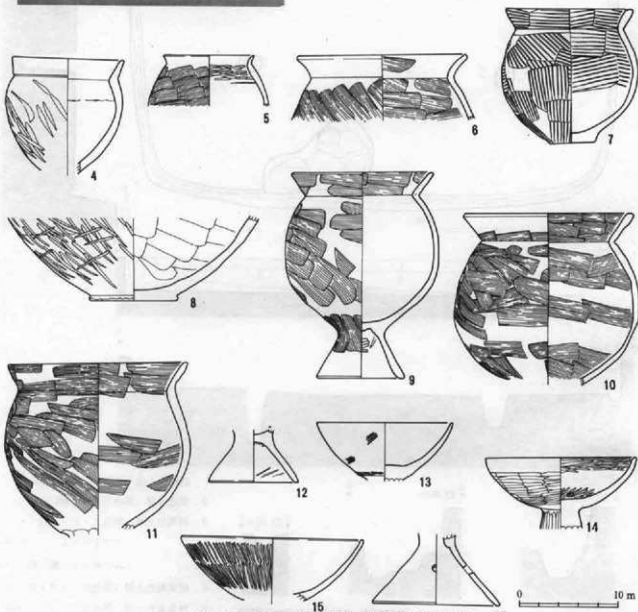
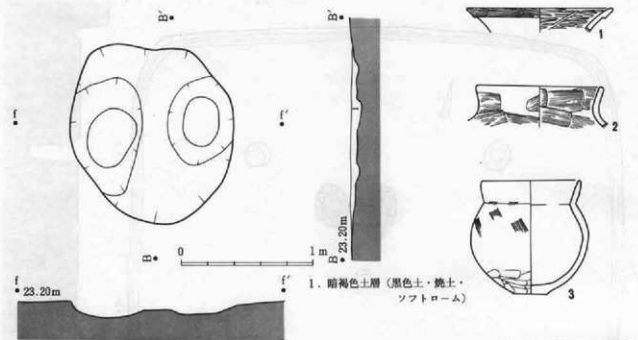
#### 064号住居跡(第171・173図、図版61・83)

遺構 061号住居跡の北東7mに位置する。平面形状は7.7m×7.5mの隅丸方形。確認面からの深さは最大で50cmを測る。床面は平坦で全体的に堅く床面と容易に確認でき、幅15cm、深さ10cmの周溝が壁に沿って一周する。炉は住居中央やや北寄りに、接するように2カ所検出した。主柱穴は対角線上に4カ所検出された。3カ所が径35cm前後、深さ70cm前後、残りの1カ所は径45cm、深さ45cmを測る。ほかには南壁に接して貯蔵穴様の掘込みが検出されたが、複数の小掘込みと重複しておりいずれが本住居に伴うものか詳細は不明である。

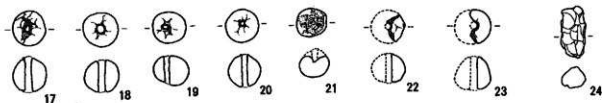
遺物 1は折り返し口縁壺の口縁部である。折り返しによる口縁の肥厚がみられるのみである。2は壺の口縁部である。3はやや小さめのはぼ完形の広口壺である。球状の胴部から微かに内湾する口縁がほぼ真直ぐに開く。4は小型の甕である。頸部には輪積痕が明瞭に残る。全体的に整形が粗雑で器形も僅かに歪んでいる。5は4と同様小型の甕の上半部である。口縁は低く大きく外反する。6は甕の口縁部付近である。7はほぼ完形の甕である。僅かに突出した底部を持つ、球状の胴部から微かに肥厚した口縁が直線的に開く。8は甕の底部付近である。器厚が相対的に厚く底径等を考え合わせると、相当大きな甕と思われる。9～11は台付甕である。9は10・11と比べるとやや小形である、球状の胴部から直線的に開く口縁が付く。10・11はともに脚部を欠く。9と同様に球状の胴部から直線的に開く口縁が付くが、その口縁は微かに肥厚している。11は頸部の締まりは他の2点と比べると若干弱い。12は脚部である、上半部を欠く。台付甕のものと思われる。13～16は高杯である。いずれも杯部のみで、脚部を欠く。13は杯部のみは完形で、脚部を接合部より欠く。底部に微かに稜を持ち、口縁は僅かに内湾しながら開く。14は杯部と脚部の一部が残る。杯部は碗の様に脚部の接合部から内湾しながら口縁が開く。15は杯部である、口縁は僅かに内湾しながら緩やかに開く。16は杯部のみである、上半部を欠く。中段には穿孔が4カ所穿たれている。接合部が残り、現状では孔が観察できる。これが器台に見られる穿孔なのかどうかの判断は難しいが、整形・器形等を考えると高杯の脚と思われる。17～24は土玉である。完形は17～20の4点だけである。いずれも焼成・整形が良い。21は孔を焼成後開けようとしたのか、多少欠損しているものの凹みが見られる。計測値を厚さ・幅・孔径の順



第171図 064号住居跡実測図



第172図 064号住居跡炉跡実測図及び出土遺物



第173図 064号住居跡出土遺物

0 10cm

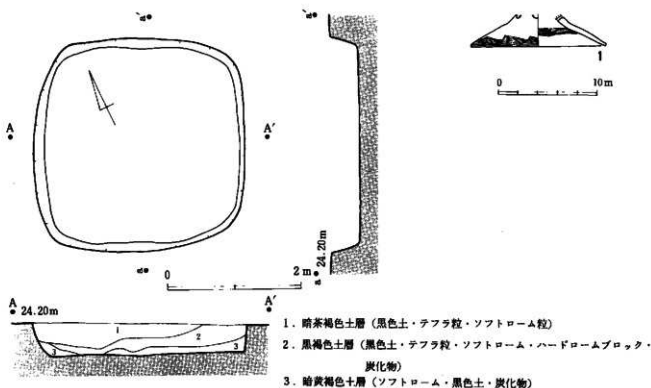
挿図 番号	遺物 番号	器 種	法量 cm	遺存度	成形・調整手法 上段は内面・下段は外面	胎 土	色 調	焼成
1	12, 13	壺	口 径 14.8 底 高 2.4 最大 13.0	10%	ヘラミガキ ヘラナゲ, ナゲ	細砂多量	赤褐色 (赤影処理)	良
2	7	壺	9.5 3.7	10%	ハケナゲ (スス付器) ヨコナゲ, ハケナゲ	細砂やや少 ない	赤褐色 内面明褐色	良
3	1, 4, 5, 7, 22	広口壺	16.0 9.5 11.3 11.8	88%	ヨコナゲ, ナゲ ナゲ, ハケ調整のちナゲ, ヘラケズリ	細砂多量	赤色処理, 黒斑あり	良
4	1, 17	壺	11.4 11.2 11.9 9.2	49%	指ナゲのちヘラナゲ, ナゲのち粗織なヘラナゲ 指ナゲ, ナゲ後粗織なヘラミガキ	細砂やや多 い	明褐色 外は加熱で 黒色	良
5	22	壺	5.0	35%	ヨコナゲ, ヘラミガキ, ナゲ ヨコナゲ, ハケ調整	細砂やや多 い	暗褐色 内面明褐色	良
6	1, 4, 5, 11, 12, 13	壺	15.3 8.2	44%	ヨコナゲ, ナゲのちハケナゲ ヨコナゲ, ナゲのちハケナゲ	細砂多量	茶褐色	良
7	1, 12, 13	壺	12.3 4.4 13.5	80%	ナゲのちハケ調整 ナゲのちハケ調整, ヨコナゲ, ナゲのちハケ調 整	細砂やや少 ない	明褐色 外面は加熱 で黒色	良
8	17	壺	9.0 8.0	37%	ヘラナゲ, モミの圧痕あり ナゲのちヘラミガキ	細砂やや多 い	暗褐色 内面明褐色	良
9	1, 12, 14	台付壺	14.5 9.0 20.4 15.6 17.1	50%	ナゲのちハケ調整 ナゲのちハケ調整, ナゲ, ナゲのちヘラナゲ ナゲのちハケ調整	細砂やや少 ない	明褐色 胴部外面は 加熱され黒 色	良
10	1, 4, 5, 17	台付壺	16.9 18.7 17.9	70%	ナゲのちハケ調整 ナゲのちハケ調整	細砂やや少 ない	茶褐色, 外 は加熱で黒 色	良
11	1, 4, 11 12, 14, 17	台付壺	17.1 18.5	75%	ナゲのちハケ調整 ナゲのちハケ調整, 指圧痕残る	細砂やや少 ない	明褐色, 外 面上部は加 熱で黒色	良
12	18	台付壺	9.2 5.1	25%	ナゲ, ヘラナゲ ナゲ	細砂やや少 ない	明褐色	良
13	19	高杯	13.7 5.7	50%	ヘラナゲ ハケメのちヘラナゲ, ナゲ	細砂少量	明褐色	良
14	1, 2, 4, 6, 7	高杯	15.2 7.0	45%	ヘラミガキ, ナゲ, ヘラミガキ ヨコナゲ, ヘラミガキ, ヘラミガキ	細砂少量	暗褐色 内面明褐色	良
15	7	高杯	18.8 6.2	25%	ナゲ ナゲのちヘラミガキ	細砂やや少 ない	明茶褐色	良
16	11	高杯	13.0 6.9	16%	ナゲ ヘラナゲ	細砂少量	明褐色	良

で示す。17は37mm・35mm・7mm, 18は36mm・33mm・8mm, 19は34mm・31mm・6mm, 20は34mm・34mm・5mm, 21は幅33mm, 22は厚さ29mm, 23は厚さ34mmをそれぞれ測る。24は粘土の塊を手で捏ねたままの状態で焼成したもので、何に使われたのか、何に使うものなのかは不明である。

065号住居跡（第174図、図版61）

**遺構** 004号住居跡の北東7mに位置する。平面形状は3.2m×3.2mの隅丸方形。確認面からの深さは最大で50cmを測る。床面は平坦でやや堅く変化している。炉および柱穴等住居に伴う施設は検出されなかった。

**遺物** 1は高杯の脚部である。裾を大きく広げ穿孔が穿たれている、穿孔は2カ所確認できたのみで本来は6カ所穿たれていたと思われる。そのほかに遺物は少なく図示するものはない。



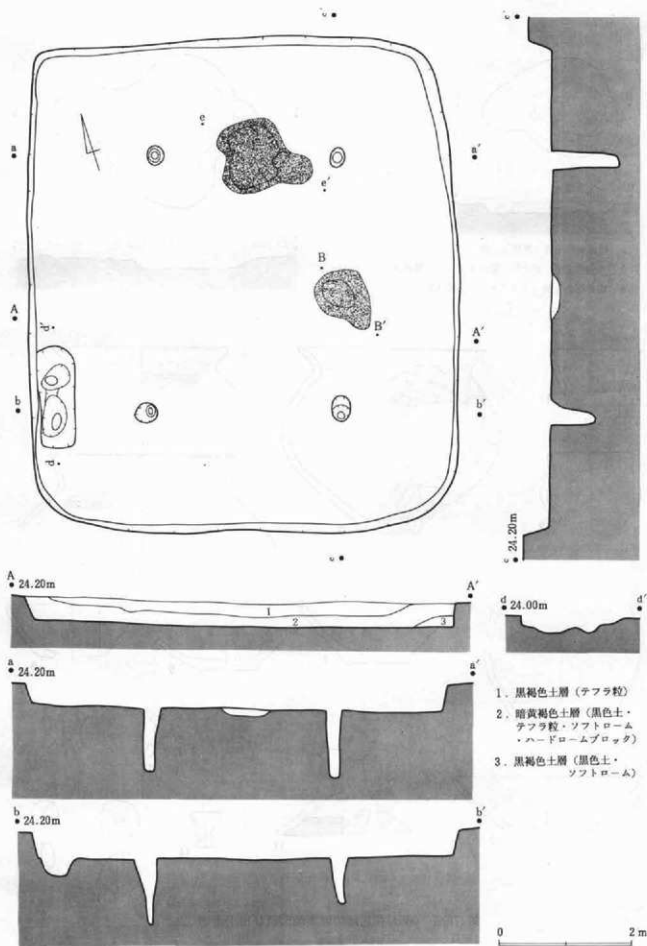
第174図 065号住居跡実測図及び出土遺物

挿図番号	遺物番号	器種	法量 cm	遺存度	成形・調整手法	上段は内面・下段は外面	胎土	色調	焼成
1	2	高杯	口底高最大 13.6 3.1	25%	ハケ調整、弱いハケナゲ 弱いタテヘミギナギ、ハケナゲ		細礫少量	明茶褐色 黒斑あり	良

066号住居跡（第175・176図、図版61・83・86）

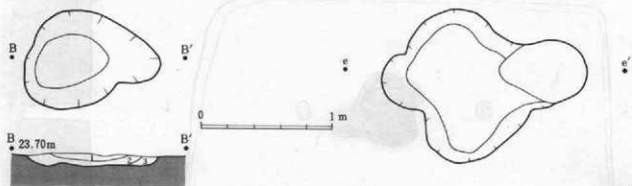
**遺構** 065住居の東12m（H-8）に位置する。平面形状は7.3m×6.5mの隅丸方形。確認面からの深さは最大で36cmを測る。床面は平坦であるがやや軟弱である。炉は住居の中央北側と東側に大きく不整形なものを2カ所検出した。主柱穴は対角線上に4カ所検出された。径30~35cm、深さ70~95cmを測る。ほかには西壁南側に接して深さ10~20cmの長楕円を呈する凹みが検出されているが、その性格等詳細は不明である。

**遺物** 1は壺の口縁部である。2は小型の壺である。胴部の中位に最大径を持ち、括れの少ない頸部から長頸壺様に口縁部が付く。3は甕である。口縁部と胴部の一部を欠くものの完形に近い土器であ

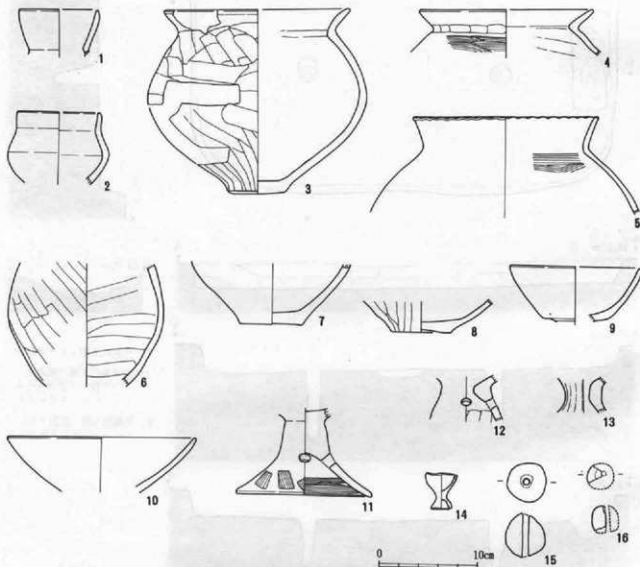


第175図 066号住居跡実測図





1. 暗赤褐色土層 (黒色土・焼土)
2. 赤褐色土層 (焼土粒・焼土ブロック・黒色土・ソフトローム)
3. 暗黄褐色土層 (ソフトローム・焼土)



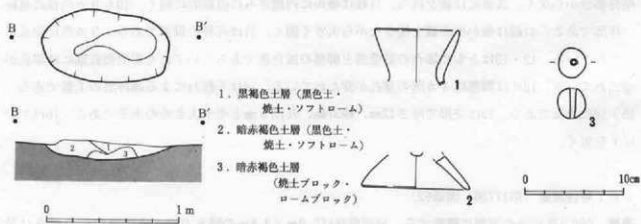
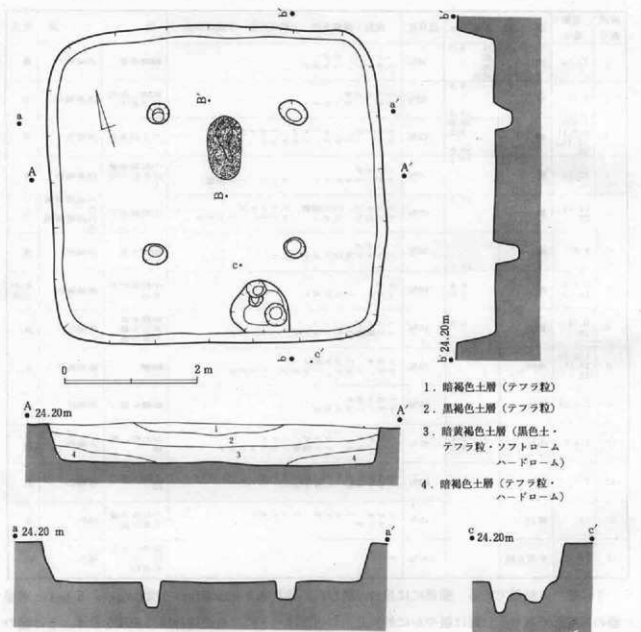
第176図 066号住居跡炉跡実測図及び出土遺物

採掘 番号	遺物 番号	器 種	法量 cm	遺存度	成形・調整手法 上段は内面・下段は外面	胎 土	色 調	焼成
1	13.14	甕	口底 高さ大 8.0	16%	ヘラナゲ、ナゲ ヘラナゲ、ヘラナゲ	細砂多量	赤褐色	優
2	5.11	甕	8.4	49%	ヘラミガキ ナゲ、ヘラミガキ	細砂、赤色 粒子若干	灰茶褐色	良
3	1.4, 5, 6, 9, 11 13, 14, 22	甕	10.2 18.6 5.2	72%	ヘラナゲ、ヘラケズリ、ヘラナゲ ナゲ、ヘラナゲ、ヘラケズリ	長石粒多量	黒褐色	良
4	12.13	甕	22.0 17.4	5%	ヘラナゲ ナゲ、ヘラケズリ、ヘラナゲ、ハケ調整	中粒砂多量 赤色粒子若 干	暗茶褐色	良
5	12.15, 22	甕	18.4	10%	ヘラナゲ、ハケ調整、ヘラミガキ ナゲのもヘラオン、ヘラナゲ、ヘラミガキ	中粒砂若干	外面暗黄褐 色 内面淡黄褐 色	良
6	2.6	甕	15.6	33%	ヘラナゲ ヘラナゲ及びミガキ	細砂少量	黒褐色	良
7	1.3, 4, 10, 13	甕	6.4 6.0	10%	ナゲ ミガキ、ヘラケズリ	中粒砂やや 多め	淡黄褐色	やや 不良
8	6.11, 16	甕	8.0	10%	ヘラナゲ ハケ調整のもヘラナゲ、ヘラケズリ	細砂多量、 長石少量、 石英少量	茶褐色	良
9	1.3, 10 13, 17, 22	高杯	13.4	75%	ミガキ、ヘラケズリ ナゲ、ミガキ、ヘラナゲ、ヘラナゲ	細砂	暗黄褐色	良
10	2.6, 13	高杯	9.0	45%	ヘラミガキ ナゲ、ヘラミガキ	細砂少量	黒褐色	良
11	1.4, 6	高杯	13.8 8.5	60%	ヘラナゲ、ヘラナゲ、ハケ ヘラミガキ、ハケ調整のもヘラミガキ、ナゲ	長石粒、細 砂	赤褐色	良
12	7	器台		23%	ナゲ、ヘラケズリ、ヘラナゲ ヘラミガキ、ヘラミガキ	1mm大長石 粒	暗褐色	良
13	13	器台		16%	ミガキ、ヘラナゲ、ヘラケズリ ヘラナゲ	中粒砂多量 石英少量	褐色	良
14	21	手捏土器		100%	ナゲ	細砂、赤色 粒子若干、 石英粒	褐色	良

る。4は甕の口縁部である。頸部には接合の整形痕が残りあまり丁寧な作りではない。5も4と同様に甕の口縁部である。口縁は緩やかに外反し、口唇部はヘラによる連続押捺で波状を示す。6は甕の胴部である。底部と口縁部を欠く。7・8はともに甕の底部である。9は高杯の杯部である。脚部を接合部分から欠く。底部には稜を持ち、口縁は僅かに内湾ぎみに直線的に開く。10も9と同様に高杯の杯部である。口縁は緩やかに曲線を描きながら大きく開く。11は高杯の脚部である。3カ所に穿孔が穿たれている。12・13はともに器台の器受部と脚部の接合部である。いずれも器受部底部には穿孔が穿たれている。12には脚部に4カ所の穿孔が穿たれている。14は手捏ねによる高杯形の土器である。15・16は土玉である。15は完形で厚さ42mm、幅37mm、孔径6mmとやや大きめの土玉である。16は半分以上を欠く。

#### 067号住居跡（第177図、図版62）

遺構 066号住居跡の東側に隣接する。平面形状は5.0m×4.8mの隅丸方形。確認面からの深さは最大で67cmを測る。床面は平坦で堅く踏み固められている。炉は住居中央やや北寄りに検出された。主



第177図 067号住居跡実測図及び出土遺物

検出 番号	遺物 番号	器 種	法量 cm	遺存度	成形・調整手法	上段は内面・下段は外面	胎 土	色 調	焼成
1	1.5	壺	口 底 高さ 8.6	10%	ヘラナゲ ナゲ、ミガキ		中粒砂やや 多い、石英 若干、黄褐 若干	淡灰色	良
2	7.8	高杯	11.0	25%	ナゲ、ヘラナゲ ナゲ		細砂多量、 長石石英若 干	淡黄褐色	良

柱穴は対角線上に4カ所検出された。径35cm前後、深さ30～35cmを測る。ほかには南壁に接して貯蔵穴様の深さ10cm前後の浅い掘込みが検出されている。

遺物 1は壺の口縁部である。2は脚部の裾部分である。3カ所に穿孔が確認できる。器形等を考えると高杯の脚部と思われる。3は土玉で完形である。厚さ31mm、幅30mm、孔径6mmを測る。焼成・作りともに丁寧である。

#### 068号住居跡（第178・179図、図版62・84）

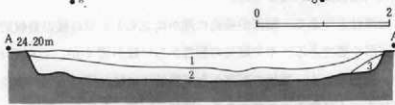
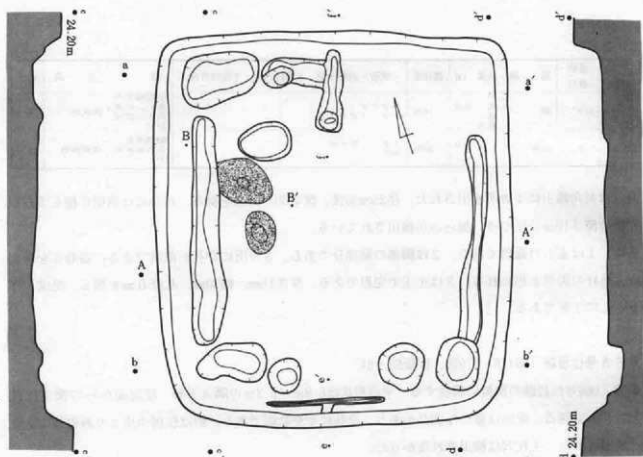
遺構 068号住居跡の南側に隣接する。平面形状は5.9m×5.3mの隅丸方形。確認面からの深さは最大で40cmを測る。床面は微かな凹凸があり、全体にやや軟弱である。炉は住居中央より西寄りに2カ所検出された。主柱穴は検出されなかった。

遺物 1は壺の口縁部付近である。頸部が垂直に僅かに立ち上がり口縁が直線的に開く。2口縁部を僅かに欠くがほぼ完形の甕である。やや縦長の胴部から口縁が開くが、口唇部付近で微かに内湾する。3は甕である、底部を欠く。球状の胴部から直線的に口縁が開く。胴部中央付近を中心にしてススの付着が観察される。4は甕の上半部である。球状の胴部から僅かに肥厚したやや低い口縁が直線的に開く。5は高杯の杯部である。底部に微かな稜を持ち、口縁は僅かに内湾しながら直線的に大きく開く。6は高杯の脚部である。裾部はやや内湾する、穿孔は3カ所穿たれていると思われる。7は多少欠くが、完形に近い器台である。器受部底部には穿孔が穿たれているが、脚部には穿たれていない。脚部がわずかに器受部より大きく開く。

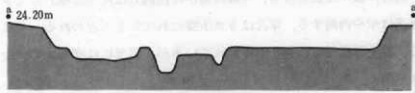
#### 069号住居跡（第180図、図版62・84）

遺構 068号住居跡の東7mに位置する。平面形状は4.7m×4.0mの隅丸方形。確認面からの深さは最大で25cmと浅い。床面は平坦で全体にやや軟弱である。炉は住居中央より若干南側に検出された。柱穴は炉の周辺に3カ所検出されたが、いずれも主柱穴とは考えられずその性格は不明である。

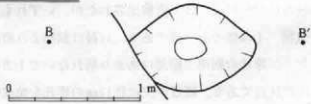
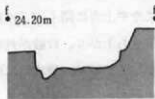
遺物 1は甕の上半部である。口縁は頸部より直線的にやや上方に開く。2は甕である、底部付近を欠く。球状の胴部で頸部はあまり括れないで上方に若干立ち上がり、口縁が外反して付く。3は甕の底部付近である。底部中央に径12mmの穿孔を焼成前に穿っているが、焼成時には外側が半分はみ出した粘土に塞がれている状態である。器形は鉢形よりも甕にちかい器形を呈すると思われる。4は最大径が7cmに満たない小型土器の胴部である。器形・整形等を考えると048号住居跡から出土した小型壺と類似している。5は脚の裾部分である。器形から判断すると高杯の脚部と思われる。穿孔は確認



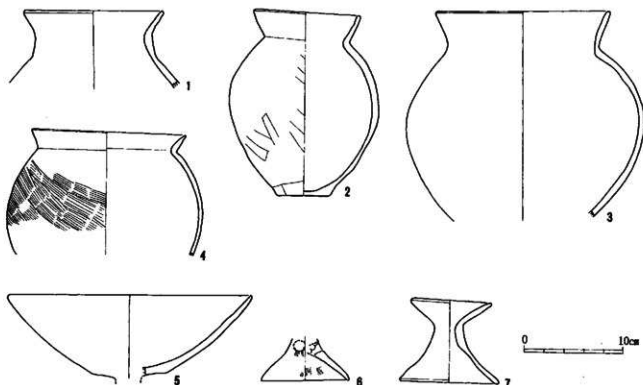
- 1. 黒褐色土層 (黒色土・チフツ粒・ロームブロック)
- 2. 暗茶褐色土層 (黒色土・チフツ粒・ソフトローム)
- 3. 暗黄褐色土層 (ソフトローム・黒色土)



- 1. 赤褐色土層 (焼土・暗褐色土)
- 2. 暗黄褐色土層 (ソフトローム・焼土・黒色土)



第178図 068号住居跡実測図



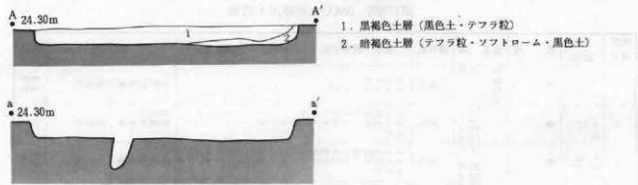
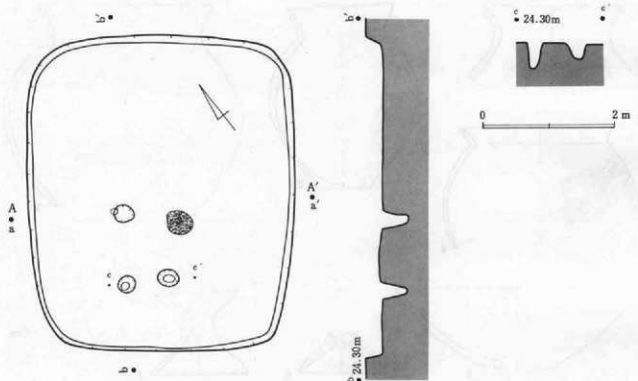
第179図 068号住居跡出土遺物

採回 番号	遺物 番号	器 種	法量 cm	遺存度	成形・調整手法 上段は内面・下段は外面	胎土	色調	焼成
1	10	壺	口 13.8 底 高 最大	35%	ヨコナゲ ヨコナゲ、ナゲ	中粒砂多量	黒褐色	やや 不良
2	9,12	壺	10.3 5.1 18.2 15.1 17.0	85%	ヨコ方向のヘラミガキ、ヘクリがはげしい ヨコナゲ、ヘラケズリのもナゲ、ヘラケズリ、 ナゲ	赤色粒子、 細砂やや多 い	淡褐色	良
3	9,10, 12,17	壺	20.9 23.9 15.3	80%	ヨコ方向のハケ調整のもヨコナゲ、ヨコナゲ ヨコナゲ、タテ方向のハケメのもヨコナゲ、ヘ ラナゲ	中粒砂多量	淡灰褐色	やや 不良
4	4,9,12	壺	12.5 19.7 24.2	50%	ハケ調整のも縦いヨコナゲ、ヘラケズリのもナ ゲ ハケ調整のもヨコナゲ、ハケ調整	細砂やや多 く、石英粒 若干	褐色	良
5	3,10	高杯		50%	ヨコヘラミガキ ヘラミガキ、ハケメのもヘラミガキ	細砂少量	淡黄褐色	良
6	10,14	高杯	8.8	40%	ハケ調整のもナゲ ハケ調整のも縦いミガキ、ヨコナゲ	細砂やや多 く、長石、 石英粒若干	黄褐色	良
7	2,4,9, 11	盃台	7.7 9.6 8.3	60%	ヨコナゲ、ナゲ、ナゲ ヨコナゲ、ヘラによる整形のもナゲ、タテ方 向のハケ調整のもナゲ	細砂やや多 く、長石若干、 赤色粒子若干、 長石粒若干	淡赤褐色	良

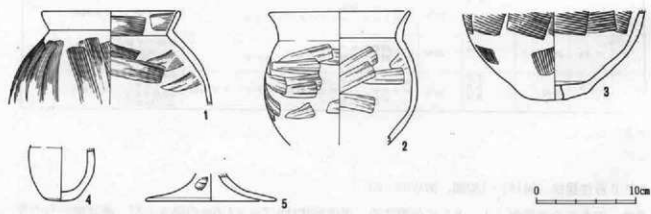
できなかった。

070号住居跡(第181・182図、図版63・84)

遺構 調査区の北側西(J-8)に位置する。平面形状は5.7m×4.6mの隅丸方形。確認面からの深さは最大で60cmを測る。床面は平坦で全体にやや軟弱であり、幅、深さ共に10cmを測る周溝が壁に沿って一周する。炉は住居の南東側に3カ所検出した。いずれが本住居の炉跡なのかは不明である。柱穴は検出されなかった。住居の南西隅近く西壁に接して貯蔵穴様の径60cm、深さ30cmを測る掘込み



1. 黒褐色土層 (黒色土・テフラ粒)
2. 暗褐色土層 (テフラ粒・ソフトローム・黒色土)



第180図 069号住居跡実測図及び出土遺物

採回 番号	遺物 番号	器 種	法量 cm	遺存度	成形・調整手法 上段は内面・下段は外面	胎 土	色 調	焼成
1	7	壺	口底 13.9 高さ 9.3 最大 14.4	40%	ナゲのもハケナゲ ヨコナゲ、ナゲのもハケナゲ	細磯やや多い	暗褐色	良
2	2.9	壺	15.7	85%	ヨコナゲ、ナゲのもケズリ ヨコナゲ、ナゲのもケズリ	細磯やや多い	赤褐色 内面明褐色 黒皮あり	良
3	7	有孔鉢	6.3 8.6	33%	ナゲのもハケ調整 ナゲのもハケ調整	細磯やや多い	明褐色 (黒皮あり)	良
4	1.5	壺?	3.6 5.3 6.7	75%	ナゲ ヨコナゲ、ナゲ	細磯少量	明褐色 (黒皮あり)	良
5	9	高杯	13.2 2.7	30%	ナゲ ナゲ、一部ハケナゲ	細磯やや多い	明褐色 (黒皮あり)	良

が検出された。

遺物 1は壺の口縁部である。頸部より大きく外反する口縁である。2は複合口縁壺の上半部である。口縁部は頸部より大きく外反して開き、口縁は折り返しにより肥厚しているが装飾的な文様は施されていない。頸部には粘土紐を貼り付けその上から指先で連続して押捺して文様としている。また頸部直下にも文様は描かれていない。3は小型の鉢である。口縁部の一部と底部を欠くがほぼほぼ完形である。焼成は良い。4は一部を欠くもののほぼ完形の大型の高杯である。杯部は底部に数かに稜を持ち、僅かに内湾しながら大きく開く。脚部は口縁部ほどではないが裾に向かって開く、3カ所に穿孔を穿っている。5は高杯の脚部で、杯部を欠く。4とは対称的に裾を大きく広げる脚である。途中穿孔を段と位置を違えて3カ所ずつ計6カ所穿っている。6は高杯の脚部であるが、杯部との接合付近で裾も欠く。5と同様な器形を示すと思われる。3カ所に穿孔が穿たれている。7は完形の土玉である。厚さ32mm、幅34mm、孔径5mmを測る、作りは丁寧で焼成も良い。

#### 071号住居跡（第183図、図版63）

遺構 069号住居跡の東5mに位置する。平面形状は4.4m×4.1mの隅丸方形。確認面からの深さは最大で22cmを測る。床面は平坦で全体にやや軟弱である。炉および柱穴などの施設は検出されなかった。

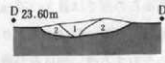
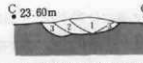
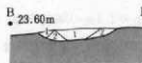
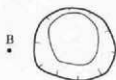
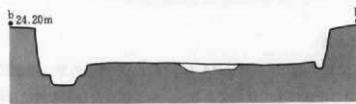
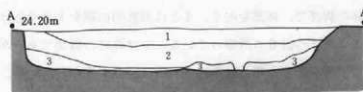
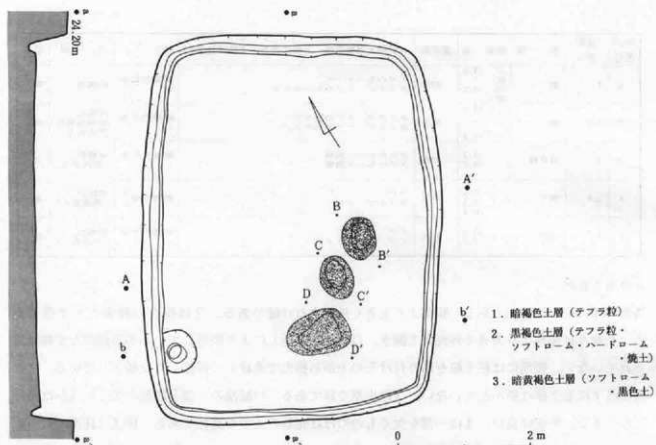
遺物 出土遺物の量はそれほど多くはなく、図示できるものはなかった。

#### 072号住居跡（第184・185図、図版63・85）

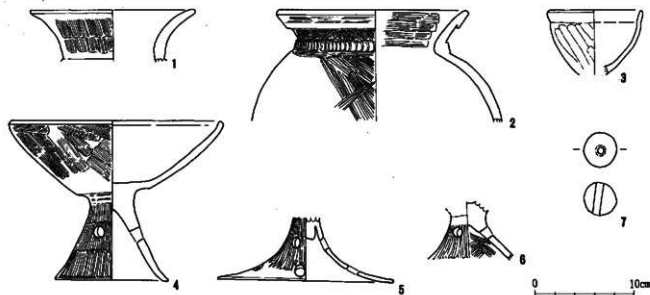
遺構 071号住居跡の南東3m、調査区の東の端に位置する。平面形状は5.2m×4.4mの隅丸方形。確認面からの深さは最大で28cmを測る。床面は平坦で中央部がやや堅く締まっているが、全体的にはやや軟弱である。炉は中央より東寄りに検出された。柱穴は検出されなかった。ただ南壁に接して小掘込みを有する浅い掘込みが検出されているが、性格など詳細は不明である。

遺物 1は口縁部を欠くが、胴部から底部に至る土器である。外面の整形は丁寧なヘラミガキが施されている、内面は剝離が激しい。2は壺の口縁部である、僅かに外反する。内外面ともに剝離が激





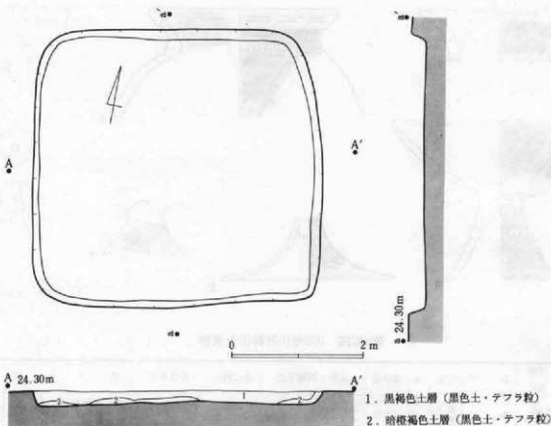
第181図 070号住居跡実測図



第182図 070号住居跡出土遺物

挿図 番号	遺物 番号	器 種	法量 cm	遺存度	成形・調整手法 上段は内面・下段は外面	胎土	色調	焼成
1	6.15. 16	壺	口 径 最大 16.6	33%	ヨコナデ ヨコナデ、ヘケ調整、ヘラケズリ	3~5mm大 の赤色粒子、 細砂多量	暗茶褐色	やや もろ い
2	6.7.17	壺		48%		細砂少量 極めて良質 な粘土	明黄褐色	良
3	19	鉢	9.7	80%	ナデ ヨコナデ、ヘラケズリ	細砂と1mm 大の赤色粒 子	暗茶褐色 内面暗黄褐 色	良
4	5.18	高杯	21.7 11.4 15.7	95%	ヨコナデ、イガキ、ナデ ヨコナデ、ヘケ調整、ヘラケズリ、 ヘラミガキ	細砂、1~ 3mm大の長 石多量	赤褐色 内面暗黄褐 色	良
5	5.8.15	高杯	17.8	20%	ヘラケズリ、ナデ ヘラミガキ、ナデ	細砂、赤色 粒子	淡黄褐色	良
6	2	高杯		25%	ナナメミガキ ヨコケズリ、ヘラミガキ	細砂若干	赤褐色	良

しい。3はほぼ完形の壺である。最大径を胴部上位に持つやや肩の張った感じの壺である。内面は剝離が激しい。4は口縁部の一部を欠くがほぼ完形の壺である。球状の胴部からやや外反する口縁が付く。内外面とも剝離が激しい。また外面中央付近にはススの付着が観察される。5は口縁部を欠く壺である。最大径を胴部の下位に持つ。この土器も内外面の剝離が激しい。6は台付壺である、口縁部付近を欠く。球状の胴部の底部に小さめの脚が付く。整形はさほど丁寧ではない。ここでも器面の剝離が目立つ。7は高杯の杯部である、脚部は接合部分から欠く。杯部は底部に微かな稜を持ち僅かに内湾しながら直線的に大きく口縁が開く。ヘラミガキも丁寧に行われている。8は7と同様に高杯の杯部で、脚は接合部分から欠いている。杯部は横方向のヘラケズリによる微かな稜を持ち、僅かに内湾しながら口縁が開く。閉き方は7ほどではない。口縁部の内外面を除き割合と丁寧なヘラミガキが施されている。杯部内面の中央付近は剝離が激しい。9は高杯の脚部である。穿孔が4カ所に穿っていると思われる。10は完形の土玉である。厚さ36mm、幅34mm、孔径5mmを測る。焼成は良好である。



第183図 071号住居跡実測図

#### 073号住居跡（第186図、図版64）

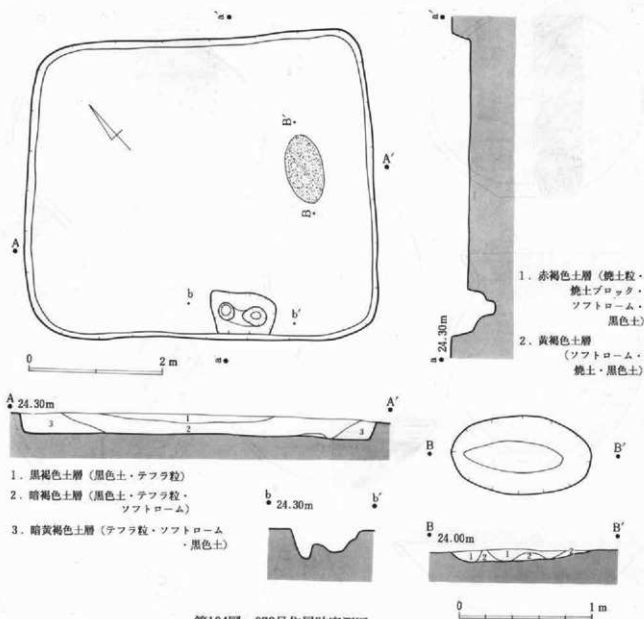
**遺構** 調査区北側西端（E-7）に位置する。平面形状は3.1m×3.0mの隅丸方形。確認面からの深さは最大で20cmと浅い。床面は平坦で全体にやや軟弱である。炉及び柱穴などの施設などは検出されなかった。

**遺物** 出土遺物の量は少なく、図示できるものはなかった。

#### 074号住居跡（第187図、図版64・85）

**遺構** 057号住居跡の西9m、調査区の西の端に位置する。平面形状は3.8m×3.7mの隅丸方形。確認面からの深さは最大で36cmを測る。床面は微かに凹凸があり、全体にやや軟弱である。炉は住居の北東側に偏って2か所検出された。柱穴は検出されなかった。南壁の西寄りには壁に接するように貯蔵穴（70cm×62cm×40cm）が検出された。

**遺物** 1は甕である。球状の胴部に直線的に開く口縁が付く。頸部から胴部にわたってススの付着が観察できる。2は甕である。全体に整形が粗く行われており、器形も歪んでいる。底部は僅かに上げ底状を示す。3は鉢である。口縁部に面取りが施され、口唇部は刃状に鋭角に整形されている。頸部の括れは少ない。全体に整形は丁寧で焼成も良い。4は甕の底部である。5は高杯の脚部である。杯部は欠く。穿孔は4カ所に穿たれている。



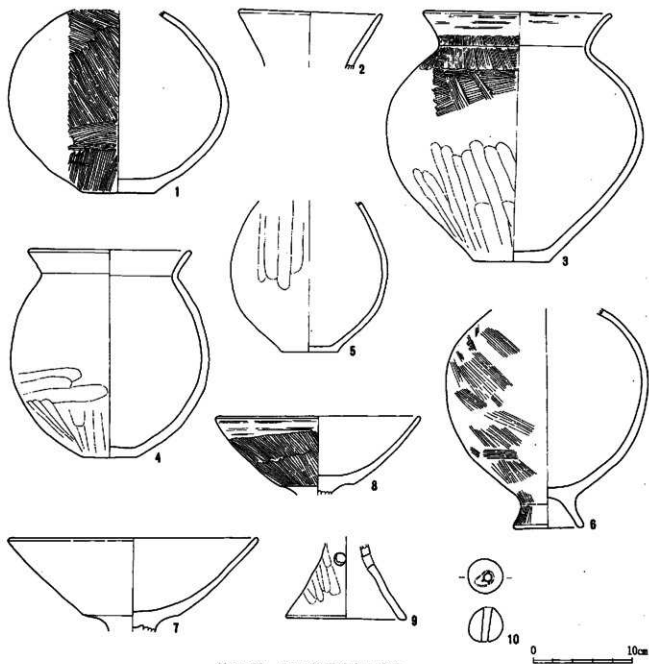
第184図 072号住居跡実測図

088号住居跡 (第188図、図版64)

**遺構** 調査区北側西端 (E-8) に位置し、073号住居跡の南側になる。東側を削平により消失し全体の形状は不明だが、4.0m×3.6mの隅丸方形を呈すると思われる。確認面からの深さは最大で16cmを測る。床面はソフトローム上に確認され、硬化したところは確認されなかった。炉は確認できなかった。南西済みに小掘込み (18cm) が1カ所検出されている。

**遺物** 出土遺物の量は少なく、図示できるものはなかった。

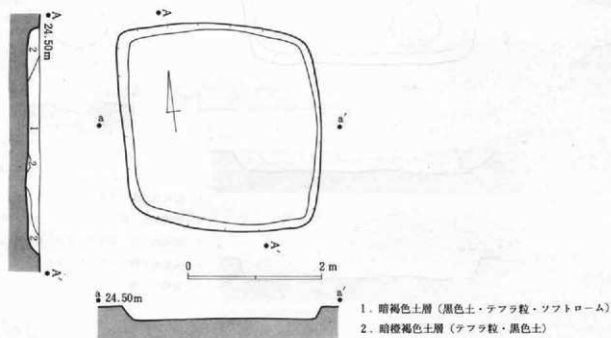
以上、本遺跡から検出された古墳時代前半の住居跡について順にその概要を述べてきた。その数は70軒を数え、今回の調査で検出された遺構の中でも群を抜く。以下に検出された住居跡について簡単にまとめることにする。



第185図 072号住居跡出土遺物

採回 番号	遺物 番号	器 種	法量 cm	遺存度	成形・調整手法	上段は内面・下段は外面	胎土	色 質	焼成
1	9	壺	口 径 7.2 底 高 最大	70%	タテ方向のヘラミガキ		細礫、長石 粒多量	赤褐色に黒 褐色 内面黒褐色	良
2	12	壺		84%	タテ方向のヘラミガキ、ヨコ方向のヘラケズリ ミガキ		細礫少量	暗黄褐色	良
3	3.5, 9, 12, 17	壺	18.9 7.8 24.9	95%	ヨコ方向のナゲ、タテ方向のヘラケズリ ヨコ方向のナゲ、タテ方向のハケミ、ヨコ方向 のヘラミガキ		細礫	暗赤褐色 内面暗茶褐 色	良
4	12	壺		90%	ヨコナゲ、ヨコ方向のヘラケズリ、タテにヘラ ケズリ ヨコナゲ		細礫多量	暗赤褐色 内面黄褐色	良
5	10	壺		40%	ヨコ方向の軽いナゲ タテヘラケズリ		細礫	赤褐色 内面暗黄褐 色	良

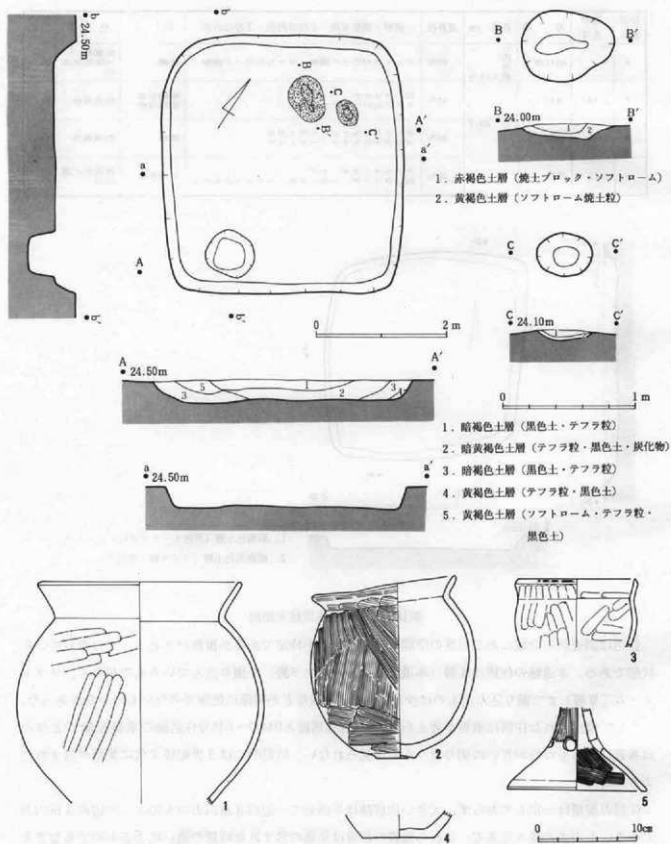
押図 番号	遺物 番号	器 種	法量 cm	遺存度	成形・調整手法 上段は内面・下段は外面	胎 土	色 調	焼成
6	9	台付壺	口 底 高さ大15.6	60%	ナナメ方向のハケ調整、ヨコ方向のハケ調整	細礫	暗褐色 内面暗黒褐 色	良
7	2,14	高杯		45%	深いヨコナゲ タテ方向のヘラケズリ	細礫少量 風雲母粒	暗灰褐色	良
8	11	高杯	20.7	45%	ヨコナゲのもナナメヘラミガキ ヨコナゲのもナナメヘラミガキ	細礫	明黄褐色	良
9	7,11	高杯		25%	タテヘラミガキ、ナゲ 深いヨコナゲ、ヘラミガキ、ヘラケズのもナゲ	細礫多量	淡褐色に黒 斑有	良



第186図 073号住居跡実測図

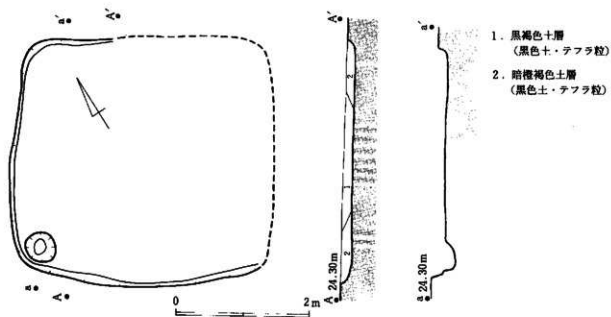
住居は調査区の全域にある程度の空間を持ちながら不特定であるが複数戸まとまって分布している状態である。本遺跡の住居はⅡ層（本遺跡では新期テフラ層）を掘り込んでいるものが多く、ソフトローム（Ⅲ層）まで掘り込んだものは少なく、壁・床面などが明確に把握できないものが多少あった。こうして検出された住居は重複が考えられる041号住居跡と044号・045号住居跡の重複を除くとほかは接近はするものお互いに切り合うものは見られない。時期的には3世紀後半代に集落が営まれたようである。

住居の規模は一定しておらず、大きい住居跡は平面形で一辺約8m四方のものから一辺約3m四方の小さいものまで様々である。これら規模の相違は集落の営まれた時期の違いによるものでもなさそうである。住居の規模の平均的なものは一辺が約4～5m四方の平面形状を示す住居である。次に施設について見てみると、床面に1カ所または複数の炉を設けることが一般的のようで、地床炉が多く検出された。なかには炉も検出されない住居もある。これら炉をもたない住居では炉以外にもカマド



第187図 074号住居跡実測図及び出土遺物

押図 番号	遺物 番号	器 種	法量 cm	遺存度	成形・調整手法 上段は内面・下段は外面	胎土	色調	焼成
1	1.2, 4, 8, 12, 13, 14	甕	口 底 高 最人 20.4	25%	コナダ コナダ, ナダダ, ヘラケズリ	細砂 1mm大 多量	暗褐色 内面暗黄褐色	良
2	1, 6	甕	14.8 3.9 17.9	66%	コナダ, ヘラケズリ コナダ, ヘケ調整, ハケメのちヘラケズリ	細砂 1mm大 多量	明黄褐色 内面明赤褐色	良
3	10	鉢	12.4	20%	コナダ, ヘラケズリ コナダ, ヘラケズリ, ヘラケズリ	細砂 1mm大 多量	暗黄褐色 内面黒褐色	良
4	14	甕	7.3	10%	ナダ ヘラケズリ	細砂 1-2 mm多量	暗赤褐色 内面暗褐色	良
5	1, 4, 11	高杯		50%	コナダ ヘラミガキ	細砂少量	暗赤褐色 内面赤褐色	良



第188図 088号住居跡実測図

を作り使用した痕跡は全くない、さらにカマドの使用を示すような遺物も全く出土しておらず、カマドの使用は考えられない。それから壁に沿って検出される周溝は数軒で検出されたにとどまり、そのほか残りの大多数の住居からは検出されなかった。同じようなことが柱穴にも見られ、支柱穴が明確に検出・確認された住居はそれ程多くはなく、半数以上の住居に柱穴が検出されない状況にある。貯蔵穴については極めて少数の住居跡での検出に限られている。その規模・形態および住居内での位置は一定していない状況である。住居の地面への掘り込みは遺構の検出面から深いもので約70cm、浅いもので約10cmを測り、一定ではない。平均的な掘り込みの深さは約30~40cmの深さである。当時の生活面を現在の地表面近くに設定したとしてもそれ程深くは掘り込んではいないのではないかと考えられる。

本集落（遺跡）はまだ周囲に広がる様子が今回の調査からも十分に何かがえるので、詳しくは今後の残る調査の結果を待ってさらに詳しく検討したい。

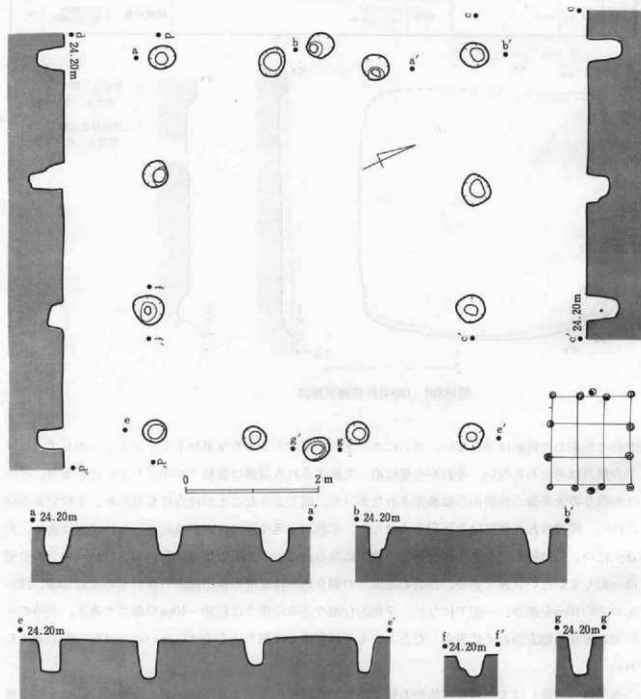


b. 掘立建物跡

住居跡以外に検出された遺構は掘立建物跡が1棟のみであった。以下にその概要をのべることとする。

050号掘立建物跡 (第189図、図版65)

調査区中央の東の端、031号住居跡の南に接近して検出された。側柱のみの検出で、平面の形状は3



第189図 050号掘立柱建物跡実測図

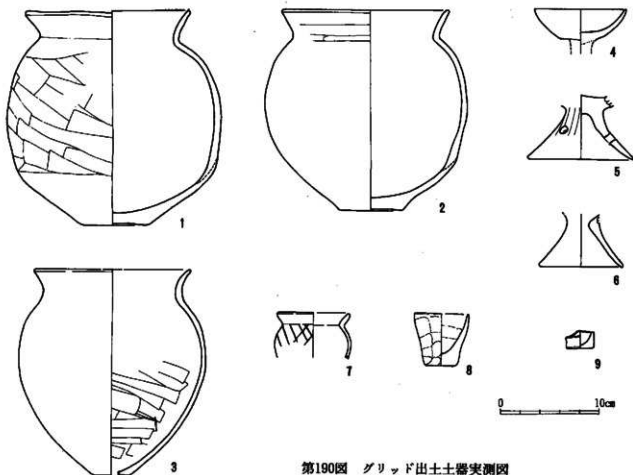
間(6m)×3間(5.1m)でやや東西に長い。また、東西の各妻中央外側に柱穴列に接するようにそれぞれの側に1カ所づつ柱穴が検出されている。本掘立建物跡にともなうものであろう。しかし何に使われたものかは不明である。掘方は径35~50cm、深さは一定せず最も浅い20cmから最も深い58cmと様々である。

掘立建物跡は調査区の東の端に接するよう検出された、住居跡の検出状況などを考え合わせると掘立建物跡が単独の1基のみでの検出とは考えられない、調査区の東側にもさらに複数の存在は十分に考えられる。遺構に伴出する遺物はなかったが、時期的には周囲住居跡の時期や状況等を見ると古墳時代の前半としてもよいであろう。詳細な検討は今後の調査の結果を待ちたい。

## 2. グリッド出土遺物

### a. グリッド出土土器 (第190図・図版86)

遺構以外の包含層からも僅かではあるが土器の出土がみられた。その多くは破片であるが、ここでは器形が復元できた土器を中心に述べることにする。おもに出土したグリッドは11F、12E・12Fの3グリッドからである。遺構は検出されていない地域であるが、あるいは本来遺構に伴ったものかもしれない。



第190図 グリッド出土土器実測図

陣岡 番号	遺物 番号	器 種	法量 cm	遺存度	成形・調整手法 上段は内面・下段は外面	胎 土	色 調	焼成
1	12E-25 ・35 -1	甕	口 16.2 底 6.8 高 21.3 最大21.6 (16.4)	70%	ヘラによる整形 ヘラによる整形、ヘラケズリ	細砂や多い、 赤色粒子少量、 石英・長石 粒子若干	黄褐色	良
2	12E-25 ・35 -2	甕	8.4 (20.3) 20.4	65%	ヘラによる整形 ヘラによる整形	細砂や多い、 長石粒 少々、石英 粒子若干	褐色	良
3	11F-05 ・15 -1	甕	3.8 24.5 (18.9)	30%	ヘラケズリのモノナデ ヘラ(先)によるタテ方向にガキ	細砂、赤色 粒子若干	黄褐色	良
4	12F-00 ・70 -1	高杯	9.2	50%	ナデ ナデ	細砂や多い、 赤色粒子 若干、石英 粒若干	黄褐色	良
5	11F-05 ・15 -2	高杯	10.4 (6.8)	55%	ヘラにガキ ナデ、タテ方向のヘラによる整形、ヨコナデ	細砂、赤色 粒子若干	暗黄褐色	良
6	11F-05 ・15 -1	器台	8.5 (5.2)	50%	ナデ、ヘラによる整形 タテ方向のヘラにガキ、ヨコナデ、ヘラによる 成形	細砂、赤色 粒子少量、 黒色片若干	黄褐色	良

1・2は12E区からの出土でもとも土師器の甕である。内外面ともヘラによる整形が行われている。ともに胴下半部に稜ともいえないほどの屈曲が見られ、接合痕も観察される。土器の上半部と下半部が別々に作られ結合されたときのものであろうか。3は11F区からの出土の甕である。内外面ともヘラによる整形が行われている。1・2と違い胴部上位に最大径をもち、底部が器形のわりに小さい。1～3ともに胴部中央付近にはほぼ一周してススが付着している。4は高杯の杯部である。脚部との接合部で欠損している。二次焼成を受けた痕跡がある。5は高杯の脚部である。裾は大きく開き、3カ所に穿孔が穿たれている。6は器台の脚部である。器受部から脚部に掛けて穿孔があるが、脚部には穿孔は見られない。7は小型の甕の破片である。薄手で焼成も良好である。胴部にはヘラによる沈線で格子状に文様が刻まれている。8は手捏土器である、鉢形を呈する。9は非常に小さい手捏土器である。

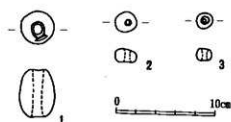
以上、遺構外出土の土器についてその概要を説明してきた。土器の種類・器形・法量・製作手法などを見ると古墳時代前半の土師器の特徴を備えており、本遺跡の住居跡から出土する土器の特徴とも一致する、ここにまとめて示した遺構外出土の土器は古墳時代前半期の土器としてよさそうである。

## b. 古墳時代の石製品・石器

### 石製品 (第191図、図版86)

調査区の北西端に位置するグリッド5F-36から瓊玉1点と丸玉2点、グリッド4H-14から丸玉1点計4点が出土している。この内グリッド5F-36から出土した丸玉1点(琥珀製)は細かな破片に割れてしまい、復元が不可能で原形を知ることが出来なかった。残る3点についてその概要を述べることにする。

1は瓊玉で一部に欠損も見られるがほぼ完形である、石材は硬玉製で長径24mm・短径17mmを測る小型の扁球形の玉である。玉には長軸に沿って両端から径4～6mmを測る孔が穿たれている。表面は丁



第191図 古墳時代グリッド出土玉類実測図

寧に磨かれている。ほかには装飾もない。2は丸玉で石材は琥珀製で径11mm・厚さ13mmを測り、やや偏平で白玉を思わせる形状を呈する。中心には両端から径3～4mmの孔が穿たれている。表面は小さな凹凸が多数見られあまり丁寧な造りとはいえない。また割れてしまったもう1点の丸玉も琥珀製であり破片の状況から同様な形状を示すと思われる。3は丸玉で石材は硬玉製で径7mm・厚さ6mmを測る。中心には両端から径2～4mmの孔が穿たれている。表面は丁寧に磨かれている。

これらの玉類は包含層からの出土で何等かの施設に伴うものではなかった。また出土した周囲にも関連するような施設・遺構は検出されていない。さらに出土地点が台地の外れ近くであり、集落を考えてもその外側に位置している。これらの単独での出土は考えにくく、今後改めて検討が必要と思われる。

#### 石器 (第192図、図版86)

昭和57・58年度と2回にわたる調査で、住居跡から石器の出土があった。その中で古墳時代の所産と思われる石器が少数だが見られた。以下にそれらの石器の概要を述べることにする。

1は砂岩製の磨石である、平坦面と側面によると思われる磨痕が見られる。また敲打によると思われる剝離痕が一部に残る。しかし本来の使用の詳細は不明である。2～5は砥石であるが、破片で、ほぼ完形で残るのは5のみである。2・3は砂岩、4は流紋岩、5は粘板岩製である。2・3の盤状に平たいものと4・5の棒状のものとの2つの種類に形態分類できる、使用目的がそれぞれ違っていたのであろうか。4・5の形状のものは現在でも鎌などの刃を研ぐ砥石によく見られるものである。6～9は軽石(浮石)である。いずれも多孔質の淡色の軽石である。7は長方体に整形しており、9は図の下方の部分が面取りして整形した様による摩擦が観察される。6・8は使用によるものなのか加工によるものなのかは判然としないが、擦れたような痕跡が見られる。また、いずれの軽石も孔を穿った様子はない。

以上、石器についてその概要を述べたが、砥石は明確にその使用目的もはっきりしているが、そのほかの石器についてはその使用が判然としない。軽石などは形状・加工された部位等が違い一様にその使用目的を決められない。



第192図 古墳時代石器実測図（遺構出土）

第8表 古墳時代石器計測表

神岡 番号	遺物		分類	計測値 (mm)			重量 (g)	打面	細部調整	石材	備考
	出土地点	番号		長さ	幅	厚さ					
1	052	-10	磨石	(9.5)	5.7	1.9	152.7			砂岩	b
2	038	-25	砥石	10.0	9.9	2.6	380.4			砂岩	
3	070	-14	砥石片	(4.2)	4.5	1.7	48.9			砂岩	
4	044	-2	砥石片	(5.4)	(5.0)	(2.1)	48.1			流紋岩	
5	030	-27	砥石	11.1	3.8	2.4	169.5			粘板岩	
6	054	-2	軽石	6.3	4.6	3.0	16.1				
7	066	-13	軽石	4.0	2.6	2.6	5.6				
8	009	-18	軽石	7.2	9.1	4.8	41.0		有		
9	066	-8	軽石	4.7	5.1	3.9	15.5				a
	066	-8	軽石				3.5				b

## IV. その他の時代の調査

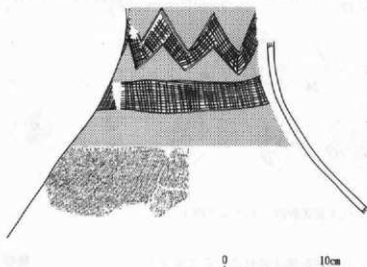
### 1. 弥生時代の調査

#### a. グリッド出土の土器

本遺跡の北側、昭和58年度の調査区域では残念ながら遺構よりの出土ではないが弥生時代の土器が僅かではあるが検出された。以下に出土した土器について文様等がはっきりしている土器破片についてその概要を述べることにする。

#### 弥生式土器群 (第193・194図、図版35)

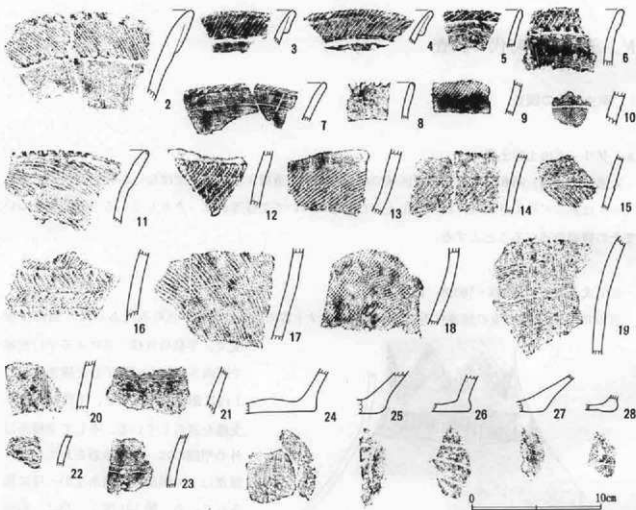
第193図1は大型の壺の頸部付近である、形を成す土器の出土はこの1点のみであった。頸部は無



第193図 弥生時代土器実測図 (グリッド出土)

文で、半截竹管様工具による平行沈線  
で区画された中に格子目を描きながら  
上段に鋸歯状の文様を、下段に帯状の  
文様を巡らしている。そして文様帯以  
外の空間には一様に赤彩されている。  
頸部以下の胴部には燃糸文が一様に施  
されている。第194図2~28は土器破  
片である。2~6は口縁部の破片で外  
へ向かって大きく開く、口縁部は粘土  
の折り返しにより肥厚し、さらに口唇  
部から口縁部にかけて燃糸文が一様に  
施されている。加えて無文の頸部には

櫛歯様工具による文様を、2は縦位に等間隔を於いて、5・6には横位に波形文を施している。7・8は口唇部付近に段を持たない口縁部の破片である、7は口唇部にヘラ様工具による短沈線様の刻みが、8の口唇部には棒様工具の刺突が加えられ波形様の文様を作っている。9・10・12～18は頸部および胴部の破片である、細い縄文または短軸絡条体による文様が施されている。そのうち9・10は縄文が施文されていない区域に赤彩が施されている。11は口縁部である、口唇部には棒様工具による刺突が加えられ波形様の文様を作り、以下には燃糸文が施されている。19～23は頸部付近の土器である。無文帯には櫛歯様工具を用いての平行沈線を縦横または波形様に施文し文様を描いている。24～28は底部の破片である、胎土・焼成などから弥生式土器の底部と判断した。すべて平底を呈している。底部外面に、24は布目痕が、その他は木葉痕が観察できる。



第194図 弥生時代土器拓影図(グリッド出土)

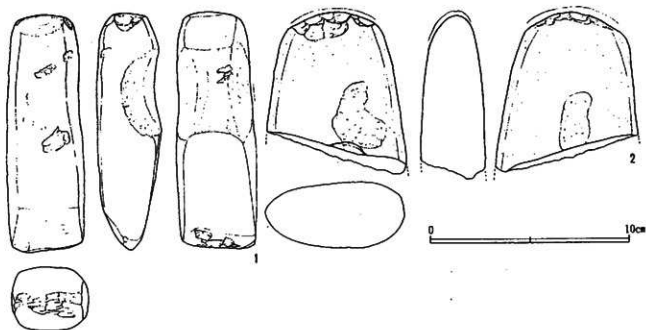
以上、本遺跡出土の弥生式土器についてその概要を施文されている文様を中心に述べてきた。概観すると、弥生時代後期の土器群の特徴を備えているものが多い。第193図1の土器は久ヶ原式期に比定できると考える。そして第194図に示した土器破片は小さいものが多くなかなか分類は難しいが、

第194図の8・11・12・16および底部の土器などはいわゆる「北関東系」とも「白井南式」とも言われる土器群と考えられる。本遺跡が立地する印旛台地を含む千葉の北部では、弥生時代後期の土器群のなかには関東の北東地方の弥生式土器に類似する土器群またはそれらの要素を備え持つ南関東地方の土器群も見られるなど、現在でも当該期の土器群について十分に把握されていない状況にある、さらに詳細な検討が必要である。

b. グリッド出土石器 (第195図、図版36)

昭和57・58年度と2回にわたる調査で、若干ではあるが石器の出土が見られた。遺構と包含層からそれぞれ1点ずつの出土が見られた、次に遺物の説明を述べる。

1は013号住居跡から出土したもので、砂岩製の磨製石斧である、刃部は丸みを帯び、一部には剝離(刃こぼれ)の痕が見られる、使用の結果と思われる。また柄の部分には袢りが入れられている。2は花崗岩製の磨石であるが、完形品ではない。周囲と平坦面の一部に擦痕が認められる、また長軸の端部は敲打によると思われる剝離が観察され、多様な目的のために使用されていたようである。



第195図 弥生時代石器実測図

第9表 弥生時代石器計測表

挿図 番号	遺物		分類	計測値(mm)			重量 (g)	打面	細部調整	石材	備考
	出土地点	番号		長さ	幅	厚さ					
1	013	-21	磨製石斧	11.6	3.9	3.3	28.8			砂岩	
2	6F-35	-3	磨石	(83.3)	7.1	3.2	24.2			花崗岩	



### 第3章 結 語

#### I. 先土器時代 (第196~199図)

先土器時代出土の石器を接合資料を除いた地点別・器種別を一覧できる様に第196図に示した。なお、図表中の地点外出土の遺物をのぞく遺物実測図正面の最下端がその遺物の出土した標高を示し、さらに実測図上位にその遺物の石材を示す記号を付した。この図表を参考にして、本遺跡出土の石器群について概観し、くわえて本遺跡の先土器時代について簡単にまとめてみることにする。

本遺跡出土の先土器時代遺物は、とくに石器群に限定してそれを構成する石材、石器組成、そして剥片剥離技術などから本県での先土器時代文化に、石器の産出層準を参考にして石器組成を中心に文化層の編年に対比して見ると「下総Ⅱa期」に帰属する第1地点、「下総Ⅱb期」に帰属する第2地点と第3地点の二つに分類が可能であると考えられる。そのなかで第1地点では黒曜石の石核を中心にして剥片の接合が見られ、石器の製品を受け入れていただけではなく石器を製作していた可能性も十分に考えられる。さらに第2地点では石器群に重複し広範囲にわたり受熱により赤色に変色したり、細かく割れたと考えられる礫や礫破片が数多く出土している。礫とくに拳大の重さ200g前後の大きさのものは先土器時代の「調理用具」でねその集まった礫群は「調理施設」の可能性を示すものとも言われており、本遺跡出土の礫・礫破片もその多くが「調理用具」として使用されていたものとも考えられる。そこで、本礫群の礫・礫破片について以下に行を改めてもう少し詳しく検討することにした。これら地点出土の遺物に加えて、地点外から出土した石器をも概観して見ると、「下総Ⅱc期」以降の文化層に帰属する遺物の出土も見られるなど本遺跡が立地する台地は先土器時代も長期にわたって人々の生活に係わっていたことをうかがわせている。

#### ◎第2地点出土の礫・礫破片について

##### ○研究略史

はじめに「礫群」の研究史について非常に簡単であるが触れることにする。礫群そのものは、先土器時代の研究の出発ともなった岩宿遺跡の調査でも石器群にもなって発見されており、先土器時代の石器群研究が本格的に開始され始めた初期の段階からその存在が知られていた、そして先土器時代の存在が明らかになるにしたがって礫群も石器群と同様に先土器時代の人々らの生活・文化を研究するための重要な資料であることの理解や注意が向けられていた。石器群の調査のなかで礫群の発見も多くなり礫群そのものについて機能や用途などについても研究され、多くの研究者が様々な解釈を提示したが、礫群の性格を明確に示すものはなかった。そして途中、先土器時代の研究は「石器群」にその研究の主眼がおかれて礫群の研究が停滞した一時期があったが、近年埋蔵文化財の発掘調査の数も増大し、また調査面積もそれに伴って増加して、より深く、より広範囲にわたって調査が出来るようになった。そしてこのことは礫群の発見される機会をも増やす結果になったわけである。こうして増加してきた「礫群」には同じ「礫群」ではあるが

その形態に違いがあり、さらに礫群を包蔵する遺跡の立地する台地、そしてその台地での検出される位置及び産出する層準などによってもその様相が様々であることが知られてきた。また最近では様々な視点から研究がなされるようになり、その研究の増加に伴って石器群とともに礫群の検出例も増加してきた。層準的にはいわゆるA T (給良 a n 沢バミス) 降灰以後の「下総Ⅱ a 期」からの検出例が多い。

#### ○第2地点出土の遺物について

本遺跡第2地点で出土した先石器時代遺物について再度その構成について簡単にまとめることにする。産出層準は立川ローム層の「Ⅲ層」(ソフトローム層) 下部から「Ⅳ~Ⅴ」層にわたっている。下総台地ではいわゆるⅢ層に続く「ハードローム」に相当する「Ⅳ層」がⅢ層のソフトロームとの同一化も考えられ、産出基準はⅣ~Ⅴ層である可能性を考えておかねばならないだろう。この層準は千葉県での先石器文化の「下総Ⅱ b 期」に相当する位置でもある。出土した遺物の総数は1025点、うち石器群としては104点が識別可能であった、なお詳細は本文第2章1の「2. 遺構と遺物」で述べているのでここでは省略する。残りの921点が礫群として分類が可能であった。この礫群のうち接合を行わずに個体として分類できたのは僅かに30点にすぎなかった。残りの891点は破片である、このうちの233点は散細な破片であったので資料として使用出来ない状況にあった、結局残った668点について「礫群」資料として接合・分類などに使用可能であった。この数量でも第2地点出土の遺物総数に占める割合は65.6%を越え、さらに破片の233点を加えると実に90.1%にもなる。つまり礫・礫破片の方が数量的には石器群をはるかに上回り、本地点が石器群を主体に礫群が伴うといったものではなく、逆に礫群に石器群が伴うかたちの遺物群の構成である。また完形礫が非常に少なく大部分は礫の破片であり、広範囲にわたって出土している。本礫群がどのような状況の結果、今に至ったかをできる範囲で検証してみようと思う。

#### ○「礫群」とは

現在一般に多く用いられている「礫群」と言う二字の熟語から想像されるものは礫(河原などでよく見かける石)の集まったものと言うような、想像は出来るもののその実判然としない漠然としたものである。研究史の前半でも「礫群」、「配礫」などとその表現も研究者によって様々であり、固定的な概念ではなかった。礫群が初めて定義されたのは野川遺跡の報告で、「拳大の礫が密集するもの」とされ、「配石」(幼児の頭大の礫が点在するもの)とは区別された。しかし密集とはいったい何個の礫がどのような状態にあるのか具体的には示されず、本文中でもかなり例外とするものも多い状況であった。つまり、この定義でもまだ外部の部分の解釈にとどまっている感がありまだ不透明の中にある、しかし一般的にはこの定義が定着しているようである。近年、礫群の発見例が増加してきたなかでその形態がさまざまな様相を示すものであることが徐々にではあるが分かってきた。最近ではこうした礫群の総合的な検討に加え、礫群を構成する礫そのものの属性の検討からその集合体である礫群個別の属性についても検討されるようになった。こうしたなか礫群を構成する礫のほとんどが、その表面が赤色に変化し、ひびが入りさらに割れている状態にあることにも注目し、「礫群」とは「主に拳大(500g前後)以下の焼け礫によって構成される礫のまとま

<p>ナイフ形石器</p> <p>第1地点</p> <p>23.00m</p>	<p>角礫状石器</p> <p>第2地点</p> <p>23.00m</p>	<p>第3地点</p> <p>23.00m</p> <p>第3地点</p> <p>23.00m</p>
<p>ナイフ形石器</p> <p>第1地点</p> <p>23.00m</p>	<p>角礫状石器</p> <p>第2地点</p> <p>23.00m</p>	<p>ナイフ形石器</p> <p>第1地点</p> <p>23.00m</p>
<p>ナイフ形石器</p> <p>第1地点</p> <p>23.00m</p>	<p>角礫状石器</p> <p>第2地点</p> <p>23.00m</p>	<p>ナイフ形石器</p> <p>第1地点</p> <p>23.00m</p>

第1968図 先土器時代遺物一覽

り」として定義し、(焼けていない) 礫の集まりであると一般に理解されている「礫群」は本来その用途などに違いがあり、区別されるべきであるとして別の名称を考えるべきであるとする研究者もいる。

礫が赤く変色し、ひびが入り、そのために割れてしまう状態は、礫を個別として見た場合、結果に至るまでには様々な要因が加わっていることが考えられるが、とにかく一定以上の熱を一定期間(時間)を越えて受けた結果もたらされる状況のものであることは間違いのないであろう、受熱による礫の変化はその礫またはその礫を内蔵する礫群の一属性にすぎないとも考える。発見される礫群の多くがこの様な状態にある礫が集まったものであっても、それはその礫群が何等かの使用の結果であり、熱を受けない礫の同様な集まりはその使用がなかったか、それに至るまで使用されなかったか、はたまた全く使用されなかったのか、様々な状況をも考えておかなければならないのではないだろうか。

以下、ここで言う「礫群」とは「本来、主に拳大以下の自然礫〜丸みを持ち意図的に破砕された部位を持たない〜によって構成される、または構成されていた礫・礫破片のまとまり」を意味し、受熱による礫の変化は、特別「礫群」の判断の根拠とはしていない。

## ○礫・礫破片の分類

次に第2地点出土の礫・礫破片についての分類を行うことにする。なお分類の対象とした資料は、接合作業により2点以上の破片が接合した資料106個体と、個体として分類可能な50%以上残る接合しない礫・礫破片の30点を含む合計136点(破片数では698点)について分類作業を行った。

### 1) 礫群を構成する礫の石質

礫群構成礫の石質は第11表に示すとおりである。不明(11.7%)を除く、120点について分類すると、11種類の石質に分類できる。そのうち砂岩(29.4%)、チャート(18.3%)、安山岩(16.9%)の3種類で全体の65%を占め、凝灰岩(7.3%)、花崗岩(6.6%)、石英(3.7%)と続く。そのほかは1.5%以下と非常に少量の出土である。

ここで、本礫群に関係する礫の産地、あるいは供給源について簡単に触れておきたいと思う。本礫群の主体を占める礫、とくに中心である砂岩、チャート、安山岩の3種類の石種は本県内の礫群でも多く利用されている主要5種類の内3点でもある。これらの礫の産地(供給源)は現段階では特定は難しいが、供給源と考えられる地域がある。本県には東京湾岸部(富津市付近一長浜層と呼ぶ)から房総半島中部(万田野層と呼ぶ)に大きな礫を含む礫層が存在し、礫の岩石種類はチャート、砂岩がその中心を占め、ほかに少量のメノウや安山岩も見られることが知られている、大きさは長さが5~10cmが主体である。

本遺跡の立地および、利用されている岩石の種類・構成などを見ても本県中央部に存在する礫層に包含されている礫が第2地点の礫群を構成する礫、加えて本遺跡出土の石器素材または礫の供給源になっていた可能性を十分に考えておかなければいけないであろう。

### 2) 礫群を構成する礫の大きさ

礫群構成礫の大きさはおおむね「拳大」以下ではあるが、ある一定の大きさのものが目立つようだ。本礫群は復元礫の復元率が50%以下の礫が70点と過半数を越えており実数としての把握が難しい、そこで、長

さについてのみ観察すると、長さ3cm～7cm、及び7cm～12cmの礫が56点と集中している。本礫群では長さが3cm～12cmの礫が最も多く利用されていることが分かる。ただ最小長と最大長に4倍近い差があり、礫群の大きさのばらつきが大きいことが想像できる。また、復元率が50%以下の礫についてみても長さ12cmを越えるものはほとんど見られないと言ってよく、おおむね本礫群に使用された礫の大きさは長さ12cmを越えるものはほとんど見られないと言ってよく、おおむね本礫群に使用された礫の大きさは長さ12cm以下の長さ7cm前後の礫が多用されたと考えられる。

第11表 第2地点出土礫・礫破片の石材別占有率

石材名	完形礫数	大中礫片	復元率		小計	礫の大きさ (長さ比 単位cm)						小計	占有率	備考		
			個体数	占有率		<50%	>50%	～1	～3	～7	～12				12～	不明
砂岩	3	6	31	29.3%	11	20	40	0	0	13	5	0	22	40	29.4%	
チャート	1	0	24	22.7%	13	11	25	0	0	9	6	0	10	25	18.3%	
安山岩	1	2	20	18.9%	3	17	23	0	0	3	3	0	17	23	16.9%	
凝灰岩	1	1	8	7.5%	2	6	10	0	0	3	2	0	5	10	7.3%	
石英	0	0	5	4.7%	1	4	5	0	0	1	0	0	4	5	3.7%	
花崗岩	3	4	2	1.9%	1	1	9	0	0	4	1	0	4	9	6.6%	
流紋岩	0	0	2	0.9%	0	2	2	0	0	0	0	0	2	2	1.5%	
変成岩	1	0	1	0.9%	1	0	2	0	0	0	1	0	1	2	1.5%	
礫岩	0	0	1	0.9%	0	1	1	0	0	0	0	0	1	1	0.7%	
頁岩	1	0	1	0.9%	1	0	2	0	0	1	1	0	0	2	1.5%	
粘板岩	0	0	1	0.9%	0	1	1	0	0	0	1	0	0	1	0.7%	
不明	3	3	10	9.5%	3	7	16	0	0	1	1	1	13	16	11.7%	
合計	14	16	106	100.0%	36	70	136	0	0	35	21	1	79	136	100.0%	

\* 第2地点出土遺物のうち石器以外の礫・礫破片の総数は921点(90.1%―検出遺物総数に占める割合)、復元礫の破片総数は668点[72.8%―礫・礫破片総数に占める割合](65.6%)を数える。ほかに個体として数えられるものが30点[3.3%](3.0%)、合計698点[76.1%](68.8%)を資料として使用。残り222点[23.9%](21.5%)は小破片であり、資料としての使用ができなかった。なお、礫・礫破片以外の104点(9.9%)はいわゆる石礫として報告している。

### 3) 礫群を構成する礫の重さ

まず、完形礫についてみると総重量1,183g、平均重量91.0230g、標準偏差78.5976gとなる。また、復元礫のうち復元率が50%以上の礫35点(復元礫106点の33%)についてみると復元礫推定総重量5,205.5g、平均重量148.7285g、標準偏差91.7581gとなる。これらを平均してみると119.8gとなり、長さ7cm前後の砂岩礫の重さに近い値である。完形礫の平均重量と復元礫の推定平均重量との差が57.7gもある。この礫の平均重量の差は、復元礫の総重量を残存する礫の重量から推定し求めた結果のためであると考えられる。復元礫の推定総重量は総体的に本来の重量よりは重めの数字を示していると考えられるので、若干割り引いてみる必要があるだろう。また、双方の標準偏差をみると、完形礫では、78.5976、復元礫では91.7581と大きな数値を示す、この数値はともに資料の礫個体の重さに大きなばらつきがあることが分かる。礫個体の重さは石質の違いにもよると考えられるが、礫の大きさの違いが最も関係していると考えられる。

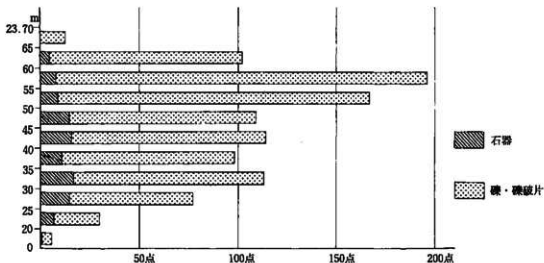
#### 4) 礫群を構成する礫の表面の状況

本群を構成する礫は完形礫が少なくほとんどが礫破片であるが、そのすべてを観察すると、受熱による礫表面の赤色変化はほとんどの礫に見られる。このことから、これらの礫は礫群の主たる性格である「調理施設」を構成していた礫であることが十分に考えられる。しかし、これらの礫にはスズまたはタール状の付着物と思われるものが観察されたのは数点のみで、それも極めて狭い範囲に付着しており特定は困難である。

#### 5) 礫群を構成する礫の分布

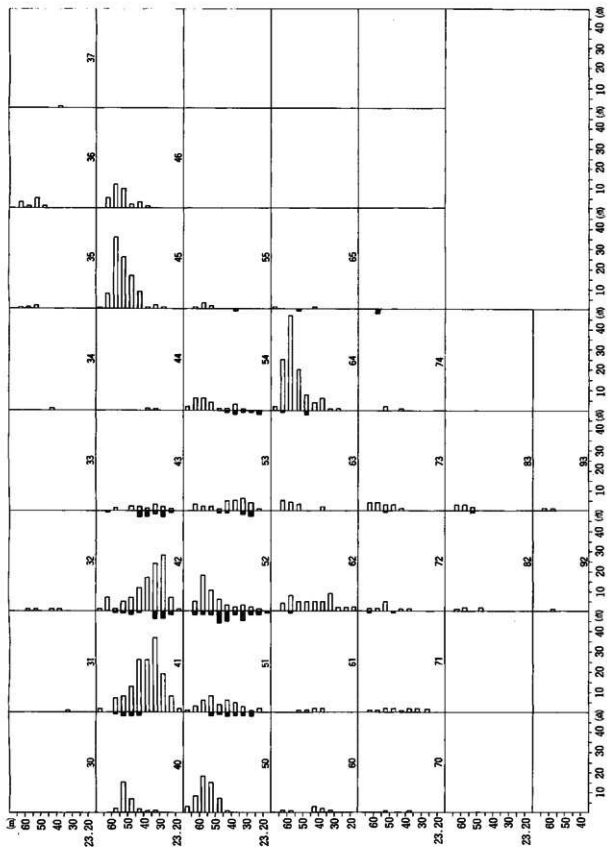
まず、水平分布についてみると、本文でも述べたように総体では東西16m、南北12mを測る広い範囲に分布（第8図及び第14図参照）している。他遺跡で検出されている多くの礫群でもこのように広範囲にわたる礫の分布は一般的ではなく、多くは径1～2mの範囲に集中してまとまっている状態が一般的である。大きくても4m前後の範囲に収まる程度である。そこで、本礫群についてさらに観察・検討した結果、グリッド7K-41、42を中心とするグループ（G<sub>a</sub>と呼称する）、グリッド7K-45を中心とするグループ（G<sub>b</sub>と呼称する）、そしてグリッド7K-64を中心とするグループ（G<sub>c</sub>と呼称する）の大きく3つのグループに分けられそうであることが分かる。これら各グループ毎に水平分布について観察して見るとけっして密とは言えないまでもある程度の遺物集中部分があり、周囲に小数の遺物の散布がみられるという状況を示しており、各グループ毎ではまとまった一つの状態にあると言える。分布の範囲も一般にみられる範囲に近い状況を示している。

つぎに垂直分布についてみる。本文では産出層をⅢ層（ソフトローム層）として、下位のN～V層から



第197図 第2地点遺物垂直分布状況

の産出も見られると述べたので、Ⅲ層とN～V層の境界付近の標高である23.45mを基準にして上下に5cmの単位で遺物の垂直分布の状況を第197図に示した。こうして遺物の分布状況を観察すると標高23.55～23.60mの範囲から産出した遺物が最も多い。しかしこれより下位にも出土量を多く示すところが2カ所観察される。これは水平分布で見られた集中地点の3カ所の分散によるものなのであろうか。そこでさら



第198図 第2地点グリッド別遺物垂直分布図

に、細かく小グリッド（2m×2m）単位に区切って遺物の垂直分布状況を示すと第198図のとおりである。遺物の集中するグリッド及び深さ分かる。グリッド7K-45、そしてグリッド7K-64を中心にする2つのグループについては標高23.45mより高い位置に遺物出土の中心を持っていることが読み取れる。またグリッド7K-41、42を中心とする遺物の出土状況は平面分布では同一グループ内と思われたが、遺物の集中する深さが標高23.45mを境に上層（グリッド7K-50、51、52を中心とするグループG a I）と下層（グリッド7K-41、42を中心とするグループG a II）とに二分される。この下層の礫群はほぼ円形に分布し多少遺物の分布の傾きも見られ、何か凹みが存在するようにも考えられるが、残念ながら調査時点では何等遺構の可能性も確認できなかった。そこで、本群はG a I、G a II、G b、G cの4つのグループに分割の可能性があることがうかがえる。また、各グループ毎にみた垂直分布では、多くの遺物が15cm程度の高低差の範囲内に集中して検出されており、垂直方向でもまとまっている状況であると言えよう。

#### 6) 礫群を構成する礫の接合状況

礫・礫破片の接合状況については第3表に示したとおりである。さらに小グリッド単位で見た接合状況について、こんどは数量ではなくグリッド毎の遺物出土の有無を含めてみると第199図に示したようになる。接合状況を見ると、そのほとんどが同一グループ内で接合している状態がうかがえる。さらに第199図の○を付した接合遺物は復元率（接合率）が70%以上の礫について示したもので、復元率の高い礫・礫破片ほど同一グループ内での接合が多いことが見て取れる。つまり本礫群の個体別の礫・礫破片の分散はそれほど広い範囲に至らず、割合と狭い範囲内で収まっている状況にあることが分かる。

#### 7) 礫群と重複する石器群の状況

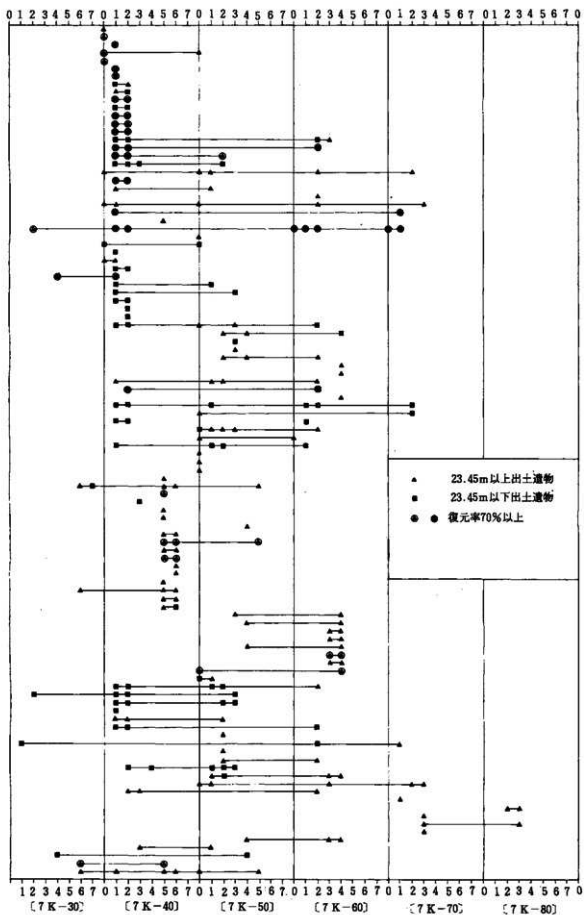
第2地点出土の石器についての詳細は本文で述べた通りである。ここではその分布状況に主眼をおいて見てみることにする。さて、本文では第2地点全体の遺物分布状況および接合状況について本文中で示したが、石器群については明示していなかったため、ここで石器群の分布（水平）および接合状況を石器の素材である石材別に分類して改めて明示することにした。第200図がそれである。なお、垂直分布については第197・198図に既に示してある。グリッド7K-41、42、51を中心に東西に若干長く楕円上に分布し、標高23.45m、以下にその集中が見られる。接合する石核、剝片等は近い範囲から検出されている。これら石器群の分布の状況は、G a IIとは若干南北にずれるが、かなりの部分を重複し、ほぼ同一層準と言えらるる状況を示している。

#### ○まとめ

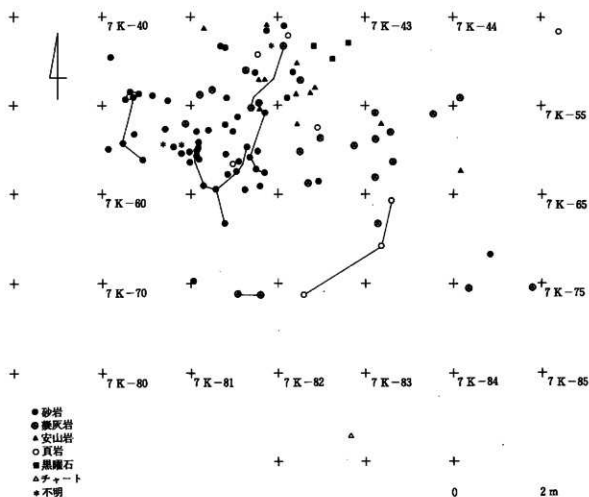
第2地点出土の礫・礫破片について以上の7項目にわたって分類を行った。しかし石器の検出時の詳細な状況、例えば炭化物や焼土（粒）などの検出状況、または土坑状の遺構の有無など直接的、間接的に礫群と関連すると思われる資料の集積が若干不足していることが考えられるが、以下に本礫群についての性格などについて不十分ながらもまとめをすることにする。

本県での先石器時代の遺構・遺物の検出例はその数を増やしつつあるが、こと礫群については検出例は増加してはいるもののそれ程多くはない。また検出される礫群自体も、その規模や構成する礫の数なども





第199図 第2地点曜・礫破片グリッド別接合状況図



第200図 第2地点石器分布図（石材別）

小數であり、全体に小規模なものが多い。これは「石なし果」と言われる本県の特徴なのだろうか。さて、本遺跡検出の礫群（第2地点）の状況を簡略的にまとめると次のようになる。

- ① 礫群を構成する礫の石質は砂岩、チャート、安山岩が主体的（全体の65%）である。
- ② 礫群を構成する礫はそのほとんどが破片である。完形礫は14点と非常に少ない。
- ③ 礫群を構成する礫はそのほとんどが熱を受け本来の礫表面が赤色に変化している。ススまたはタール状の付着物はほとんど見られない。
- ④ 礫群を構成する礫は長さにして7cm前後で、最小3cmを下回るものはなく、最大12cmを越える礫は少ない。全体に小ぶりである。
- ⑤ 礫群を構成する礫の重さは110g前後の礫が多く使用されたと考えられる。
- ⑥ 礫群を構成する礫は大きく4つのグループ（Ga I、Ga II、Gb、Gc）に分けられ、それぞれのグループではまとまった遺物の分布状況を示す。
- ⑦ 礫群を構成する礫はGa I、Gb、GcのIII層を産出率とする礫・礫破片のみで構成するグループと、Ga IIのように石器を共存する礫・礫破片のグループとに分層が可能である。

以上の要点をまとめると、本礫群は礫表面の受熱による赤化から考えると、礫を用いた「調理施設」を構成していた礫であることは十分に理解できる。しかし本礫群が「調理施設」そのままの状態であるかを考えてみると、本礫群は礫破片が全体の90%以上を占め、完形礫はほんの少数にすぎず、礫の水平・垂直分布、および集散状況を見て、ある程度の密集箇所がみられるも、使用中または使用されなくなってそのまま遺棄された状態とは考え難い。また、礫破片の接合状況を見て、50%以上復元できた礫は接合した礫全体の3割程度に過ぎず、7割が50%以下である。さらに本礫群には接合が困難な細かな破片が多い、このことは礫の供給が必ずしも十分ではない状況から礫を何回も使用した結果とも考えられる。この状況を考慮しても「遺棄された状態」を示す結果とは必ずしも言えない。こうして考えると、本礫群は総体的に使用後に不用品としてまとめて破棄された礫である可能性が高い、しかもほぼ同一な深度で集中箇所が少なくとも3カ所（グループGa I、Gb、G）に分散される状況を考え合わせると、何回かに分けて破棄されたことが考えられる。残念ながら本礫群と同一箇所からの焼土・炭化物の集中箇所が確認されていないことは、「調理施設」は多少離れた場所に設けられ、使用されていたことが考えられる、それもある程度の長期にわたって利用されたと考えられる。

また、グループGa IIとした石器を伴する礫群の礫・礫破片を前述のように分類し、結果を検討すると、ほかの3つのグループと同様に礫・礫破片は「破棄された状態」を示していると言える。

この礫群に伴する石器は刮片が、それも破片が多く、逆に石器製品は少ない。検出された石器の中には石器製品自体完形品は少なく、角錐状石器1点と掻器2点が確認できたのみである。接合資料を見ても石器素材としての刮片は見られない。これらの石器は伴する礫群同様に「破棄された状態」を示しているのだろうか。先土器時代の生活をより深く理解するためには礫群に対しても、石器群と同様に注目してみる必要があるかもしれない。

#### 【引用・参考文献】

- 小田 静夫他 『前原遺跡』 1976  
 金山 善昭 『礫群』 『新橋遺跡』 1977  
 金山 善昭他 「鈴木遺跡の礫群の分析」 『鈴木遺跡』 I 1978  
 金山 善昭 「武蔵野・相模野両台地における旧石器時代の礫群の研究」 『神奈川考古』 19 1984  
 金山 善昭 「先土器時代の礫群研究史」 『古代文化』 39-7 1987  
 金山 善昭 「礫群研究の手掛かり」 『東京の遺跡』 No.27 1990  
 小林 達雄 「野川先土器時代遺跡の研究」 『第四紀研究』 10-4 1971  
 田村隆・沢野弘他 『千葉県文化財センター研究紀要』 11 1987  
 辻本 崇夫 「礫群の形成過程復元とその意味」 『古代文化』 39-7 1987  
 藤野 次史 「鈴木忠編『先土器時代の礫群をめぐって』」 『考古学研究』 34-4 (No.136) 1988  
 保坂 康夫 「先土器時代の礫群の分布とその背景」 『山梨考古学論集』 I 1985  
 保坂 康夫 「礫群使用の非日常性について」 『古代文化』 39-7 1987  
 保坂 康夫 「礫群とブロックの関わりについて」 『山梨考古学論集』 II 1989

## II. 縄文時代

本遺跡の縄文時代の遺構・遺物は、調査区の北側の区域の集中して検出され、南側の区域には遺物は僅かにあるものの住居跡等の遺構は検出されていない。これは縄文時代をととして台地北側に入り込む小支谷及び現在の亀成川を意識しての立地なのだろうか。

さて、本遺跡の縄文時代の遺物・遺構を概観すると、早期後半から晩期まで途中多少の粗密があるものの長期間にわたり本台地上を活動の場として人々の生活が営まれていたことが分かる。

遺構 住居跡は前期前半・後期初期・晩期に営まれたと考えられる住居跡が9軒検出されている。前期の住居は遺物の搬出も多少多く、080号のように貝を出土するものもあり、形状および柱穴・炉などの施設が明確に認められると、反面075号のように遺物も少なく、形状は不明確で、施設が炉以外まったくないものがあり、全体に判然としない。土杭は住居跡より多く20基が検出された、うち2基は陥穴である。残る18基は規模・形状が一定しておらず、すべてが土杭であるのかさらに検討が必要である。遺物を出土した土杭は10基、うち前期前半の土器を伴うものが7基、そのほかが3基である。炉穴は重複を合わせて15基、平面形状は楕円形を呈するものが多いが全体的に多様である。遺物は早期後半の土器を出土するものが6基あり、すべての炉穴を当該期賸してよさそうである。

遺物 縄文土器は遺構と同様に調査区の北側の区域の集中して出土している。出土はⅡ層のいわゆる新期テフラ層を中心にⅠ層からも見られる。総数20,000近い量である。時期については遺構と同様に早期後半から晩期までの長い時期にわたって出土している。この中で出土量の多い土器群は前期前半の関山式・黒浜式土器群、そして後期初頭の称呼寺式・堀之内武士器群で、ともに当該期の住居跡および土杭を検出している土器群である。次に多い土器群は早期後半の条痕文系土器であり、この土器群にもやはり当該期の土杭・炉穴などの遺構が検出されている。注目される土器群としては田戸式土器群に伴うと思われる無文土器群、そして住居跡と思われる遺構からも出土している晩期の千網式土器群である。次に土製品であるが、玢状耳飾りが7点出土している。いずれも大きさ・形態を異にしており同一個体のは見られない。またすべて欠損しており完形品がないのが残念である。いずれも前期後半の浮島式・興津式期に伴うものと考えられる。

縄文時代の所産と考えられる石器は石鏃をはじめとして様々な種類の石器が出土している。この中で目立つのは楔形石器が多いことである。石材はチャートの小礫を素材にしたものが多数を占めている。稀に黒曜石や安山岩のみもられる。その楔形石器はその形状から石器製作に関係するものと考えられ、本遺跡で石器の製作が行われてた可能性も出てきたわけである。しかし遺構より包含層、それもあまり集中していない状況での出土が多く、当該時期や場所を推定することさえもできない状態にあるのが多少残念ではある。

### Ⅲ. 古墳時代

泉北側第2遺跡からは古墳時代に属する遺構として、住居跡70軒・獨立柱建物跡1棟が検出されている。出土遺物からみて、これらの遺構はすべてほぼ同一時期の所産と考えられるものである。直接調査にかかわったのではないため出土状況など不明な点が多くあるが、気が付いたことをいくつか述べてまとめたい。

本遺跡の出土土器群を概観すると、古式土師器に特徴的な小型土器のうち器台形土器と高杯形土器は存在するが、定型化した小型丸底埴形土器が欠如していることが分かる。古墳時代初頭及び前期の土器編年については統一された見解は確認されていないが、小型器台形土器の出現→定型化した小型丸底埴形土器の出現→小型器台形土器の消滅→小型丸底埴形土器の消滅という流れは概ね了承されている。この流れに当てはめると、泉北側第2遺跡の土器群は第1番目の段階中に位置付けられることになる。各々の段階における細分は、土器型式学的研究や遺構での供伴関係の検証などによってなされるべきであると考えられるが、ここではその問題に論究することは差し控えたいと思う。しかし、本遺跡の出土土器群には弥生式土器の影響を残すものが少ないこと、甕形土器の口縁部が単純口縁となっていることなどから、第1段階でも新しい時期のものであることは指摘できる。また、住居跡の重複関係が1ヶ所しか認められないことや各住居跡出土土器群の様相に大きな差が認められないことから、本集落はほとんど同一時期（時期差があっても極めて短時間）に形成されたものと判断される。

近隣に同様の時期の遺跡を求めると、印旛郡印西町平台先遺跡（註1）・同町船尾町田遺跡（註2）、同町一本桜南遺跡（註3）・同町向新田遺跡（註4）・印旛郡白井町復山谷遺跡（註5）が挙げられる。このうち向新田遺跡は定型化した小型丸底埴形土器が存在しており、先述の流れで考えると第2番目の段階に位置付けられる集落である。また、復山谷遺跡は弥生時代から古墳時代後期まで継続して営まれた集落で、古墳時代前期については本遺跡よりやや古い様相を示している。船尾町田遺跡は小型埴形土器が存在するが、中心的な時期は本遺跡と隣接するものと考えられる。土器群の様相においても共通する要素が認められ、注目しなければならない遺跡である。

印旛沼の対岸の鹿島川や手繰川流域には同時期の大規模な遺跡が数多く立地している。佐倉市に所在する白井南遺跡（註6）・飯郷作遺跡（註7）・江原台遺跡（註8）・大崎台遺跡（註9）・上座矢橋遺跡（註10）などがそれで、古墳時代前期の一大中心地を形成している。しかし、出土土器群の様相は本遺跡を含む地域とは若干異なっているようである。

本遺跡の出土土器群で最も注目しなければならないことは、いわゆる北陸系土器の存在である。南関東の五領期における外来系土器群については学界の問題とされて久しいが、現在最も話題となっているのが北陸系土器群であろう。千葉県においては5遺跡からの出土が確認されており、本遺跡が6番目の遺跡となる（註11）。5遺跡のうち4遺跡は上総地域に所在し、下総地域では装飾器台が出土している大崎台遺跡に次いで2遺跡目である。

北陸系土器は023号（第122図6）、030号（第130図3・4）、038号（第141図11・12・13・17）、045号

(第149図5・6)、046号(第150図3)の5軒の住居跡から出土しており、器種も小型壺形土器・甕形土器・蓋形土器・有孔鉢形土器・器台形土器と変化に富んでいる。しかし、これらの土器は焼成があまり良好でなく作りも丁寧ではない。また、内面にヘラ削りを施しているものは030号住居跡の甕形土器(第130図3)のみである。このように5の字口縁や全体的な器形こそ北陸地方の土器に類似しているが、成形技法や調整技法はまったく異なったものである。器形的な特徴を手がかりに北陸地方の土器編年と比較してみると、月影Ⅱ式から古府タルビ式あたりに対応すると考えられる。

県内出土の他の北陸系土器は、実見した限り器形はもとより調整技法もかの地の土器をよく模倣して作られていた。したがって、本遺跡出土の土器群は、それらの土器群とは同一のレベルでは考えられないものと言える。しかし、器形を模倣するという事は、かの地の土器を知っていなければ作れないことも確かである。調整技法までも忠実に模倣した北陸系土器が直接的な人間の移動を物語っているとすれば、本遺跡などのような土器群は何を意味するのであろうか。

先述した船尾町田遺跡でも、蓋形土器や口縁土器を上方に折り返す器形を示す甕形土器が出土している。これも北陸地方の土器の器形を模倣したものとも考えられる。この遺跡は伊藤沼に注ぐ新川に面した台地上に位置し、遺跡西側の小支谷は北に約2km遡ったところに谷津頭がある。この谷津頭は泉北側第2遺跡が臨む支谷の谷津頭に接しており、両遺跡の通行がたやすかったことが想像できる。また、新川は現在花見川とつながり東京湾へ注いでいるが、かつては伊藤沼へ注ぐ内陸河川であった。そうすると、東京湾から花見川・新川を経て船尾町田遺跡へ、そこから小支谷を伝わって利根川流域(かつては鬼怒川水系)の泉北側第2遺跡へ続くルートが想定できる。この新川・花見川流域には、千葉市上ノ台遺跡(註12)・同市宮脇遺跡(註13)・八千代市権現後遺跡(註14)・同市井戸向遺跡(註15)などの遺跡が所在し、この想定を裏付けている。

一方、花見川の河口は千葉市南部で東京湾に注ぐ村田川の河口に隣接し、村田川上流域は伊藤沼に注ぐ内陸河川である鹿島川の中流域に接している。この村田川・鹿島川・伊藤沼のルートには千葉市東南部遺跡群・市原市千原台遺跡群や先述の佐倉市内の遺跡が立地し、弥生時代以来重要な文化の伝達路としての位置を占めていたことがわかる。北陸系土器の分布をみても南中台遺跡・中台遺跡・大堀遺跡・神門古墳群といった東京湾沿岸地帯に集中していることから、西から伝達される文物や移動してきた人間は、まず村田川・養老川・小櫃川・小糸川などの東京湾に注ぐ河川の河口地域に取り付き、それから内陸に向かって進出していったと考えられる。一番内陸に入ったものが房総のメインストリート上に位置する大崎台遺跡である。

泉北側第2遺跡や船尾町田遺跡の土器を作った人は、おそらく東京湾沿岸地域で「本物の北陸系土器」を見たり使ったりしたのだと考えられる。そして、地元に戻ってその土器をまねて作ったものがあの土器なのではなからうか。県内で出土する北陸系土器も結局は模倣品である。模倣品をさらに模倣するという行為の中にあつた意識まで検討する余裕はないが、単なる流行の模倣という意識だけではなかつたと思う。この問題は類例を積み重ね分析することによって、当時の地域圏や社会構造を解明する手がかりとなると考えている。

- (註1) 『平台先遺跡』 平台先遺跡調査団 1973
- (註2) 『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅵ』(財)千葉県文化財センター 1984
- (註3) 郷堀英司・大澤正巳「一本松南遺跡出土の砂鉄について」  
『研究連絡紙』25号(財)千葉県文化財センター 1989  
報告書は未刊行。遺物は(財)千葉県文化財センター千葉北部事務所に保管してある。
- (註4) 約80軒の住居跡が検出されており、報告書刊行に向け千葉北部事務所で整理中である。
- (註5) 『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅶ』(財)千葉県文化財センター 1982
- (註6) 『臼井南』佐倉市教育委員会 1975
- (註7) 『佐倉市飯合作遺跡』(財)千葉県文化財センター 1978
- (註8) 『江原台』佐倉市教育委員会 1976他
- (註9) 『大崎台遺跡発掘調査報告書Ⅰ～Ⅲ』佐倉市大崎台B地区遺跡調査会 1985～1987
- (註10) 『千葉県佐倉市第2ニューカリヶ丘宅地造成地内埋蔵文化財調査報告書-上座矢橋遺跡-』  
(財)印旛郡市文化財センター 1986
- (註11) 比田井克仁「南関東出土の北陸系土器について」『古代』83号 1987
- (註12) 『千葉上ノ台遺跡』千葉市教育委員会 1982
- (註13) 『宮脇』宮脇遺跡調査団 1973
- (註14) 『八千代市権現後遺跡-萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅰ-』  
(財)千葉県文化財センター 1984
- (註15) 『八千代市井戸向遺跡-萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅳ-』  
(財)千葉県文化財センター 1987

【註】 本書で報告した遺構については、その番号を発掘調査時に付したまま用いた。そのため、本文中では若干の不都合が生じた。そこで、本書では報告した遺構を本文に沿って改めて整理し一覧表として示した。

第10表 遺構一覧表

縄文時代											
住居跡	075	078	079	080	084	085	086	098	P-26		
土坑	P-1	P-2	P-3	P-4	P-6	P-7	P-8	P-9	P-10		
	P-13	P-14	P-15	P-18	P-19	P-20	P-21	P-22	P-23		
	093	099									
炉穴	077	081	083	089	090	092	094	095	096		
	097										
古墳時代											
住居跡	002	003	004	005	006	007	008	009	010		
	011	012	013	014	015	016	017	018	019		
	020	021	022	023	024	025	026	027	029		
	030	031	032	033	034	035	036	037	039		
	040	041	042	043	044	045	046	047	048		
	051	052	053	054	055	056	057	058	059		
	060	061	062	063	064	065	066	067	068		
	069	070	071	072	073	074	088				
	掘立柱建物跡	050									
	欠番	001	028	039	076	082	087	091	P-5	P-11	
P-12		P-16	P-17	P-24	P-25	P-26	P-27	P-28	P-29		
その他	049 (住居跡-未調査)										



写 真 图 版



東北側第2遺跡



遺跡全景 (57年度)



遺跡全景 (58年度)

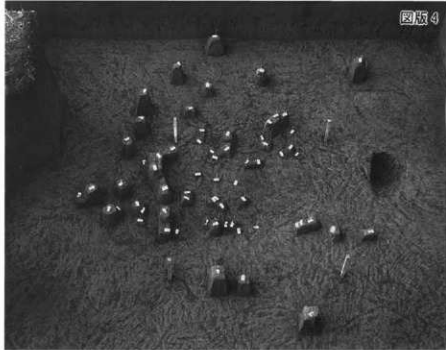


遺跡近景



周原区全景 (1:1250)

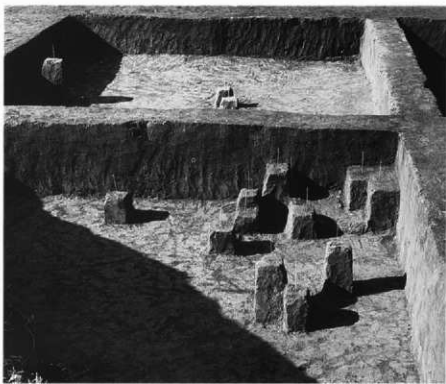
第 1 地点遺物分布状況

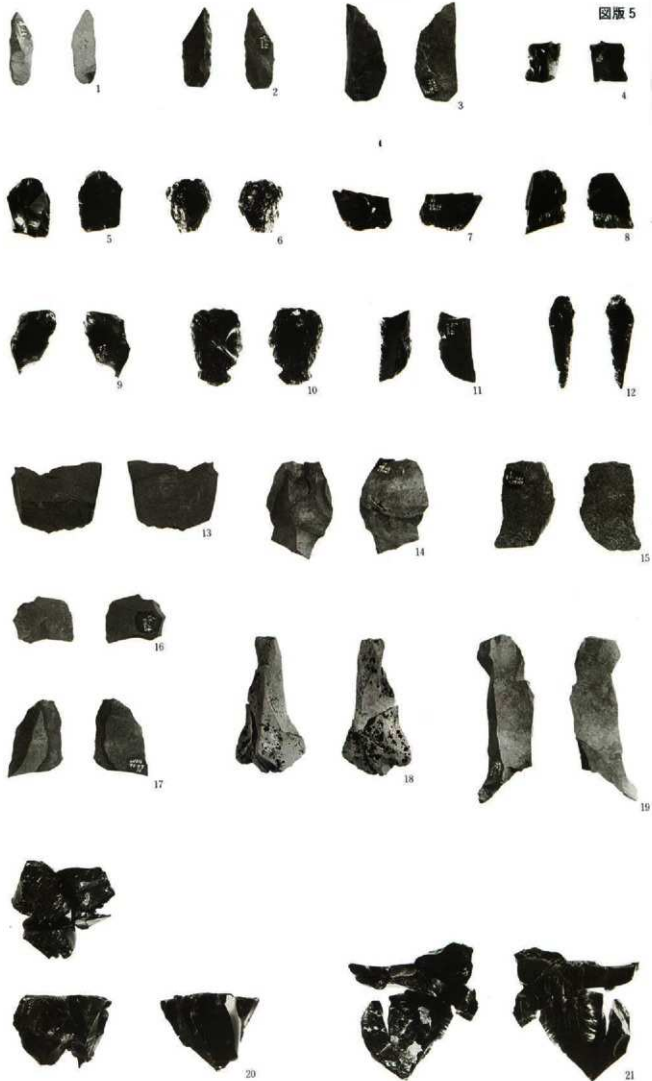


第 2 地点遺物分布状況



第 3 地点遺物分布状況





第1地点出土石器



第 2 地点出土石器

第 2 地点

第 3 地点

地点外





15



16



1



2



3



4



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



11



12



13



14



15



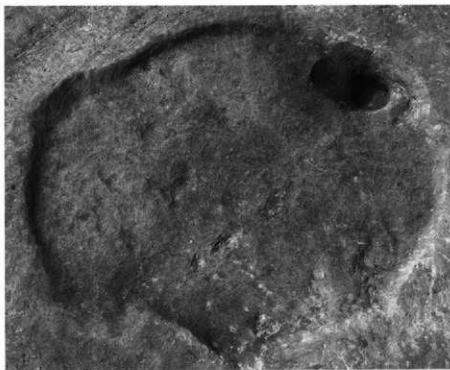
16



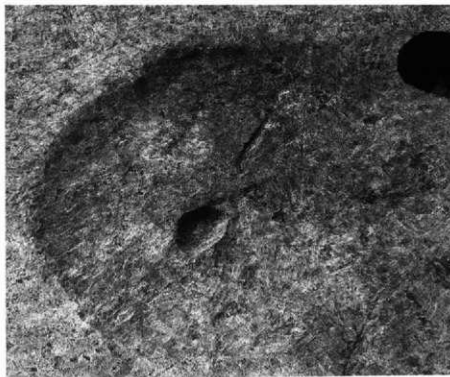
17



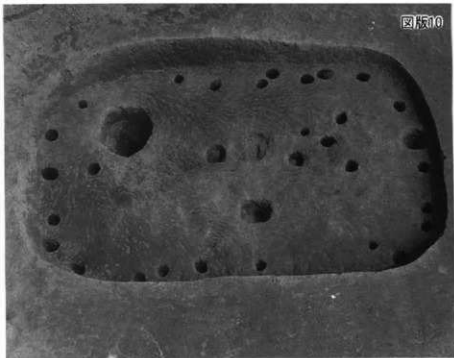
075号住居跡全景



078号住居跡全景



079号住居跡全景



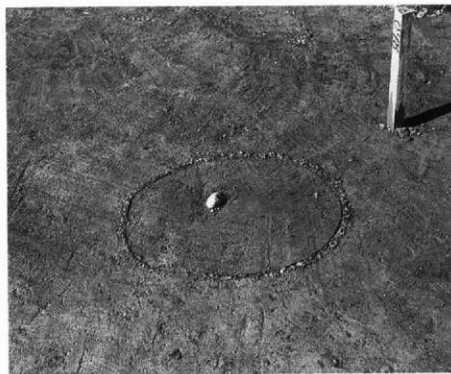
084号住居跡全景及び遺物出土状況



085号住居跡全景



086号住居跡全景

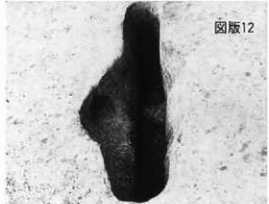


098号住居跡炉跡



P-26号住居跡全景

P-1·2号土坑全景



P-3·P-4号土坑全景



P-6·P-7号土坑全景



P-8·P-9号土坑全景



P-10·P-13号土坑全景



P-14·P-15号土坑全景



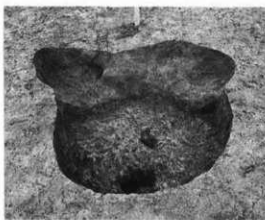
P-18·P-19号土坑全景



P-20·P-21号土坑全景



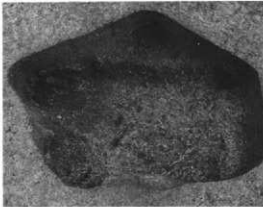
P-22·P-23号土坑全景



093·099号土坑全景



077·081号炉穴全景



083·089号炉穴全景



090·092号炉穴全景



094·095号炉穴全景



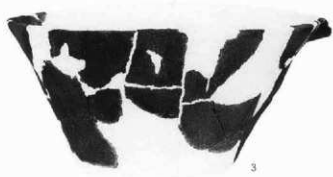
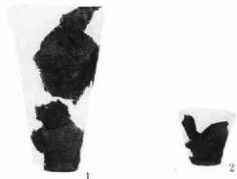
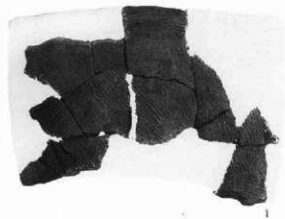
096·097号炉穴全景





075号住居跡

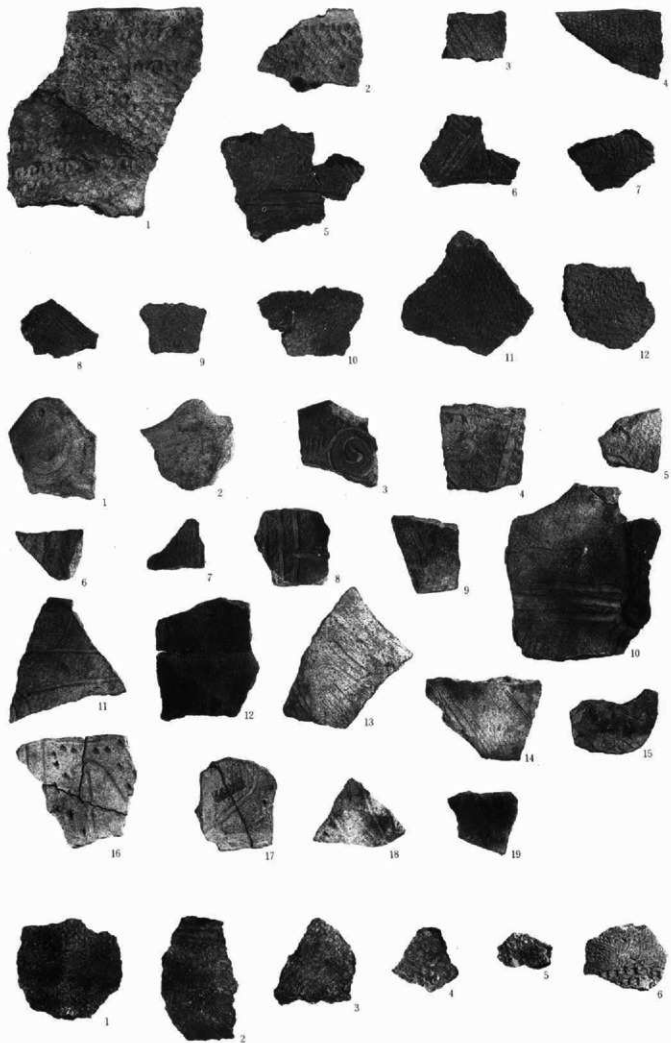
080号住居跡



085号住居跡

086号住居跡

P-26号住居跡



084号住居跡	P-13号土坑
P-7号土坑	
	P-14号土坑
P-8号土坑	
P-9号土坑	
P-15号土坑	
P-20号土坑	P-21号土坑



099号土坑

077号炉穴

083号炉穴

089号炉穴



099号土坑077·083·089号炉穴出土土器



094号炉穴

095号炉穴

097号炉穴





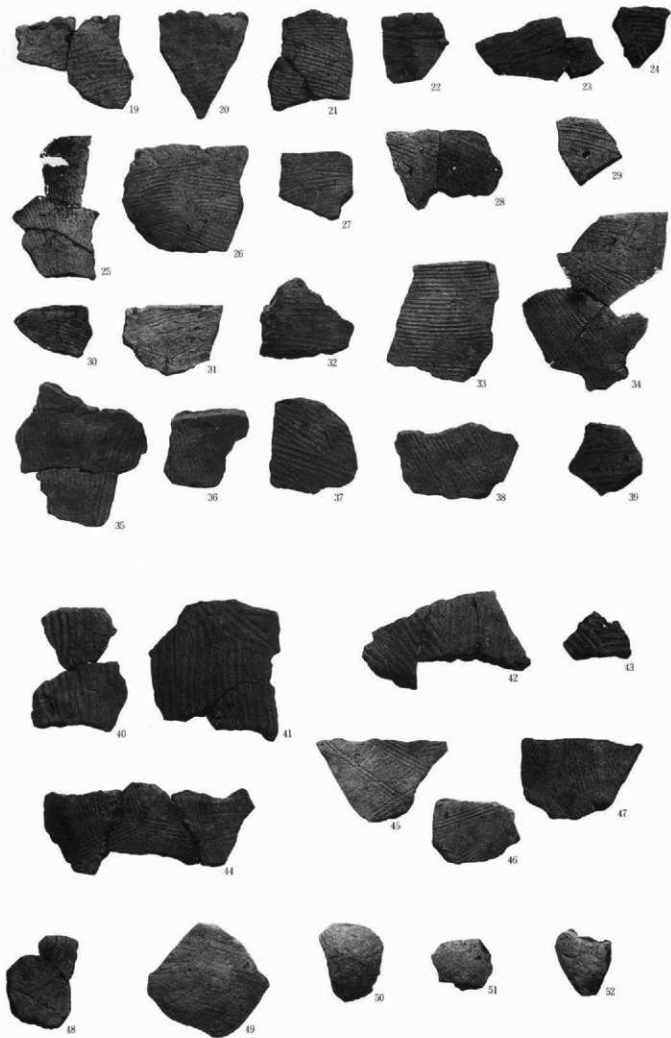
第1群土器 (1・2・3類)



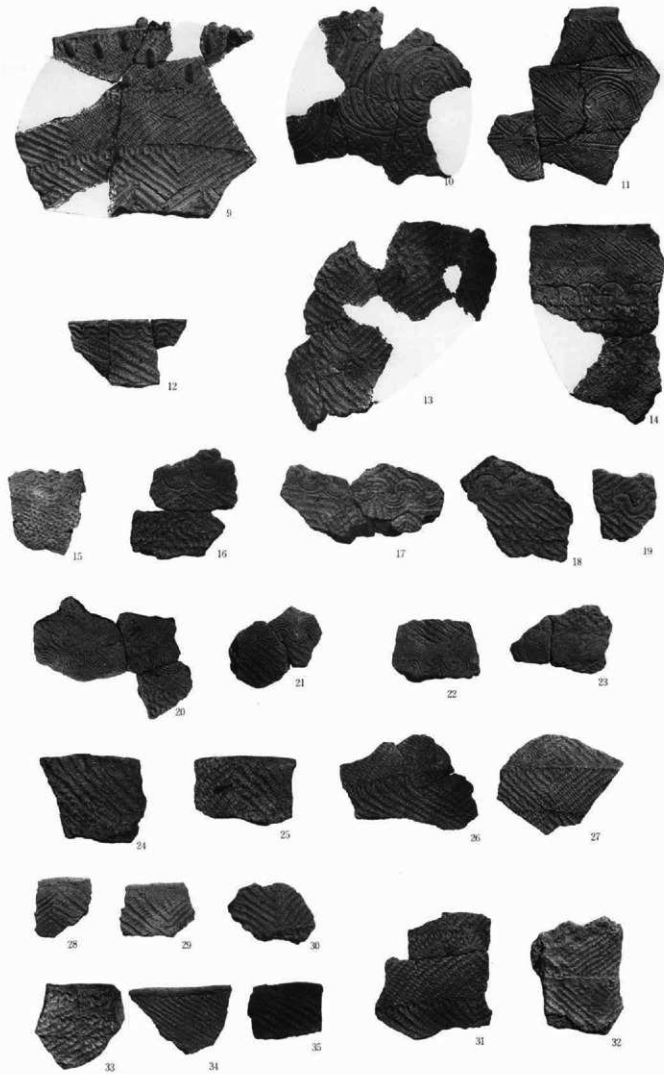
第1群土器(1・2類)



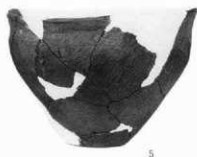
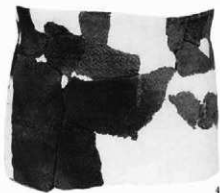
第2群土器(1・3類)



第1群土器(3期)



第2群土器(1類)



第2群土器 (1・2類)





36



37



38



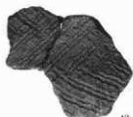
39



40



41



42



43



44



45



46



47



48



49



50



51



52



53



54



55



56



57



58



59

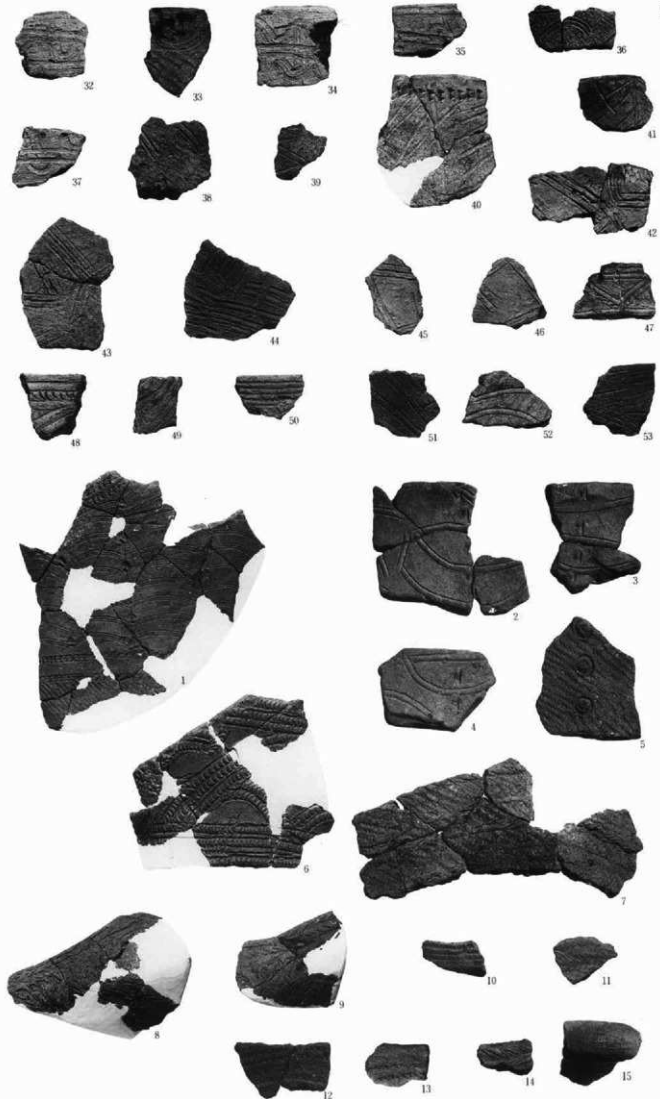


60



61

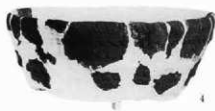


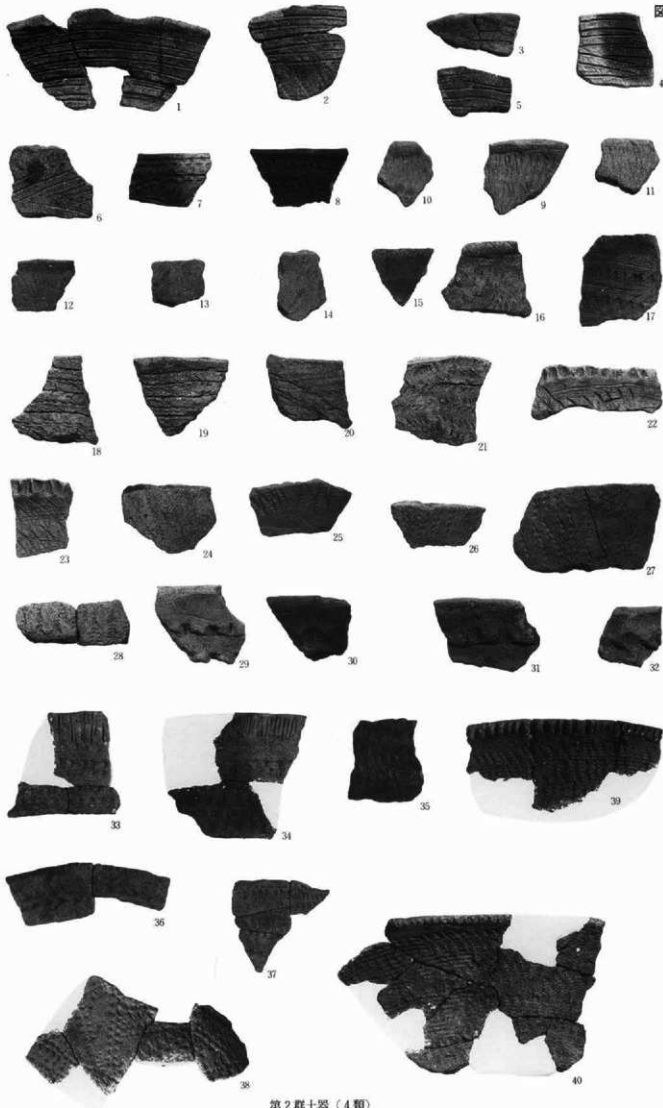


第2群土器 (2・3類)

第 2 群

第 3 群





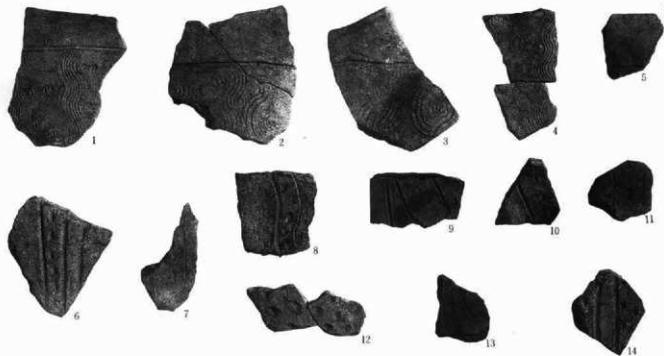
第2群土器(4類)



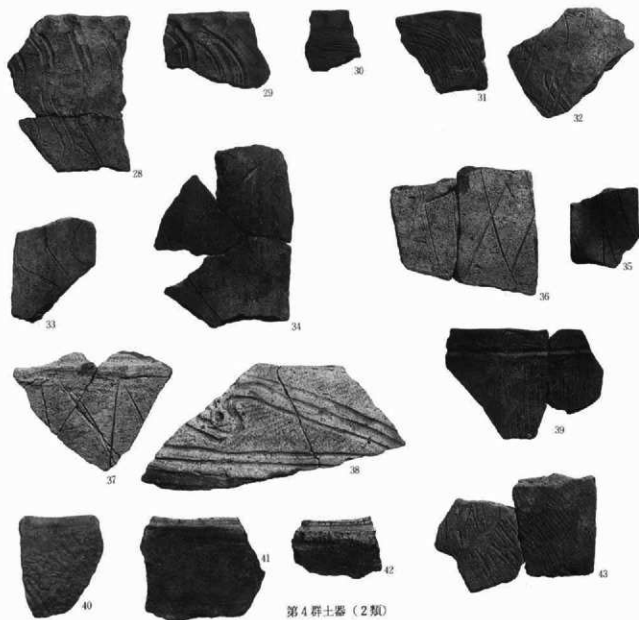
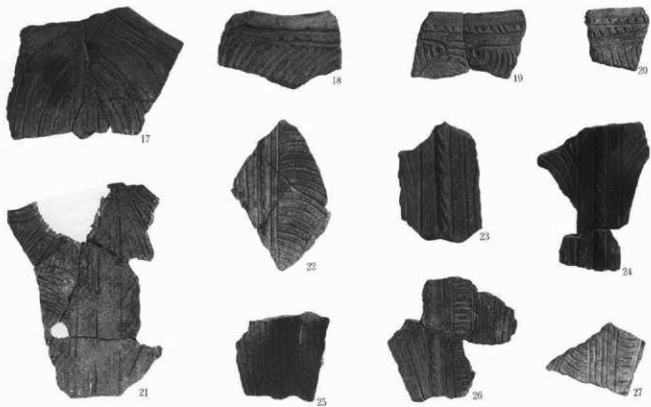
第2群土器(4・5類)







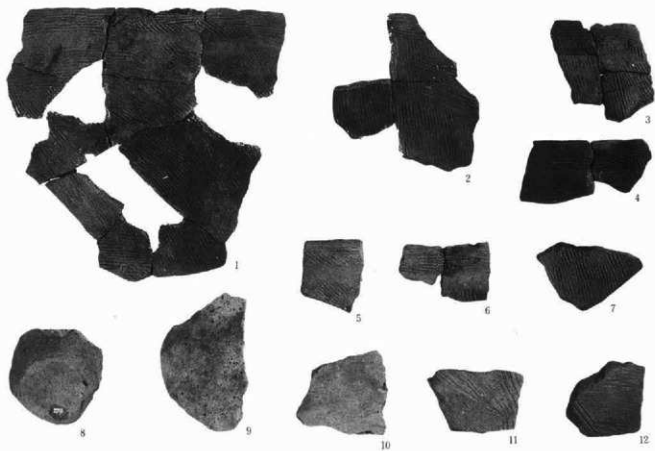
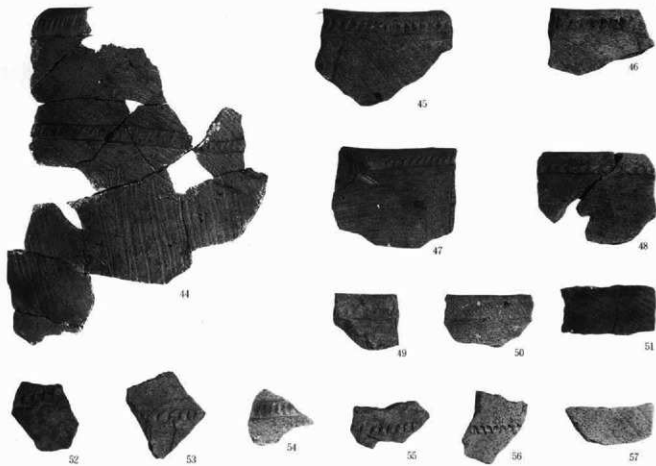
第4群土器 (1・2類)

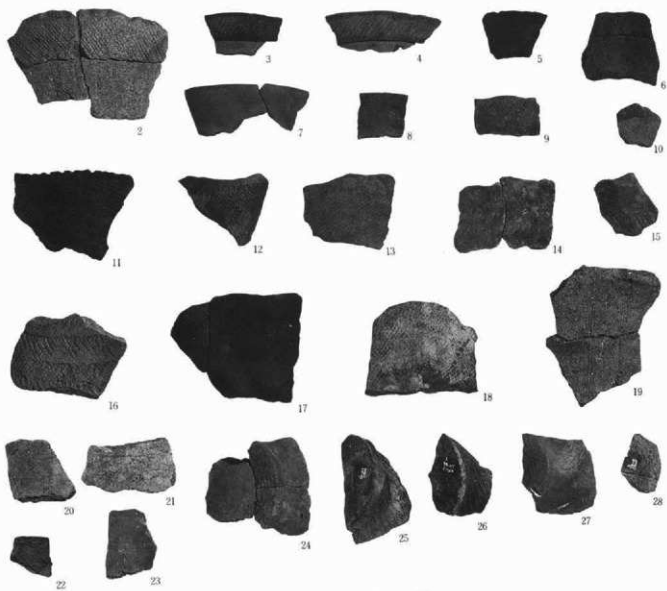
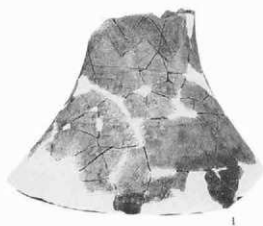


第4群土器 (2類)

第 4 群

第 5 群

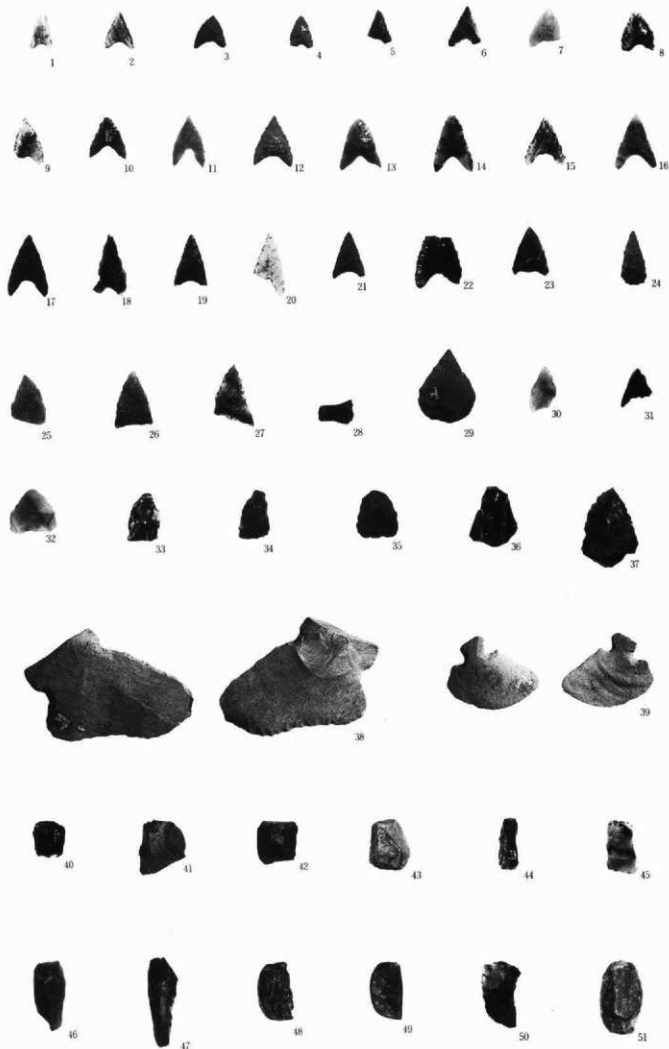




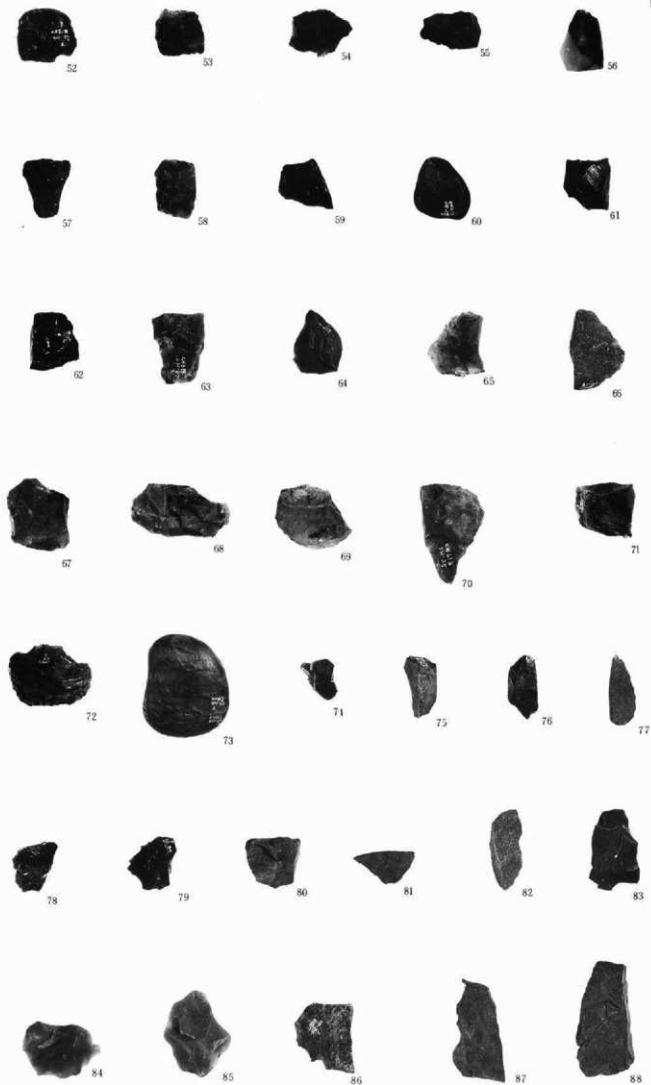
縄文時代出土遺物及び弥生時代出土遺物



縄文時代石器 (遺構出土)



縄文時代石器（グリッド出土）



縄文時代石器（グリフ出土）





縄文時代石器（グリフ出土）



116



117



118



119



120



123



124



121



122



125



126



127



128



129



130



131



132



133



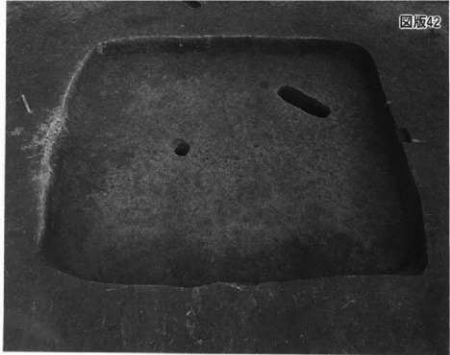
134



135



136



002号住居跡全景



003号住居跡全景



004号住居跡全景



005号住居跡全景及び遺物出土状況



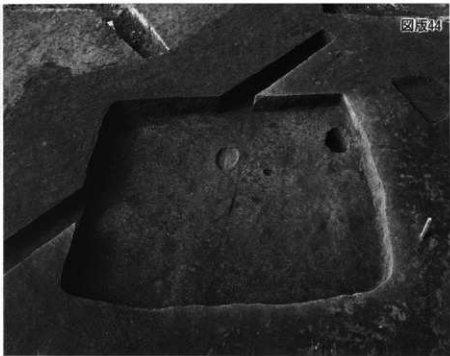
006号住居跡全景



007号住居跡全景



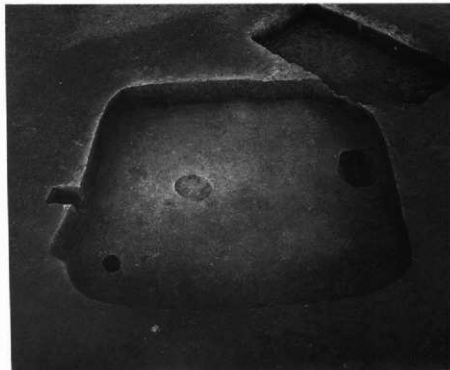
008号住居跡全景及び遺物出土状況

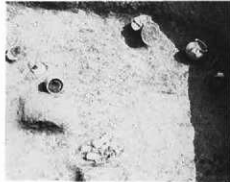


009号住居跡全景



010号住居跡全景

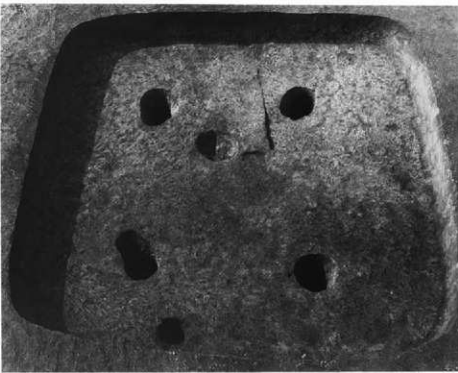




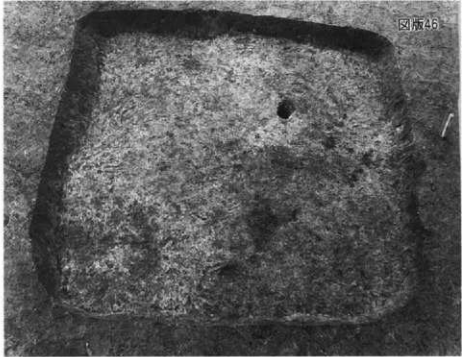
011号住居跡全景及○遺物出土状況



012号住居跡全景



013号住居跡全景



014号住居跡全景



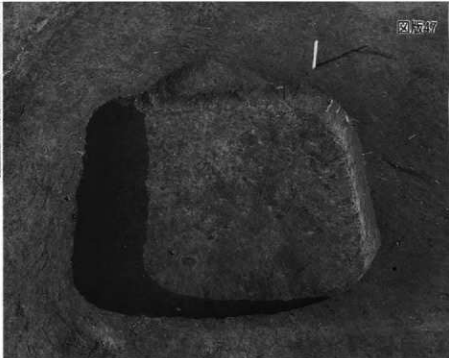
015号住居跡全景



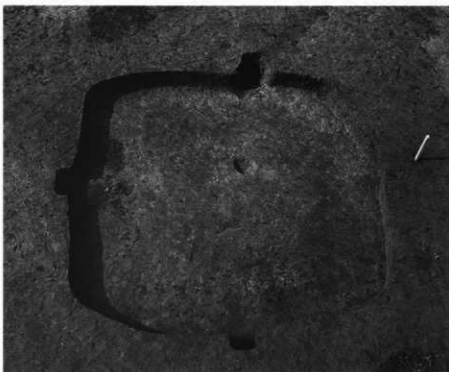
016号住居跡全景



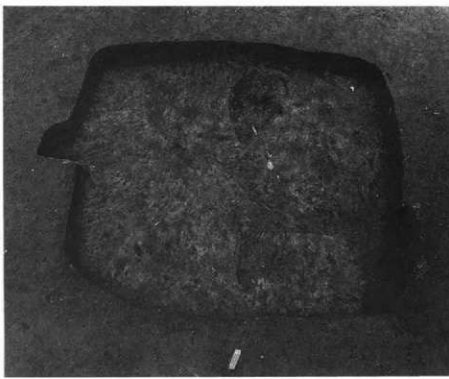
017号住居跡全景及び遺物出土状況



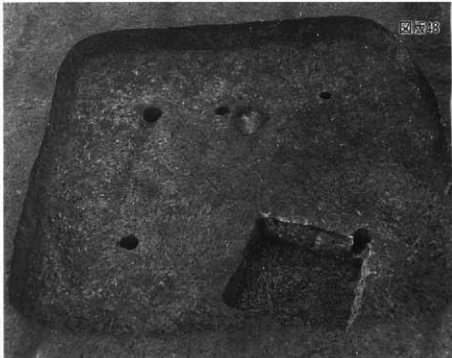
018号住居跡全景



019号住居跡全景







020号住居跡全景



021号住居跡全景及び遺物出土状況



022号住居跡全景



023号住居跡全景及び遺物出土状況

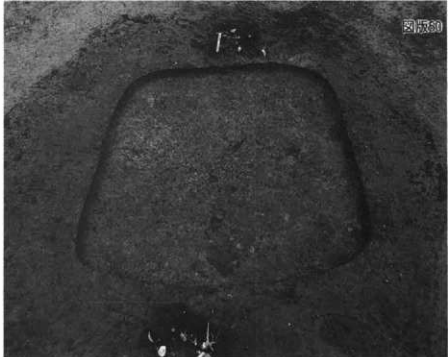


024号住居跡全景及び遺物出土状況

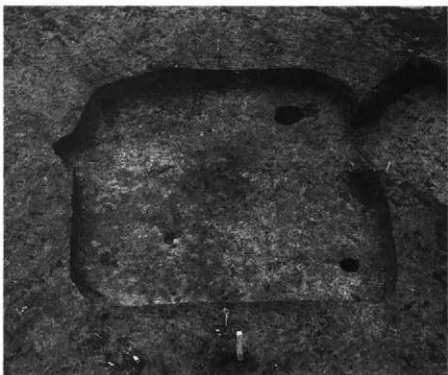


025号住居跡全景





026号住居跡全景



027号住居跡全景



029号住居跡全景



030号住居跡全景及び遺物出土状況



031号住居跡全景及び遺物出土状況



032号住居跡全景





033号住居跡全景



034号住居跡全景及び遺物出土状況



035号住居跡全景及び遺物出土状況

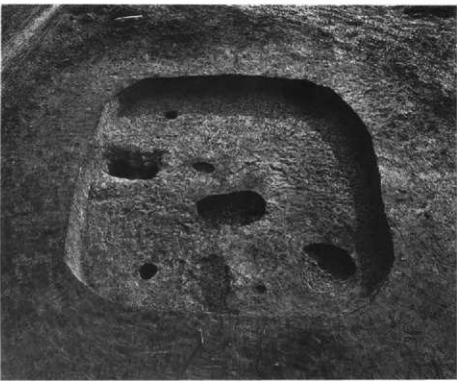
036号住居跡全景



037号住居跡全景



038号住居跡全景及び遺物出土状況

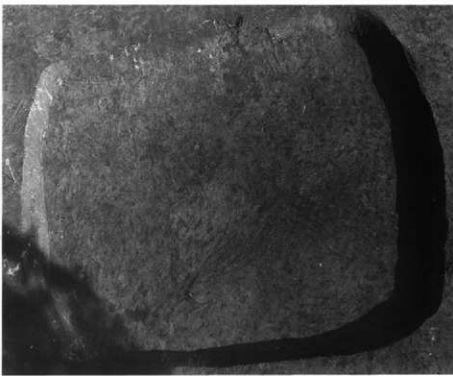




040号住居跡全景



041号住居跡全景及び遺物出土状況



042号住居跡全景

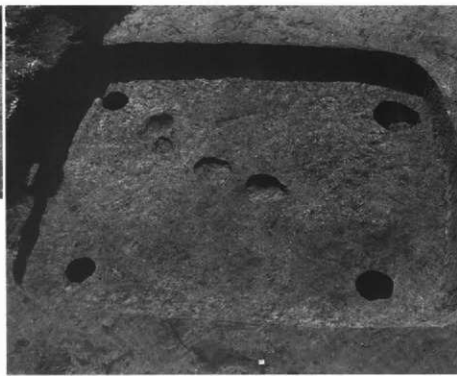
043号住居跡全景



044・045号住居跡全景及び遺物出土状況



046号住居跡全景及び遺物出土状況



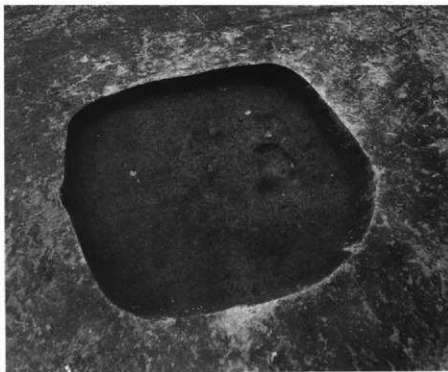




047号住居跡全景



048号住居跡全景及び遺物出土状況

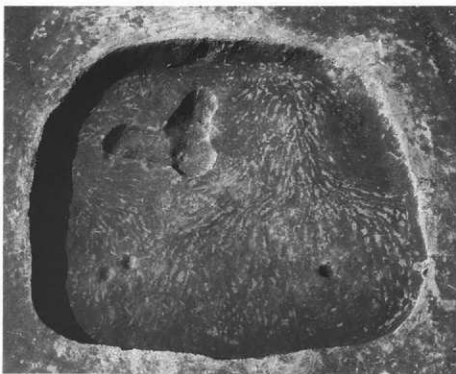


051号住居跡全景

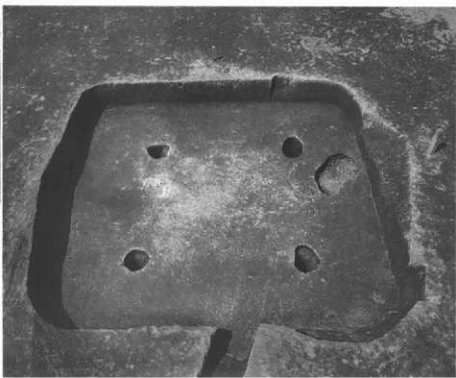
052号住居跡全景



053号住居跡全景



054号住居跡全景及び遺物出土状況

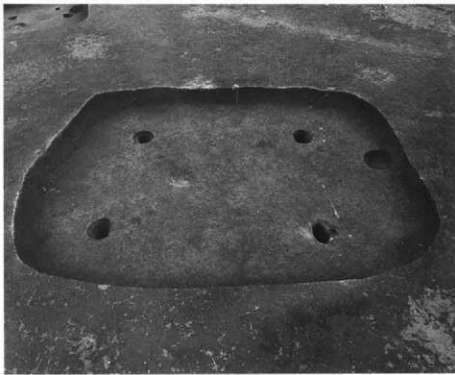




055号住居跡全景



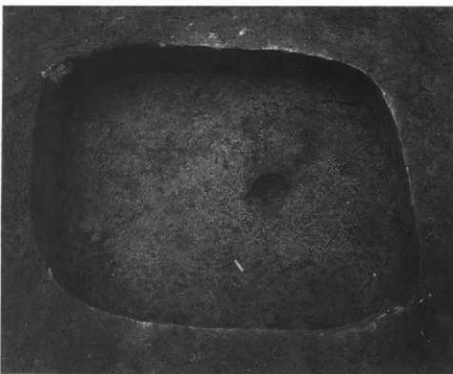
056号住居跡全景



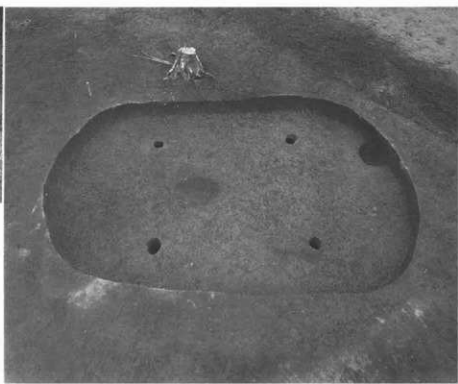
057号住居跡全景



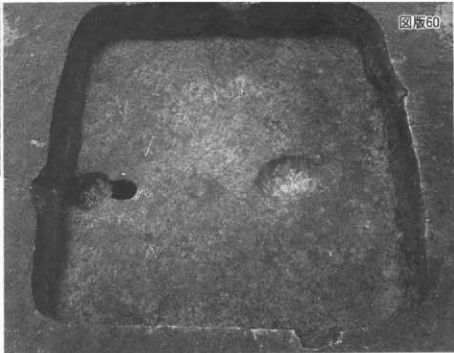
058号住居跡全景



059号住居跡全景



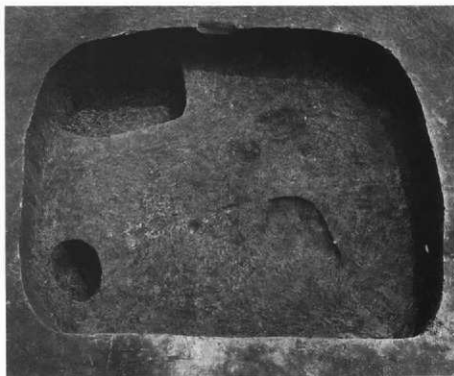
060号住居跡全景及び遺物出土状況



061号住居跡全景及び遺物出土状況



062号住居跡全景及び遺物出土状況



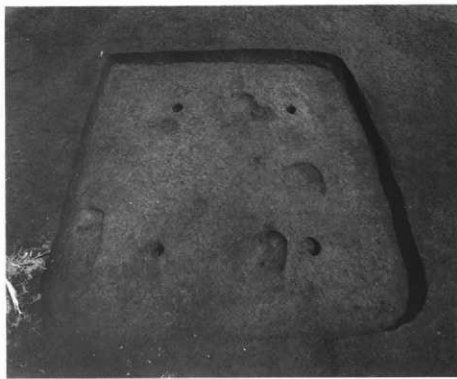
063号住居跡全景



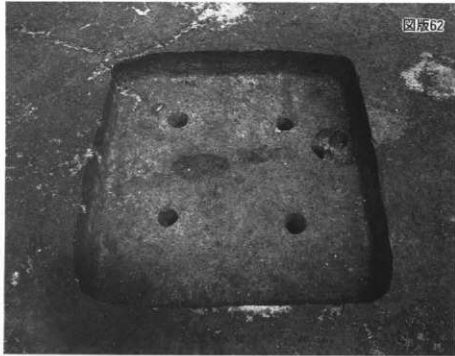
064号住居跡全景及び遺物出土状況



065号住居跡全景



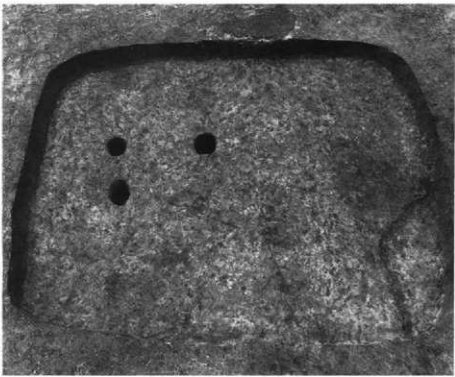
066号住居跡全景



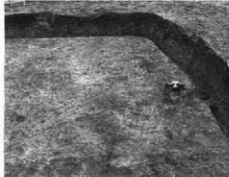
067号住居跡全景



068号住居跡全景



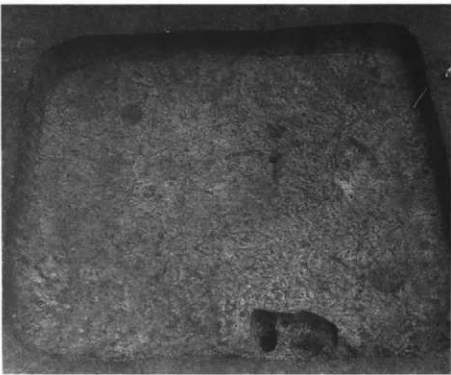
069号住居跡全景



070号住居跡全景及び遺物出土状況

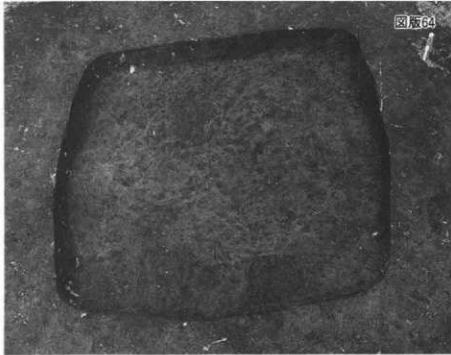


071号住居跡全景

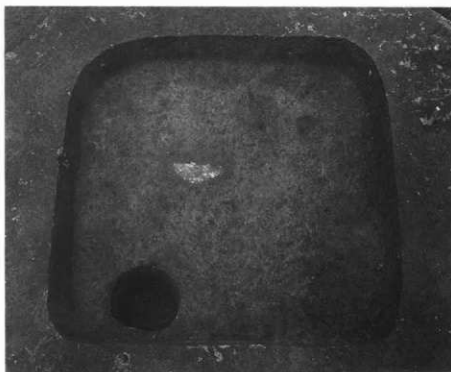


072号住居跡全景及び遺物出土状況





073号住居跡全景



074号住居跡全景



088号住居跡全景

050号掘立建物跡



002・005号住居跡出土土器

006号住居跡

007号住居跡

008号住居跡

010号住居跡



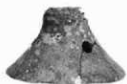
2



3



5



7



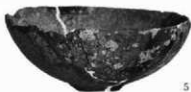
3



3



2



5



7



8



11



1



2



4



6



5



9



3



7



10



11



12



14



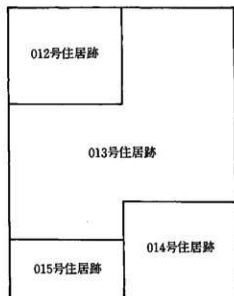
16



13



19





3



1



2



5



6



13



1



1



016号住居跡	
017号住居跡	
018号住居跡	019号住居跡
020号住居跡	





1



6



3



2



10



8



9



11



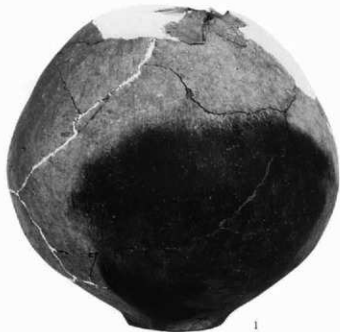
15

023号住居跡

025号  
住居跡

026号住居跡

027号  
住居跡



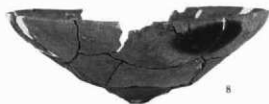
5



3



2



8



6



9



1



1



2



030号住居跡

031号住居跡



033号住居跡

034号住居跡





035号住居跡

037号住居跡



1



2



3



4



5



6



7



8



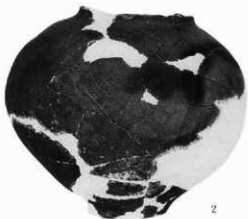
4



5



1



2



3



4



5



9



6



8



7

038号住居跡

040号住居跡



12



14



13



17



1



6



16



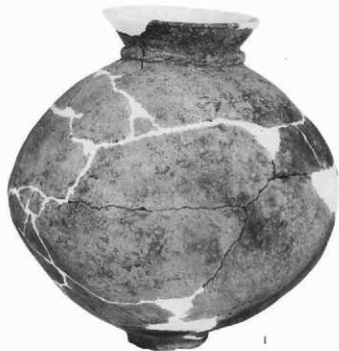
18



20

041号住居跡

045号住居跡





046号住居跡

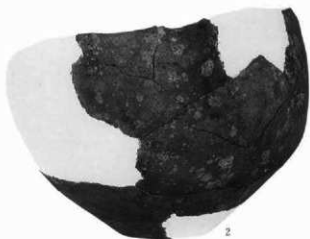
047号住居跡

048号住居跡









061号住居跡

062号住居跡



1



2



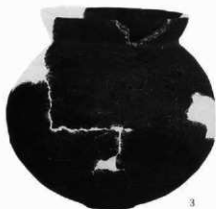
7



2



4



3



5



1



6



8



7

064号住居跡

066号住居跡





3



7



4



10



9



11



13



11



3

068号住居跡

069号住居跡

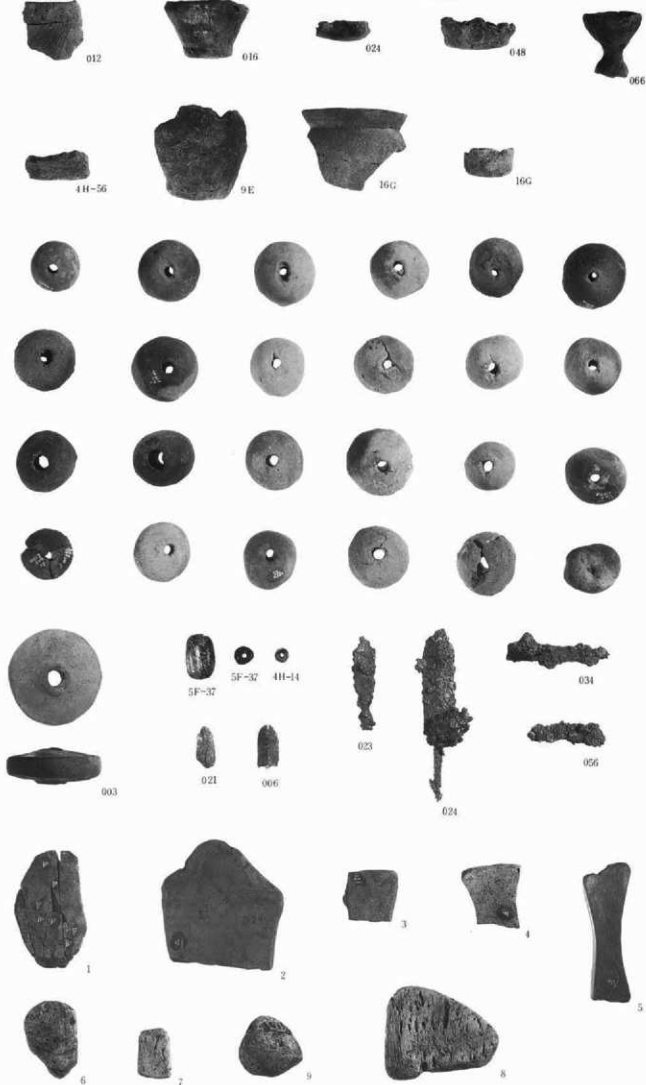
070号住居跡



072号住居跡

074号住居跡





古墳時代出土遺物

---

千葉県文化財センター調査報告第190集

千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書 X

平成3年3月20日 印刷

平成3年3月20日 発行

発行 千葉県企業庁  
千葉県長州1-9-1 Ⅸ0472-23-3419代  
住宅・都市整備公団千葉開発局  
印旛郡印西町戸神501 Ⅸ0476-46-2011代

編集 財団法人 千葉県文化財センター  
四街道市鹿渡無番地 Ⅸ0434-22-8811

印刷 株式会社 弘報社 印刷  
千葉市古市場町474-268 Ⅸ0472-68-2371代

---